

博士學位論文

日中戦争期における

中国共産党の対日プロパガンダ戦術・戦略

——日本兵捕虜対応に見る「二分法」の意味——

Analysis on Chinese Communist Party's War-time Propaganda toward Japan

——Focus on Bisection Method Treating with Japanese Captives

指導教授：山本武利 教授

2010年12月

早稲田大学

政治学研究科

趙 新利

日中戦争期における
中国共産党の対日プロパガンダ戦術・戦略
——日本兵捕虜対応に見る「二分法」の意味——

Analysis on Chinese Communist Party's War-time Propaganda toward Japan

——Focus on Bisection Method Treating with Japanese Captives

2010年12月

早稲田大学
政治学研究科

趙 新利

目 次

序章	1
1 問題の所在	1
2 先行研究の考察	2
3 仮説と具体的な手順	6
4 本研究の意義	8
第1章 毛沢東の対敵プロパガンダ戦略・戦術	11
1.1『持久戦論』から見る毛沢東の敵軍工作思考	11
1.1.1 日本人民の獲得	12
1.1.2 『持久戦論』の心理戦思考	15
1.1.3 国際宣伝を重視する輿論戦思想	19
1.1.4 『持久戦論』と敵軍工作	20
1.2 毛沢東の欧米ジャーナリストへの宣伝攻勢	24
1.2.1「延安交際処」についての考察	25
1.2.2 中外記者西北訪問団延安訪問の実現	28
1.2.3 外国人記者の著作から見る国際世論工作の効果	33
第2章 日本軍向けの戦争プロパガンダ組織	39
2.1 敵軍工作部についての考察	39
2.1.1 総政治部及び敵軍工作部の変遷	39
2.1.2 第一次国共合作の時期の敵軍工作	44
2.1.3 土地革命戦争期の敵軍工作	45
2.1.4 日中戦争期の敵軍工作	47
2.2 共産党内の「知日派」と敵軍工作	53
2.2.1 敵軍工作に携わった「知日派」の代表人物	53
2.2.2「知日派」と対日本軍プロパガンダ工作	57
2.2.3「知日派」と中国共産党の対日政策	60

2.3 敵軍工作訓練隊	72
2.3.1 敵軍工作訓練隊の創立	72
2.3.2 敵軍工作訓練隊における日本語教育と政治教育	74
2.3.3 八路軍兵士向けの敵軍工作教育	78
第3章 共産党の捕虜政策とその原点	87
3.1 中国共産党の捕虜政策	87
3.1.1 土地革命期の対国民党捕虜政策:「対敵2分法」の原点	87
3.1.2 対日捕虜政策の変遷	90
3.1.3 一般軍民の「2分法」に対する抵抗	96
3.2 国民党の対日プロパガンダ活動とのつながり	101
3.2.1 国民党政府の対日プロパガンダ機関	101
3.2.2 国民党政府の対日プロパガンダ活動	103
3.2.3 プロパガンダ出版物に見る国民党の「2分法」	106
3.2.4 中国古典思想のなかの「2分法」	108
第4章 日本人捕虜教育と反戦組織	113
4.1 日本工農学校と捕虜教育	113
4.1.1 日本人捕虜の概況	113
4.1.2 日本工農学校とその分校	114
4.1.3 日本軍捕虜に対する教育手段	118
4.2 共産党支配地区の覚醒連盟及びその支部	125
4.3 共産党支配地区の反戦同盟及びその支部	133
4.4 日本人民解放連盟と在華日本人共産主義者連盟	151
4.4.1 日本人民解放連盟の結成	151
4.4.2 日本人民解放連盟の組織構成	152
4.4.3 在華日本共産主義者同盟	161

第5章 中国共産党の対日プロパガンダ工作と日本人反戦組織	165
5.1 日本人反戦組織と中国共産党との関係性	165
5.1.1 日本人反戦組織への態度と政策.....	165
5.1.2 日本人捕虜の八路軍入隊.....	168
5.1.3 敵軍工作部と解放連盟の分担・協力.....	172
5.2 プロパガンダ工作の3段階	175
5.2.1 中国人によるプロパガンダ工作.....	175
5.2.2 中国人と日本人共同のプロパガンダ工作.....	179
5.2.3 日本人反戦組織によるプロパガンダ工作.....	181
5.3 プロパガンダ工作と日本人反戦組織	185
5.3.1 プロパガンダ手段.....	185
5.3.2 日本人反戦組織の貢献度.....	192
5.3.3 プロパガンダ工作の限界度.....	195
第6章 結論と展望:対日プロパガンダ政策と「二分法」の意味	203
6.1 本研究で解明した史実.....	203
6.2 中国共産党「二分法」思想の意味.....	207
6.3 本研究の課題と展望.....	209
あとがき	212
参考資料	213
付録	221
付録1:敵軍工作に関する総政治部の指示.....	221
付録2:反戦同盟晋察冀支部『日軍の友』14号(1942年4月4日).....	225
付録3:反戦同盟晋察冀支部『日軍の友』15号(1942年4月11日).....	229
付録4:反戦同盟晋察冀支部『日軍の友』18号(1942年5月23日).....	233
付録5:反戦同盟晋察冀支部『前進』月刊第2号.....	237
付録6:反戦同盟晋察冀支部『前進』月刊第3号(1942年3月5日).....	246
付録7:反戦同盟晋察冀支部が作成した日本語ビラ.....	255

序 章

1, 問題の所在

ある国の国民が別の国の国民に対してどのようなイメージをもつのかは、主として3つの要因によって決定される。第1はマス・メディアである。たとえば、戦後の日本人はアメリカから流入する便利な技術、流行、ライフスタイルに注目し、マス・メディアによって伝えられる「アメリカは自由で何でもできる国である」というイメージによってアメリカを支持した。しかし、最近では、宗教右派の影響力の拡大、国連を無視した単独行動、イラク戦争の遂行、格差の拡大というブッシュ政権についての報道により、日本人、とくに若者のアメリカへの関心と評価は下がっている。第2は宗教である。サダム・フセインの独裁政権が崩壊し国民の手で民主的な国づくりができるようになったのにもかかわらず、イラクでは宗教勢力が反米を教え込み、ある意味で民主化努力を混乱させている。その他のイスラム教国でも、同じことがいえる。第3は政府である。戦争中に敵対国が国民の意識を高揚するためにある種のイメージを植え付けることはよく行われたことであり、第2次世界大戦の日本政府が日本国民に対して行った反米教育がその代表例であろう。そして、平常時になると、政府がこのような宣伝や教育を行う機会は少なくなる。

このような国民意識づくりとその要因と考えると、注目に値するのは中国の事例である。なぜなら、中国は、実質的な戦争状態から脱しているにもかかわらず、これまで日本人を2タイプに分ける思考様式を採用してきたからである。たとえば、毛里和子の『日中関係——戦後から新時代へ』によると、日本軍国主義者と日本人民を区分する「2分法」が初めて対日基本原則として日本側に伝わったのは1955年であるという。それは現今の日中関係にも深く影響を与えている。しかしながら、この「2分法」がいつ頃からどのように現れたのかについては、必ずしも十分に研究されていない。毛里和子によれば、当時、民間交流を促進しようとするときに、日本への一般的反発を見て、政策上2つを区別する教育が必要だと認識された。日本軍国主義者と日本人民を区別する(中国侵略の責任は当時の日本政府にあり、日本人民にはない)手法であり、日本政府内でも政策決定する「元凶」と一般公務員を区別し、大きな罪悪と一般的な誤りを区別するという方針であった¹。

山本武利の「米戦時情報局が見た中国共産党の日本人洗脳工作」によると、「2分法」を日中戦争期に遡ったうえで、「日本人兵士への人道的配慮ではなく、捕虜利用こそが八路軍のプロパガンダ、宣撫活動、さらにはその勝利に不可欠との冷徹な計算が八路軍幹部に終始働いたことを如実に示している」としている。そしてさらに「2分法はすでに1938年から始まり、現在までに70年もの歴史の中で繰り返し、中国共産党によって日本人ばかりか中国人に向けて繰り返し発信されてきたことが確認される」と指摘している。この他、山本武利は『延安リポート』で、「捕虜の

扱いの真実は、ゲリラ戦中心の八路軍戦術、戦略にとって日本兵捕虜が極めて重要であった²」事実も取り上げている。

日中戦争の中で、中国共産党はさまざまな対日プロパガンダを行った史実があり、その活動の中にこの「対日2分法」の原点を発見することができる。1920年代には、周恩来など中国共産党指導者の演説や国民党軍捕虜を扱う政策から、「対国民党2分法」の思考法があったことがわかる。「対国民党2分法」と「対日2分法」の関連性を分析し、「2分法」の意味を考察する。そして、中国がいつ頃からどのような理由でこの「2分法」を採用したのかなどの問題を明らかにすることは、かつての日本と中国の歴史的側面に光をあてるだけでなく、その理由を明確にすることをつうじての現在の2国関係を考える上でもきわめて重要である。

2, 先行研究の考察

本研究は、日本軍国主義者と日本人民を区分する「2分法」が「日中戦争期における中国共産党の対日プロパガンダ」の中から形成されてきたことを想定する場合、研究の中心になるのは、中国共産党の対日プロパガンダ戦略であろう。中国共産党の対日プロパガンダ戦略を解明するためには、共産党の文書と指示などの資料は重要である同時に、中国における日本人の反戦組織と反戦活動は関連してくる。とくに共産党の敵軍工作、特に捕虜政策と捕虜教育工作も本研究と深く関連し、本研究の研究対象でもある。「中国共産党の対日プロパガンダ戦略」にかかわる研究として、日中戦争期、中国における日本人の反戦活動および中国共産党の捕虜政策に関する研究があり、それは主として次の2タイプに分類できる。

第1は、中国共産党の敵軍工作組織と捕虜政策についての先行研究である。資料公開の遅れなどの原因で、日中戦争期における中国共産党の敵軍工作、とりわけ対日政策についての研究は中国でも日本でもまだ十分には行われていない。その中、中国共産党の捕虜政策についての考察は論文の形で研究誌に散見するが、著作という形でまとまれたものについて、筆者の考察した限り、徐則浩『従浮虜到戦友³』だけである。日中戦争期における中国共産党の対日政策を考察するとき、その捕虜政策は重要な部分となる。今まで、中国共産党の捕虜政策についての研究は次の通りである。

姫田光義、藤原彰編の『日中戦争下中国における日本人の反戦活動⁴』には、八路軍の捕虜政策について考察する論文(井上久士『中国共産党・八路軍の捕虜政策の確立——1937-40』)が掲載されている。「抗戦初期の捕虜政策」「野坂参三の延安着任と捕虜政策の新展開」などの項目がある。「捕虜送還」段階と「捕虜を送還せずに訓練を与える」段階にはっきり分けて考察されている部分は本研究にとって参考になる。しかし、井上論文の重点は「野坂が中国共産党の捕虜政策に与えた影響」に止まっており、本来もっと早い段階に着目し、もっと広い視野で共産党の政策変遷及び2分法の意味を考察する必要があるだろう。本研究では、土地革命期の捕虜

政策と日中戦争期の捕虜政策のつながりを明確し、捕虜優遇政策が実行可能まで共産党の宣伝・説得・教育工作における努力も考察し、2分法の意味を分析する。

徐則浩『従浮虜到戦友』は敵軍工作、日本人反戦組織に触れ、中国共産党の捕虜政策を中心に分析を展開した著作である。そのほか、八路軍新四軍の創立、政治工作3大原則、敵軍工作機構の完備、対敵宣伝工作、延安にいる岡野、日本工農民学校、日本敗戦と日本戦友の帰国など幅広く記述されている。「捕虜釈放」と「捕虜優待」などの政策の形成と変遷は、本研究にとって貴重な先行研究となる。しかし、一般軍民向けの「捕虜政策の宣伝工作」、中国共産党の2分法の形成及びその意味についても論及されていない。

山本武利が編訳した『延安リポート アメリカ戦時情報局の対日軍事工作⁵』は八路軍の対日心理戦争を考察しようと延安を訪れたアメリカ軍事視察団の報告書である。累計71号にわたる膨大な量のレポートの中、共産党の捕虜政策または日本人捕虜状況に関連する内容は、「第11号 八路軍による戦争捕虜の処遇」「第21号 八路軍の対日本人捕虜政策」「第46号 捕虜の扱い方——敵軍工作ハンドブック第5版」「第48号 八路軍部隊と民間人の捕虜教育法」「第55号 捕虜の処遇」「第59号 八路軍に捕えられた日本人捕虜の統計」など多数がある。そのほか、譚政「敵軍工作の目的と方針について」、日本人民解放連盟が作成したビラのサンプル、良いビラの書き方など具体的なプロパガンダ手段に関する概略的分析などもある。これらの報告書は、共産党の日本人捕虜教育を研究するには、貴重な資料となる。特に共産党の捕虜政策に関して、『延安リポート』は最も多くの資料を集めている。とくに「第46号 捕虜の扱い方——敵軍工作ハンドブック第5版」は八路軍総政治部敵軍工作部編「敵軍ハンドブック」第5版の全訳であり、「捕虜工作の重要性」「前線での捕虜の扱い方」「後方での捕虜の扱い方」「捕虜の教育方法」「捕虜の釈放の仕方」「捕虜の管理法」などの項目に分けられており、1941年までの捕虜工作の推移をまとめた貴重な資料である。同時に、諸先行研究の中で、『延安リポート』「第48号 八路軍部隊と民間人の捕虜教育法」では、一般軍民向けの「捕虜政策宣伝・教育工作」について記載され、貴重な参考となる。しかし、これは1941年の資料であり、「捕虜返還」という段階に限られており、早期の捕虜政策を考察するには貴重な資料であるが、捕虜政策の全体像は描かれていない。

そのほか、研究誌などで散見できる共産党の捕虜政策についての先行研究のほとんどは、中国共産党の捕虜政策を詳しく研究した成果である。しかし、土地革命期の捕虜政策との繋がりを考察し、全体としての共産党の「対敵2分法」思想の関する考察はまだ充分ではない。また、一般軍民向けの「捕虜政策の宣伝工作」を言及する研究も充分ではない。本論文では、共産党の捕虜政策の変遷を軸にし、共産党の捕虜政策の原点である土地革命期の捕虜政策を考察し、日本人捕虜を扱う政策のつながりを分析する。捕虜優遇と「2分法」の関係性、および捕虜政策の真実を詳しく論じたい。

第2は、中国にいる日本人の反戦組織と反戦活動についての研究である。日中戦争のとき、中国では、早くも「日本人の反戦運動」に関する研究が現れた。共産党や国民党の軍隊におい

て、日本人の反戦運動は敵情研究の一部となっていた。そのほかに、中国でもっとも早く現れた日本人反戦運動に関する研究は、宋斐如の『日本人民的反戦運動』が挙げられる⁶。47 ページの薄い本ではあるが、『日本人民的反戦運動』では、「従対華侵略到反戦運動」（中国侵略から反戦運動へ）、「日俄戦争当時の反戦運動」（日露戦争当時の反戦運動）、「日本智識份子的反戦運動」（日本の知識人の反戦運動）、「左翼陣営在反戦運動中の統一化」（反戦運動における左翼陣営の統一化）、「日本士兵的反戦運動」（日本人兵士の反戦運動）、「植民地民衆的反戦運動」（植民地民衆の反戦運動）などのテーマが挙げられている。1938 年という早い時期に出版された著作だけに、その後中国で現れた覚醒連盟、反戦同盟、解放連盟などの日本人反戦組織に関する考察はない。1945 年まで日中戦争期における日本人の反戦運動に関するトータルな分析にはなっていない。さらに、中国共産党と日本人反戦組織の関係性についての分析は一切なかった。

中華人民共和国が建国されて以降、「在華日本人反戦運動」に関する研究が現れたのは、日中関係がよくなってきた 1980 年代後半からであった。これ以前、中国では「悪魔の日本軍」というイメージが強かったため、親中の日本人のことはあまり知られていなかった。「日本人反戦運動を研究すること」自体は、敵に内通する罪で批判され、厳しく禁止されていたこともあった。例えば中国で「日本人反戦運動」研究の第一人者である孫金科は 1950 年代からはすでに個人的に「日本人反戦活動」に関連する資料を収集し、研究を始めていた。しかし、文革期の批闘大会で厳しく批判され、収集したすべての資料も没収された。1980 年代に入ると、「中日友好を促進しよう」という狙いもあり、親中の日本人のことも一般人に知られるようになった。それに関する多くの研究成果もこの時期から出版されるようになったのである。例えば小林清の『在華日人反戦組織史話⁷』、王岳庭の『在華日人反戦運動史略⁸』、孫金科『日本人民的反戦闘争⁹』などの著作が次々と出版された。反戦兵士の水野靖夫の回想録『日本軍と戦った日本兵：一反戦兵士の手記』が中国語に翻訳されたのも 1985 年のことであった¹⁰。さらに、長年中国天津で研究活動に携わった反戦兵士だった小林清の中国語版回想録『在中国的的土地上¹¹』と『反戦組織史話』も同時期に出版された。

孫金科『日本人民的反戦闘争』は 1996 年に出版された少数の日本反戦活動の著作のひとつである。主に日本人の反戦組織と反戦運動を中心に取り上げており、「盧溝橋事変前の日本人民反戦闘争」「在華日本人反戦組織の創立と反戦活動の展開」「反戦組織の統一と反戦運動と活躍」「日本人民解放連盟の創立と反戦運動の終結」という 4 編に分けて、日本人の反戦活動を系統的に論じている。更に、日本国内における反戦活動、国民党統治区における反戦活動、解放区における反戦活動に分けて論じている。覚醒連盟とその支部、反戦同盟とその支部、日本人民解放連盟とその支部、日本工農学校とその分校について、各組織の活動を詳しく記載している。同書は主に日本人の反戦活動を中心に論じている著作であり、中国共産党の方針や政策と敵軍工作部という機関にはあまり触れていない。中国共産党と日本反戦組織の関係性についても論及していない。中国にいる日本人の反戦活動を知るには、重要な資料になるが、日中

戦争期における中国共産党の対日政策とは無縁である。

『在華日人反戦紀実¹²』は最近出版された著作である。研究というよりは、通俗読み物というほうが適切かもしれない。本書の執筆者は梁淑珍、張建華、胡振江、王庭岳、丁建同、孫金科、春日嘉一、小林陽吉である。42章で42人の反戦兵士の反戦物語をまとめ、各章は1人の日本人反戦兵士の物語として、書かれている。それぞれいかに捕虜になったのか、いかに教育を受け転向したのか、どういう反戦活動を行なったのかなどについて詳しく記載している。本書の特徴は、日中戦争期だけではなく、これらの反戦兵士が日本に帰国した後の状況も紹介している。敵軍工作部の工作を所々に触れているので、それぞれの人物活動を考察するには重要な参考資料になる。しかし、孫金科の『日本人民的反戦闘争』と同じように、本書は日本人の個別の反戦活動を紹介する著作で、共産党の捕虜政策と方針などについては論じていない。

そのほかに『在華日人反戦運動史略』(1989)、『在華日人反戦組織史話』(1987)、鹿地亘『日本兵士の反戦活動¹³』、『日本人民反戦同盟闘争資料¹⁴』、藤原彰『資料 日本現代史1 軍隊内の反戦運動¹⁵』などがある。これらの資料は日本人反戦運動を中心に考察した研究であり、日本人の反戦運動、特に日中戦争期における日本人の反戦組織と反戦運動の変遷を考察するには、貴重な先行資料となる。しかし、多くの研究は、日本人反戦組織及び反戦運動を中心にするものであり、日本人反戦組織と中国共産党の関係についてはあまり言及していない。

本論文は中国における日本人反戦活動を全面的に考察する研究ではないが、共産党の日本人反戦組織政策を考察するとき、上述した研究は重要な先行研究となる。しかし、これらの先行研究は、日本人反戦組織の歴史整理、日本人の反戦人物の物語としてまとめられ、共産党の政策に重点を置くものではないため、共産党のプロパガンダ戦術という角度からの論及が行われていない。したがって、本論文で中国共産党が日本人反戦組織に対して、いかなる態度・政策を採っていたのか、などといった問題の解明に加え、前述した先行研究を踏まえ、共産党の日本人反戦組織に対する政策を考察する必要があるだろう。本論文では、収集した新しい資料『敵軍工作に関する総政治部の指示¹⁶』を中心に、中国共産党が「日本人反戦組織」への態度と政策、日本人反戦組織と中国共産党の捕虜政策の関係、敵軍工作部と解放連盟の分担・協力を解明しながら、共産党の対日プロパガンダ戦略と関連させて考察する。

しかしながら、これらの先行研究は、なぜ中国共産党が日本軍国主義者と日本人民を区分する「二分法」を採用したのかについて直接的で明確な解答を与えていない。そして、まさにこれらの説明を補完する新しい視点が、中国共産党の宣伝活動を視座とする研究である。

日本軍国主義者と日本人民を区分する「二分法」及び、中国共産党の道義外交、日本兵捕虜利用など「二分法」の意味に関するこれらの先行研究は、本論文にとって貴重な先行研究となる。しかし、中国共産党の「対敵二分法」の起源はさらに考察する必要がある。本論文で考察する限り、中国共産党の「対敵二分法」思想は1928年、対国民党作戦のときにすでにあった。そして、「対敵二分法」の起源と意味を考察し、それは中国人が普遍的に持っているものなのか、共産党独自のものなのかなどの問題を明らかにする。

資料利用の面において、中国側の一次資料の公開はまだ限られているが、筆者が収集した日本人反戦組織の出版物などの一次資料がある。同時に、日中戦争当時の新聞報道は貴重な参考となる。上述した先行研究は、当時の共産党機関紙『新中華報』、『解放日報』、『八路軍軍政雑誌』などについての考察はまだ充分ではない。本論文では、それらの新聞・雑誌を精査し、先行研究を踏まえ、「2分法」の意味を解明する。

3, 仮説と具体的な手順

1937年から1945年までの日中間が戦争状態にあった時期、中国共産党は「軍事3分に政治7分」という方針を打ち出し、日本軍向けの政治工作を積極的に行なった。その1つに、日本人捕虜を教育・改造し、対日軍事プロパガンダに従事させるという史実があった。

本論文では具体的に、敵軍工作部など中国共産党のプロパガンダ組織はいかなる存在なのか、中国共産党は日本人の反戦組織をどう扱っていたのか、などの問題を明らかにする。このようなプロパガンダ組織の構成、中国共産党と日本人反戦組織の関係性についての考察から、中国共産党の対日プロパガンダの原則である「2分法」の意味も見えてくる。

今までの資料から、次のような仮説を立てることができる。中国政府が第2次世界大戦後に対日関係でしばしば公式的に表明している「対敵2分法」は、一見すると、「資本主義諸国の政府は敵であるとしても、当該国家の人民は味方である」という国際共産主義の思想を反映しているように思われる。しかしながら、中国政府の「対敵2分法」の形成過程を詳細に検討すると、①1920年代に、「対敵2分法」の最初の原則が、中国の土着思想に基づいて形成され、②1930年代に、その原則が知日派中国人の手を借り、日本軍向けのプロパガンダ工作の一環として精緻化されてきた、ことがわかる。

本論文では主に2つの部分に分けて考察したい。第1に、組織面の考察で、敵軍工作部の組織構成を考察することである。第2に、政策面の考察で、共産党の対日プロパガンダ工作からその「2分法」の意味を考察することである。

(1) 敵軍工作部の組織と活動

日中戦争期における中国共産党の対日プロパガンダ政策を見るには、最も重要な部門は、総政治部の下にある「敵軍工作部」である。本論文では、中国各地で収集した1次資料と今まで散在した日中両側の先行研究を踏まえ、敵軍工作部の創立、発展の過程と各級敵軍工作組織の具体像を系統的に研究する。

敵軍工作部については、八路軍の中の「知日派」の役割が重要である。本論文では八路軍の敵軍工作に直接参与した趙安博、王学文、張香山などの人を例に考察を加える。これらの人々はほぼ皆日本留学の経験を持ち、留学中、日本の一般庶民の生活、日本社会を客観的に観察できる立場にいた。特に、日本人との付き合いの中で、「日本人民」に対して好感を持っている人も多かった。八路軍の「知日派」は日本をどう見ているのか、「知日派」の人々は共産党の敵軍工

作政策にどのようなつながりがあったのか、などの問題を解明したい。

敵軍工作の推進のため、敵軍工作訓練隊及び敵軍工作幹部学校が設立され、中国軍民向けの捕虜政策の教育工作が行われていた。また、抗日動員のため、全国的に抗日宣伝が行われていた。しかし宣伝などによって作り出された「悪魔の日本軍」というイメージはその後の捕虜優遇と「2分法」政策の実行に不利な作用をもたらしたため、捕虜優遇と「2分法」の合理性を宣伝するため、八路軍兵士と民衆向けの教育・説得工作が展開された。

(2) 対日プロパガンダ活動と捕虜政策

敵軍工作部という「機構」の軸と平行し、もう1つの軸である中国共産党の対日宣伝の政策を考察する。

A. 捕虜政策

中国共産党のプロパガンダ戦略を考察するとき、捕虜政策は最も重要な要素となる。土地革命期の1928年11月に、毛沢東が「敵軍に対する宣伝で、最も有効な方法は捕虜を釈放することと負傷兵を治療することである」と指示している。このことから共産党の捕虜政策の宣伝目的性を窺うことができるだろう。日中戦争期の捕虜政策について、「捕虜釈放」を実行するまでの捕虜の扱いの実状、「優遇せずに釈放」の段階、「優遇してから釈放」の段階に分けて分析する。当時の中国共産党は「2分法」思考法の指導のもとで、捕虜優遇、捕虜教育などの工作を行おうとした。当時の命令、指示および『新中華報』『解放日報』『八路軍軍政雑誌』などの資料を詳しく分析し、対外的に「捕虜優遇政策」の内容とプロパガンダ意義を解明する。

B. 日本人反戦組織と対日プロパガンダ

満州事変後の1933年から、中国共産党は「日本労働者の革命闘争を応援する」姿勢を見せている。それは「2分法」思想と一貫している。1937年の日中戦争勃発後、共産党は更に成熟しつつある「日本反戦観」を示し、日本人捕虜を優遇すると同時に、日本人反戦組織に対しても柔軟な態度と方針を採っている。日本反戦活動が先にあり、国民党向けの「2分法」も先にあって、その2つの要素で、中国共産党の対日プロパガンダ工作が実行される過程の中で、「対日2分法」思考法が生まれたのではないかと、「2分法」の形成を解明する。

本論分では、日中戦争期における中国共産党の捕虜政策と日本人反戦組織のつながりを明らかにしたい。それは即ち別の側面から共産党の「2分法」の意味を窺うことができる。

2009年、中国共産党と日本人反戦組織の関係を究明する上で貴重な資料となる『敵軍工作に関する総政治部の指示』が陝西省档案館で発見された。資料には、「敵工部の分担する工作」「解放連盟が担当する工作」をはっきり規定されており、解放連盟と共産党の関係、及び敵軍工作の組織上の変化が明らかとなった。今までの先行研究と独自の新しい資料に基づいて、前期の「中国人が行う敵軍工作」、中期の「中国人と日本人共同で行う敵軍工作」、後期の「日本

人反戦組織を通じての敵軍工作」と3つの段階に分けることができる。時間の推移に沿って、中国共産党が「日本人反戦組織」に対して行った政策、共産党の日本人反戦組織への支援・指導・利用、さらには敵軍工作部と解放連盟の役割分担・協力関係などを分析する。

今までの研究の中には、敵軍工作部に関する研究はあるが、敵軍工作部の構成、工作を系統的に考察する研究はまだ不十分である。中国共産党は日本人の反戦組織をどう扱っていたのか、など中国共産党と日本人反戦組織の関係についての研究も少ない。特に、民衆を動員するための「抗日宣伝」と、「2分法」に対する一般兵士・民衆の対抗もこれまでなされていない。中国共産党と日本人反戦組織の関係性についての分析から、中国共産党の対日プロパガンダ戦略も見えてくる。

中国側の歴史資料公開の遅れなどの原因で、当時の1次資料を入手するのは極めて困難である。筆者が陝西省、山東省で新しく収集した『敵我在宣伝戦線上¹⁷』、『敵軍工作に関する総政治部の指示¹⁸』などの資料は、本研究にとって貴重な1次資料である。

同時に、日本アジア歴史資料センターで収集した『中原会戦俘虜調査報告7部¹⁹』、『俘虜とせる奸匪日本兵士奪取の件²⁰』、『延安方面共産区状況の1端に関する件²¹』、『反戦同盟の新聞『日軍の友』と雑誌『前線』などの1次資料や『北支の治安戦²²』、水野靖夫²³、前田繁光、秋山良照²⁴の回想録などの2次資料を踏まえて分析を行う。更に、『延安リポート』、エドガー・スノウの『中共雑記²⁵』、『中国の赤い星²⁶』及びニム・ウェールズの『人民中国の夜明け²⁷』など欧米側の記載も考察し、多面的な検討を加える。

4, 本研究の意義

中国共産党の対日政策に関する研究は、日中戦争期に遡ることができる。日中戦争期における中国共産党の対日政策を考察するには、何より対日戦争プロパガンダ政策、特に「2分法」思考法を考察すべきである。

「共通の敵を打倒するために連合できる諸勢力と共闘する」戦略は、中国共産党の性格の重要な一部である。共産党は日中戦争に当たり、「軍国主義者に利用された」日本軍一般兵士とその政府や軍閥を区分する「2分法」を採っていた。現今の中日関係については、中日友好を望む大多数の日本人民と中日友好を阻害する一握りの人を区別する「2分法」を採っている。中国国内においても、「文革」が終わった際、利用された紅衛兵や群衆と4人組などの極少数の人を区別する「2分法」を採っていた。1989年の天安門事件後、利用された学生と反革命動乱を起こした極少数の人を区別する「2分法」を採っていた。最近の2008年3月14日のラサ騒動においても、ダライラマ集団に利用され騒動を起こした少数人と安定を望むチベット各族人民を区別する「2分法」を採っていた。多数人の支持を得るため中国共産党は少数人を敵にし孤立させ、多数人を友にし、獲得しようとする「2分法」を一貫して採用してきた。「2分法」という共産党のプロパガンダ哲学は日中戦争期において成熟し、その後の中国共産党の多くの政策に深く影響を与えている。「2分法」思考法は、中国共産党の政策設定を見るには、重要且つ今日的な意味を持って

いる。

現在、歴史問題は日中関係を影響する大きな要素として注目されている。日中間の歴史問題をみるときに、中国共産党の「二分法」思考法はいまでも重要な役割を果たしている。「二分法」思考法は、中国人の日本観を左右する大きな要素でもある。日本にとって、台頭する中国という隣国と付き合う上で、「二分法」を理解する意味は大きい。

いまの中国の正式文書では、日中の中の歴史問題に関しては、「二分法」の考え方を堅持することが基本となっており、一般民衆にも周知されている。しかし、いったん何か事が起きると、非理性的な反日活動が誘発され、この「二分法」の考え方がないがしろにされてしまう。つまり、中国人の心の中には、教え込まれた「二分法」という理性的思考法と、すべての「日本鬼子」が憎いと思う感情が並存している、と考えられる。そんな現状の中、日中戦争期における中国共産党の対日プロパガンダ及び「二分法」思考法の形成とその意味は、中国人の「日本観」、 「日中戦争観」を見る上で、大きな意義があるだろう。

-
- 1 毛里和子『日中関係 戦後から新時代へ』岩波新書,2006年6月20日,22頁。
 - 2 山本武利編訳『延安レポート—アメリカ戦時情報局の対日軍事工作』岩波書店,2006年2月,18頁。
 - 3 徐則浩『従浮虜到戦友』安徽人民出版社,2005年7月1日。
 - 4 姫田光義,藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店,1999年9月18日。
 - 5 前掲書『延安レポート—アメリカ戦時情報局の対日軍事工作』。
 - 6 宋斐如,『日本人民的反戦運動』,生活書店,1938年6月第1版。
 - 7 小林清『在中国的土地上』解放軍出版社,1985年8月。
 - 8 王岳庭『在華日人反戦運動史略』河南人民出版社,1989年。
 - 9 前掲書,『日本人民的反戦闘争』。
 - 10 鞏長金訳『反戦士兵手記』解放軍出版社,1985年6月。
 - 11 前掲書,『在中国的土地上』。
 - 12 中共河北省党史研究室,河北省政協文史資料委員会編『在華日人反戦紀実』河北教育出版社,2005年8月。
 - 13 鹿地亘『日本兵士の反戦活動』同成社,1982年10月10日。
 - 14 鹿地亘『日本人民反戦同盟闘争資料』同成社,1982年10月10日。
 - 15 藤原彰『資料 日本現代史1 軍隊内の反戦運動』大月書店,1980年7月25日第1刷発行。
 - 16 『敵軍工作に関する総政治部の指示』陝西省档案館,5495-13-24-26。
 - 17 『敵我在宣伝戦線上』陝西省档案館,3018-11-3-23。
 - 18 『敵軍工作に関する総政治部の指示』陝西省档案館,5495-13-24-26。
 - 19 『中原会戦俘虜調査報告7部』防衛省防衛研究所, C04123313500。
 - 20 『俘虜とせる奸匪日本兵士奪取の件』防衛省防衛研究所, C08010761200。
 - 21 『延安方面共産区状況の1端に関する件』防衛省防衛研究所,C04120692000。
 - 22 防衛庁防衛研修所戦史室『北支の治安戦』<1><2>朝雲新聞社 1968.8, 1971年10月。
 - 23 水野靖夫『日本軍と戦った日本兵:一反戦兵士の手記』白石書店,1974年8月31日。
 - 24 秋山良照『中国戦線の反戦兵士』徳間書店,1978年11月10日。
 - 25 エドガー・スノウ,小野田耕三郎・都留信夫訳『中共雑記』未来社,1964年11月30日。
 - 26 エドガー・スノウ,宇佐美誠二郎訳『中国の赤い星』築摩書房,1964年9月20日。
 - 27 ニム・ウェールズ,浅野雄三訳『人民中国の夜明け』新興出版社,1971年9月25日。

第1章 毛沢東の対敵プロパガンダ戦略・戦術

第1章では、『持久戦論』など毛沢東の著作と欧米ジャーナリストへの攻勢から、毛沢東の戦争プロパガンダ戦略と「二分法」の戦略的思考法を解明したい。それは「日中戦争期における中国共産党の対日プロパガンダ」を研究するには基礎的な部分となる。

『持久戦論¹』は1938年5月というかなり早い時期に書かれた文章で、初期毛沢東の対日政策を見るには重要な著作となる。それによると、「もし中国人の大多数、日本人の大多数、世界各国人の大多数が抗日戦争に味方するものとすれば、日本の少数人が強制的に掌握しつつある軍事力及び経済力がなおよく優勢なものたり得ると考え得られるだろうか²。」それと同時に、抗日戦争の勝利は、「国際力及び敵国人民の援助から離脱するものでもない³」と指摘し、日本人民の援助の必要性を強調している。「日本人民」を含める「人民戦争」思想、「日本人民」を含める「国際抗日統一戦線」思想など対日政策に対する毛沢東の根本的な考えは、その後の日本人捕虜を扱うときの政策と深く関連している。

日中戦争期において、中国共産党は外交権を持っていなかったが、「延安交際処」を通じて積極的に対外工作を展開した。特に、プロパガンダ工作推進のため、欧米ジャーナリストに対して積極的な攻勢を行い、有利な世界世論を作るために努力した。本章では「延安交際処」についての考察し、「中外記者西北訪問団」を獲得する共産党の努力と訪問団の活動を明らかにしたい。世界各国で出版された欧米の諸記者の著作を分析し、共産党の世界世論政策の効果を明らかにする。その主の著作には『中共雑記』(Edgar Snow), 『中国の赤い星』(Edgar Snow), 『人民中国の夜明け』(Nym Wales), 『中国的惊雷』(White 1988), 『華北前線』(Bertram 1937), 『新西行漫記』(Band 1948), 『中国的新生』(Bertram 1937), 『北行漫記』(Forman 1945)などがある。

1.1 『持久戦論』から見る毛沢東の敵軍工作思考

『孫子の兵法』には、軍隊出征の3段階を説明する「朝気」、「昼気」、「暮気」説がある。それによると、「是故朝気鋭、昼気惰、暮気帰。故善用兵者、避其鋭気、撃其惰帰。此治気者也。」(是の故に朝の気は鋭く、昼の気は惰り、暮の気は帰る。故に善く兵を用ふる者は、其鋭気を避け、其惰帰を撃つ、此れ気を治むる者なり。)孫子は1日の朝、昼、暮で戦争の3段階を意味している。「出生当初の意気は朝気であつて、戦争半ばは昼気、愈々永引くに從つて暮気といふやうなものである⁴。」

『孫子の兵法』など中国古代兵書を愛読する毛沢東の『持久戦論』も、日中戦争を3段階に分

け、各段階の対策を分析している。

『持久戦論』は毛沢東が日中戦争勃発 10 カ月後の 1938 年 5 月 26 日から 6 月 3 日まで延安抗日戦争研究会での演説に基づいてまとめたものであるが、「すでに全抗日戦の発展方向について確乎たる見透しを与えている⁵⁾。『持久戦論』の日中戦争における地位と抗日戦争に対する指導意義などは多く論じられているが、『持久戦論』と中国共産党の敵軍工作の関係性についての研究はまだ少ない。『持久戦論』では、抗日戦争における中国共産党の採るべき政治工作政策が多く論じられている。

日中戦争勃発から 10 ヶ月後にはすでに『持久戦論』はまとめられ、終戦の 1945 年までは 7 年以上が経過している。このことから『持久戦論』は日中戦争に対する毛沢東の予想として、また日本向け作戦計画としても考えることができる。「抗日戦争は持久戦である」という前提の下で、中国共産党の日本捕虜教育工作における長期的計画が成立している。即ち、「速勝」は出来ない戦争であるからこそ、日本捕虜の優遇政策の継続的効果を期待していたのである。敵軍工作はあくまで長期間を想定した持久戦として考えられていた。長期性という特徴を持ち、即ち敵軍工作も「持久戦」である。総政治部副主任である譚政が 1940 年 6 月の『対敵工作の当前任務』では、「3年に及ぶの抗日戦争と対敵工作の経験により」、「日本帝国主義の軍隊は」「弱められつつあるが」、「しかし、対敵工作の持久的、困難的な性質が変わっていない⁶⁾。」

1.1.1 日本人民の獲得

敵軍を勝ち取るために、共産党は「2分法」で敵軍の下級兵士を団結しようという努力は一貫として行われている。『持久戦論』でも「2分法」の考え方が反映されている。

(1)「日本人民」を含める「人民戦争」思想

日中戦争の勃発以前にすでに一般大衆及び下級兵士に対する政治工作を積極的に行っていた。「人民戦争思想は毛沢東軍事思想の核心である⁷⁾は、当時の実践経験をまとめたものである。『持久戦論』では、毛沢東は人民戦争思想を強調している。「兵士と人民は勝利の本である⁸⁾。」「戦闘の偉力の最も深奥な根源は民衆の中に存在する⁹⁾と強調し、「軍隊は打って民衆と一丸となり、軍隊と民衆の眼中に於て自己の軍隊なりと見做しめるべきである。かかる軍隊は天下無敵である¹⁰⁾と指摘している。

「2分法」で日本人民の援助を狙う。如何に日本と戦うべきかについて論じる『持久戦論』では、毛沢東は日本人民を敵にすることを避け、「日本人民」を抗日勢力の一部にする狙いを示している。『持久戦論』では、日本の大多数の人民と強制的に軍事力と経済力を掌握している「少数」を区別する「2分法」の観点を採り、大多数の日本人民は中国人民と世界人民のように、世界抗日統一戦線の戦力となると考えた。「もし中国人の大多数、日本人の大多数、世界各国人の大多数が抗日戦争に味方するものとすれば、日本の少数人が強制的に掌握しつつある軍事

力及び経済力がなおよく優勢なものたり得ると考え得られるだろうか¹¹。」それと同時に、抗日戦争の勝利は、「国際力及び敵国人民の援助から離脱するものでもない」と指摘し、日本人民の援助の必要性を強調している¹²。中国の抗日戦争は、日本人民の解放とも関連していることが指摘され、「殲滅はまた戦争過程を短縮させ、日本の下級士官、兵卒及び日本人民解放の時期を早める条件の1つである¹³」とされた。1938年10月12日に発表した『抗戦十五ヶ月の総括』によると、日本の戦争は、「彼ら本国の人民大衆と絶対対立させる戦争となり、日本帝国主義は戦争のために人の財産を取ってきた結果、彼ら国内人民や前線兵士の間に多くの不満を引き起こした。戦争の発展につれ、日本人民と兵士の大衆は断固として戦争を反対するようになる違いがない。それらは十五カ月の中で証明されたものである¹⁴。」

日本人民は日本の戦争を反対すべきことを強調している。毛沢東は、中国古代の孟子の「得道多助、失道寡助」（道に適えば助けが多く、道にそむけば助けが少ない）という名言を活用し、中国の抗日戦争の正義性と日本の侵略戦争の非正義性を指摘している。日本が行っている戦争に対して、「日本の戦争は進歩を阻碍する反革命的戦争であり、日本の人民をも含めた全世界人民は悉く反対すべきであり、また正に反対し始めている¹⁵。」大多数の日本人民は戦争を起こした「少数人」と違い、戦争に反対すべきであると強調している。その中から、大多数の日本人民と戦争を起こした「少数人」を区別する毛沢東の「二分法」思想が分かる。それと同時に、毛沢東は日本の「国内的階級対立を最大規模に激化させ、中国の民族的対立（中国全民族と日本の支配者との対立——原注）及び世界の大多数の国家並びに人民との対立を激化させずには置かないのである¹⁶」と指摘し、日本国内の対立を利用する考えを示している。同時に、日本人民だけでなく、全世界において日本の戦争に反対させる狙いが分かる。

日本人民の反戦的力は、日本に戦勝したい中国にとって欠かせない条件の1つであると毛沢東は考えている。『持久戦論』の最後の部分では、毛沢東は「中国は日本帝国主義の実力に戦勝」できる条件を3つにまとめた。それぞれは「中国抗日統一戦線の完成」、「国際的抗日統一戦線の完成」、「日本の人民革命の興起」である¹⁷。毛沢東の「世界抗日統一戦線」についての考えでは、日本人民の革命は欠かせない条件の1つとなっていることが分かる。

(2)「日本人民」を含める「国際抗日統一戦線」思想

毛沢東は日中戦争を国際的な背景から観察している。1939年6月12日に発表した『第2次帝国主義戦争論』にも各国の民族解放運動を統一戦線に組織化して、革命戦争で帝国主義戦争を打倒すべきだと主張している。現在は「第1次世界大戦の時」とは違い、「共産党は数十カ国に分布している。」「第2次帝国主義世界大戦は人類空前の災難であり」、「すべての資本主義国家の被抑圧人民、すべての植民地および半植民地の被抑圧民族は覚醒し、団結し、帝国主義戦争に反対し、革命戦争を起こすに違いない¹⁸」、「全世界の各資本主義国家の人民解放運動の存在と発展、各植民地や半植民地の民族解放運動の存在と発展は、すべて中国の良い友となり、中国抗戦の頼れる援助者である」と指摘し、「各国人民解放運動や、各国民族解放運動

は、堅固な統一戦線に組織化すべきだ¹⁹と強調している。

さらに、1944年4月12日に発表した『中国共産党抗日時期発展の3つの段階』によると、「現今の時局は2つの特徴がある。1つは、反ファシズム戦線の増強とファシズム戦線の衰微である。もうひとつは、反ファシズム戦線内部人民勢力の増強と反人民勢力の衰微である²⁰。」日本人民を含める「国際統一戦線」の促成を狙っている毛沢東の見方が『持久戦論』にも出ている。『第2次帝国主義戦争論』の一年前に発表した『持久戦論』にも、「統一戦線」問題は多く論述されている。中国語版の『持久戦論』では、「統一戦線」という言葉は37回も用いられている。政治工作の重要な部分である「統一戦線」について、毛沢東はもうすでに日本の「国内の反戦的人民から前線の反戦的兵士に至るまでの人々²¹」を団結し、統一戦線という形で敵軍と戦う考えを示した。

抗日戦争と統一戦線とが堅持されるために幾多の要因が必要である。国民党から共産党に至るまでの全国各党派、資本家から労働者に至るまでの全国各人民、主力軍から遊撃隊に至るまでの全国各軍隊、国際的方面では各民主主義国家から社会主義国家に至るまでの各国家、敵軍方面では国内の反戦的人民から前線の反戦的兵士に至るまでの人々などが何れも我々の抗戦中にそれぞれ各種の異った程度の努力を尽くしているのである²²。

1939年2月15日出版した『八路軍軍政雑誌』第2号で、毛沢東の「抗戦と外援の関係—『持久戦論』英訳本序言」が掲載され、「偉大な中国抗戦は、中国のことだけでなく、東方のことだけでなく、世界のことでもある²³」と指摘の指摘がある。『持久戦論』では、毛沢東は世界範囲で日中戦争を見ることを堅持し、日中戦争は第2次世界大戦の一部であり、中国の抗日戦争は世界の反ファシズム運動の一部であり、中国の抗日統一戦線は国際抗日統一戦線の一部であることを強調している。『持久戦論』の最初の部分では、抗日戦は「世界の歴史に於てもまさに偉大なるものになるであろう。全世界の人々は悉くこの戦争に関心を寄せている²⁴」と指摘され、中国語版の『持久戦論』では、「援助」という言葉は37回も出ている。「中国の任務はかかる国際情勢を利用して自己の徹底的開放を遂げ、独立せる民主国家を建設すると同時に、また世界の反ファシズム運動を援助することにある²⁵」と強調している。日本帝国主義に戦勝するために、「日本国内の人民及び被圧迫民族の革命運動の興起²⁶」は1つの条件とされている。

「世界抗日統一戦線」において、日本の革命的勢力の働きは重要である。「この戦争はどの位長びくであろうか」という質問に対し、「主要なものとしては中国自身の力の外に、国際的に中国に与えられる援助と、日本国内の革命的援助もまた極めて関係するところ大である²⁷」と毛沢東は『持久戦論』で答えている。「この戦争が正義のものであるからこそ全国的な団結を喚起し、敵国人民の同情を激起し、世界の多数国家の援助を呼集めているのである²⁸」日本人民と世界多数国家の援助を重視している毛沢東の「国際抗日統一戦線」の考えがわかる。

(3)「兄弟」である捕虜を優遇する敵軍工作原則

敵軍工作は共産党の政治工作の重要な一部分である。日中戦争が始まった直後の1937年10月25日、イギリス人記者のジャームス・バートラムとの談話の中で、毛沢東は八路軍政治工作の3つの基本原則をまとめた。「第1は將兵一致の原則であり」、「第2は軍民一致の原則であり」、「第3は敵軍を瓦解させ、捕虜を寛大にとりあつかう原則である²⁹。」とまとめている。『持久戦論』では、「軍隊政治工作の3大原則」を重ねて明言した上で、「これらの原則の実行が有効なためには、兵士の尊重、人民の尊重、及び敵軍捕虜の尊重というこの根本態度より出発すべきである³⁰と強調している。

軍隊政治工作はいつも共産党指導者に重視されている。土地革命戦争の時期、国民党や軍閥と戦うとき、共産党は敵軍の一般兵士とその政府や軍閥などと区別する「2分法」を採っていた。「復讐、鬱憤(うっぶん)を晴らすのなら、彼らはその対象ではない。白軍兵士の圧倒的多数は労農の子弟で、あなた達は彼を殺したって、地主や土豪劣紳らは、すぐに新しい人を捕まえる。結局不運なのは貧乏な民衆だけだ。」さらに毛沢東は「彼らを帰らせて、私達のために宣伝してもらおうべきだ³¹」と2分法を採用するにいたった敵軍工作の考えを示している。

抗日戦争を主な研究対象とする『持久戦論』では、毛沢東はまた土地革命期の敵軍工作と同じ原則を指摘し、明確化した。「我々が捕虜とする日本の兵士や将校は歓迎され非常な好遇を受けなれならぬ。我々は単に彼らを殺害しないのみならず、さらに彼らを兄弟同様に愛護しなければならぬ。種々の方法の採用によって、日本軍の兵士を彼らのファシスト的上官に反抗するよう蹶起させねばならぬ。我々のスローガンは「お互いに聯合して我々の共同の圧迫者に反対しよう」ということである³²。『持久戦論』では、「我が軍の日本軍に対する殺傷は甚だ多いが、捕虜は甚だ少い³³という現状も指摘している。

大多数の日本人民と戦争を起こした「少数人」を区別する「2分法」を前提として、毛沢東は『持久戦論』で日本軍捕虜を扱う八路軍兵士に具体的な指導を与える。「日本の兵士に対しては、その傲慢な自尊心を侮辱することではなくて、彼等のこの自尊心について理解をもち、またこれに逆らはずして導いてやることである。捕虜の優待、国民外交等々の方法により、日本の統治者らの反人民的侵略主義について理解を持つよう彼等を導いてやることである³⁴と指摘している。

1.1.2『持久戦論』から見る毛沢東の心理戦思考

『孫子の兵法』には、「是故百戦百勝、非善之善者也。不戦而屈人之兵、善之善者也」とある。(是の故に百たび戦つて百たび勝つは、善の善なる者に非ざるなり。戦はずして人の兵を屈するは、善の善なる者なり³⁵。)そのほか、「三軍可奪氣、將軍可奪心」(三軍は氣を奪ふ可く、將軍は心を奪ふ可し)³⁶という論述もある。日中戦争期においては、共産党は抗日勢力の士氣向上の努力をしながら、敵軍の心理攪乱及び士氣破壊活動を積極的に行っていた。毛沢東は『持久戦論』で心理戦術を重視し、分析している。

(1)「唯武器論」への批判:中国軍民への鼓舞

「中国の武器は他の国のものに劣っているから戦えば必ず敗戦する³⁷」といった亡国論に対して、毛沢東は「唯武器論」を批判し、悲観的である中国軍民を激励しようとしている。毛沢東は『持久戦論』で「人力」の重要性を強調し、戦争では決定的要因を武器ではなく「人」であると主張している。その上、「人心の対比³⁸」を力の対比の重要な要素と主張している。それは中国共産党の政治工作の根柢のひとつであると考えられ、抗日戦争の心理戦術の一部分だと考えられる。即ち、敵軍向けの心理瓦解や破壊工作の外に、中国軍民への激励も心理戦術の重要な部分であろう。

「唯武器論」に対して、それは「戦争問題に於ける機械論であり、主観的1面的に問題を見る意見である。我々はこれと反対であり、単に武器を問題とするのみならず、人力を問題とする。武器は戦争の重要な要因ではあるが、決定的要因ではない。決定的要因は人であって物ではない。力の対比は単に軍事力及び経済力の対比であるのみならず、また人力及び人心の対比でもある³⁹」と指摘し、武器が日本に劣っている中国軍民の「人力」と「人心」が決定的要因であると強調している。

中国軍民の心理を安定させて始めて日本軍向けの心理戦を着実に出来るようになる。抗日戦争の政治動員を強調するとき、毛沢東はまた武器は「第2義的である」ことを指摘している。政治動員が「関係するところは絶大であり、武器等々は敵に劣っているが、その点は何といても第2義的である。この1手を第1の重要性を持つものである⁴⁰。」政治動員を通じて、安定的中国軍民の心理作りの重要性を示している。

どうやって持久戦を短縮させることができるかという、「自己の力の増大、敵の力の減少に努力する以外に何の方法をも講じない⁴¹。」この論述は共産党の敵軍謀略方針とつながっている。その中、「人心」、即ち士気の力が重視されている。中国軍民の「士気の振起」と敵軍の「士気の頹廢」のための努力は対照的だが、その統一性は論じられている。「毎月1回比較的大きな勝利戦、例えば平型関、台兒莊の戦いに類する勝利戦を行うようにすれば、大々的に敵の気力を阻喪させ、我が軍の士気を振起させ、世界的声援を呼集めることが出来る⁴²。」つまり、中国軍民の士気の高揚と日本軍の士気の頹廢は、その心理戦の目標である。

(2)敵軍の瓦解:敵軍士気を破壊する心理戦思考

『持久戦論』では、毛沢東は軍隊政治工作の3大原則である「上官と兵士との一致、軍隊と人民との一致、敵軍の瓦解⁴³」を重ねて強調し、「敵軍の瓦解」を3大原則の1つにしている。敵軍を瓦解させ、敵の士気を破壊する方針が何度も強調されている。中国語版の『持久戦論』では、「瓦解」という言葉は4回使われており、「破壊」という単語は14回に上がる。更に、「士気」は8回に出現し、「人心」は4回、「厭戦」は2回、「反戦」は3回、「軍心」は2回、「動揺」は4回用いられている。

日本軍の士気を破壊するために、毛沢東は日本軍の心理状況を把握し、日本軍兵士の心理現況を分析している。「日本軍隊の長所は単にその武器にあるばかりでなく、更にその教養——その組織性、過去に於て敗戦したことの無いその自信、天皇及び鬼神に対するその迷信、その傲慢なる自尊心、その中国人に対する軽視等々の特徴——にあり、これらの点は日本軍閥の多年の武断的教育及び日本の民族的習慣によって造り上げられたものである⁴⁴。」

『持久戦論』では、「心理戦」という言葉は1回も出ていないが、遊撃戦、運動戦などの戦術を運用するとき、心理戦との総合運用は毛沢東に重視されていることが分かる。『持久戦論』では、毛沢東の敵軍心理瓦解工作についての思考が多く現れている。例えば、運動戦という戦略を説明するとき、敵の士気を破壊する方針を示した。「戦争の前期には我々は一切の大きな決戦を回避し、先ず運動戦によって、逐次に敵の軍隊の士気及び戦闘力を破壊して行くようにしなければならぬ⁴⁵」と指摘し、運動戦と心理戦の運用の考えを示している。「かくして日本は中国抗戦による長期の消耗によりその経済を破壊させ、無数の先頭に於ける消耗によってその士気を頹廃させていくであろう⁴⁶」との指摘もあり、心理戦と持久戦の統一性を強調している。

毛沢東は中国抗日戦争を3つの段階に分けて分析している。それらの敵軍工作の謀略や手段によって、毛沢東は日本軍の士気の行方、つまり敵軍工作の心理戦の効果を大胆に予測した。それは、持久戦の3段階を分析するときを示している。第1段階における敵側の「向下的な変化」を分析するとき、敵側の「向下的な変化」の現れを「士気の頹廃」と「国内人心の不满」、国際的輿論⁴⁷にもまとめている。それらの表れを実現するために、共産党は敵軍工作を更に重視する傾向は予測できるはずである。「幾十万人の死傷、武器弾薬の消耗、士気の頹廃、国内人心の不满、貿易の縮減、百億円以上の支出、国際的輿論によって与えられているのである⁴⁸」と毛沢東が分析している。「我々は日本軍隊のかかる長所が破壊出来るものであるのみならず、すでに破壊が始まっていることを認める。破壊の方法として主要なものは政治上よりの奪取である⁴⁹。」

第2の段階である「相持段階」においては、心理戦の目標を明確化した。「広範な遊撃戦と人民抗日運動とがこの大量の日本軍を困憊せしめて、1面ではこれを大量的に消滅させ、他の1面では1歩進んでその郷愁、厭戦の心理を反戦心理にまで発展、増大せしめて精神上よりこの軍隊を瓦解せしめるに至るだろう⁵⁰」と毛沢東が日本軍向けの心理戦の目標を明確化している。更に、この段階に於いて、日本の向下的変化の表れを国内人心の不满、士気の頹廃と国際孤立などにまとめている。それらの表れの中に、敵軍工作の効果である内容の割合はかなり高いのである。「日本の軍力、財力は大量的に中国の遊撃戦に消耗され、国内人心は不満を増大させ、士気はますます頹廃し、国際的にはより一層孤立を感じさせられる⁵¹」と指摘し、心理戦術と財力の消耗、国際抗日統一戦線、日本人民の人心奪取などの工作との総合運用についての考えを示している。

更に第3の「反攻段階」においては、中国側の「広範な統一戦線を結成し、未曾有の団結を実現した」一方、「敵側では、すでに士気の頹廃が始まっているし、敵陸軍の鋭鋒(鋭気)はこの段階

の中期に於てはすでにその初期に比べて鈍化して居り、末期に至ればますますその初期に比し鈍化して行くであろう。敵の財政経済はすでにその枯渴を現し始めて居り、人民及び兵士の厭戦気運はすでに成長し始めて居り、また戦争指導集団の内部ではすでにその「戦争の煩悶」を示し始めて居り、戦争の前途についての悲観が成長しつつあるのである⁵²と指摘している。

抗日戦の3つの段階において、日本軍士気の頹廃、厭戦や反戦気運の成長、日本国内人心の不満の増大などの方面から、心理戦の計画を示している。毛沢東のそれらの考えは、その後の中国共産党の敵軍工作と対敵宣伝と深く関連していると考えられる。「日本軍の心理はすでに動揺し始めて居り、下級士官、兵士などは戦争目的を理解して居らず、中国軍隊と中国人民の包囲の中に陥り、突撃の勇氣は中国兵よりも遙かに劣っている⁵³」日本軍の心理の変化と中国軍民の士気の変化を対照し、中国軍民を激励し、日本軍士気を破壊する面において、『持久戦論』は敵軍工作的な意義を持っていると考えられる。

(3) 攪乱工作を通じて、敵軍に錯覚を与える心理戦術

「武器及び人員の教養程度」が日本軍に劣っている中国の「弱兵」⁵⁴が勝利を獲得するために、遊撃戦と運動戦は強調されている同時に、敵軍向けの攪乱工作も指摘されている。つまり、「計画的に敵の錯覚を造り出し」、敵軍を混乱させる工作方針である。それは、「計画的に敵の錯覚を造り出し不意の攻撃を加えることは優勢を造り出し、また主動を奪取する方法であるばかりでなく、重要な方法である⁵⁵。」

その上、前述した「人民戦争」理論、「抗日統一戦線」理論と合わせて、中国の民衆を動員・利用し、「消息を封鎖することの出来る際に、敵を欺瞞する各種の方法を採用すれば、常に有効に敵を判断の錯誤と行動の錯誤との苦境に陥れることが出来、それによってその優勢と主動とを喪失させることが出来るのである⁵⁶」と指摘している。「敵に錯覚を与え、また不意を与えて有利に戦い、これに勝利するというこの戦争方法に於てもまた必ずや大きな役割が果され得るであろう。」

57

毛沢東は、中国の伝統古典から教訓・経験を吸収するのが好きである。「我々は宋の襄公ではなく、猪武者流の仁義道徳を必要としない。我々は敵の眼と耳とを出来る限り封じてしまい、敵を盲目とつんぼとにしてしまはねばならぬ。敵の指揮員の心を出来得る限り混乱させ、彼を狂人にしてしまい、それによって自己の勝利を取得するようにせねばならぬ⁵⁸。」「君子は他人がこまっているのに乗じて人を撃つようなことはしない」といった宋の襄公を批判している毛沢東のあらゆる心理戦手段で日本軍を戦勝する決意がわかる。

そのほかに、捕虜を殺さずに優遇する捕虜政策も心理戦と深く関連している。戦争の目的は「自己を保存し、敵を消滅させる」こと以外の何ものでもない、と毛沢東が強調しているが、その上に更に「敵の消滅とは敵の武装を解除することであり、また所謂「敵の抵抗力の剥奪」であって、その肉体を消滅させることではない⁵⁹」と説明し、心理戦を含めるあらゆる手段で「敵の抵抗力の剥奪」を狙う姿勢が分かる。

1.1.3 国際プロパガンダを重視する輿論戦思想

毛沢東は国際プロパガンダに関して、「抗戦と外援の関係—『持久戦論』英訳本序言」で次のように述べている。「英国、米国、仏国などの民主国家の広大なる民衆、各階層のすべての進歩的な人々を含め、すべて中国の抗戦に同情し、日本帝国主義の中国侵略に反対しているのである」「我々の敵は世界的な敵で、中国の抗戦は世界的な抗戦である⁶⁰。」「『持久戦論』では、日本向けの宣伝活動を含める国際プロパガンダを通じて国際援助を獲得するための努力は多く語られている。中国語版の『持久戦論』では、「国際プロパガンダ」という言葉は4回出現している。

(1) 国際プロパガンダによる国際援助への狙い

戦争の勝利を獲得するために、「敵軍の瓦解と敵軍兵士の獲得とに努力し、国際的宣伝による国際的援助の獲得に努力すること以外にはないのである」⁶¹と毛沢東が指摘し、国際プロパガンダを通じての国際援助の必要性を明言している。抗日戦争の勝利は、「国際力及び敵国人民の援助から離脱するものでもない⁶²。」

毛沢東は、楽観的「速勝論」を批判し、国際プロパガンダ工作の強化を主張している。「また例えば、国際外交や国際プロパガンダ工作はなおこの上強化すべきであろうかどうかについて見るに、その答は否定的であるかもしれない⁶³。」

勝利を実現するために、毛沢東は国際プロパガンダと外交の重要性を繰り返し強調している。反攻段階である「第3段階」においては、毛は「敵軍内部の変化」を狙っていることが分かる。そこから、国際プロパガンダと敵軍工作との関係性も分かる。「単に自己の力のみではなお不十分であり、更に国際的な力と敵国の内部的変化との援助に依存するを要する。然らざれば、勝利は不可能である。それ故に、中国の国際的宣伝及び外交工作の重要性が加重しているのである⁶⁴。」

(2) 国際への世論攻勢:「世界の永久平和」の打ち出し

『持久戦論』では、「世界の永久平和」が打ち出され、それは共産党の国際世論攻勢のスローガンともなる。「平和のために戦う」という考えは、その後の日本軍捕虜教育と日本軍向けの宣伝工作の実行と深く関連していると考えられる。『持久戦論』は毛沢東の演説であり、それ自体は共産党の政治工作の一環である。日本労農学校での捕虜教育を行うとき、『持久戦論』はその教材ともなっている。『持久戦論』では、「すでに開始されている革命的な戦争はこの永久平和のための戦争の一部である」⁶⁵「抗日戦争は永久平和のための戦いの性質を含んでいるのである⁶⁶」と指摘している。それは、戦争で苦しんでいる中国民衆と兵士向けの政治工作のためだけでなく、日本軍向けの敵軍工作にも使うことが可能である。

それと同時に、「世界の永久平和」という概念を具体的に描き、「人類が一度永久平和の時代

に到達すれば、もはや戦争は不必要である、そのときには軍隊の必要もなく、軍艦の必要もなく、軍用飛行機の必要もなく毒ガスの必要もない。それより以後は人類正確の第3時代——永久に戦争なく平和な時代——が出現し、我々の子孫は幾億万年も戦争に遭遇することはないであろう⁶⁷。」戦争で苦しんでいる中国の民衆と日本軍に対して、「世界の永久平和」は説得力のある宣伝となったと考えられる。

我々の戦争は神聖な、正義的な、進歩的な戦争であり、平和を希求するための戦争である。それは単に一国の平和を求めるばかりでなく、また世界の平和をも求めるものであり、単に一時的平和を求めるばかりでなく、永久の平和をも求めているのである。(中略)この目的のために、人類の大多数は極大の努力を払うべきである。4億5千万の中国人は全人類の4分の1を占めている。もしも、我々が一斉に努力し、抗戦と統一戦線とを堅持し、日本帝国主義を打倒し、自由平等の新中国を創造するならば、それが全世界の永久平和獲得に対してなす貢献は疑いもなく非常に偉大なものである⁶⁸。

敵軍の士気を「破壊するには1つの長期の過程が必要であり、先ず第1に、我々がこの特徴を重視し、然る後、辛棒強く計画的に政治の上から、国際的宣伝の上から、日本の人民運動の上から等、多方面からこの点に向って工作を行う必要がある⁶⁹」という指摘から、敵軍工作自体が「持久戦」であることが分かり、敵軍工作、心理戦、国際抗日統一戦線、国際プロパガンダなどの要素は、それぞれ関連し、総務的に運用しなくてはならないという毛沢東の考えが分かるだろう。

1.1.4 『持久戦論』と敵軍工作

『持久戦論』はのちの日本人捕虜教育や日本軍向けのプロパガンダ工作に運用された。敵軍工作幹部だった劉国霖によると、日本人捕虜に『持久戦論』を読ませ、日本の侵略戦争は必ず失敗すると信じさせようとした⁷⁰。前田光繁が捕虜となったら、毛沢東の『持久戦論』を勉強させた。中国語版なので、読んでも分からないため、敵軍工作の幹部がそれを日本語に訳し、読んであげた。「中国人民が日本侵略者を戦勝できると信じさせた⁷¹。」前田光繁自身も、「毛沢東『持久戦を論ず』などを学習した⁷²」と回想している。「中国文だから骨が折れたが、敵工部の幹部たちが読んで聞かせてもくれた。実に魅力ある論文であった。八路軍の勝利を確信の源はここにあったのだ⁷³」という。水野靖夫の回想によると、捕虜となった翌年、農民抗日運動の指導者から、『持久戦論』などを持ってきてくれたが、「さすがにこれはチンプンカンプンであった⁷⁴」という。香川孝志の回想によると、「覚醒連盟の杉本氏⁷⁵が私のところに本を持ってきて『読んでみないか』とすすめてきた」「その中に『漢文が読めるのなら、これを読んでみないか』と言って杉本氏がすすめたのが、毛沢東の『論持久戦』である」「これを読んで本当に私はおどろいた。これだけ

のすぐれた見通しを持った人の思想や理論を学べるものなら学んでみたい」という気持ちになったという⁷⁶。

1940年の百団大戦で捕虜となった中村善太郎(通名・中小路静夫)の回想録によると、捕虜になったら、八路軍に優遇された同時に、その工作員は毛沢東の『持久戦論』の内容と使って捕虜を教育していた。「その後、旅団本部に連れていかれました。そこには日本語のしゃべれる朝鮮人の工作員がいた。彼は毛沢東の『持久戦論』を紹介しながら、この戦争では日本が必ず負けると言った⁷⁷。」

大山光義の回想にも、『持久戦論』が出ている。敵軍工作部の趙香山が中国語版の『持久戦論』『新段階論』などの本を大山に渡し、「読んでみてください。意見があれば遠慮なくいってください」といわれた⁷⁸。和田真一の回想によると、捕虜になったら、レーニン、毛沢東の著作を渡された。「毛沢東の『持久戦論』を読み、心から感服した⁷⁹」という。「毛沢東の『持久戦を論ず』のほうに興味があった。中国語は知らないが、原語を漢文式に読んでみると意味の通らないところが沢山あるが、それでも何とか意味が分かった。全文を完全に読み終わったわけではないが、当時の私は、毛沢東主席が日本軍の伝統や軍事技術、訓練、士気、武器の優れている点を挙げて、これが日本軍が現在の段階で強大であることを指摘し、その弱点、戦争が侵略戦争であり、国内に反対勢力があること、人力と物力に限界があり、士気と兵隊の質が低下している点を挙げ、中国軍が戦闘の経験を重ねていくなかで質的にも量的にも向上し強大になり均衡がくずれること、開戦四年の今日、敵味方の力関係を正しく分析している点に非常に感心した⁸⁰」と回想している。渡辺三郎の回想によると、捕虜になった後、覚醒連盟から『社会科学』『持久戦論』などの本を渡された⁸¹としており、『持久戦論』が入所早々の捕虜の教育に使用されていたことが分かる。

『持久戦論』は、日本軍向けのプロパガンダ工作にも使われた。日本人反戦組織である覚醒連盟冀南支部の盟員だった秋山良照の回想によると、プロパガンダ手段の1つである日本軍宛の手紙は、秋山が書いた。その中には、毛沢東の著書、『中国革命の戦略問題』や『持久戦について』を引用したと記されている。「それは、人々を納得させる不思議な力を持つ論文であった」と回想している⁸²。

¹ 本論文では、1946年に人民社によって出版された日本語版の『持久戦論』(尾崎庄太郎訳)を参考。

² 毛沢東著、尾崎庄太郎訳『持久戦論』人民社、1946年9月、50-51頁。

³ 前掲書、『持久戦論』、66頁。

⁴ 公田連太郎『孫子の兵法』(兵法全集第1巻)中央公論社、昭和10年6月20日、240頁

⁵ 前掲書、『持久戦論』、126頁。

⁶ 「対敵工作的当前任務」十八集團軍政治部出版『八路軍軍政雑誌』第2巻第6期、1940年6月5日、52頁。

⁷ 常涛、張正明「毛沢東人民戦争思想探源」『前沿理論』、2007年2月号、1頁。

⁸ 前掲書、『持久戦論』、63頁。

⁹ 前掲書、『持久戦論』、119頁。

¹⁰ 前掲書、『持久戦論』、120頁。

¹¹ 前掲書、『持久戦論』、50-51頁。

-
- ¹²前掲書、『持久戦論』, 66 頁。
- ¹³前掲書、『持久戦論』, 104-105 頁。
- ¹⁴『毛沢東軍事文集』(第2卷)軍事科学出版社, 中央文献出版社, 1993 年 12 月第1版, , 376-377 頁。
- ¹⁵前掲書、『持久戦論』, 61 頁。
- ¹⁶前掲書、『持久戦論』, 15-16 頁。
- ¹⁷前掲書、『持久戦論』, 122 頁。
- ¹⁸前掲書、『毛沢東軍事文集』(第2卷), 477 頁。。
- ¹⁹前掲書、『毛沢東軍事文集』(第2卷), 478-479 頁。
- ²⁰前掲書、『毛沢東軍事文集』(第2卷), 710 頁。
- ²¹前掲書、『持久戦論』, 2頁。
- ²²前掲書、『持久戦論』, 2-3頁。
- ²³前掲書、『毛沢東軍事文集』(第2卷), 448 頁。
- ²⁴前掲書、『持久戦論』, 1頁。
- ²⁵前掲書、『持久戦論』, 50 頁。
- ²⁶前掲書、『持久戦論』, 7頁。
- ²⁷前掲書、『持久戦論』, 7頁。
- ²⁸前掲書、『持久戦論』, 18 頁。
- ²⁹ パートラム(James Bertram) 著, 林淡秋 等訳『華北前線』新華出版社, 1986 年7月, 124-125 頁。
- ³⁰前掲書、『持久戦論』, 120 頁。
- ³¹『中国共産党軍隊政治工作 70 年史』(第 1 卷)解放軍出版社, 1991 年 5 月, 157 頁。
- ³²前掲書、『持久戦論』, 12 頁。
- ³³前掲書、『持久戦論』, 104 頁。
- ³⁴前掲書、『持久戦論』, 104-105 頁。
- ³⁵前掲書、『孫子の兵法』(兵法全集第1卷), 89 頁。
- ³⁶前掲書、『孫子の兵法』(兵法全集第1卷), 238 頁。
- ³⁷前掲書、『持久戦論』, 3頁。
- ³⁸前掲書、『持久戦論』, 51 頁。
- ³⁹前掲書、『持久戦論』, 50-51 頁。
- ⁴⁰前掲書、『持久戦論』, 68-69 頁。
- ⁴¹前掲書、『持久戦論』, 53 頁。
- ⁴²前掲書、『持久戦論』, 77 頁。
- ⁴³前掲書、『持久戦論』, 66 頁。
- ⁴⁴前掲書、『持久戦論』, 104-105 頁。
- ⁴⁵前掲書、『持久戦論』, 10 頁。
- ⁴⁶前掲書、『持久戦論』, 12 頁。
- ⁴⁷前掲書、『持久戦論』, 48 頁。
- ⁴⁸前掲書、『持久戦論』, 48 頁。
- ⁴⁹前掲書、『持久戦論』, 105 頁。
- ⁵⁰前掲書、『持久戦論』, 44 頁。
- ⁵¹前掲書、『持久戦論』, 48-49 頁。
- ⁵²前掲書、『持久戦論』, 41-42 頁。
- ⁵³前掲書、『持久戦論』, 105 頁。
- ⁵⁴前掲書、『持久戦論』, 76 頁。
- ⁵⁵前掲書、『持久戦論』, 88 頁。
- ⁵⁶前掲書、『持久戦論』, 88 頁。
- ⁵⁷前掲書、『持久戦論』, 88 頁。
- ⁵⁸前掲書、『持久戦論』, 88 頁。
- ⁵⁹前掲書、『持久戦論』, 71 頁。
- ⁶⁰ 毛沢東「抗戦と外援の關係—『論持久戦』英訳本序言」十八集團軍政治部出版『八路軍軍政雜誌』第1卷第2期, 1939 年2月 15 日, 9-10 頁。
- ⁶¹前掲書、『持久戦論』, 53 頁。
- ⁶²前掲書、『持久戦論』, 66 頁。
- ⁶³前掲書、『持久戦論』, 6 頁。
- ⁶⁴前掲書、『持久戦論』, 45 頁。
- ⁶⁵前掲書、『持久戦論』, 60 頁。
- ⁶⁶前掲書、『持久戦論』, 61 頁。
- ⁶⁷前掲書、『持久戦論』, 60-61 頁。
- ⁶⁸前掲書、『持久戦論』, 62 頁。

-
- ⁶⁹前掲書、『持久戦論』, 104 頁。
- ⁷⁰劉国霖, 鈴木伝三郎「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」学苑出版社, 2000 年6月, 41 頁。
- ⁷¹孫金科『日本人民的反戦闘争』北京出版社, 1996 年2月, 39 頁。
- ⁷² 姫田光義, 藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店, 1999 年9月 18 日, 106 頁。
- ⁷³ 香川孝志, 前田光繁 著『八路軍の日本兵たち—延安労農学校の記録』サイマル出版会, 1984 年6月, 164 頁。
- ⁷⁴ 水野靖夫『日本軍と戦った日本兵:一反戦兵士の手記』白石書店, 1974 年 8 月 31 日, 89 頁。
- ⁷⁵ 杉本一夫は前田光繁の偽名である。
- ⁷⁶ 前掲書, 『八路軍の日本兵たち—延安労農学校の記録』, 25 頁。
- ⁷⁷ 前掲書, 『日中戦争期下中国における日本人の反戦活動』, 123 頁。
- ⁷⁸中共河北省党史研究室, 河北政協文史資料委員会『在華日人反戦紀実』河北教育出版社, 2005 年8月, 162 頁。
- ⁷⁹ 前掲書, 『在華日人反戦紀実』, 172 頁。
- ⁸⁰反戦同盟記録編集委員会 編『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』日本共産党中央委員会出版部, 1963 年9月, 66-67 頁。
- ⁸¹前掲書, 『在華日人反戦紀実』, 195 頁。
- ⁸²秋山良照『中国戦線の反戦兵士』徳間書店, 1978 年 11 月 10 日, 56 頁。

1.2 毛沢東の欧米ジャーナリストへの宣伝攻勢

中国共産党は結成された初期に、中国国内の民衆を動員するための国内世論工作を積極的に行ってきたが、国際世論工作はそれほど重視されていなかった。国際世論工作は、1937年の日中戦争の勃発以後重視されるようになった。『中国共産党新聞思想史』によると、「国際宣伝」という言葉が中国共産党の正式文書に現れたのは1938年3月の「中共中央政治局会議」の決議文中が最初である¹。「抗戦はもうすでに8カ月が経った。しかし、われわれの国際宣伝工作及びわが国各界の団体と海外の各界の団体とのつながりは薄い²」との記載が残っている。

また同一の資料から「対外宣伝」という言葉が中国共産党の正式文書で初めて使われたのは1938年11月に行われた「中共六届六中全会」であったことが分かっている³。決議には、「あらゆる勢力を団結し、日本ファシズム軍閥侵略者に反対し、対外宣伝を強め、国外の援助を勝ち取り、対日制裁を実現させる⁴」とある。なお、筆者が調べたところによると、周恩来が1938年1月7日に「如何に持久戦を行うか」のなかで、すでに「対外宣伝」との概念を提唱し、「全国統一の対外宣伝を行い、計画的・系統的に宣伝資料を世界に提供すべきだ⁵」と述べている。

当時の国際世論工作は、日中戦争期を契機に大きく進展した。中国共産党は日中戦争勃発前の1936年6月から10月にかけて、アメリカ人記者のエドガー・スノー(Edgar Snow)を積極的にソビエト地区に招いて、取材に応じた。スノーは、毛沢東を初めとする共産党の首脳を取材し、『中国の赤い星』を1937年10月にイギリスで発表した。反響は大きく、中国共産党が世界に認知される契機となった。中国共産党は外国人記者を通じた国際世論工作の有用性を再認識し、その後も周恩来など中国共産党の有力者は国民党統治地区において、常に記者会見を開き、影響力のある外国人記者を招き接触していた⁶。

日中戦争期の中国共産党には外交権はなかったが、「延安交際処」を通じて積極的に対外工作を展開した。特に、欧米ジャーナリストに対して積極的にプロパガンダ工作を進めた。本節では「延安交際処」はどのような経緯で始まったのかを明らかにし、中外記者西北訪問団を実現させるにいたった共産党の努力とその効果を解説する。

スノーやその後の中外記者西北訪問団は、中国共産党の国際世論政策における欧米ジャーナリストへの積極的な工作の代表例であるが、そのほかにも、ドイツの新聞「フランクフルター・ツァイトゥング」の記者として延安に来たアグネス・スメドレー(Agnes Smedley)など外国人記者が多

くいた。本節では、スノーと中外記者西北訪問団に絞って分析する。

1.2.1「延安交際処」についての考察

共産党の部局として延安交際処は、これまで十分に研究がなされていない。延安交際処の正式名称は「陝甘寧辺区政府交際処」であり、日中戦争において、延安交際処は中国共産党の「統一戦線」政策を実施する最前線であった。同時に、中外記者西北訪問団の延安訪問、アメリカ軍事視察団の接待などにも関わっていた。ここでは延安交際処について考察する。

1935年11月、中国共産党は長征を経て陝北に到着し、11月に中華ソビエト共和国中央政府駐西北弁事処を設立した。1936年1月26日、対外宣伝と連絡交渉工作を強化するため、西北弁事処は第4号命令を出し、外交部を設立することを決めた。外交部の下に交際処を設け、伍修権はその処長に就任した。その後、交際処は交際科となり、科長には胡金魁が就任した。1936年アメリカ人記者スノーが延安の西北にある保安を訪問したとき、胡金魁はその接待工作を担当していた。スノーは延安交際処の前身である「外交部宿舍」に宿泊した。スノーの著作によると、「外交部宿舍」は土を積み上げた1室きりの小屋4軒で、そのうちのひとつがスノーの宿舍であった⁷。

1937年9月、陝甘寧辺区政府が設立されると、外交部は廃止された。1938年5月、辺区政府交際科が正式に発足し、金城(1906-1991)が科長となった。1940年に交際科は交際処に格上げされ、金城は引き続き処長となった。

交際処の処長を長年にわたって担当していた金城は、元の名前は金樹棟。1947年に西北軍区政治部敵軍工作総部部長となり、共産党の敵軍工作にも関わった。1949年中華人民共和国が建国した後、中央統戦(統一戦線工作)部で活動し、中央統戦部の副部長や顧問などの要職に着いた。

金城の回想録は延安交際処を考察するうえにおいて、貴重な参考資料となる⁸。ここでは、金の回想録を中心に、これまで収集した資料に基づいて、延安交際処の経緯と活動を考察する。

(1) 交際処設立の背景

交際処設立の目的の第1は対外宣伝工作の強化である。金城の回想録によると、1937年の冬、金城は延安抗日軍政大学を卒業した後、中国共産党組織部部長の李富春から、辺区主席の対外工作秘書の工作を命じられた。「陳雲さんがソ連から帰国してきて、元のソビエト中央政

府の外交部が廃止され、対外連絡宣伝工作弱体化しているので、この方面の工作を強化しようと提案した。中央組織部は貴方にこの工作を担当させることを決めた⁹と李より言われている。毛沢東は会議の中で、「一部の党内長老は10年内戦の時期、ソビエト内での活動が習慣化し、閉鎖的に同志とだけ活動することを好み、党外の人との接触や合作を嫌がっている。こういった『閉門主義』の傾向も直さなければならない¹⁰」と指摘している。

第2の目的は統一戦線工作のためである。金城の回想録によると、交際処が設立された当初、毛沢東が会議を開き、交際処の任務を討論した。毛沢東は次のように指摘している。「現在、わが国の抗日民族統一戦線はもうすでに作られた。日本侵略者を打ち負かすために、われわれは抗日民族統一戦線を堅持し、発展させ、強化すべきだ。統一戦線工作の展開で、われわれのドアも開くようになる。延安にくる国内のお客さんがどんどん増えていく。貴方たちの仕事はますます増え重要性も増す¹¹。」

中国共産党の統一戦線工作と対外宣伝工作は深くつながっている。金城の回想録によると、交際処が設立された当初、毛沢東が会議で統一戦線工作を強調した後、来賓向けの宣伝工作の方法について次のように指示している。「来賓向けの宣伝工作を行うときは、事実に基づいて我が党の政策を宣伝すべきだ。」「われわれは誠実かつ率直に実際状況を紹介すれば、必ず人々の信頼を得ることができる¹²。」

(2) 交際処の役割

延安交際処は、対外宣伝と統一戦線工作の担当部署であると同時に、共産党の秘密情報を獲得するための特務機関でもあった。中国共産党の特務工作に従事していた楊黄霖の回想録によると、交際処の下に連絡科、招待科、行政科と3つの科署が設置されていた。延安に派遣された国民党の連絡参謀官は交際処が接待していた。楊黄霖によると、「接待工作員は訓練を受け、毎日国民党連絡参謀官の部屋の紙くずを収集して私に渡した。破った紙くずの中から、国民党の関心事を探った¹³。」としている。さらに、国民党連絡参謀の電報用暗号ノートを手に入れたのも交際処だった。獲得作戦の総指揮は交際処処長の金城だった。楊黄霖の回想によると、部屋の掃除係に偽装した工作員が、国民党連絡参謀の部屋と暗号ノートの置き場所を把握した上、連絡参謀やその助手を野外会食と京劇鑑賞に招待し、その間に延安にいる工作員が2回にわたって、そのノートを写した。1945年8月下旬、毛沢東が敢えて重慶に行き、国共協議に参加したのは、交際処が重慶にある国民党と延安の間の電報を盗聴し、共産党中央指導部に貴重な情報を提供したからだ¹⁴。

その後の外国人記者とアメリカ軍事視察団の延安訪問を実現させたときにも、延安交際処は

重要な役割を果たした。中外記者西北訪問団の延安訪問の接待や連絡工作はすべて交際処が担当していた。他の分野の外国人来賓が延安に来たときの接待などの工作も延安交際処が担当していた。たとえば、日中戦争期において中国共産党の通信技術に大きく貢献したイギリス人のマイケル・リンドステイ(Michael Lindstay)の回想録によると、1944年5月に延安に到着したら、「交際処に泊まることとなった。ここでわれわれは18カ月滞在した¹⁵⁾」と記されている。毛沢東など中央指導者が外国の友人(医者、記者、技術者など)に接見するときも、交際処を通じて行われた。



外国の友人を迎えた延安交際処の人々、左4人目は処長の金城。

(出典:『八路軍抗日根拠地見聞録——一個英国人不平経歴的記述』102頁)



アメリカ軍事視察団との写真。

前列の真ん中は周恩来、右は葉劍英、後列の真ん中は楊尚昆、左は延安交際処の金城である。

(出典:楊黄霖「延安交際処憶往」26頁)

1.2.2 中外記者西北訪問団延安訪問の実現

日中戦争勃発以前、中国に駐在している外国人記者は主に上海などの沿海都市で活動していた。これらの地域では、取材も比較的自由に行われ、国民党政府の新聞検閲を避けることもできた。日中戦争が勃発した後、最新情報を入手するため、多くの外国人記者が武漢・重慶などの地区に移動した。国民党中央宣伝部国際宣伝処の統計によると、1937 年末から 1942 年2月までの間、武漢・重慶では 168 名の外国人記者を接待した。そのなかの 77 名はアメリカ人記者であった¹⁶。

太平洋戦争勃発まで、アメリカなどの国の記者は「中立」の立場で第三者として中国で取材していた。太平洋戦争が勃発した後、アメリカは中国の同盟国となり、中国にいるアメリカ人記者は中国国民党と共産党の日本に対する方針について、それまで以上に関心が高まった。

こうした背景の中、中国共産党はアメリカなどの外国人記者を獲得する努力を通じて、国際世論工作を展開しようとした。共産党側は自分にとって有利な国際世論及び国内世論を作るため、積極的に支配地区以外の新聞記者と接触した。特に外国人記者に対して、積極的な攻勢を行った。1936 年のスノーに始まり 1944 年の中外記者西北訪問団まで、共産党は外国人記者を利用し、国際世論に影響を与えようとした。外部に知られていない共産党支配地区を取材したい外国人記者と外部に対し誤解を解きたい共産党の利害が一致し、外国人記者の延安訪問が推進された。

国民党は日中戦争が勃発した後、対外宣伝に力を入れた。国民党中央宣伝部国際宣伝処は外国の友人を団結し、特に在華外国人記者を利用して中国の抗戦情勢と外交政策を宣伝しようとした。ただし、本節は共産党の対外宣伝政策を研究対象にしているため、国民党の対外宣伝政策は分析から除く。

(1)スノーのソビエト地区訪問

1927 年に第1次国共合作が終結した後、両党関係が悪化した。共産党が作った「革命根拠区」であるソビエト地区に対して、国民党が封鎖政策を行った。「共匪」「赤匪」などの悪イメージを改善するため、毛沢東と周恩来は、行動が自由である外国人記者を利用しようとした。毛と周が宋慶齡に対して、「ソビエト地区を取材しにくる記者を招いてほしい」との希望を述べた手紙を書いた¹⁷。当時西側の記者もソビエト地区に対し関心を持っていた。1937 年2月、スノーが当時のアメリカ大使ジョンソンに次のように述べている。「政府側が発表した共産党に関する宣伝につ

いては、私はもう基本的に信じることができない。なぜなら、それはまったく理解できないからだ。強奪と殺人だけに興味ある土匪が、南京の部隊に10年も対抗してきたなんて、誰が信じることができるのか。きっとある強い力が彼らを支えている¹⁸。」こうした背景から、スノーのソビエト地区訪問が実現した。

1936年6月、宋慶齡の紹介で、中国共産党の秘密組織がスノーの延安訪問の手筈を整えた。オットー・ブラウン(Otto Braun)の記録によると、劉少奇が指導している中央委員会華北書記局の未知の工作人員から、スノーが招待状を受け取り、同時に毛沢東宛ての招待状と西安での落ち合い場所を書いた送り出しの手紙をもらった。秘密工作人員の手配で、西安を通過して延安など共産党支配地区に到着すると周恩来は彼を大いに歓迎し、あらゆる面で便宜を図ってくれたというのである。ブラウンの記録によるとスノーがアメリカの秘密諜報員だったとの説もあるが、肯定も否定もできないという¹⁹。

スノーのソビエト地区訪問は、国民党政府の許可を得ずに、隠密裏に進められた。スノーが保安に到着したとき、「ソビエト中国視察の米人記者歓迎！」「日本帝国主義打倒！」「中国革命万歳！」と中国語と英語で書いた横断幕を持った人々が列を成していた²⁰。

1936年7月9日、周恩来が陝西省の安塞でスノーと会談した際、「私は貴方が中国民衆に友情のある信頼できるジャーナリストで、本当のことをいってもよい、間違いのない方だという報告を受けた」、「私たちが知りたかったのはこれだけだよ。貴方が共産主義者でなくてもどうでもよいのだ。私たちはソビエト地区を見に来るジャーナリストを誰でも歓迎する。それを妨害するのは私たちではなくて国民党だ。貴方は見たことは何でも書いてかまわない。そして貴方がソビエト地区を調査するためにはあらゆる援助を与えよう²¹」と述べた。この周恩来の発言からも当時の共産党が如何に積極的に外国人記者と接触を図っていたかをうかがい知ることができる

1936年10月に、取材を終えたスノーは北京に戻った。11月から、スノーの取材記事はアメリカやイギリスの新聞に掲載された。前述したとおり、スノーの書いた『中国の赤い星』は1937年10月にイギリスのビクター・ガレンツ社(Victor Gollancz Ltd London)によって出版され、大きな影響力を見せた。ついで1938年1月にニューヨークのランダムハウス社(Random House)によってアメリカ版も刊行された。ともに短時日のあいだに版を重ねる売行きを示した。その後の1938年3月に²²、上海にある共産党の秘密組織は「複社」の名義で同書の中国語版を出版した。国民党政府の出版検閲の関係で、「赤い星」のような表現を避け、当時の中国語版は『西行漫記』とのタイトルを使った。中国国内の世論にも大きく影響を与えた²³。

スノーは中国共産党の国際プロパガンディストの宣伝者となり、当時知られていない中国共産

党の状況を世界に紹介した。スノーの成功は、多くの西側記者に刺激を与えたと考えられる。中国にいる外国人記者の間は、情報交換が行われていた。たとえば、1937 年末、中国に来たアメリカ人記者のアナ・ルイズ・ストロング(Anna Louise Strong)は『中国の赤い星』を読んで、香港の船でスノー夫婦と面会し、「中国共産党との接触は良い結果がある」と深く信じるようになった²⁴。1938 年の初め、ストロングは八路軍前線から漢口に戻ってきたスドレーに会い、共産党八路軍に対する見方について意見を交した²⁵。このように、中国に駐在していた外国人記者の間の情報のやり取りがあり、お互いに影響を与えていたと考えられる。スノーの共産党支配地区の訪問は、1944 年の中外記者西北訪問団の延安訪問へと繋がったと考えられる。

(2) 中外記者西北訪問団について

そのころ、連合国側はヨーロッパ戦線をにらみながら、中国戦線でも反攻を準備していたので、外人記者団としては、延安の抗日闘争の真相をみきわめておこうというのが、直接の目的であった²⁶。長期的に封鎖されている中国共産党にとっても、自己のプロパガンダや外界の誤解を解くには、絶好のチャンスとして利用された。記者団が延安に来る前の2週間の間、延安の工作員は受け入れ準備に追われた。会議や記者の質問への対応のほか、接待の準備も進めた。たとえば、多くのソファや椅子を準備した上、ホールで孫文と蔣介石の大きな写真を掛けた。朱徳は、延安にいたイギリス人のリンドスティを司令部に呼び、記者団に対しどのような情報を提供したらよいかを尋ね、それを周恩来などのも伝えた²⁷。

最初にどの記者が国民党に延安取材の申請を出したのか、それはいつだったのか、という問いに対する答えは、資料によってかなり違う。前述した金城『延安交際処回憶録』によると、一番最初に延安取材を申し込んだのは何名かのアメリカ人記者だった。それは 1944 年3月のことだった²⁸。同じ内容をソ連記者として延安にいたピョートル・ウラジミロフの日記でも確認できる。1944 年3月 29 日の日記には、次のように記載している。「中共指導部は米国との接触を求めている。その手始めに、外人記者団を受け入れる準備をしている。ただし外人記者団の方から訪問を望んでいるという印象を与えるのに一生懸命だ²⁹。」

それと違う記載もある。中国第2歴史档案馆の館員である劉景修の考察によると、当時国民党中央宣伝部国際宣伝処処長である曾虚白が 1943 年 11 月8日の『工作日記』には次のように書いている。「アメリカ記者ハリソン・フォアマン(Harrison Forman)の手紙によると、この前、彼は部長に拝謁し、延安への旅行取材を面と向かって述べたそう。申請や証明書などの手続きは本部にて行うと命じられた。」20 日、曾虚白の日記にはまた次のように記載している。「フォアマンの

延安旅行取材の件については、代わりに報告を総裁に出すようにと部長に命じられた³⁰。」

張克明、劉景修の考察によると、「1943年11月6日、フォアマンが延安取材を申請した。フォアマンが『読者文摘』の正式代表ではなく、しかも、抗戦以来、まだ外国人記者が延安を取材の先例がないため、国民党中央宣伝部国際宣伝処は、蔣介石に伺いを立てるべきだと主張。11月20日、軍委会弁公庁が国際宣伝処にフォアマンの政治態度を確認した。その後、蔣介石から『見送るべきだ』との返答があった。」「12月27日、国民党中央宣伝部が、中共の重慶駐在事務所がフォアマンの延安訪問を歓迎する姿勢を知った。董必武は毛沢東、朱徳、周恩来に紹介した³¹。」

劉景修の考察によると、1944年2月の初め、取材を申請する外国人記者が増えた。2月3日に曾虚白の日記には「外国記者の多くが延安への旅行取材を申し込んでいる」と書いている。同日、国民党中央宣伝部部長である梁寒操が外国人記者らの申請を蔣介石に提出すると同意した。23日に、梁が記者会見で「外国人記者の延安訪問を総裁が批准した」と発表した³²。

劉景修が歴史文書で発見した外国人記者の名簿によると、延安訪問を申請した10名の記者が記載されている。彼らの所属と氏名は『ニューヨークタイムズ』(The New York Times)のブルックス・アトキンソン(Brooks Atkinson)、『同盟勞工新聞』のイスラエル・エプスタイン(Israel Epstein)、『ロンドン・タイムズ』のフォアマン、『ロンドン新聞記事報』のスチュアート・ゲルダー(Stuart Gelder)、イタルタス通信のプーチンカ(П у т и н к)、『マンチェスター導報』のガンサー・スタイン(Gunther Stein)、『TIME』と『Life Magazine』のセオドア・H・ホワイト(Theodore H. White)、AP通信ムーサー(S. Moosa)、UP通信のモーリス(J. Morris)、ロイター通信のグラハム・バロー(Graham Barrow)である³³。

国民党中央宣伝部は各記者の政治立場のバランスを考慮したうえで、延安訪問の記者名簿を決めた。国民党の判断によると、「エプスタインとスタインは左寄りの記者で、フォアマンは中国共産党に同情している。ボウトウ(M. Votaw)、シャナハン神父(Father Cormac Shanahan)は国民党に近い立場である³⁴。」5月10日に重慶で行われた国民党の記者会見で、「中外記者西北訪問団は、近いうちに出発できる」と発表した³⁵。

6月10日付の『解放日報』によると、中外記者西北訪問団一行21人が5月17日に西安に着いた。記者団の引率者は謝保樵、副引率者は鄧友穂である³⁶。中外記者団が21日午後1時半に、西安を離れ車で臨潼に行き遊覧し、午後7時に車で山西省に赴いた³⁷。6月9日昼12時に、中外記者西北訪問団一行21人が延安に到着した。『解放日報』記者が延安交際処に行き訪問団の記者たちを訪問し、午後5時、八路軍の葉劍英参謀長が宴会を開き、記者団を歓迎

した。記者団のメンバーは、スタイン、エプスタイン、フォアマン、プーチンカ、ボウトウ、シャナハン神父である。外国人記者と同行する中国記者は9名だった。『大公報』孔昭愷、『中央日報』張文伯、『掃討報』の謝爽秋、『国民公報』の周本淵、『時事新報』の趙炳焄、『新民報』の趙超構、『商務日報』の金東平、中央社の徐兆鏞と楊家勇である³⁸。

6月10日午後5時、朱徳副司令長官が官邸で宴会を開き、記者団を歓迎した。葉劍英参謀長が挨拶をした後、エプスタインと孔昭愷が中外記者の代表として挨拶した³⁹。

6月12日午後5時、毛沢東が記者団のインタビューを受け、スタイン、シャナハン神父、エプスタイン、謝爽秋、趙炳焄の質問に答えた。「国共談判」「第2戦場」「中共の望みとその働き」について語った⁴⁰。

記者団西北訪問の流れ:

◆1944年5月17日、21人の中外記者西北訪問団が出発。内、外国人記者6人。まず、西安及び閻錫山の駐在地を訪問。

◆6月9日、訪問団が延安に到着。6月10日、朱徳は王家坪礼堂で記者団歓迎会を行う。葉劍英は歓迎の挨拶をした。エプスタインが外国人記者の代表として挨拶をした。

◆6月12日、毛沢東が記者団の取材を受けた。

◆6月14日、記者団が「延安各界慶祝連合国日及保衛西北動員大会」に参加。スタインとフォアマンが挨拶した。

◆6月22日、葉劍英が記者団に報告をした。英語に翻訳したパンフレットも配られた。その中に、八路軍、新四軍の抗戦業績、民兵分布及び八路軍、新四軍の発展状況の図表などがある。八路軍、新四軍の中で犠牲となった外国の友人の名簿を発表し、記者の反響を引き起こした⁴¹。

◆6月25日、毛沢東、朱徳、葉劍英がそれぞれ外国人記者の取材を受けた。

◆8月20日、延安で取材活動を続けているエプスタインなど5人の外国人記者が晋綏抗日根拠地に行く前、毛沢東が延安交際処で送別の宴会を開いた。

◆8月29日、アトキンソン、ホワイトの延安取材申請に対して、蔣介石が許可を下ろした。

◆9月17日、アトキンソンが延安に到着する。国民党官僚によると、中国共産党は彼に対して「礼を尽くし、敬意を表した⁴²。」

◆10月5日と23日、エプスタイン、スタイン、フォアマン、ボウトウが重慶に戻る。ボウトウが延安から重慶に戻った時に、国民党中央宣伝部の曾虚白に次のように述べた。「中共は何故宣伝

の面で成功できたかという点、外国人記者に対する接待が盛大であったからだ」「外国人記者の西安に対する印象は特に悪かった⁴³。」

◆10月23日、訪問団が延安を離れた。

◆10月15日、蔣介石が「外国人記者の延安取材を許可しない」と強調した。

◆10月26日、アメリカ人記者のホワイトが取材許可を得て、延安に向け出発。

1944年に、併せて21人の中外記者西北訪問団(外国人記者6人)が延安を訪問した。記者団とは別に、アメリカ人記者のホワイトなども延安訪問を実現した。

1.2.3 外国人記者の著作から見る国際世論工作の効果

中国共産党が欧米ジャーナリストを利用して、有利な国際世論を作ろうとした努力は一貫していた。

(1) 中国共産党と外国人記者との接触

「皖南事変」が起こった後、中国共産党と国民党の矛盾が表面化した。中国共産党は中共に同情している記者を利用し、「皖南での国民党の暴行」を非難しようとした。1940年11月6日、毛沢東が「国内外の連絡を強化し、(国民党)の投降・分裂活動をとめる」と周恩来に電報を出した。周恩来などは積極的に国際世論、特に英米の記者を獲得するために努力していた。1940年12月の初め、アメリカ人記者のストロングが重慶に到着後、周恩来は面談をしたいと彼女に手紙を出しており、その後、周恩来は何度もストロングと会って取材を受けている。その内容は翌年の3月に、アメリカで発表された⁴⁴。

1940年12月24日、周恩来が毛沢東に電報を出し、次のように提案した。「抗戦の勃発以来、英米の記者が八路軍や新四軍を宣伝する書籍を合計すると、20から30種もある。我が党の名声に極めて大きく影響し、ある程度外交面の影響も出ている」、政治的立場が対立している個別の記者を除いてみんなと連絡し、利用すべきだ、と周恩来は主張した⁴⁵。

中立的な記者に対しても、中国共産党は積極的に獲得する努力を行った。周恩来はその中心的な力となった。1941年2月1日、周恩来は『タイム』の記者であるホワイトと数時間にわたって談話した。抗日民族統一戦線の摩擦と裂け目の状況を紹介した。1937年から1940年までの歴史を詳しく紹介し、ホワイトが「事実を知るための一番満足できる答えを得た⁴⁶」と述べた。

金城の回想録によると、1943年初め、外国人記者らから延安訪問の申請があった。共産党の重慶駐在代表である董必武は歓迎の意を表した。3月9日、周恩来が董必武に電報を出し、「私

は毛沢東、朱徳2同志及び中共中央の委託を得て、歓迎を示すために電報を出す」と述べた⁴⁷。さらに、4月30日に、毛沢東が董必武宛てに電報を出し、「各位の来延に対し、大いなる歓迎の意を表す」と表明した⁴⁸。

外国人記者が延安に来る前に、延安にある交際処でも記者団を接待する準備会議を開いた。周恩来が出席し、具体的な指示を出し、「宣伝出去、争取過來」(外部向けの宣伝を行い、記者を取り込む)との原則を決めた。

同時に、記者別の対応も行っていた。周恩来の指示によると、「今回の工作の重点は、外国人記者に置くべきだ。外国人記者の中、スタインとフォアマンを重点的に獲得すべきだ。スタインは政治見解と活動力のある記者だ。彼は長年にソ連にいたが、「トロツキー派分子」として追い出された。中国にも何年間いたが、われわれについては特に「トロツキー派」の活動を行っていないと見ている。フォアマンはアメリカ人で、単純で率直の性格を持っている人だ。政治上にも、国民党に対しても共産党に対しても特に偏見を持っていない。彼らの国外及び中国国内における影響力は大きい。イタルタス通信のプーチンカも影響力が大きい。彼は共産党員で、政治的立場や観点はほぼわれわれと一致しているので、特に取り込む努力をしなくてもいい⁴⁹。」

共産党指導部は外国人記者の取材を重視していた。1944年10月に重慶から延安に入ったホワイトの著書によると、「新聞記者にとって、当時ほど幸運なことはなかった。延安の共産党政治局には13名の委員がいた。彼らみんな率直で、みんなアメリカ人に好意を示し、誠意を持って情報を提供してくれた。この13人の中、私は11名を取材した⁵⁰。」

この記述から、当時の共産党がいかに外国人記者の影響を重視し、外国人記者を獲得しようとしたかは分かる。

(2) 共産党と国民党の検閲

共産党が延安などの抗日根拠地で外国人記者に紹介したことや宣伝してもらいたい内容については、100パーセント狙い通りの効果をあげたとは言えない。そのひとつの原因は、国民党政府の検閲だった。敵視が強まる国民党と共産党の間には、敵対関係が強かった。延安を訪問した外国人記者らの報道に対して、国民党側は厳しい検閲を行った。ガンサー・スタインの『延安 一九四四年』によると、「私が送った通信の中で重要なものは全部——これは全体の約5分の4にあたるものだったが——検閲を受けた。『嘆きなさるな。あなたのグループの外国特派員はみな同じ目に会っているのだからね!』と低くつぶやくように検閲官が言った⁵¹」とある。

延安に来ている外国人記者の記事に対して、有利な世論作りのための環境整備として、共産

党も検閲を行った。外国人記者を接待するための準備会議で、周恩来が外国人記者の記事の検閲について具体的に手配をした。「戦時各国の慣例に従い、共産党が記者の報道に関して適切な検査を行う。外国人記者の報道検査は翻訳組の組長である浦化人が担当し、中国記者の報道は柯柏年が担当することとなった⁵²。」「通信の内容に関しては、わが政府(辺区政府)は原則的に検査権を放棄しないが、実際に執行するさい、軍事機密や政府批判のデマじゃなければ、われわれは一律に通信を許し、国民党との区別を示す⁵³」と、共産党は厳しい検閲はしない姿勢を示したとは言え、原稿に対して、共産党の手直しが多すぎて発表する価値がなくなった事例もある。1944年10月に重慶から延安に入ったホワイトの著書によると、毛沢東を1時間程度取材した時のことについて、「取材の記録を彼に目を通してもらうことに対して、私は応答した」「しかし、あの原稿が私のところに戻ってきたとき、手直しが多すぎて、発表する価値はなくなった⁵⁴。」

(3) 共産党の国際世論工作の効果

外国人記者を利用し、国際世論に影響を与えようとした中国共産党の努力は、国民党の検閲などがあったが、ある程度の効果を収めた。

世界各国で出版された欧米の諸記者の著作には『中共雑記』(RANDOM NOTES ON RED CHINA)(エドガー・スノー),『中国の赤い星』(Red Star Over China)(エドガー・スノー),『人民中国の夜明け』(Inside Red China)(ニム・ウェールズ),『中国的驚雷』(Thunder Out of China)(セオドア・H・ホワイト),『華北前線』(North China Front)(バートラム),『新西行漫記』(TWO YEARS WITH THE CHINESE COMMUNISTS)(ウィリアム・バンド),『北行漫記』(Report from Red China)(ハリソン・フォアマン)などがある。前述したように、1937年末の『中国の赤い星』の刊行は、世界が中国共産党支配地区への理解するうえで大いに助けとなった。その他の著書もある程度、共産党の対外プロパガンダに貢献したといえよう。

国民党や共産党の検閲があつたにしても、外国での出版などで、延安を訪問した外国人記者の著書はある程度プロパガンダ効果があつたと考えられる。中外記者西北訪問団の一員として延安を訪問したスタインの著書である『延安 一九四四年』(The Challenge of Red China)は1945年にイギリスのパイロット出版(Pilot Press)によって出版された。それは共産党支配地区を知るには重要な資料として好評を得た。さらに1946年になると、その中国語版は上海中国文化投資公司によって10冊に分けて出版された。その翻訳と出版の主な工作は、中国共産党党員の胡国城が設立した会社によって実現した。その後、さらに農社との名義で第2版の出版が実現し

た。中国国内民衆向けのプロパガンダともなった⁵⁵。

欧米ジャーナリストのほか、中国共産党はあらゆるチャンネルで海外の支援を得ようと努力した。医学・通信などの分野のいわゆる「欧米の友人」を積極的に招聘し、活躍の場を与えた。たとえば、前出のイギリス人リンドスティは 1942 年に中国共産党支配地区を訪問したときの記録を残している。その中で、中国共産党側の肖克は共産党支配地区で飛行場の建設に関して、積極的に英国の援助を得ようとしたとしている⁵⁶。

本節では、主に中国共産党の国際世論構築において、欧米ジャーナリストを獲得する努力を分析した。それは日中戦争期における中国共産党の対外プロパガンダ工作の一環となっている。

中国共産党の歴史において、毛沢東は革命家・軍事家・政治家として知られているが、有能な宣伝マンでもあった。1917 年、24 歳の毛沢東は雑誌『新青年』の為に文章を書き始めた。1919 年7月 14 日に『湘江評論』を創刊し、編集長を務めた。1921 年1月6日に、新民学会長沙会友会議で、「私がしたい仕事といえば、一つは教員で、もう一つは新聞記者だ」と発言した⁵⁷ことから、メディアに対して興味あることが分かる。中国共産党が創立された後、特に日中戦争の時、毛沢東は自ら新華社の新聞原稿を書いたり、新聞記者と座談をしたりして、中国共産党の宣伝活動に影響を与えていた。毛沢東の国際プロパガンダ思想は、毛沢東軍事思想の重要な構成部分となっていた⁵⁸。

創立当初の中国共産党は対外宣伝を重視した。1942 年1月 26 日に、毛沢東は『中央宣伝部宣伝要点』のなかで、「今まで本部の宣伝は、党外向けの宣伝を重視してきた。今後、党内宣伝も重視しようと決定した。各地の同志はご注意を⁵⁹」と書いている。戦局の発展につれて、1945 年9月 14 日、毛沢東・周恩来は華中解放区の責任者に「出来るだけ早く上海などへ行って新聞を作れ。」「一日も早ければ早いほどいい。遅ければ遅いほど不利だ。」「最大の力を入れて経営しなければいけない⁶⁰。」と指示している。これらの措置は中国共産党の対敵プロパガンダの歩調を速めた。

毛沢東の欧米ジャーナリストへの積極攻勢は対敵プロパガンダのひとつの手法である。1936 年7月に、毛沢東は延安で何度も米国記者のスノーの取材を受け、外交問題・日中戦争・内政問題・統一戦線問題などについて、共産党の主張と立場を表明した。1937 年10月、毛沢東はイギリス人記者のジャームス・バートラムの取材を受け、国民党の偏った抗日戦略を批判し、共産党の主張する全面的な抗日戦略を明確に表明した。

日中戦争期において、中国共産党は積極的に外国人記者による国際世論工作を展開した。1936年に実現させたスノーのソビエト地区訪問を初め1944年の中外記者西北訪問団、その他多くの外国人記者が共産党支配地区を実際に訪問し、共産党の指導者を取材し、新聞報道および出版活動を通じて、欧米社会に共産党支配地区の状況を紹介した。本節では、中外記者西北訪問団の延安訪問の接待仕事を担当した延安交際処をはじめ、中外記者西北訪問団を実現させた中国共産党の努力、記者団延安訪問の流れと中国共産党の国際世論工作の効果について考察した。

¹鄭保衛『中国共産党新聞思想史』福建人民出版社，2004年12月第1版，208頁。

²『中共中央文件選集』（第11冊）中共中央党校出版社，1991年，458頁。

³前掲書『中国共産党新聞思想史』208-209頁。

⁴前掲書『中共中央文件選集』（第11冊）752頁。

⁵周恩来「怎樣進行持久抗戰」『周恩来軍事文選』（第2卷）人民出版社，1997年，91頁。

⁶王曉嵐，戴建兵「中国共産党抗戰時期对外新聞宣伝研究」『中共党史研究』2003年第4号，59頁。

⁷E・スノー著，松岡洋子訳『目覚めへの旅』紀伊國屋書店，1963年9月，140頁。

⁸金城『延安交際処回憶録』中国青年出版社，1986年10月。

⁹前掲書『延安交際処回憶録』1頁。

¹⁰前掲書『延安交際処回憶録』7頁。

¹¹前掲書『延安交際処回憶録』4頁。

¹²前掲書『延安交際処回憶録』6頁。

¹³楊黃霖「延安交際処憶往」『百年潮』2007年第2号，26頁。

¹⁴前掲「延安交際処憶往」28頁。

¹⁵『八路軍抗日根拠地見聞録——一個英国人不平經歷的記述』（英）林邁可 著，楊重光，郝平 訳，国際文化出版公司出版，1987年6月，96頁。

¹⁶劉景修，張釗「美国記者与中国抗戰」『民国档案』1989年第1号，107頁。

¹⁷袁本文「周恩来与西方記者」『北方工業大学学報』1999年6月，65頁。

¹⁸李克安『斯諾在中国』三聯書店，1982年，78-79頁。

¹⁹オットー・ブラウン 著；瀬戸鞏吉 訳『大長征の内幕：長征に参加した唯一人の外人中国日記』恒文社，1977年11月，388-389頁。

²⁰前掲書，『目覚めへの旅』140頁。

²¹エドガー・スノー，宇佐美誠二郎訳『中国の赤い星』筑摩書房，1964年9月，44頁。

²²「訳者のあとがき」，前掲書，『中国の赤い星』359頁。

²³埃德加・斯諾 著，董樂山 訳『西行漫記』「中文重訳本序」三聯書店出版，1979年12月，3頁

²⁴丁曉平『感動中国：与毛沢東接触的国際抗日友人』中央文献出版社，2005年5月，107頁。

²⁵前掲『感動中国：与毛沢東接触的国際抗日友人』111頁。

²⁶ガンサー・スタイン著，野原四郎 訳『延安一九四四年』みすず書房，1962年6月，353頁。

²⁷前掲書『八路軍抗日根拠地見聞録——一個英国人不平經歷的記述』101頁。

²⁸前掲書『延安交際処回憶録』，198頁。

²⁹ピョートル・ウラジミロフ 著，高橋正 訳『延安日記——ソ連記者が見ていた中国革命』サイマル出版会，1975年，197頁。

³⁰劉景修「外国人記者何時提出赴延安採訪」『現代史研究』1989年第4号，300頁。

³¹張克明，劉景修「抗戰時期美国記者在華活動紀事（2）」『民国档案』1988年第3号，123頁。

³²前掲「外国人記者何時提出赴延安採訪」301頁。

-
- ³³前揭「外国人記者何時提出赴延安採訪」301 頁。
- ³⁴前揭「抗戰時期美国記者在華活動紀事(2)」126 頁。
- ³⁵「記者參觀團即將來西北」『解放日報』1944 年5月 11 日 1 面。
- ³⁶「記者參觀團已到西安」『解放日報』1944 年5月 18 日 1 面。
- ³⁷「中外記者團赴晉參觀」『解放日報』1944 年5月 22 日 1 面。
- ³⁸「記者參觀團抵延，葉參謀長等設宴洗塵」『解放日報』1944 年6月 10 日 1 面。
- ³⁹「朱副司令長官行署舉行晚會，歡迎記者參觀團」『解放日報』1944 年6月 12 日 1 面。
- ⁴⁰「接見記者團席上，毛主席暢談國內外局勢」『解放日報』1944 年6月 13 日 1 面。
- ⁴¹前揭「抗戰時期美国記者在華活動紀事(2)」127 頁。
- ⁴²前揭「抗戰時期美国記者在華活動紀事(2)」129 頁。
- ⁴³前揭「抗戰時期美国記者在華活動紀事(2)」130 頁。
- ⁴⁴前揭「美国記者与中国抗戰」109 頁。
- ⁴⁵前揭「周恩來与西方記者」69 頁。
- ⁴⁶前揭「美国記者与中国抗戰」109 頁。
- ⁴⁷周恩來「歡迎來延安參觀——致董必武轉外国人記者團」『周恩來書信集』中央文獻出版社 1988 年版，232 頁。
- ⁴⁸胡喬木『胡喬木回憶毛澤東』人民出版社，1994 年，332 頁。
- ⁴⁹前揭書『延安交際處回憶錄』，201 頁。
- ⁵⁰白修德 著，馬清槐 方生 譯『探索歷史』三聯書店，1987 年 12 月，164 頁。
- ⁵¹前揭，『延安一九四四年』343 頁。
- ⁵²鄭保衛『中國共產黨新聞思想史』福建人民出版社，2004 年 12 月，216 頁。
- ⁵³『中共中央文件選集』(第 14 冊)中共中央黨校出版社，1991 年，316 頁。
- ⁵⁴白修德 著，馬清槐 方生 譯『探索歷史』三聯書店，1987 年 12 月，174 頁。
- ⁵⁵岡瑟·斯坦因 著，馬飛海等譯『紅色中國的挑戰』(The Challenge of Red China)上海譯文出版社，1999 年 12 月，2 頁。
- ⁵⁶「肖克關於与林邁邁可談話情況致毛澤東等電(1942 年2月)」『八路軍·文獻』解放軍出版社，1994 年5月，775 頁。
- ⁵⁷竇其文『毛澤東新聞思想研究』中國新聞出版社，1986 年 6 月，148 頁。
- ⁵⁸朱金平『輿論戰』中國言實出版社，2005 年，13 頁。
- ⁵⁹前揭書『毛澤東新聞文選』67 頁。
- ⁶⁰前揭書『毛澤東新聞文選』131 頁。

第2章 日本軍向けの戦争プロパガンダ組織

2.1 敵軍工作部についての考察

日中戦争期においては、共産党の兵力や武器は日本軍にも国民党軍にもはるかに劣っている状態だった。しかし政治工作は共産党の有力な武器となった。朱徳は1938年に『論抗日遊撃戦争』で政治工作の重要性を強調している。政治工作をないがしろにすると、「粗雑な原始的な武器で強敵と戦うことになり、勝利するのは不可能である。それだけではなく、自身の生存もおぼつかない。従って、抗日遊撃戦争における政治闘争という武器を最も重要な地位に位置づけなければならない¹。」

政治工作の要諦の一つは敵軍工作である。中国共産党の軍隊政治工作は主に3つの部分から構成されている。第1、共産党軍隊の兵士の教育工作。第2に、民衆を動員する工作。即ち人民を動員しその支持を得て、「軍」と「民」の関係をよくすることである。第3は敵軍工作である。人民の支持を獲得する努力をする同時に、敵軍に対する人民の敵意を育てる工作と敵軍を瓦解させる工作などがある。本節では、後者の敵軍に対する工作を主として分析したい。

2.1.1 総政治部及び敵軍工作部の変遷

敵軍工作は政治工作の一部である。政治工作の主な活動は中国共産党の総政治部が指導している。総政治部と敵軍工作部の沿革は以下の通りである。1928年10月に開かれた中国共産党第6次全国代表大会では、中央軍事部の設立が決定された。1930年3月、中央軍事部を中央軍事委員会と改名し、周恩来は書記を務めた。1930年までの中央軍事部には、政治工作を担当する部門はなかった。1930年8月、中央軍事委員会に総政治部を設立することが決定された²。当時のメンバーは主任を務める魯易だけだった。1931年2月15日、中央軍事委員会総政治部が正式に発足し、毛沢東が主任を務め、全国各地の紅軍政治工作を指導し始めた。1931年11月、中華ソビエト共和国(中华苏维埃共和国)中央革命軍事委員会が結成された。したがって、総政治部も「中華ソビエト中央革命軍事委員会総政治部」に改編され、王稼蓄(王稼祥)が主任を務めた。総政治部の下に、組織部、宣伝部、敵軍工作部、地方工作部、青年部、紅軍最高裁判所などの部門が設立された。共産党の政治工作の分野でははじめて正式な敵軍工作部が設立された。従って、敵軍工作部は、1931年11月に設立されたと考えられる。1932年1月、中国工農紅軍総政治部に改称したが、組織と機構は変わっていない。1932年5月、総政治部は中国工農紅軍総部に配置され、中国工農紅軍総政治部総部総政治部と改名した。1935

年 10 月, 総政治部は中華ソビエト西北革命軍事委員会に編入された。1936 年 12 月, 中華ソビエト中央革命軍事委員会創立, 総政治部は中央革命軍事委員会に編入された³。

中国共産党の政治部及び敵軍工作部の変遷は次のようにまとめることができる。

政治部及び敵軍工作部について

中共中央軍事部(1927 年7月～1930 年7月)(政治部は設置されていない。)

中共中央軍事委員会総政治部(1930 年8月～1931 年1月)

主任 魯易

中共中央軍事委員会総政治部(1931 年2月～10 月)

主任 毛沢東 周以栗(代)

中華ソビエト中央革命軍事委員会総政治部(1931 年 11 月～1932 年5月)

その中, 1932 年 1 月から, 「中国工農紅軍総政治部」に改称。

主任 王稼蓄

副主任 聶榮臻 賀昌(後)

組織部 葉季壯

宣伝部 李卓然

敵軍工作部 李涛

地方工作部 周桓

青年部 高伝遜

秘書処 滕代遠

紅軍最高裁判所 袁国平(兼)

中華ソビエト中央革命軍事委員会総政治部(1932 年6月～1933 年 12 月)

中国工農紅軍(総部)総政治部(1933 年5月に設立)

主任 王稼蓄 賀昌(代)

副主任 賀昌

袁国平

秘書処 肖向荣

組織部 李弼庭

宣伝部 徐夢秋

敵軍工作部 李涛

動員部 羅榮桓

地方工作部 潘漢年

青年部 高伝遜

中華ソビエト中央革命軍事委員会総政治部(1934 年 1 月～10 月)

中国工農紅軍(総部)総政治部

主任 王稼蓄

顧作霖(代) 李富春(代)

副主任 賀昌 李富春(後)

秘書処 肖向荣

組織部 李弼庭

宣伝部 徐夢秋

青年部 肖華

敵軍工作部 李翔梧

中華ソビエト中央革命軍事委員会総政治部(1935年7月～9月)

中国工農紅軍(総部)総政治部

主任 秦邦憲(代)

(博古)

陳昌浩(後)

副主任 李富春 楊尚昆(後)周純全(後)

秘書処 肖向荣

組織部 李弼庭

宣伝部 陸定一

青年部 王盛栄

白軍工作部 賈拓夫

地方工作部 劉少奇(兼)

中華ソビエト西北革命軍事委員会総政治部(1935年11月～1936年10月)

主任 王稼薈 李富春(代) 楊尚昆(代)

副主任 楊尚昆

秘書処

組織部 黄克誠

宣伝部 陸定一

地方工作部 劉曉

敵軍工作部 李涛

中華ソビエト中央革命軍事委員会総政治部(1936年12月～1937年7月)

主任 王稼薈 任弼時(後)

副主任 楊尚昆 鄧小平(後)

秘書処 周桓

組織部 楊尚昆

宣伝部 陸定一

地方工作部 劉曉

敵軍工作部 李涛

抗日戦線部 肖向荣

中央軍委(含八路軍総部)(1937年8月)

(8月当時, 中央軍委には総政治部は設置されていない。)

八路軍政治部主任 任弼時

副主任 鄧小平

中央軍委(含八路軍総部)(1937年10月)

(中央軍委総政治部は1937年10月に設立され, 対外には「八路軍政治部」という名義を使う。)

中央軍委総政治部主任 任弼時 毛沢東(代)

副主任 譚政 傅鐘

八路軍政治部 主任 任弼時 副主任 鄧小平

中央軍委(含八路軍総部)総政治部(1938年前半)

中央軍委総政治部主任 任弼時 毛沢東(代)

副主任 譚政 王稼祥(後)傅鐘(後)

野戦政治部主任 傅鐘(兼)

組織部 呉溉之

宣伝部 陸定一

民運部 蔡乾
敵軍工作部 蔡乾(兼)
鋤奸部 楊奇清
総務処 年成合
軍法処 吳溉之(兼)

(1938年8月、王稼祥が中共中央軍委総政治部主任兼八路軍政治部主任を務めていた。王稼祥が延安にいるため、前方には八路軍野戦政治部を設置した。) ⁴

中央軍委(含八路軍総部)(1938年後半)

総政治部主任 王稼祥
副主任 譚政
野戦政治部主任 傅鐘
組織部 方強
宣教部 陸定一
民運部 黄鎮
鋤奸部 楊奇清
敵軍工作部 蔡乾
総務処 青中興
軍法処 方強(兼)

中央軍委(含八路軍総部)(1939年)

総政治部
野戦政治部主任 傅鐘(兼)
副主任 陸定一
組織部 方強
宣伝部 陸定一(兼)
民運部 黄鎮
鋤奸部 楊奇清
敵軍工作部 蔡乾
総務処 青中興
軍法処 曾伝六

中央軍委(含八路軍総部)(1940年前半)

総政治部主任 王稼祥
副主任 譚政
秘書長 彭加倫
協理員 李文華
組織部 胡耀邦
宣伝部 肖向荣
鋤奸部 吳溉之
敵軍工作部 王学文 (副部長 李初黎)
連絡部 譚政

野戦政治部主任 羅瑞卿
副主任 陸定一
組織部 周桓
宣伝部 陸定一(兼)

鋤奸部 楊奇清
敵軍工作部 漆克昌
總務處 陳子斌
軍法處

中央軍委(含八路軍總部)(1940年後半)

總政治部主任 王稼祥
 副主任 譚政
 秘書長 彭加倫
組織部 胡耀邦
宣傳部 肖向榮
鋤奸部 吳溉之
敵軍工作部 王學文 (副部長 李初黎)

野戰政治部主任 羅瑞卿
 副主任 陸定一

中央軍委(含八路軍總部)(1941年)

總政治部主任 王稼祥
 副主任 譚政 傅鐘
 秘書長 彭加倫
組織部 胡耀邦
宣傳部 肖向榮
鋤奸部 吳溉之
敵軍工作部 王學文 (副部長 李初黎)
連絡部 譚政(兼)

野戰政治部主任 羅瑞卿
 副主任 陸定一

組織部 周桓
宣傳部 陸定一(兼)
鋤奸部 楊奇清
敵軍工作部 漆克昌

中央軍委(含八路軍總部)(1942年)

總政治部主任 王稼祥
 副主任 譚政 傅鐘
組織部 胡耀邦
宣傳部 肖向榮
鋤奸部 吳溉之
敵軍工作部 王學文 (副部長 李初黎)
連絡部 譚政(兼)

野戰政治部主任 羅瑞卿
 副主任 陸定一

秘書長 陳子斌

組織部 周桓
宣伝部 陸定一(兼)
鋤奸部 楊奇清
敵軍工作部 漆克昌

中央軍委(含八路軍総部)(1943年)

総政治部主任 王稼祥
副主任 譚政 傅鐘(後)

組織部 胡耀邦
宣伝部 肖向荣
鋤奸部 吳溉之
敵軍工作部 王学文 (副部長 李初黎)
連絡部 譚政(兼)

野戦政治部主任 羅瑞卿
副主任 張際春 陸定一

中央軍委(含八路軍総部)(1944年)

総政治部主任 王稼祥
副主任 譚政 傅鐘

組織部 胡耀邦
宣伝部 肖向荣
鋤奸部 吳溉之
敵軍工作部
連絡部

野戦政治部主任 羅瑞卿
副主任 張際春 陸定一

組織部 周桓
宣伝部
鋤奸部 楊奇清
敵軍工作部

中央軍委(含八路軍総部)(1945年10月)

総政治部主任 劉少奇
組織部 胡耀邦
宣伝部
鋤奸部
敵軍工作部
連絡部⁵

2.1.2 第一次国共合作の時期の敵軍工作

——政治部制度の確立と共産党敵軍工作の萌芽期

1921年7月1日中国共産党の成立後、1925年10月中央軍事委員会が成立されるまでの間、軍事工作あまり行われていなかった。第1次国共合作の時期、黄埔軍校(陸軍軍官学校)の政治工作の責任者は共産党指導者の周恩来だった。1925年2月に行なった「第1次東征」におい

て、広東の惠州、潮州、汕頭一帯を占拠している陳炯明軍閥を討伐した。「第1次東征」の直前、周恩来は黄埔軍校で「戦時宣伝研究班」を作り、対敵宣伝計画を準備した。更に、「戦時宣伝隊」を創立し、その任務を「民衆向けの宣伝」と「敵向けの宣伝」とした。具体的な対敵宣伝活動は、捕虜の優遇、宣伝ビラ、敵軍に潜入しての煽動工作などがある⁶。これは中国共産党独自の活動ではないが、共産党が参加した最初の対敵宣伝活動だと考えられる。

1924年1月に国民党第1次全国代表大会の開催から1927年の両党決裂までの第1次国共合作時期において、初めて軍隊政治部制度が創設された。1924年6月に創立された黄埔軍校には、政治部が設立された。それは中国軍隊の政治部制度の始まりである。黄埔軍校には周恩来など多くの共産党党員が派遣され、周恩来は黄埔軍校の政治部部長を長年勤めていた⁷。

1924年までの各軍閥の間には、捕虜の侮辱、虐待と殺害は日常的だった。国共合作期の国民革命軍の大部分は、軍閥の部隊から編入されて来ていたので、当初、捕虜問題にうまく対応できなかった。軍閥部隊の兵士に対する階級を調べると、兵士のほとんどは職がなく強制的に入隊させられた労農階層である。政治工作を強化すれば、彼らの支持を得て、国民革命軍隊に入れてもらえる判断され、敵軍工作の重要性も強調されるようになった⁸。当時の国共合作期においては、「政治工作に従事している共産党員が多くいるが、軍事指揮工作、直接部隊を支配する共産党員が極めて少なかった⁹。」「政治工作の工作人員のほとんどは共産党員の人であった。」「政治工作の内容のほとんどは共産党員が決めたのである¹⁰。」たとえば、その後の共産党軍隊政治工作に活躍する周逸群などの共産党員は、当時の黄埔軍校国民党党部で、「中国青年軍人連合会」、「火星社」などの組織を発足させ、軍隊政治工作に従事していた。中国青年軍人連合会が発行した『中国軍人』『青年軍人』『兵友必携』など兵士向けの宣伝誌を創刊し、宣伝活動を展開した¹¹。さらに、周恩来が政治部主任を務めていた期間、政治教育、政治工作の訓練を着々と進められた。『宣伝煽動問題』『軍隊の政治工作』などの課目を設置し、政治訓練班で国民革命軍のために千名近くの政治工作幹部を育成出した¹²。それらの政治工作の経験は、その後の共産党軍隊の政治工作にも深く影響を与えたと考えられる。周恩来などの政治工作は、中国共産党の政治工作の基礎となった。

2.1.3 土地革命戦争期の敵軍工作

1927年8月から1937年7月までの十年間は、中国歴史においては「土地革命期」と呼ばれている。

(1) 総政治部と敵軍工作の発足

1927年8月1日の南昌起義は、中国共産党軍の軍隊創立の象徴とされている。当時、中国共産党独自の軍隊が創立された。更に、第2方面軍(実質的な紅軍)で総政治部が設立され、8月5日から郭沫若が主任に就任し、政治部には組織科、宣伝科と党務科が設置された¹³。

政治部の設置につれ、政治工作も次第に推進された。その中、軍の内外向けの宣伝活動が積極的に進められた。対外的には、共産党の主張、目的などを宣伝し、対敵工作を進めていた。対内的には、蜂起の革命的意義を説明し、全軍将兵の士気を鼓舞していた¹⁴。紅軍の政治工作は徐々に制度化され、紅軍兵士向けの教育活動が行われ、共産党の捕虜政策も紅軍兵士に伝えられた。

(2)「土匪」武装勢力向けの工作

本文でいう「土匪」とは、人民財産を強奪する地方原住民武装勢力のことである。国民党軍向けの敵軍工作を行う同時に、各地に分布している共産党軍隊は自身の軍隊の拡大のため、原住民武装勢力を団結改造し、共産党軍隊に編入するため積極的に宣伝工作を行なった。1929年11月、賀龍の軍隊が湖北省咸豊、利川で、原住民武装勢力である「神兵」向けの宣伝工作を展開した¹⁵。

原住民の「土匪」武装勢力を扱うときに、中国共産党は「反動頭目と中堅を重点的に攻撃する。一般群衆と反動分子を区別する」政策を採っていた。それは日本捕虜を扱うときの「2分法」と同様な考えに基づいてできたと考えられる。「土匪」に対して、「その群衆を獲得し、首領を反対させる」、「土匪首領に対して、拘留する¹⁶」などの政策が規定されている。

(3)敵軍向けの「策反¹⁷」活動

1930年3月30日、毛沢東の批准を経て公布された『総政治部通令』は、白軍向けプロパガンダとして、下記のようなスローガンが謳われた。「白軍の皆さんは労農出身だから、労農を殺すな」、「俸給をもらうため、白軍は暴動を起こさなければならない」、「白軍兵士は反革命将校を殺し、新しい将校を選出し紅軍を設立すべきだ」、「白軍兵士と下部将校の紅軍入隊を歓迎する」などがあり¹⁸、敵軍兵士の不満感情を扇動する活動が積極的に展開された。1932年7月25日発表されたスローガンには、「紅軍は労農の軍隊で、白軍兵士の友だ」、「破壊工作を行い、紅軍を応援する」、こぞって紅軍に入隊しよう！武器を持ち紅軍に入隊しよう¹⁹などがある。

総政治部が1932年10月27日に発表した『大挙して攻撃する敵を粉碎するための政治工作訓令』では「団(または軍)と軍区及び分区政治部は白軍兵士運動訓練短期班を直ちに開くべきだ。訓練を受けた人員を白軍に派遣し工作させる²⁰」と指示している。続いて11月23日に、総政治部は、『敵軍における政治工作訓令』において、「各級政治部は常に適切な人材を発見し訓練を与えるべきだ。可能であれば軍団または政治部が訓練班で訓練を実施する。不可能な場合は個別な訓練を与える。白軍の反乱と暴動を指導するため、訓練を受けた人を白軍に派遣し、宣伝鼓動と組織工作をやらせよう²¹」と指示している。

典型的成功例は、1931年12月に勃発した国民党第26路軍の寧都蜂起においてである。国共合作時期、鄧小平など共産党員が所属していた26路軍には、共産党の組織がある程度残っていた。劉振亜、趙博生(総指揮部参謀長)など共産党工作員は積極的に工作を展開し、12月

14 日午後蜂起した。1.7 万人の兵士が2万件以上の武器を携帯して紅軍に入隊し、紅一方面軍第5軍団に編入された²²。

(4)統一戦線を通じての敵軍工作

1934年10月から1936年10月までの長征を終えた紅軍の兵力は激減した。陝西省北部に着いた紅軍が対峙したのは、宜川、韓城、白水一帯の楊虎城西北軍と延安、甘泉、洛川、鄜県一帯の張学良東北軍である。当時、日本の中国侵入に対抗すべく、「抗日民族統一戦線」を呼びかけながら、国民党軍向けの宣伝工作を展開した。

張学良の東北軍の兵士の多くは東北地域の出身で、当時中国東北地区は日本軍に占領されていた。1936年1月25日に毛沢東、周恩来などが『紅軍は東北軍と連携して抗日することについて、東北軍全体への手紙』を発表し、その中に、東北軍は紅軍を攻撃すべきではなく、東北軍と連携し直接日本帝国主義者と作戦行動を執るべきと主張していた²³。同年4月、周恩来を責任者とする「中共中央東北軍工作委員会」が発足した。6月20日に発表した『東北軍に対する工作の指導原則』には、「東北軍を抗日させることは我々の基本方針」としている。東北軍向けの工作の目標は、「東北軍を瓦解・分裂させることなく」、「抗日勢力にさせることである。」「東北軍を紅軍にすることもなく」、「紅軍の友軍にすることである²⁴」とある。

共産党は蒋介石の「不抵抗政策」を批判しながら、東北軍向けの宣伝活動を積極的に展開した。まず、紅軍兵士を教育し、紅軍を強い統一戦線工作隊とした。当時の紅軍兵士のスローガンには、「東北軍は紅軍と戦わない、行軍も東北軍と戦わない。」「中国人と中国人は戦わない。」「内戦を止めて、一致抗日しよう」などがある。第2に、捕虜政策が叫ばれた。捕虜に向けても、蒋介石の政策への批判と共産党と合同抗日政策を宣伝していた。第3に、毛沢東、周恩来など共産党の指導者が自ら東北軍の高級将校向けの説得工作を積極的に行った²⁵。1936年4月9日に延安で行われた周恩来と張学良の間の会談はよく知られている。楊虎城の西北軍向けの宣伝活動も同様に展開された。

それらの工作は、「西安事変」と第2次国共合作ともつながっていると考えられる。

2.1.4 日中戦争期の敵軍工作

日中戦争期における敵軍工作は、敵軍、偽軍という2つの部分からなっている。中国共産党が言う「敵軍」は日本軍のことを指し、「偽軍」は日本軍に協力する中国軍のことである。抗日する国民党軍は「友軍」とされている。

第2次国共合作によって、1937年8月25日、紅軍は主に国民革命軍第八路軍(八路軍)と新編第四軍(新四軍)に改編された。1937年8月1日、中国共産党中央組織部が出した『改編後党と政治機関の組織問題についての決定』では、政治工作について、「師以上の軍隊では政治部を設置し、団には政治処、營には政治教導員、連には政治指導員を設置する」とある。政治機関

の部門には、組織部、宣伝教育部、民運指導部、敵軍工作部が設置されていた²⁶。

1937年10月10日、中共中央軍事委員会総政治部は延安で成立され、任弼時が主任に、傅鐘が副主任に就任した。総政治部の機関と責任者は次の通りである。組織部(部長方強、副部長胡耀邦)、統戦部(部長王若飛[兼])、宣伝部(部長蕭向荣)、敵軍工作部(部長李楚离、政委王学文)、編訳局(局長曾涌泉)²⁷。総政治部の工作は極めて重視されていた。主任の任弼時がソ連へ行ったときには毛沢東がその主任を兼任した。

1938年12月、『国民革命軍第18集團軍²⁸政治工作暫定条例(草案)』が公表され、政治工作の3つの主要な任務として規定された。それぞれ「(1)戦闘の勝利のため、部隊の戦闘力を強化し高めること。(2)軍隊と群衆の緊密な関係を保障し、民衆を抗戦参加するように動員すること。(3)敵軍を瓦解させる工作を行い、敵軍兵士を勝ち取り共同で侵略戦争を反対する²⁹」である。敵軍工作が強調されたことが窺える。当時は第2次国共合作の時期なので、「敵軍」とは日本軍と偽軍のことだと考えられる。

(1) 国民党軍に対する政策

共産党は国民党軍を「友軍」、「中間派」、「頑固派」という3つの部分に分けて対応していた。

「友軍」

第2次国共合作の進展につれ、共産党軍と国民党軍の関係も大分改善された。1937年10月4日、毛沢東は、朱徳、彭徳懐と八路軍政治部主任である任弼時に宛てた電報において、友軍政策を強く要請している。「彼らには慰撫愛護の意を表し、軽視、無視、皮肉、無関心及び彼らを危険な地位に置くなどの間違った態度を厳しく戒める」。「彼らを紅軍と一致団結させ、心から紅軍の周囲に糾合させる³⁰」と指示している。1937年11月9日、八路軍第120師責任者賀龍などが毛沢東に『友軍統一戦線についての提案』において、「友軍」との協力関係を強化しようという努力が強調された。「友軍駐在地及びその周辺での活動は、友軍と相談して行う」「臨時政権は友軍の参加も狙う」「友軍駐在地及びその周辺で漢奸審判は、友軍の参加を積極的に実現させ、合同審理を行う。」「これらの活動を通じて、八路軍の政治影響を強める³¹。」などがその内容である。1937年12月24日、毛沢東、譚政などの名義で発布された命令では、「友軍区域内では統一戦線原則を堅持すべき」とし、「友軍との摩擦」は「抗日の団結に影響を与える」可能性があり、「摩擦を減少」すべきだと指示している。さらに「友党友軍と地方当局の一部の弱点について、善意を持って批評と建議を与え、皮肉と風刺は避けるべきだ」。「友軍の英勇抗戦と犠牲精神に対して、賞賛を与えるべきだ」³²と具体的に指示している。1938年10月12日、毛沢東が書いた『抗日民族戦争と抗日民族統一戦線発展の新段階』において、「抗日に参加する友軍は大きければ大きいほど良い。共産党の発展と進歩だけでは、日本帝国主義を撃退することは不可能である³³」と指摘している。1939年6月、総政治部から『友軍向け連絡工作进行訓令』が出された。「各部隊はすべての機会を利用し、友軍と連絡をし、彼らに前進させる。」「過去の同窓関係、同僚関係を利用し、手紙のやり取りで連絡し、思想上、政治上で彼らに影響することを

狙う³⁴。」それと同時に、共産党が出版した新聞、雑誌、抗日教科書などを友軍に送る工作、新年のとき年賀状を友軍に送る工作なども積極的に展開された³⁵。

「中間派」

国民党軍隊の一部は、反共には積極的ではなく、中立的な態度をとっている。それらの国民党の軍隊のことを「中間派」という。1940年4月12日、毛沢東は中央軍委のために書いた『中間派に対する方針についての指示』で、「大局を念頭におき、友情を維持する」方針を決めた。中間派に対して、「直接人を派遣し、または間接に人に頼んで、手紙を出したり、ビラを撒いたり、彼らと摩擦を起こす意思が全くないことを示す。」³⁶『『すべての中国同胞と中国友軍が団結して抗日救国しよう』、『内戦を反対し、中国人同士が殺しあうことを反対しよう』などのスローガンは、依然として思想上反共軍隊を瓦解するにも友軍の同情を勝ち取るにも有力な武器である」と指摘している。「同時に、『漢奸部隊』、『頑軍』などの批判的なスローガンの乱用はぜひとも避けねばならぬ。過去の経験によると、これらのスローガンの乱用は、逆に反共軍隊の反感と団結を増やしてしまう³⁷」とも指摘し、「中間派」向けの宣伝活動の具体的な注意点も指摘している。

1940年3月25日、毛沢東が『反摩擦闘争の中の統戦工作についての指示』で、「頑固派の攻撃を反対する闘争では、頑固派や偽軍がまだ漢奸になっていない段階では、日本軍への投降行為また漢奸行為を外部に宣伝をしたり、国民党に報告することは、不適切である。」「公然と偽軍に転換した者または公然と投降した者を除いて、特定の人物を漢奸だと断定することを禁ずる。」「簡単にレッテルを張ることは決してしてはいけない³⁸」と強調し、「中間派」を獲得する狙いを見せている。

「頑固派」

「我々を敵視し、我々と摩擦を起こし、抗日せずに反共だけをする勢力に対して、我々も鋭く対立し、決然として闘争をする³⁹。」1939年1月、国民党5中全会の開催後、国共関係が悪化し始めた。各地で国民党軍と共産党軍の摩擦や対立起こっていた。1939年6月、総政治部から『友軍向け連絡工作を展開する訓令』が出された。その中に、「準漢奸部隊、つまりその首領がすでに日本軍とつながって、明らかに投降する決意のある部隊に対して、われわれは厳格な秘密工作の方式で、その首領が投降しようとするときに蜂起を起こしその部隊を瓦解させる⁴⁰」と指摘している。

日本軍の傀儡組織(漢奸勢力・偽軍)に対しても、「2分法」政策で相手を瓦解させる狙いがあった。1939年5月に発表された譚政の論文には、敵が頼っている漢奸勢力を瓦解させ、偽組織の統制能力を減退させ、民衆統制を弱体化させる政策が強調されている。「偽組織内部の上層と下層の違いがあり、さんざん悪事を働く首領と脅迫され従った者を、区分して見るべきであり、違う方針をとり、違う態度で扱うべきである」。さらに、「大小漢奸は皆同様だ」、一律に「赦免せずに殺す」という方法は、非常に誤っていると述べている。「そうやっていくと、追い詰められてやむ

を得ず反抗することになり、日本帝国主義者のために力を尽くすことになるに違いない。しかし、我々の基本的な目的は、偽組織の存在及び統制を粉碎・破壊し、敵の手下・手先を取り除き、敵を孤立させることである。したがって、瓦解させる方針は、この目的のためである。この目的を無視して偽組織に対する政策を執る危険性、及びそれにより予想される悪い結果は、想像を超えている⁴¹と指摘している。

1940年10月18日、中共中央が『反共捕虜を優待する問題についての指示』で次のように規定している。「国内のすべての反共派が我々を攻撃した場合、捕虜となった士官と兵士、偵察員、特務、叛徒分子に対して、どんなに反動で極悪非道であっても、原則的には一律殺害しない。この政策は反共派を孤立・瓦解させる最も良い方法である。全党全軍の全員に知らせるべきだ⁴²。」

(2) 日本軍に対する政策

1937年7月7日から日中戦争が勃発までの間で八路軍が「日本軍向けの政治工作」の重要性を強調したのは、1937年10月6日の『日本軍向けの政治工作を展開させる指示』が初めてであった。指示の内容は、「平型関戦闘及び遊撃部隊の経験により、日敵は殺されても投降しない。その原因は、民族的障壁と日本軍閥の瞞着にはあるが、しかし、今までの中国軍は敵軍政治工作を行っていないばかりか、残虐な手段で捕虜を扱ってきたことも、敵が殺されても投降しない重要な原因であろう。そのため、敵軍向けの政治瓦解工作を開始し、敵軍の戦力を弱めることは、現在の政治工作の重要な任務である⁴³」とある。1945年4月24日に発表した『抗日戦争における2つの路線』において、毛沢東は軍隊政治工作の任務をまとめた。「その任務は、我が軍を団結させ、友軍を団結し、人民を団結し、敵軍を瓦解し、戦闘の勝利を保証するために闘争することである⁴⁴」と指摘している。

1938年1月、周恩来が『抗戦軍隊の政治工作』を公表し、毛と共通する政治工作の論調を公開した。周は「軍隊の政治工作」、「民衆の政治工作」、「敵軍の政治工作」の3つの部分に分けて政治工作を論述した。具体的指示として「常に敵軍向けの宣伝煽動工作を行う。」「前線で敵軍へ投降呼びかけ、ビラを散布し、敵を動揺させる。」「捕虜虐待を極力に禁ずる。優待、教育、釈明を受けた捕虜を釈放し戻す⁴⁵」などがある。1938年2月、周恩来は国民政府軍事委員会政治部副部長に就任した。

朱徳は1938年初頭に『論遊撃戦争』で政治工作を「政治戦争」と位置づけ、日本軍向けの宣伝工作について、「政治戦争の第3の要点は、敵軍を瓦解することである。」「遊撃隊は様々な方法で、たとえばビラを敵軍の中に散布する方法や、通じる言語で呼びかける方法、偽軍の中の親類と友人に連絡するなどの方法で、敵軍の嘘の政治宣伝を暴露させる。中国侵略は彼らの利益にとっては無益で有害であることを明らかに示す。彼らは敵である日本軍閥を助けて、友を攻撃していることを分からせる。我々の抗日自衛の政治意義を分からせる。彼らは戦勝したとしても、苦難の現状は変わらないことを説明する。革命的敗北主義を使い、つまり銃口の向きを変え

日本軍閥と漢奸と戦ってはじめて自分の解放が実現できることを彼らに説明する⁴⁶」などの具体的指示を出している。

兵器と宣伝という2つの武器で敵と戦う方針を共産党軍隊は採っていた。1942年1月1日に八路軍総部が『全体指揮官と政治工作人員への手紙』では、「積極的に敵軍偽軍、及び敵軍占領区人民群衆向けの工作を展開する。すべての抗日軍人が武装戦闘員だけではなく、武装宣伝員にもなる。兵器で敵を消滅することに長じているだけでなく、宣伝で敵を瓦解することにも長じているようにする⁴⁷。」

(3) 日本軍占領区におけるプロパガンダ工作

1941年3月30日から4月3日までの「第1次治安強化運動」、7月7日から9月8日までの「第2次治安強化運動」、11月1日から12月25日までの「第3次治安強化運動」においては、共産党軍が「敵進我進」、「敵の後方に進軍する」方針を取り、日本軍占領区に武装工作隊を派遣し、宣伝攻勢を展開し、偽軍向けの宣伝、瓦解工作を展開した。たとえば、第129師団が59の武装宣伝隊を出動させ、敵軍占領区において50万以上の宣伝資料を使って宣伝活動を展開した。晋察冀軍区が敵軍工作部、偵察分隊、各県公安局及び遊撃隊を武装宣伝隊に組織し、日本軍の別働隊を主な目標として活動していた⁴⁸。1942年1月、中央華北局が武装工作隊を広範囲に設置する決定をし、任務を決めている。決定された5つの任務は、1、日本軍と偽軍向けの宣伝戦を展開する。2、敵軍占領区の群衆工作を展開し、秘密武装を発展する。3、日本軍と偽軍の下層工作を展開する。4、敵を打撃し、漢奸を取り除く。5、交通の援護と経済戦⁴⁹である。

盧耀武と劉国霖が1989年10月に書いた『129師団の政治工作』によると、武装工作隊の主なメンバーは1942年の抗日軍政大学6分校卒業生によって編成されていた。武装工作隊による政治工作の主な活動は、日本軍占領区に小人数の武装宣伝隊を派遣し、座談会や群衆集会などの方式で、「日本必敗、中国必勝」を宣伝し、いかに敵軍を騙し、漢奸を打撃するかも宣伝された。日本反戦連盟とも協力し合っていた⁵⁰。冀南武装工作隊は1943年3月に成立し、日本軍占領区での破壊、瓦解活動を展開した⁵¹。この時期の変装宣伝は注目される。

¹ 『朱徳選集』人民出版社、1983年、43頁。

² 『中国人民解放軍全史(九)』、軍事科学出版社 2000年1月、7頁。

³ 『中国共産党軍隊政治工作七十年史(1)』、解放軍出版社、1991年5月、237-238頁。

⁴ 八路軍表冊、11頁、解放軍出版社、1994年4月。

⁵ 前掲書、『中国人民解放軍全史(九)』。

⁶ 前掲書、『中国共産党軍隊政治工作七十年史(1)』、59頁。

⁷ 侯敬智、『中国人民解放軍政治工作発展史』、国防大学出版社 1995年、35頁。

⁸ 前掲書、『中国人民解放軍政治工作発展史』、54頁。

⁹ 前掲書、『中国人民解放軍政治工作発展史』、59頁。

-
- 10 前掲書,『中国人民解放軍政治工作發展史』,75頁。
 - 11 前掲書,『中国人民解放軍政治工作發展史』,40-43頁。
 - 12 前掲書,『中国人民解放軍政治工作發展史』,45頁。
 - 13 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(1)』,127頁。
 - 14 前掲書,『中国人民解放軍政治工作發展史』,82頁。
 - 15 賀龍「回憶紅2方面軍」『近代史研究』1981年第1期。
 - 16 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(1)』,223頁。
 - 17 「策反」とは,敵の内部にもぐりこんで,蜂起と帰順を扇動する活動のこと。
 - 18 『軍隊政治工作歴史資料』第2冊,中国人民解放軍戦士出版社1982年,369頁。
 - 19 前掲書,『軍隊政治工作歴史資料』第2冊,518頁。
 - 20 前掲書,『軍隊政治工作歴史資料』第2冊,539頁。
 - 21 前掲書,『軍隊政治工作歴史資料』第2冊,552頁。
 - 22 前掲書,『軍隊政治工作歴史資料』第2冊,566頁。
 - 23 『軍隊政治工作歴史資料』第3冊,中国人民解放軍戦士出版社1982年,374頁。
 - 24 前掲書,『軍隊政治工作歴史資料』第3冊,490頁。
 - 25 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(1)』,600頁。
 - 26 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(1)』,7頁。
 - 27 『中国共産党軍隊政治工作七十年史(2)』,解放軍出版社,1991年5月,16頁。
 - 28 1937年9月11日に,八路軍は第18集団軍に改称し,習慣的には「八路軍」ともいう。
 - 29 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(2)』,17頁。
 - 30 『毛沢東軍事文集』第2巻,軍事科学出版社,中央文献出版社,1993年12月第1版,70頁。
 - 31 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(2)』,146頁。
 - 32 前掲書,『毛沢東軍事文集』第2巻,130-131頁。
 - 33 前掲書,『毛沢東軍事文集』第2巻,403頁。
 - 34 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(2)』,147頁。
 - 35 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(2)』,147頁。
 - 36 前掲書,『毛沢東軍事文集』第2巻,545頁。
 - 37 前掲書,『毛沢東軍事文集』第2巻,574頁。
 - 38 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(2)』,168頁。
 - 39 『八路軍回憶史料』(3),解放軍出版社,1991年9月,77頁。
 - 40 『中国共産党軍隊政治工作七十年史』(2),解放軍出版社,1991年5月,147頁。
 - 41 譚政「敵人在華北的現行政策」『八路軍軍政雜誌』第5号,1939年5月15日,26頁。
 - 42 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(2)』,168頁。
 - 43 中国人民解放軍歴史資料従書編審委員会『八路軍文献』,解放軍出版社,1994年5月,64頁。
 - 44 前掲書,『毛沢東軍事文集』第2巻,,770頁。
 - 45 中共中央文献研究室編集委員会,『周恩来選集』(上),人民出版社,1981年,92頁。
 - 46 前掲書,『朱徳選集』,42頁。
 - 47 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(2)』,211頁。
 - 48 『中国人民解放軍全史(4)』,軍事科学出版社,2000年1月,293頁。
 - 49 前掲書,『中国共産党軍隊政治工作七十年史(2)』,220頁。
 - 50 前掲書,『八路軍回憶史料』(3),102-104頁。
 - 51 前掲書,『八路軍回憶史料』(3),201頁。

2.2 共産党内の「知日派」と敵軍工作

清末から多くの若い中国人留学生が日本に渡った。中国で革命を起こした政治家・軍事家・文学者の多くは、日本留学経験のある人である。中でも蒋介石、陳独秀、李大釗、周恩来、郭沫若などが有名である。さらに中国共産党第1回全国代表大会代表には李達、李漢俊、董必武、周仏海などの日本留学経験者がいた¹。

ここでいう「知日派」とは、日本に留学、また訪問した経験があり、日本の文化や一般の人々の考えをある程度理解している人のことである。本節では、1937年から1945年までの日中戦争期において、中国共産党の敵軍工作部で活躍していた「知日派」を中心に、中国共産党の指導層の「日本観」について分析する。その「知日派」のほとんどは、日本で長年留学し、日本のことを深く理解している人々であり、日中戦争期において共産党の軍隊で日本人捕虜を扱い、敵情研究や日本軍向けプロパガンダ工作などに従事していた人々でもある。

日中戦争期において、中国共産党は、日本軍を瓦解させるために多くの「知日派」の人材を活用しようとした。1937年10月6日に総政治部が出した『八路軍総政治部が日本軍向け政治工作を展開する指示』には敵軍工作幹部の充実と日本留学経験者の活用を強調し、「各師団の敵軍工作部の工作は腕利きの幹部が主宰し、適切な工作員を配属すべきである。各部はそれぞれ日本語のわかる幹部や兵士を各連隊にそれぞれ2人、旅団に1人、師団に2、3人を配属すべきである。これらの工作員のほとんどは、日本留学から帰国した愛国青年でなければならない。政治上と工作能力の面で積極的に育成し、敵軍工作の優秀幹部にさせ、創造力と自主性を発揮させるべきである²」としている。

1937年日中戦争の勃発につれ、多くの在日中国人留学生が帰国することになり、国民党または共産党の軍隊に入った人も多くいた。日本の国情と日本人の考えをよく知り、日本語が堪能である「知日派」の多くは敵軍工作、日本軍向けのプロパガンダ工作および日本人捕虜の教育に従事していた。1937年から1945年までの日中戦争期における中国軍の対日工作とその政策設定を見ると、これらの「知日派」の働きは注目に値する。

2.2.1 敵軍工作に携わった「知日派」の代表人物

(1) 王学文

日中戦争期において八路軍総政治部敵軍工作部長をつとめた王学文（1895－1985）は、日本留学経験のある1人である。王学文の元の名前は王守椿であり、江蘇省徐州で生まれ

た³。1910年から1927年までの間に、前後して東京同文書院、第一高等学校予科、金沢第四高等学校、京都帝国大学経済学部及び大学院で学んだ。その回想録によると、1911年、「同文書院で2年間勉強したが、ちょうど孫中山先生が指導した辛亥革命が勃発し、中国最後の封建王朝政府が打倒された。わたしはすぐに帰国し、約1年滞在してまた東京に戻った。」1927年になると、「国内から周恩来、朱徳、賀竜らの同志が南昌で蜂起し、南下して汕頭を占領したニュースが入ってきた。そこでふたたび帰国することにした⁴。」合計16年程度日本で生活していた王学文は、1937年から延安にある中共中央党校で教鞭を執った。1940年から中央軍委総政治部敵軍工作部部長となり、対日本軍プロパガンダ工作と日本人捕虜の教育に従事していた⁵。



1915年に金沢で撮った王学文と夫人の写真⁶。

(2) 張香山

日中戦争期において、長期にわたって共産党の敵軍工作に従事していた張香山（1914－2009）は、浙江省の出身で、1933年10月から1937年4月まで日本に留学していた⁷。東京高等師範での留学を終え、帰国した張香山は1937年に八路軍に入隊し、1938年に中国共産党に入党した。日中戦争期において、八路軍129師団の敵軍工作部副部長、太行軍区敵軍工作部部長、晋冀魯豫軍区敵軍工作部部長などを歴任した⁸。日本で身につけた日本語能力と日本人の心への理解は、その後の敵軍工作に大きく生かされた。八路軍の捕虜となった香川孝志の回想によると、捕虜となったばかりのとき、張香山に日本語で「安心しなさい。われわれ八路軍は捕虜を殺さない」と言われ、心が落ち着いたという⁹。同じく八路軍の捕虜となった前田光繁の回想によると、捕虜になったら、10日間ほど張香山と同居生活が続いた。その間張香山は正面から意見をぶつけるのをなるべく避けて、1933年から1937年まで日本に留学したころの話や、日本での政治活動や中国に強制送還されたことなどを語った¹⁰。日本留学の経験は、張香山にとって日本人捕虜と交流する共通の話題を提供してくれた。日本留学で経験したことの共有を通じて、日本人捕虜の反感・不安感を解消することができたと言えよう。2000年、日本で過ごした美しい青春時代を

記録する『回首東瀛』が出版され、桜、箱根、筑波山、武蔵野など、「東京で過ごした青春時代」の美しい思い出が書かれている¹¹。



1935年、同級生と筑波山に登る。左端は張香山¹²。

(3) 趙安博

長期にわたって八路軍の敵軍工作に従事していた趙安博（1915－1999）は、浙江省生まれで、1934年秋に日本に留学し、1935年春から1937年7月まで第一高等学校に在学し、1937年に帰国して八路軍に入隊した¹³。1982年に出版された回想録には、恩師である松本亀次郎先生に対する敬意を示している。「東亜高等予備校の松本亀次郎先生は、ながく日中文化の交流に尽力してきた学者だった」という。1935年春、趙安博は第一高等学校（今の東京大学教養学部）に入った。当時、ドイツ語を教えてくれた片山敏彦先生のことを回想し、「当時、中日関係は日一日と悪化の途をたどりつつあったが、先生は中国学生にとっても友好的で、民族的差別などいささかもなく、講義の態度もしごく真面目であった」、「しかし、あの頃日一日と猖獗を極め始めた軍国主義には、ひじょうな反感をもっていた。その後、日本が中国への侵略戦争をすすめるようになると、先生は一高教授の職を決然となげだされ、芸術的抵抗の立場に移った。先生のこうした高尚な人柄には、今考えてもまったく頭のさがる思いがする¹⁴」と述べている。



第一高等学校に在学した当時の趙安博の写真（1936年）¹⁵。

回想録によると、「一高在学中、わたしは、日本軍国主義が中国侵略に拍車をかけるにしたがい、中日両国の関係が日増しに悪化してくるのを、身をもって感じた。中国の留学

生が日本で勉強しつづけるのもむずかしくなってきた。——このような状況のもとでは、これ以上勉強はつづけられないし、たとえあとで大学に入れたとしても、卒業までもっていくのは並大抵のことではない。それに、学費や下宿代の仕送りもいつまでつづくかわからない。わたしは、さらに進学しようというそれまでの計画を中止し、1937年7月、盧溝橋事変が起きてまもなく、東京での学生生活に別れをつけて祖国へ帰った¹⁶。」

趙安博は日中戦争期において、敵軍工作部と延安日本工農学校で野坂参三の助手として、日本人捕虜教育、日本軍向けのプロパガンダ工作などの分野で活躍していた。

(4) 林植夫

林植夫(1891-1965)は福建省の出身で、1906年から日本に留学し、孫文が作った「同盟会」に加盟した。1920年に東京帝国大学農学部林学科を卒業した。1933年、彼の翻訳した河上肇の『資本主義経済学之歴史的発展』が商務印書館から出版された¹⁷。1938年に新四軍に入隊し、1941年まで新四軍政治部敵軍工作部部長をつとめ、日本人捕虜教育や日本軍向けのプロパガンダ工作などに従事していた¹⁸。タイの華僑で、日本留学経験のある陳子谷は新四軍の敵軍工作部門で活動していた。新四軍2支隊で兵士に日本語のスローガンを教えていた。1939年に中国共産党に入党し、新四軍新6団政治処敵軍工作部の股長をつとめた¹⁹。陳子谷の回想によると、当時、共産党員ではないと、軍隊の正式幹部になるのが困難だった。同盟会会員であった林植夫は、国民党中央委員でもあったので、中国共産党に入党する手続きは、共産党中央委員会の批准が必要だった。日本人捕虜がいなかった1939年以前は、新四軍の敵軍工作の日本語スローガンは、林植夫によって作られた²⁰。1941年皖南事変で国民党の捕虜となったが、日本留学時代に蒋介石、宋美齡と面識があり、共産党に入党しなかったこともあり、処刑は免れた²¹。

(5) 李初梨と李亜農兄弟

李初梨(1900-1994)と李亜農(1906-1962)は兄弟であり、ともに日本留学経験があり、しかも共産党軍隊で敵軍工作に従事していた。李初梨(3男)は、1915年に日本に留学し、1916年にまた10歳だった李亜農(4男)を連れて日本留学をさせた。日中戦争期において、李初梨は総政治部敵軍工作部副部長をつとめ、李亜農は新四軍敵軍工作部副部長として活躍した。

李初梨は四川省江津の出身で、1915年に日本での留学を始めた。東京高等工業学校・京都帝国大学で学業にいそしんだ。日本で中国の左翼作家の成仿吾、田漢らと頻りに接触し、マルクス主義に出会った。1927年に帰国し、左翼文学組織「創造社」に参加した。1928年に上海で中国共産党に入党し、1937年に延安で新華社社長、『新中華報』編集長

などを歴任した²²。1940年から、中共中央南方工作委員会秘書、軍委総政治部敵軍工作部副部長、部長などを歴任した²³。延安の日本工農学校の日本人捕虜教育にも、李初梨は敵軍工作部の副部長として積極的に参加した²⁴。

李亜農は日中戦争期で新四軍敵軍工作部副部長として、日本人捕虜への教育工作に従事していた。1916年から日本に留学し始め、小学校の課程を終え、東京第一高等学校の予科に入り、その後、京都第三高等学校に入学した。1927年に京都帝国大学文学部に入学し、「社会科学研究会」を組織した。1927年に京都大学で中国共産党に入党した²⁵。その後、李亜農は「留日反帝同盟」の組織で活動し、1929年に日本警察に逮捕され、3年間刑務所に収監された。1932年に16年間の日本留学を終え帰国した。1941年に蘇北抗日根拠地に入り、新四軍政治部敵軍工作部副部長などを歴任した。建国後、上海歴史研究所所長、上海史学会会長などを歴任し、歴史学者として知られるようになった²⁶。

1941年冬、李亜農が新四軍に入ったとき、新四軍にはすでに多くの日本人捕虜がいた。新四軍の軍長であった陳毅は李亜農を敵軍工作部副部長に任命した²⁷。1942年に新四軍敵軍工作部部長をつとめた劉貫一の回想によると、李亜農副部長は日本に留学したことがあり、日本語が堪能で、日本人反戦同盟と朝鮮解放同盟の支部の工作は、李亜農が担当した。李亜農は日本人捕虜と交友を結び、一緒に日本語の本やマルクスの著作で学習した²⁸。1942年、華中局の『新華報』の編集長をつとめた陳修良の回想によると、「新四軍敵軍工作部副部長だった李亜農がよく編集部に来ていた。李亜農が流暢な日本語で日本人捕虜を教育していた²⁹」とのことである。

2.2.2 共産党指導層と日本のつながり

前述したとおり、日中戦争期において、中国共産党の敵軍工作部などの部署には、多くの日本留学経験のある「知日派」が活躍していた。共産党指導層においても、「知日派」の姿もあった。ここでは、毛沢東の日本観に触れながら、周恩来、徐特立、董必武、林伯渠、呉玉章などの「知日派」を考察する。

(1) 「延安留日同窓会」の結成

1941年9月1日、延安留日同窓会が結成された。結成大会に80名の会員が出席し、呉玉章、王学文、何敬思、李初梨、趙安博、江右書などがそのメンバーとなった。日本人反戦同盟、日本工農学校の代表である松本敏夫が挨拶に立った。大会の席上で日本語図書館の設立が決まった。

1942年2月17日、延安留日同窓会が日本工農学校の学生を招待し、交歓会を行った。65歳の呉玉章は1903年に日本で留学し、1925年に中国共産党に入党、1939年から延安

魯迅芸術学院院長，延安大学学長などを歴任した。呉玉章は交歓会で、「日本に留学している多くの中国人学生は、いつも日本人民と交流し、日本人民から真の友情と愛情を得て、頼れる保護と援助を得ている。我々は日本でマルクスレーニン主義を勉強し始めたのである。日本から大量の書籍と貴重な資料を入手している³⁰」と挨拶した。

(2) 「知日派」としての「延安五老」

「延安五老」とは、日中戦争期において、延安にいた徐特立，董必武，林伯渠，呉玉章，謝覺哉という5人の共産党長老のことである。1940年1月15日，延安で「呉玉章同志60歳祝賀会」が開かれ，毛沢東が演説した。演説の中で，毛沢東は，「呉老，林老，徐老，董老，謝老は青年に好かれている」と強調し，この5人のことを高く評価した³¹。これを機に，中国共産党の歴史の中で，「延安五老」はよく知られるようになった。

毛沢東の若い時代の先生であった徐特立（1877－1968年）は何度も日本を訪問したことがある。1913年から1919年まで，徐特立は湖南省第一師範学校で教鞭を執っていたとき，毛沢東が同学校で勉強していた³²。1910年7月から10月の間，徐特立が小学校教育を考察するために日本に滞在した³³。1927年中国共産党に入党した後，南昌蜂起，長征などに参加。1937年後，八路軍湖南弁事処の代表をつとめ，長沙で活動していた。1940年8月に延安に戻り，中央宣伝部副部長，自然科学研究院院長などを歴任した。延安に駐在していたソ連記者も「徐特立は延安で最も尊敬される1人である」，「毛沢東はこの以前の先生を深く尊敬している」と記載している³⁴。1937年1月，徐特立60歳のとき，徐先生は「今までの20年において私の先生であった。現在でも私の先生で，将来でも私の先生である³⁵」と毛沢東が強調し，徐特立に対する敬意を表していた。日中戦争期において，延安にいた徐特立は，八路軍の高級参議をつとめて，毛沢東や共産党の対日政策に影響を与えたと考えられる。

董必武（1886－1975）は湖北省の出身で，1911年に辛亥革命に参加，同年同盟会に入会した。1914年，東京にある私立日本大学に入学した。1915年から1916年まで反袁世凱運動に参加するために帰国。1916年再び渡日し，1918年まで滞在した。1921年7月に中国共産党第1回全国代表大会に出席した。日中戦争期において，中共中央党校校長，陝甘寧辺区政府代理主席などを歴任した³⁶。

林伯渠（1886－1960）は湖南省の出身で，1904年に日本東京弘文学校で留学し，1905年11月に帰国した。1913年に再び日本に渡り，孫文の中華革命党に入党した。1921年に上海共産主義小組に入った。陝甘寧辺区政府代理主席などを歴任し，共産党の統一戦線工作に大きく貢献した³⁷。

呉玉章（1878－1966）は四川省の出身で，1903年に日本の東京成城学校に入学し，1906年同盟会に入会し，8年間日本にいた。1925年に中国共産党に入党し，1938年にソ連か

ら帰国し、魯迅芸術学院院長、延安大学学長などを歴任した³⁸。

「延安五老」の中で、訪日乃至は留学の経験がなかったのは、謝覺哉だけだった。徐特立は日本で小学校教育の考察をした経験を持ち、董必武、林伯渠、呉玉章は長く日本に留学した経験を持つ。

（3）周恩来と日本のつながり

周恩来は日本留学経験のある中国共産党の指導者として知られている。1917年9月に日本に留学し、1919年4月5日に、帰国を前にした周恩来は京都の嵐山を散策し、『雨中嵐山』を書き残している³⁹。日本滞在中、周恩来は日本社会をつぶさに観察した。1918年3月9日、周恩来は日比谷公園を散策し、公園で活動している日本人の男女の学生が花草を植えて遊ぶ姿を見て感動した。当日の日記に、「中国人が口を開けば『東洋（日本）は襤褸の邦』というが、よく考えれば、日本はどのようにして襤褸であろう。おそらく中国人がいささかふがないのだ。「日本の国民が中国人を軽蔑するのも不思議ではないし、日本人の知識は実に子どものころから鍛えあげられたものなのだ。中国人は一知半解であり、どうして事理に精通しているといえよう」と記している⁴⁰。日本でこの眼で日本人の姿を見た周恩来には、日本を理性的に見る日本観があっただろう。

国共合作の時期において、周恩来は国民政府軍事委員会政治部副主任に就任し、プロパガンダ工作を担当する「三庁」を通じて対日本軍のプロパガンダ活動を行っていた。中華人民共和国建国後の20世紀50年代における日中交流と中国の対日政策においても、周恩来の日本観の影響があったと考えられる。

（4）毛沢東と日本のつながり

1936年6月から10月にかけて、アメリカ記者であるエドガー・スノーが毛沢東取材し、『中国の赤い星』を出版した。中で毛沢東の若いころのことを詳しく紹介されている。それによると、16歳だった毛沢東が湘潭にある新式学堂に通っていた。学堂の教師の一人に日本から帰ってきた留学生がおり、「仮洋鬼子」と呼ばれていた。毛沢東の回想によると、「生徒の多くは、『仮洋鬼子』の他人と異なる辮髪のためにかれを好かなかったが、私がかれが日本のことを話すのを聞くのが好きだった。」この先生から、日本の歌も教わって、「そのころ私は日本の美を知り、感じ、ロシアにたいする日本の勝利のこの歌のなかに日本の誇りと力の何物かを感じた。野蛮な日本——私たちがこんにち知っている日本——もあったことは思いもよらなかった⁴¹。」そのなかから、当時の毛沢東が日本に対する敬意を覗くことができる。

中国共産党の創立は陳独秀などの「知日派」の留日経験と深く関連している。毛沢東は

スノーの『中国の赤い星』の中では次のように陳独秀から受けた影響を述べている。「私は1919年に2度目に上海に行った。そこで私はふたたび陳独秀にあった。最初は北平で私が国立北京大学にいたときにかれにあったのだが、かれはおそらくほかの誰よりも私に大きな影響を与えた⁴²。」

1917年春、宮崎滔天が黄興の追悼式に出席するために長沙に足を運んだ。湖南省立第一師範学校で勉強している毛沢東が宮崎滔天に手紙を出し、その後、宮崎滔天が毛沢東に会い、第一師範大学で演説した⁴³。

日中戦争期において、毛沢東は日本を研究する重要性を強調し、共産党の敵情研究を重視する姿勢を見せている。1943年3月15日に毛沢東の野坂参三宛の手紙に、「私は日本の革命史について詳しくはないが、しかし非常に知りたいのだ。また、中国の党の幹部たちと党員たちにも、日本革命の史実を教える必要がある。そこであなたに、日本革命の史料を多く書いて、『解放』に発表してくださるよう提案する。ご考慮してくださるようお願いする⁴⁴」と提案している。毛沢東の日本への関心が窺える。

2.2.3 「知日派」と中国共産党の対日政策

(1) 「知日派」の共産党入党

日本で留学経験をもつ多くの者は、日中戦争期において共産党および八路軍・新四軍で活動していたが、これらの「知日派」たちはなぜ中国共産党に入党したのかについては、それぞれの出身と留学時期によって違うが、全体から見れば次の2つの理由が挙げられるだろう。

第1の理由は、日本が共産主義思想の情報源であり、中国共産党の日本での働きかけがあったことである。多くの青年は日本にきて初めてマルクス主義と出会い、共産党の勧誘を受けて左翼組織または共産党に参加したのである。周知のとおり、中国共産党の創立とマルクス主義関連の著作が中国にもたらされたことには、留学経験者が緊密に関与している。中国共産党が創立される前に中国で出版された『共産党宣言』などのマルクス主義関連の著作のほとんどは、留学生によって中国語に翻訳された。中国共産党の創立の背景にも、陳独秀、李大釗など留日学生の努力があった。共産党が創立される前には、すでに8つの共産主義小組が結成され、その1つは東京小組だった⁴⁵。1925年ころから、在日中国人留学生の間では『資本論』などマルクス主義の理論を研究する社会科学運動が盛んであった。1925年から1927年までの間に、日本の中国共産党小支部にはわずか10名程度の党員しかいなかったが、その後、支部はビラなどを通じて中国人留学生の入党を勧誘していた⁴⁶。内務省警保局保安課外事係の極秘資料「中国共産党日本特別支部検挙事件」によると、1928年10月下旬に中国共産党日本特別支部が結成された。当時の資料によると、215名の被検挙者の中で、共産党員数は82名だった。中国共産党日本特別支部の活

動のほとんどは隠密裏に行われた。支部は継続的・積極的に中国人留学生を対象として入党勧誘活動を行った。共産党支部のほか、中華留日社会科学研究所連盟など共産党の周辺組織もあった。特別支部の下には、明治大学支部・東亜予備校支部・成城学校支部など11の支部があり、党員のほとんどは各大学にいる中国人留学生だった⁴⁷。

前出の王学文は1925年に京都大学の学部在学中に、社会科学研究会に参加していた。当時の社会科学研究会は半非合法の組織で、一部の活動は伏せられていた。大学のマルクス主義経済学者である河上肇の支持を得て活動していた。日本人メンバーの中には、のちに日本共産党に入党した人も多くいた⁴⁸。王学文は1927年に帰国した後も、共産主義活動を行い、1927年6月に中国共産党に入党した⁴⁹。

日中戦争の勃発で、中国共産党はさらに国内外の民衆に対して、「抗日参加」を呼びかけていた。1937年10月6日に総政治部が出した『八路軍総政治部が日本軍向け政治工作を展開する指示』には、「日本留学から帰国した愛国青年」の活用を呼びかけている。1937年7月7日の盧溝橋事件後、在日中国人留学生の間に「帰国運動」が活発になり、7月7日から2カ月弱の間における帰国者は4000人を超えた。帰国後、国民政府の軍隊に入隊した者もいれば、八路軍・新四軍に入隊した人もいた⁵⁰。

第2の理由は、個人の政治理念・信条や顕在化しつつあった日本の中国侵略への怒りを動機とするものである。多くの中国青年は、渡日する前または日本留学期間中にすでに共産主義者の組織・集会に参加していた。張香山は日本に行く前の1932年にすでに天津で中国左翼作家連盟に参加し、書記をつとめていた⁵¹。渡日した後も、左翼文学活動を続け、郭沫若など「中国左翼文学家」たちの集会に積極的に参加していた。その回想録によると、「1934年の冬から1937年の春にかけて、中国の民族危機が深刻になる一方、救国運動も高まった。このような情勢の下で、わたしは、いっそう東京での中国左翼文学活動に励んだ⁵²。」「東京にいるとき、わたしは郭沫若と知り合い、いろいろ教を受けていた⁵³。」張香山は結局、政治活動を行ったという理由で1937年に中国に強制送還された。

李亜農は、日本留学期間中の1927年に中国共産党に入党し、「留日反帝同盟」などの組織で反日運動を行っていた。内務省警保局保安課外事係の極秘資料によると、日本で留学していた中国共産党員である李亜農の活動は、日本内務省警保当局に把握されていた。1929年の資料によると、「日本反帝同盟組織セラレ中国留日反帝同盟ニ連絡ヲ申込み来レルヲ以テ同盟ハ党员タル李亜農ヲ以テ連絡員トナシ共同ノ戦線ヲ張ルニ至レル⁵⁴。」

「中国共産党員李亜農ハ以来数次日本反帝同盟側ト協議シタル結果日本側ノ提案ニ依リ九月一日国際無産青年日ヲ期トシタル⁵⁵」とある。1929年7月27日、「留日反帝同盟」代表大会が東京都杉並区馬橋14番地で開催され、李亜農は代表会議主席に選ばれ、さらに宣伝部委員に任命された⁵⁶。1929年に李亜農が日本警察に逮捕され、1932年に帰国するまで3年間刑務所に収監された。

(2) 日本人捕虜教育における「知日派」の活用

日中戦争期に、中国共産党の「知日派」は、日本軍向けのプロパガンダ工作に大きく貢献している。日中戦争勃発前の1933年3月下旬に、中国共産党吉東局が日本軍亀岡村1旅団長の部隊に対して、プロパガンダ工作を行った。吉東局の書記は日本留学経験のある童長栄であり、日本軍向けのプロパガンダ工作・瓦解工作を得意としていた。当時、日本軍の通過する各地の木や電線柱にビラ・スローガンなどを貼った他、伊田助男という日本兵士に共産党に向けて弾薬を送らせるなどの工作を行った⁵⁷。

当時の対日本軍プロパガンダ工作进行を指導する童長栄は、1925年から1928年かけて東京帝国大学で在籍していた。帰国後、中国共産党上海滬東区委員会書記、河南省書記、大連市書記などを歴任し、1931年から東北の延辺で中国共産党東滿特委書記をつとめ、1934年に戦死した⁵⁸。童長栄は、『日本軍隊に告ぐ』などを通じて対日本軍向けのプロパガンダ活動を展開した。それは日中戦争期における中国共産党の対日本軍プロパガンダ工作と似たような性格を持っていた⁵⁹。

1937年に始まる日中戦争期においても、日本留学経験のある「知日派」は、敵軍工作部などの部門で、対日プロパガンダ工作に従事した。前述した王学文、趙安博など代表的な人物はもちろん、延安にある総政治部の敵軍工作部だけではなく、前線にある各師団・旅団・連隊などにも、日本留学経験のある多くの「知日派」が送り込まれた。たとえば覚醒連盟冀魯豫支部で活動していた水野靖夫の回想によると、八路軍115師団343旅団政治部の敵軍工作部部長をつとめた李仁は、当時30歳前の青年で、早稲田大学に留学した経験を持っていた⁶⁰。そのほか、新四軍政治部主任の袁国平が日本留学経験者である盛華、符然、李特、黄波、王天祥、陳子谷などの人を各支隊に派遣し、敵軍工作に従事させた。日本で舞踏を専攻していた呉曉邦も敵軍工作部で工作し始めたのである⁶¹。早稲田大学留学経験者である王星の回想によると、八路軍に入隊後、日本語を使う敵軍工作を担当していたとのことである。しばらく敵軍工作科で仕事をしたあと、日本語ができる3人が同じ部署にいるのは人材の浪費だということで、陳は政治部に残り、譚はほかの団へ、王星もほかの団の政治部へ配置換えとなった⁶²。

1939年8月に山東省堂邑県大李荘の戦いで八路軍129師団の捕虜となった秋山良照の回想によると、「当時わたしの通訳をしてくれ、中国語の教師になってくれた譚林夫は、九州帝大をでた日本語の達者な青年」だったという。「友達になろう。敵は、こんな不幸な戦争を始めた日本軍閥なんだから」といっていた⁶³。1941年に八路軍の捕虜となった和田真一の回想によると、「そまつな軍服をきたかれらのなかに日本の大学を出たものや、なかに日本の陸士の副官部にいたものがあることを知って驚いた。敵軍工作部に働いている甄科長は早稲田、方さんは法政大学にいたし、ベトナム人の呉さんは明大にいた」。あ

とで敵軍工作部の副科長に就任した王岳石は「日本の陸士の副官部に学んだことがある⁶⁴」と述べている。

「知日派」の人々が実施した捕虜教育工作の多くは、日本人捕虜の考えをある程度変え、彼らに一定の影響を与えた。日本人反戦組織で活躍していた前田光繁の回想によると、「私たちが日常接する八路軍幹部がみな日本語の達者なインテリで、親切な人たちであった。敵工部の蔡前部長は台湾籍の人、漆克昌科長は日本に留学した経験の持ち主。また江右書幹事も陳幹事も、もと留日学生であった。このうち江右書氏は、のちに延安で敵軍工作幹部訓練学校の教員となった⁶⁵。」日本人反戦組織で活躍していた古賀初美の回想によると、1941年捕虜となると、新四軍の蘇南第6縦隊に連れてこられた。明治大学出身の謝敏という敵軍工作員が、古賀の世話係りとなった。日本語が堪能で、小林多喜二の日本語の小説などを渡された。さらに、1941年5月末か6月に蘇中第1師団に移動し、その敵軍工作部部長も明治大学出身であり、敵軍工作部の工作員はほとんど日本留学の経験者であった。さらに、10月に新四軍第3師団に移動し、その敵軍工作部部長は一高出身の廖一帆であった⁶⁶。廖一帆（1917-1995）は幼いときマレーシアで勉強し、1935年から東京第一高等学校に留学し、1937年から延安に帰国した。その後、延安総政治部敵軍工作訓練隊助教、新四軍敵軍工作幹事、敵軍工作科長などを歴任した⁶⁷。

そのほかに、前出の野戦政治部の敵軍工作部部長の漆克昌と、敵軍工作部の工作員の陳斐琴、唐平鏞、陳重、王星などはみんな日本留学経験のある人である⁶⁸。漆克昌及び張香山、陳斐琴、江右書などの日本語に精通している工作員が、早期の捕虜に対して教育を実施した⁶⁹。漆克昌（1910-1988）は四川省の出身で、1922年に日本に留学し、東北帝国大学経済学科で勉強していた。1928年に中国共産党に入党し、1929年に日本で逮捕され、1930年に帰国。1930年に上海で逮捕され、1935年に山西の八路軍に入隊した。八路軍野戦政治部敵軍工作部科長・副部長・部長などを歴任した⁷⁰。

新四軍の捕虜となった香河正男の回想には、「敵工部にはほかに数人の幹部がいた。日本の大学に留学したことのある陳辛人と鮑汗清、明大の留学生らしくのちに第3代駐日大使となる宋之光、同じく明大留学生でのちに新四軍第1師団の敵工部長になる陳超寰、それに早大の政経に留学した謝鎮軍。敵工部にはこれらの日本への留学生が持ち帰った日本語の本がたくさんあるのに驚いた⁷¹」とある。

日本人捕虜体験者への聞き取り調査をした堀井弘一郎によると、「敵軍工作部幹部には、八路軍側の王学文部長・李初梨副部長、新四軍側の林植夫部長・李亜農副部長をはじめ、日本留学の経験があり日本語が堪能で、日本の文化や習慣、日本人の感性を知悉した逸材が配されていたことも見逃すことができない要素であった。王学文は河上肇の弟子の1人として京都帝大の大学院で学んでおり、李初梨と李亜農兄弟も京都帝大の留学生、林植夫は熊本五高・東京帝大の卒業生であった。これまでほとんどその素顔が知られていなかった林植夫が、『性格はきわめて温厚で話を諄々と説くタイプ』の穏やかな気性であった（藤

田証言)。李亜農についても、日本人を自宅によく招いて食事をご馳走してくれるような人物だった(大和田証言)。石堂清倫氏が戦後大連で李と接触していたさいの印象として『立派な人格者』、『文化人であり、何よりリベラルな性格』と回想していることとも符合する。よく知られている工農学校副校長・趙安博氏、129師敵工部長・趙香山氏なども含め、屈辱と絶望におちいった日本人捕虜たちの前に立ち現れたのは、まさにそうした共産党屈指の知日派知識人たちであった⁷²」とのことである。

共産党部隊の中の「知日派」たちの専攻は、文学、哲学、芸術などそれぞれ違うが、日本人への理解と日本語能力は最優先され、各レベルの日本軍向けの敵軍工作に当たった。日本人捕虜の不安感を解消するには効果的だったと言える。

(3) 敵情研究における「知日派」の活用

日中戦争において、中国共産党は日本と日本軍の状況を把握する「敵情研究」工作を重視していた。日本の国内情勢、日本軍の状況に関する研究工作には、八路軍にいる日本人のほか、多くの「知日派」も参加していた。

1939年1月15日に出版した『八路軍軍政雑誌』には、毛沢東執筆の「発刊辞」が掲載された。その中には、「蒙偽軍向けの獲得工作の効果は大きかったが、もう一歩進めるべきである。ここで、敵偽軍のあらゆる情報の収集と研究は大変重要であるが、この面ではまだ不十分である⁷³」との指摘がある。

1942年9月9日付の『解放日報』には、敵情研究を強化する必要性が分析されている。「われわれは一般的な手段しかない。敵軍を理解しない、敵軍を研究しない、という悪いやり方を直さなければならない。敵を理解し、敵を研究するには、敵軍特務の工作手段と敵の具体政策を対象に着手すべきである⁷⁴。」

1943年7月13日付の『解放日報』の報道によると、延安で開催された日本共産主義者同盟結成1周年記念大会において、岡野進は日本人反戦組織の盟員に対して3つの任務を挙げた。第1は革命理論学習の強化。第2に、日本研究。第3に、共産党、八路軍、新四軍の革命経験の学習。「われわれは本国の状況をしっかりと研究し、とくに日本資本主義の弱点と勤労大衆の状況を研究する⁷⁵。」その後、岡野進が各地の反戦団体支部に手紙を出し、敵情研究など日本反戦組織の3大任務を提唱した⁷⁶。

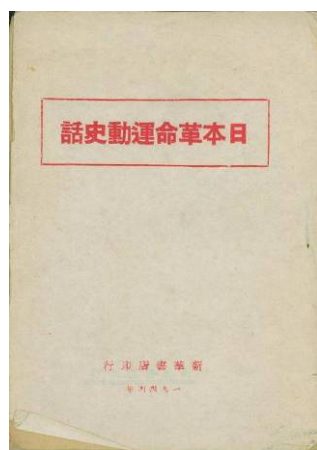
中国共産党は日中戦争期において、日本政治、日本経済、日本軍事、日本革命などを含む敵情研究工作を展開した。主な敵情研究機関とメディアを以下に解説する。

『敵国彙報』。『敵国彙報』は八路軍総政治部敵軍工作部日本問題研究会が編集し、八路軍政治部が発行する半月刊である。その前身は『敵国彙報』新聞で、1941年2月に雑誌として刊行されるようになった。この雑誌の特徴は「政治化・大衆化・軍事化」で、主に日本政治・経済・風土など各方面の状況を紹介する文章、および敵軍研究の資料を系統

的に発表していた⁷⁷。

『敵偽研究』。『敵偽研究』は八路軍野戦政治部敵軍工作部日本問題研究会敵偽研究社編集委員会が編集する月刊誌である。1941年5月20日に創刊号が発刊された。その主な目的は、「敵偽の各種の政策と活動、特に政治、経済、文化教育などについて、系統的な研究と紹介をすることである。できるだけ各種の敵偽資料を収集し、各ポルトにいる同志が敵偽研究と対敵闘争を行うときの参考資料となる⁷⁸」であった。

『解放日報』の「敵情」特集ページ。『解放日報』には、定期的に「敵情」特集ページが発行されている。1941年9月27日、創刊後隔週で発行され、『解放日報』の4面の前面が使われていた。1945年3月31日まで、計66号の「敵情」が発行された。辛亥革命の英雄とされている黄興はよく知られているが、その息子の黄乃は「敵情」の編集長をつとめていた。黄乃は日中戦争勃発前に日本に留学し、宮崎滔天の息子である宮崎龍介宅で下宿していた。エスペランティストの長谷川テルと親交を結んだ。反戦運動を理由に強制送還となったが、戦争が始まると中国共産党に入党、『解放日報』の「敵情」の編集長をつとめた⁷⁹。1942年、マルクスレーニン学院の始業式において、毛沢東が「調査なくして発言権なし。たとえば、黄乃は日本国の政治・経済・軍事などの面において調査研究を行った。日本問題について、彼には一番発言権がある」と演説した⁸⁰。



『解放日報・敵情』の記事に基づき、新華書店より出版された『日本革命運動史話』の表紙⁸¹

『八路軍軍政雑誌』。『八路軍軍政雑誌』は共産党部隊の政治工作を中心とする研究誌だが、定期的に敵情関連の論文を掲載している。たとえば、1939年5月15日に出版した『八路軍軍政雑誌』には、譚政の「敵人在華北的現行政策」が掲載されている。中で、日本軍の政策と八路軍の対策が紹介されている⁸²。そして、同じ号に、王思華の「敵軍的現状」が掲載されている⁸³。第1巻の第6号に、王思華が書いた「戦争兩年後の日本政治経済」が掲載され、日本の政治経済状況が詳しく分析されている⁸⁴。

日本問題研究会。初期の日本研究活動は、主に中国人を中心に行われていた。総政治部責任者の王稼祥が抗日軍政大学の教員である楊憲吾、敵軍工作部の劉型、軍委編訳局の曹汀などを集め、日本問題研究会を創立したのである。工作員であった王子野が多数の敵情

関係の文章を『八路軍軍政雑誌』で発表した⁸⁵。延安の敵軍工作部の下には、日本問題研究会（室）が設置されていた。黄乃の回想によると、敵軍工作部には日本問題研究室という研究機関が設けられていて、野坂参三の管轄部署となっていた。黄乃は1940年から1945年まで、日本問題研究室付の研究員として敵情研究に携わり、野坂の研究秘書をつとめていた⁸⁶。劉国霖の回想によると、日本工農学校が成立後、毎週土曜日午後には総政治部で野坂が主催する「日本問題研究会」が開かれ、総政治部やその下部の敵軍工作部、敵軍工作幹部訓練学校、日本工農学校関係者など、毎回20～30人が出席していた。その場で『日本便覧』というパンフレットは各人に一冊配布され、日本の天皇制などが紹介された⁸⁷。

敵情を把握する手段としては、（1）計画的に行われる全般的な調査研究、（2）特定地区に出した専任者による調査、（3）捕虜や投降者から情報を得る尋問、（4）日本軍の電話盗聴、（5）小商人・親戚などのつながりを通じる日本軍情報収集、（6）戦いで収集する日本軍の文書・手紙など、（7）新聞などの公開刊行物からの情報収集、などがある⁸⁸。これらの手段のほとんどは、高度な日本語能力が必要とされた。

（4）「知日派」と「2分法」

中国共産党は、戦争を起こした日本帝国主義者と一般の日本人を区分する「2分法」を提唱したが、日中戦争期において八路軍の一般兵士や中国の一般庶民に浸透させることは困難だった。「2分法」や日本人捕虜への優遇などの政策の執行には、一般兵士や一般庶民の理解と支持が欠かせなかった。その理解と支持を獲得するために、各級部隊や政府の敵軍工作部門にいる「知日派」の力は重要であった。心から「2分法」を信じ、本気に「2分法」と捕虜優遇政策を宣伝する背景には、「知日派」の日本人と日本文化への深い理解があったと考えられる。

1982年に出版された張香山では、「その時は、ちょうど中日戦争の前夜である。軍部はあらゆる輿論を動員して、軍国主義の旋風を煽りたてようとしていたが、わたしと日本人学生の間にはずっと青年の純情と友情がつづいていた。彼ら、わたしを中国人だからといって敵視したり、軽べつしたりすることはなく、やはり親しい学友であった。（中略）お互いに何のへだたりもなく青年らしい熱情と奔放な感情が発揮された⁸⁹」と当時を振り返っている。日本留学を通じ、日本庶民と日本軍国主義の違いを肌で感じていたことだろう。

「わたしは、この同級生たちと2年ほど一緒にいただけで、1937年の4月に、アメリカ船プレジデント・タフト号で帰国し、これでわたしの日本での学生生活と文学生活に終止符が打たれた。（中略）情勢からみて、日本の軍部が中国に対して全面侵攻にでてくることは明らかである。マルクスは、批判の武器と武器の批判を論じたが、わたしにとって、批判の武器を武器の批判にかえなければならない時が迫っていた。戦争の時期に、わたし

が歩んだ道は、まさにその通りであった。この戦争は、中日両国人民にとって、深刻な災難であったが、同時に、この戦争は中日両国を改造し、中日両国の関係を改善するための、道を切り開いた⁹⁰。」張香山はそのように「2分法」の考えで日中戦争をまとめている。

日本文化への理解、日本人の性格への理解は、「2分法」を具体化する捕虜教育に大きく生かされた。日本留学経験者のなかでも代表的な林植夫は、国民政府の官費留学生試験に合格して明治末～大正に日本に留学し、帰国後国民政府の役人となった。大正12年の震災のとき、国民政府の一員として日本を訪問したこともある。新四軍で林植夫の教育を受けたことのある香河正男の回想によると、「日本語はきわめて堪能で、50歳くらいの方だ。政治部では民家を借りて宿舎としていたが、林部長は隣の部屋に寝起きしていたので、毎日顔を合わせていた。大変おとなしく温厚な方で、人間的に優しい方だった。話も諄々と説いていくというタイプだった。メガネをかけ、日本人とよく似ていた」と述べている。林は「この戦争は必ず日本がまけ中国が勝つ。そうすれば、日本に無事に帰れる。それまでゆっくりしてくれ。労働はさせない。本を読んでしっかり勉強してくれ」というのである⁹¹。林植夫の日本留学および日本への理解は、日本人捕虜にある程度の親近感をもたらしたと考えられる。

日本で出会った同級生、先生、よく通う店のオーナー、公園で遊ぶ近所の子どもなど、日本留学経験の中で一般の日本人から得た感覚は、「知日派」の具体的な敵軍工作に影響を及ぼしたと考えられる。王学文の場合、1982年に出版された王学文の回想録である『河上肇先生に師事して』の中では、多くの留学時代の記憶が記されている。日本人の友達との交友についての回想の他、「学生に親切で」「謙虚」な河上肇先生を慕う心情が綴られていた。帰国の旅費まで河上先生からもらったという。「わたしは先生のお宅まで奥さまにお会いした。日本人はとても礼節に厚かった。普通現金をそのままむき出して相手にわたさない。先生の奥さまは、封筒に入れてわたしてくれた。あけて見たら20円が入っていた。こうして河上先生と中国の友人のおかげで日本を離れたのである⁹²」と回想している。日本で経験したこれらの交流は、その後の敵軍工作、特に日本人捕虜を扱うときの「2分法」政策の実行に陰に陽に影響を与えたと考えられる。

1938年から1942年までの間に東京高等師範学校と東京文理科大学（中退）で学んだ蕭向前は、直接に敵軍工作に従事していなかったが、当時の留学生の日本認識をよく表しており、以下紹介する。「日本では、一部の人にとって、いまだに解きにくい問題が残っているようである。かつて、軍国主義者は、本来多くの親日派を育てるために、なみなみならぬ精力を費やして、大勢の留学生を吸収したというのに、どうしてあべこべに、あんなに多くの抗日派を生みだしてしまい、こと、こころざしと異なってしまったのか。わたし自身の体験にもとづいていえば、日本では、軍国主義者はごく少数であり、絶対対数の善良な日本人民は、みんな中国との友好を望んでいたからである。彼らは軍国主義政策を改め、民主的解放を得たいと願っていたのだ。歴史のくだした結論は、軍国主義者が侵政策

によって自分自身の墓を掘り、人民こそが勝利者となったということである。軍国主義者は失敗して投降し、中国人民と日本人民は、共に彼らの魔手からの解放をかちとったのだ。歴史という高い見地から客観的にふりかえれば、日本軍国主義に対する抗日派は日本人民に対する親日派であった。言いかえれば、あのような状況のもとでは、親日派も抗日派にならざるを得なかったのである。これこそ、日本で20年も暮らしてきて、多くの日本の友人をもつ郭沫若同志が『七・七事変』のとき、断固、帰国して抗戦に参加した理由であり、また多くの留学生が抗日派となった根本的な原因なのである。中日両国人民の利益は、いつも一致しており、その気持ちもひとつであり、最終的には仲良くなる、これが事実なのだ⁹³。「日本軍国主義に対する抗日派は日本人民に対する親日派であった」と述べ、日本軍国主義と日本人民を区分して見る姿勢を示している。

日中戦争期において、中国共産党は積極的に日本軍向けのプロパガンダ工作を展開していた。野坂参三などの日本人を利用する同時に、日本留学経験のある中国人をも積極的に利用しようとした。これらの「知日派」は、中国共産党の具体的な対日工作に影響を与えた同時に、その敵軍政策にも影響したと考えられる。その背景には、「知日派」が日本を見るときに2つの要素があると考えられる。

第1は、「知日派」たちは日本の一般庶民を好意的に見ていたことである。王学文の回想録には、16年間の日本生活で経験した感動、日本で受けた教育、日本友人と日本人の先生への愛情が溢れている。趙安博も中国の学生にとっても友好的で民族的な差別のない片山先生のことと日本人の学友と一緒に食事、寝起き、スポーツ活動を楽しんでいた日々を回想している。

第2は、日本国内にも反帝国主義勢力が存在しているとの認識である。王学文は京都大学の在学中、日本人の岩田義道などと一緒に、社会科学研究会のメンバーとして活動していた⁹⁴。張香山も日本留学期間中、小林多喜二などプロレタリア作家の作品を読む同時に、築地小劇場で上演していた日本左翼作家の劇を見ていた⁹⁵。日本国内にある日本共産党など反帝国主義的な勢力の存在は、その後の「知日派」の日本人捕虜教育と日本軍向けプロパガンダ活動へとつながった。日本国内には反帝国主義勢力が存在しているからこそ、中国における日本人の反戦同盟結成も可能だったのである。

「知日派」たちは共産党の敵軍工作政策と緊密な繋がりがある。日本軍向けのプロパガンダ工作を有効的に展開するために、戦争を起こした日本帝国主義者と一般の日本人を区分する「2分法」は、共産党の敵軍工作政策の中心的な内容となった。「知日派」らは共産党の「2分法」政策の合理性を信じ、「2分法」を遂行する勢力であった。日中戦争期において、中国民衆の間に「悪魔の日本兵」とのイメージが普遍的だったため、「武器を捨てた日本兵はわれわれの敵ではなく友だ」と言われても、一般民衆は簡単に受け入れられなかった。つまり、日本軍全般を敵視する中国の一般兵士と民衆への「2分法」浸透は

困難をともなった。「捕虜優遇」，「2分法」などの対日政策を推進する過程において，日本の一般民衆のことをよく知る「知日派」の存在は重要だった。

このような分析は，当時の日本と中国がきわめて複雑な関係にあったことを示唆する。前述したように，「知日派」日本留学経験者が中国共産党に加入した理由は，日本が共産主義思想の情報源であり，中国共産党が日本国内で彼ら留学生に働きかけをしたことにあった。また，個人の政治理念・信条や顕在化しつつあった日本の中国侵略に対する反日感情などの影響があった。したがって，ここには，一方において日本が抗日方針を取り始める中国共産党運動を直接的・間接的に支援し，他方において「知日派」日本留学経験者の好意的な日本人観が戦争を起こした日本帝国主義者と一般の日本人を区別する「2分法」と打ち出したという2面性を観察することができる。これは当時の日本と中国の関係を考える上で注目される側面である。

「知日派」の人々は，共産党の日本軍向けプロパガンダ工作，日本人捕虜教育，敵情研究などの分野で活躍していた一方で，悲惨な境遇に見舞われることもあった。特に整風運動で「日本の特務ではないか」と疑われた。たとえば，黄乃の回想によると，一時野坂の秘書をつとめ，時々野坂の通訳をしていた趙安博は，スパイの嫌疑をかけられ，強制労働と苛酷な尋問にさらされた。耐えきれず罪状を認めたが，何としても潔白を証明しようと，野坂が住んでいた家の山の斜面から，身を投げ自殺を図った事件があった⁹⁶。戦後の中国歴史を見ても，「抗日戦争」で貢献した「知日派」たちは必ずしも中国共産党に公正的に評価されたというわけではない。「知日派」の役割と遭遇をさらに追及する必要がある。

- ¹苗体君, 寔春芳「中共『一大』代表中の四位留日成員」『党史天地』, 2007年10号。
- ²「八路軍政治部關於開展日軍政治工作的指示」中国人民解放军歴史資料叢書編審委員会『八路軍文獻』, 解放军出版社, 1994年5月, 62頁。
- ³葉世昌, 丁孝智「王学文在民主革命時期的經濟思想」『江西財經大學學報』1999年3号, 68頁。
- ⁴人民中国雜誌社編『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』東方書店, 1982年9月29日, 36頁。
- ⁵北京図書館『中国当代社会科学家』(第6卷)書目文献出版社, 1982年, 45—47頁。
- ⁶前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 29頁。
- ⁷前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 152頁。
- ⁸廖盖隆, 範源『中国人名大詞典』(現任党政軍領導人物卷)上海辞書出版社, 1989年, 202頁。
- ⁹香川孝志, 前田光繁 著『八路軍の日本兵たち—延安労働学校の記録』サイマル出版会, 1984年6月, 17頁。
- ¹⁰前掲書, 『八路軍の日本兵たち—延安労働学校の記録』, 152頁。
- ¹¹張香山『回首東瀛』中共党史出版社, 2000年11月。
- ¹²前掲書『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 156頁。
- ¹³瀋殿成『中国人留学日本百年史』遼寧教育出版社, 1997年, 750頁。
- ¹⁴前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 178頁。
- ¹⁵前掲書『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 179頁。
- ¹⁶前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 185頁。
- ¹⁷河上肇 著, 林植夫 訳『資本主義経済学之歴史的発展』商務印書館, 1933年。
- ¹⁸李一氓『李一氓回憶録』人民出版社, 2001年, 252—262頁。
- ¹⁹李維賢「華僑愛国志士陳子谷」『中華魂』, 1999年12号, 13頁。
- ²⁰陳子谷「懷念林植夫同志」『革命人物』, 1985年第S1号, 37—39頁。
- ²¹朱宗漢「回憶林植夫先生」『党史資料与研究』, 1985年6号, 49—50頁。
- ²²中華名人協会等編『中国人物年鑑』(第20卷)華芸出版社, 1995年, 175頁。
- ²³新華社「李初梨逝世」『新文学史料』, 1994年3号, 220頁。
- ²⁴徐則浩『從浮屠到戰友』安徽人民出版社, 2005年7月1日, 124頁。
- ²⁵『史林』編集部「光輝的一生——李亜農同志伝略」『史林』1986年3号, 1頁。
- ²⁶姜義華, 『史魂: 上海十大史学家』上海辞書出版社, 2002年, 88—97頁。
- ²⁷前掲, 「光輝的一生——李亜農同志伝略」, 5頁。
- ²⁸劉貫一「敵軍工作談片」『新四軍回憶資料』(第一卷)解放军出版社, 1990年, 79—80頁。
- ²⁹陳修良「懷念李亜農同志」『史林』1986年第3号。
- ³⁰孫金科『日本人民的反戦闘争』北京出版社, 1996年2月, 201—202頁。
- ³¹黄達『吳玉章与中国人民大学』山西教育出版社, 1996年, 126頁。
- ³²尹高朝『毛沢東和他的二十四位老師』中央文献出版社, 2001年, 71頁。
- ³³杜草甬, 楊木『徐特立』人民出版社, 1987年, 32—33頁。
- ³⁴彼得·弗拉基米洛夫 著, 呂文鏡 等訳『延安日記』東方出版社, 2004年3月, 148—149頁。
- ³⁵毛沢東「為徐特立六十歲生日写的賀信」蔣建農『毛沢東著作版本編年紀事』(第1卷), 湖南人民出版社, 2003年, 170頁。
- ³⁶『董必武伝略』, 法律出版社, 1985年。
- ³⁷公壽姚, 汪叔子, 鄧光東『中国百年留学精英伝』(第1卷)百花洲文艺出版社, 1997年, 210—212頁。
- ³⁸中国人民政治協商会會議全国委員会文史資料研究委員会, 『文史集萃』(第5卷), 文史資料出版社, 1985年, 93頁。
- ³⁹矢吹晋 編『周恩来, 十九歳の東京日記』小学館文庫, 1999年10月, 341—342頁。
- ⁴⁰前掲書, 『周恩来, 十九歳の東京日記』, 145—147頁。
- ⁴¹エドガー・スノー, 宇佐美誠二郎訳『中国の赤い星』筑摩書房, 1964年9月, 99—100頁。
- ⁴²前掲書, 『中国の赤い星』, 113頁。
- ⁴³于青『宮崎滔天故居賞閱宝物』『人民日報』2006年11月14日, 16面。
- ⁴⁴加藤哲郎『野坂参三・毛沢東・蒋介石』往復書簡』『文藝春秋』2004年6月号, 344頁。
- ⁴⁵「早期留日学生與共產主義組織的萌発和創建」, 『神州学人』2001年2号, 5頁。
- ⁴⁶王宜田, 丁偉「中共党史上的『東京事件』」『中共党史資料』2009年第4号, 194頁。
- ⁴⁷内務省警保局保安課外事係「極秘, 中国共産党日本特別支部檢舉事件」早稲田大学中央図書館, フ1-5913-31。
- ⁴⁸前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 32—34頁。
- ⁴⁹王振中, 錦文劇, 楊春学『中国経済学百年經典』(第3卷), 広州經濟出版社, 2005年, 65頁。
- ⁵⁰王曉秋, 「中国留学生留学日本110年歴史的回顾與啓示」『留学生』2006年Z1号。
- ⁵¹「作者簡介」張香山『中日關係管窺與見証』当代世界出版社, 1998年。
- ⁵²前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 158頁。

-
- ⁵³前掲書、『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 161 頁。
- ⁵⁴前掲資料, 「極秘, 中国共産党日本特別支部検挙事件」, 47 頁。
- ⁵⁵前掲資料, 「極秘, 中国共産党日本特別支部検挙事件」, 48 頁。
- ⁵⁶前掲, 「中共史上『東京事件』」, 195 頁。
- ⁵⁷前掲書, 『日本人民的反戦闘争』, 15—17 頁。
- ⁵⁸北京図書館社会科学参考組『革命烈士伝記資料目録』(第1巻)解放軍出版社, 1986 年, 475—477 頁。
- ⁵⁹『新民主主義革命時期出版史学術討論会文集』, 中国書籍出版社, 1993 年, 248—249 頁。
- ⁶⁰水野靖夫『日本軍と戦った日本兵:一反戦兵士の手記』白石書店, 1974 年 8 月 31 日, 107 頁。
- ⁶¹前掲, 「懐念林植夫同志」『革命人物』, 37—39 頁。
- ⁶²姫田光義, 藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店, 1999 年 9 月, 198—200 頁。
- ⁶³秋山良照『西瓜と焼餅』反戦同盟記録編集委員会 編『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』日本共産党中央委員会出版部, 1963 年 9 月, 51 頁。
- ⁶⁴和田真一「生と死の岐路」, 前掲書『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』, 69 頁。
- ⁶⁵前掲書『八路軍の日本兵たち—延安労働学校の記録』, 159 頁。
- ⁶⁶前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』, 174—175 頁。
- ⁶⁷楊增培, 『梅州市志』(第3巻), 広東人民出版社, 1999 年, 2024 頁。
- ⁶⁸劉国霖, 鈴木伝三郎, 「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」, 学苑出版社, 2000 年 6 月, 38 頁。
- ⁶⁹前掲書「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」, 39 頁。
- ⁷⁰王鴻賓, 『東北人物大辞典』(第2巻, 第2部), 遼寧人民出版社, 1996 年, 1720 頁。
- ⁷¹前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』, 166—167 頁。
- ⁷²前掲書, 『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』, 66 頁。
- ⁷³毛沢東『発刊辞』『八路軍軍政雑誌』(創刊号), 1939 年 1 月 15 日出版, 5 頁。
- ⁷⁴「敵後形勢與我軍政治工作」『解放日報』1942 年 9 月 9 日, 2 面。
- ⁷⁵「岡野進同志指示留延日人, 一致参加保衛辺区, 日本共産主義者同盟举行周年記念」『解放日報』1943 年 7 月 13 日, 2 面。
- ⁷⁶「岡野進函覆各地日人反戦団体, 学習中共闘争経験」『解放日報』1943 年 7 月 21 日, 2 面。
- ⁷⁷八路軍総政治部敵工部日本問題研究会編, 『敵国彙報』1941 年第 2 巻。
- ⁷⁸「発刊詞」, 八路軍野戦政治部敵工部日本問題研究会敵偽研究社編委会『敵偽研究』1941 年第 1 期。
- ⁷⁹水谷尚子『『反日』以前:中国対日工作者たちの回想』文芸春秋, 2006 年 7 月, 113 頁。
- ⁸⁰張華「黄乃:凸点符号里的传奇」『國際人材交流』1997 年 6 号, 6 頁。
- ⁸¹総政敵偽研究室編『日本革命運動史話』新華書店, 1944 年。
- ⁸²譚政「敵人在華北的現行政策」『八路軍軍政雑誌』第 1 巻第 5 号, 12—29 頁。
- ⁸³王思華「敵軍の現状」『八路軍軍政雑誌』第 1 巻第 5 号, 51—58 頁。
- ⁸⁴王思華「戦争兩年後の日本政治経済」『八路軍軍政雑誌』第 1 巻第 6 号, 43—60 頁。
- ⁸⁵前掲書『從捕虜到戰友』, 40—41 頁。
- ⁸⁶前掲書, 「『反日』以前:中国対日工作者たちの回想」, 122 頁。
- ⁸⁷前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』, 249 頁。
- ⁸⁸周煥中 主編『特殊的戦線』武漢大学出版社, 1991 年 11 月, 27 頁。
- ⁸⁹前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 162 頁。
- ⁹⁰前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 163 頁。
- ⁹¹前掲書, 『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』, 166—167 頁。
- ⁹²前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 37 頁。
- ⁹³前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 196 頁。
- ⁹⁴前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 33 頁。
- ⁹⁵前掲書, 『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 157—158 頁。
- ⁹⁶前掲書『『反日』以前:中国対日工作者たちの回想』, 126 頁。

2.3 敵軍工作訓練隊

日中戦争期において、八路軍と新四軍の対日本軍プロパガンダ活動は、ビラ、呼びかけ、電話など、さまざまな方式で行われた。戦争初期にはプロパガンダ工作は中国語で行われたが、徐々に日本語に変わった。日本語プロパガンダの資料づくりには、日本人と日本留学経験のある八路軍幹部が当たった。実際の対日本軍プロパガンダ活動を担ったのは主に八路軍の一般兵士であったので、八路軍では、兵士に対して日本語教育を中心とした敵軍工作訓練が集中的に行われた。

八路軍向けの日本語教育の他、日本語プロパガンダ資料づくりなどの訓練活動がいつ頃から、どのような組織を通じて、どのように行われたのかは、これまで1次資料を通じて体系的に分析されていない。本節では、延安にある敵軍工作訓練隊の概況と敵軍工作訓練隊の日本語教育、前線で行われた八路軍兵士向けの日本語教育過程における事例を分析し、最初の敵軍工作の準備活動である日本語教育がどのような経緯で始まったのかを明らかにし、日中戦争期における中国共産党の敵軍工作訓練隊の活動とその特質を考察する。

2.3.1 敵軍工作訓練隊の創立

(1) 日本語教育の必要性

1937年9月の平型関の戦い¹が終わった直後、イギリス記者であるバートラム(James Bertram)の取材を受けた朱徳は、次のように八路軍兵士向けの日本語教育の必要性を指摘している。「われわれの兵士は日本語ができないので、降伏しない日本軍を宣伝によって感化することができなかったのだ。それについてわれわれは非常に不満に思っている。その後、われわれは特に捕虜に対してわれわれの政策説明に力を入れた²」と述べている。

1944年から1947年まで延安を訪問していたアメリカ軍事視察団が作成した『延安リポート』の内容は、それと一致している。平型関の戦いで、林彪将軍が第115師団に対し、捕虜を獲得する重要性や方法を指示しようと努めたにもかかわらず、肝心の敵が「兵士諸君、武器を捨てなさい」という中国語のスローガンを理解できなかったため、1兵卒も捕まえられなかった。それは、八路軍向けの日本語教育の必要性を認識させた³。平型関の戦いが終わった直後、115師団が通知を出し、将校から一般兵士まで、全員日本語スローガンを勉強するよう命令が下された。その後1937年10月に、野戦敵軍工作部が創立された直後、師団から連隊までの各部隊に対して、迅速に敵軍工作組織を完備させ、日本語の教育を行い、日本語のわかる幹部を配属し、敵軍文書の収集を強化する旨の通知が出された⁴。

1937年10月6日に八路軍総政治部が出した『八路軍総政治部が日本軍向け政治工作を展開する指示』には、日本語でプロパガンダのできる人材の育成の必要性が示されている。指示は

「宣伝隊は主要な日本語スローガンを書くこと、スローガンの呼びかけ、および簡単な日本語回答ができるようにすべきである。同時に、敵に接近したときに、日本語スローガンの呼びかけのできる人を育成しなければならない⁵」と規定している。

1939年1月15日に出版された創刊号の『八路軍軍政雑誌』には、毛沢東の「発刊辞」が掲載され、そこでは、「敵偽軍を獲得する工作は、もうすでに八路軍政治工作の3つの主要方向の1つとなっている同時に、多くの実績を収めた。しかし、兵士と幹部に対し日文日本語の教授を普遍的に実施し、各種の方法で敵軍兵士及び下級将兵向けの反侵略統一戦線の宣伝のレベルをアップさせるなどの面においては、まだ非常に不十分である⁶」と指摘されている。毛沢東自身が、八路軍一般兵士向けの日本語教育を重視していることが分かる。1939年2月15日に出版された第2号の『八路軍軍政雑誌』には、具体的な対日本軍プロパガンダ工作の手段が挙げられている。それによると、「前線における呼びかけは対敵宣伝のひとつの方式である同時に、対敵宣伝の最も良い機会でもある。敵我の間に言語の違いがあり、すべての戦士が日本語で対敵宣伝を行なうことも不可能である。なので、七句から十句程度最も重要で意味の広いスローガン(前述した対敵軍宣伝の中心内容で示したように、敵軍が動揺するとき、怖がらずにこちらに来ることを歓迎する)を選定し、皆に身につけさせ、熟練にさせ、作戦の時敵に向かって呼びかけるべきである⁷」と指摘し、一般戦士向けの日本語スローガン教育の必要性を強調している。

(2) 敵軍工作訓練隊の創立

敵軍工作が重視に伴い、1938年11月、八路軍総政治部により延安において敵軍工作訓練隊が創設された。抗日軍政大学は8つの大隊から日本留学経験のある人を集め、敵軍工作隊は結成された。敵軍工作隊は抗日軍政大学第5大隊に属し、鄧富連(鄧飛)がその隊長兼政治指導員に就任した⁸。

1931年、中華ソビエト中央革命委員会総政治部⁹の下に敵軍工作部が設立された。その後、「白軍工作部」などに改名されたが、その主な活動は国民党軍向けの「敵軍工作」だった。日中戦争に入ると、今までの国民党軍向けの「白軍工作」と違い、日本軍向けの「敵軍工作」における一番の壁は言語の違いだった。敵軍工作訓練隊の主な任務は日本語を教育することであり、「日文訓練隊」とも呼ばれた。敵軍工作訓練隊の第1期生であった劉国霖の回想録によると、「党がわれわれに与えた任務は、敵軍工作に必要な手段である日本語をきちんと勉強することだった。延安という環境において、日本語及び生産労働と政治学習は、当時の3大任務であった¹⁰。」敵軍工作訓練隊の科目の中、「70%程度は日本語などの専門訓練で、30%程度は政治訓練だった¹¹」。

共産党は、人材を敵軍工作展開させるための最も重要な要素としていたのである。1939年2月15日に出版した『八路軍軍政雑誌』では、敵軍工作訓練隊の意義として、「日本語がわかる人と敵軍工作参加希望の青年を集め、敵軍工作訓練隊を組織し、敵軍工作専門の人材を訓練する。敵軍を獲得する工作は、我々全体の戦略においては重要な部分だからである¹²」と述べて

いる。さらに、1940年6月5日、総政治部副主任である譚政が『八路軍軍政雑誌』で『敵軍工作の当面の任務』を掲載し、「この工作をうまくやるには、中心となる一環は人力の充実にある。敵軍工作部門を強化し、それぞれの敵軍工作幹部は日本語の素養があり、日本国情を了解し、虚心に研究でき、困難に満ちた工作に従事すべきだ」¹³と指摘している。

2.3.2 敵軍工作訓練隊における日本語教育と政治教育

(1) 教員と学生の構成と選出条件

敵軍工作訓練隊の主な学生は、抗日軍政大学から選出され、敵軍工作隊に送り込まれた人である。これまでの研究では、敵軍工作隊に入る条件は4つあったとされている。1、中国共産党党员または中国共産党党员になる見込みの者。2、高校卒以上の学力。3、年齢は20歳から25歳の間。4、日本語を勉強する意欲があり、敵軍向けの宣伝工作に従事する熱望を持っている者¹⁴の以上4つである。訓練隊の教員をつとめていた江右書が執筆した文章「敵軍工作訓練隊日本語教育の経験」は1940年6月に出版された『八路軍軍政雑誌』に掲載されている。それによると、「学生を選別するとき、細かい考察が必要である。つまりそれぞれの学生が以下の条件に符合しなければならない。学歴は中学校卒かそれ以上。日本語に対して興味を持っている者。頭がよくて、外向的な性格の者。言葉がはっきりしているもの。健康なもの」¹⁵との条件が挙げられている。この2つの記録の条件には多少違うところがあるが、どちらも学生の学力、特に語学に対するが学力が強調されている。そこから、敵軍工作訓練隊における日本語教育の重要性がわかるだろう。

同時に、前線の各部隊から選抜された兵士も、敵軍工作訓練隊に入隊した。1940年7月、総政治部が120師団に『総政治部が120師団宛ての敵軍工作についての指示』(給120師關於敵軍工作的指示信)を出し、「われわれは3カ月後にまた日本語訓練隊を再開するので、迅速に学生を派遣してくることを望む」との指示があった¹⁶。延安における敵軍工作の訓練活動と前線における敵軍工作活動の実践とのつながりを強化しようとする試みである。

訓練隊の学生は合わせて150名、上級クラスと普通クラスに分けて教育が実施された。日本留学経験のある人など日本語レベルの高い学生、合わせて20-40人は上級クラスに編入され、その他の人は普通クラスに入り、仮名から日本語を勉強し始めた。同時に、上級クラスの学生の中に、普通クラスの教員を務める人もいた¹⁷。第1期生であった劉国霖の回想録によると、劉国霖が在籍している初級クラスは12組に分け、1組には10人程度の生徒がいた¹⁸。したがって、上級クラスには30人程度、初級クラス(普通クラス)には120人程度と推定できる。

『八路軍軍政雑誌』には、学生を選出する条件のほか、教員の条件も記載されている。「第1に、教育工作に忠義を尽くし、相当な教育工作経験を持っているもの。第2に、相当な日本語の教養を持っている同時に、政治の面においても相当な教養を持っているもの。第3に、性格が温和で細心なもの」¹⁹との条件が挙げられている。

敵軍工作訓練隊で教員を務めているのは、日本留学経験のある中国人のほか、教育によって転向した日本人捕虜もいた。『八路軍軍政雑誌』では、転向した日本人捕虜の活用も記されている。「すでに覚醒した日本人捕虜を利用し、日本語教育を協力させることは、学生だけではなく、教員にとっても大変有意義なこととなる。なぜなら、彼らは学生に正確な発音を教えることができる同時に、日本の風習や日本軍隊の正確な状況を紹介できる。そのほか、中国人教員が解決できない問題(たとえば日本の方言など)も対応できるからである²⁰」と日本人を利用する狙いが記載されている。

1941年10月2日付の『解放日報』の記事「日本人森健が辺区参議院議員候補者に」によると、「森君は日本九州出身、27歳、鉄道労働者、1938年に八路軍に参加、同年延安に来る。敵軍工作訓練隊日本語教員を担任²¹という記載があり、森健の延安の敵軍工作訓練隊での教員経験は明らかになっている。徐則浩の考察によると、「日本語教員は、最初は朝鮮人徐輝と2人の日本人捕虜である吉積清(のち高山進に改名)と原田好夫だった。その後、前線から主任教員江右書を延安に送ってきた。江氏は日本で長年の留学経験があり、教養を身につけており、教え方もよく、学生に高く評価されていた²²」とある。

上述した徐則浩の考察には「吉積清(のち高山進に改名)」とあるが、吉積清と高山進は別人であり²³、吉積清と森健が同一人物であることが複数の記録から確認できた²⁴。たとえば、1942年8月20日から29日まで、延安工学校で開催された華北日本人民反戦団体代表大会で、在華日本人民反戦同盟華北連合会の会長は杉本一夫に選ばれ、副会長には森健、松井英男、執行委員には高山進、茂田江純、滝沢三郎、梅田照文が選出されたと『解放日報』が報じている²⁵。ここから、森健と高山進は別人であることが判明した。したがって、徐則浩の研究で「吉積清がのち高山進に改名した」とあるのは間違いである。高山進は、通称名が春田好夫、本名は川田好長である²⁶。

敵軍工作訓練隊の第1期生であった劉国霖の回想録によると、訓練隊入隊後、日本語レベルが確認され、初級クラスに編入された。日本留学経験のある人や、日本語レベルの高い人は上級クラスに、他の人は初級クラスに編入され、「アイウエオ」から勉強した。当初教員は朝鮮人の徐輝であったが、その後、日本人捕虜であった吉積清が担当した。1939年3月、日本人捕虜の春田好夫が120師団から延安に送られて、日本語を教えた。春田は吉積より若くて、発音も吉積と違い、標準語に近かった。春節の後、また前線から主任教員である江右書が送られてきた²⁷。

つまり、敵軍工作訓練隊は比較的厳しい基準に基づいて学生と教員を選出して創立されたのである。語学に強い学生が150名選出され、日本語のできる朝鮮人、日本人、日本留学の経験ある中国人が教員に選出された。

(2) 延安敵軍工作訓練隊における日本語教育の概況

訓練隊における教育は3つの学期に分けて実施された。第1学期は入門知識を教育する期間である。主な学習内容は、発音、日本語の仮名の書き方、単語、短い文などがある。この学期は

1カ月間くらいで終了する。「学生が短い文を勉強するときに、さまざまな疑問(たとえば『行かない、行きます、行く、行く人、行けば』など、なぜ動詞にはいくつかの形があるのか)が生じる。その後、第2学期に入る。」5カ月程度の第2学期は基礎知識を教育する段階である。学習する主な内容は文法、短い文、日常会話、文を作ることなどである。第3学期はある程度深い内容の教育である。教育する主な内容は長文、文学作品、学術書の読解、敵軍文書の翻訳、敵軍兵士の手紙・新聞の翻訳、短い作文、日本語でのスピーチや討論会などの形式がある。この学期は4カ月か5カ月程度がかかる²⁸。

第1期の訓練隊には、150名の学生が集められ、日本語教育が実施された。日常会話、日本語弁論大会、日本語歌などの手段を通じて日本語教育が展開された。第1期訓練班でこれらの日本語教育を受けた150名の内、65人(43.3%)が「学術書、文書及び新聞を翻訳することができ、誤りが少ない」レベルとなった。63人(43%)が「敵軍の一般的文書を翻訳することができ、誤りが比較的多い」レベルとなった。22人(14.7%)が「簡単な文章しか翻訳できない」レベルに達した。会話の面に於いても、31人(20.7%)が「普通の言葉を使い、簡単な理論的会話ができ、捕虜教育ができる」レベル、57人(38%)が「日常会話と捕虜質問のできる」レベルとなった。「簡単な会話しかできない」人は52人(34.7%)、「しゃべるのが困難だと感じる」人は10人(6.6%)いた。さらに作文の面から見ると、「極少数の人が短い作文がかける以外、ほとんどはかけない」と『八路軍軍政雑誌』が統計を出している²⁹。

会話教育の担当教員に対して、「丁寧語」の教育の重要性が強調された。「学生に完全な文と丁寧語を使う習慣を身につけさせるべきである。学生が半分の文や命令形の文を簡単に言ってしまう傾向がある。そういう言い方に慣れてしまうと、簡単に直らない。将来の工作の中、そういった口調で来たばかりの捕虜にしゃべると、反感をもたれる恐れがある³⁰。」

前述のとおり、徐則浩の考察によると、敵軍工作訓練隊は1938年11月に創立された。劉国霖の回想によると、第1期の敵軍工作訓練隊は1938年12月に正式開校し、学生は1940年4月に卒業した³¹。つまり、150名の学生が、1938年末から1940年4月にかけて、1年4カ月間の教育を受けていた。

(3)「日常生活の日本語化」の教育手段

『八路軍軍政雑誌』の記載によると、日本語教育を実施するときに、「日常生活の日本語化」は重要な手段となった。敵軍工作訓練隊の教員である江右書が論文で「日常生活の日本語化」の実施を記載している。「外国語を勉強するとき、環境は非常に重要である。たとえば日本へ行って日本語を勉強するほうが国内で勉強するよりずっと速い。われわれも日常生活の日本語化という手段で、そのような環境を作り上げる。つまり、教員職員と学生全体を動員し、特別な事故の時を除いて、起床、集まり、会議などの号令から一般会話まで、一律日本語を使うのである。しかし、実行するときに、以下の注意事項に気を使うべきである。1、日常生活の日本語化の提唱は、早すぎたはいけない。学生が簡単な日常会話ができるようになってから実施したほうがい

い。2, 実施するときは, ある程度の強制が必要である。3, 各方面の動員工作が必要である。4, 日常生活日本語化の実施で, 一部の学生が1日中口を開かない現象を防ぐべきである³²。」

「日常生活の日本語化」の教育手段は, 捕虜となった小林清の回想録『在中国的土地上』でも確認できた。「抗日軍政大学で日本語訓練隊が作られ, 日本工農学校の生徒から, 学識の高い2名が選出され訓練隊の講師を務めた。この2人の同志は厳しく日本語教育を行った。中国同志が早く日本語を身につけるため, 勉強になる授業を行うほか, 『日常生活も日本語化』しようと提案した。彼らも出来るだけ中国同志たちと一緒にいるようにし, 中国人同志の日本語勉強をサポートしていた。効果絶大で, 全く日本語が分からない中国同志たちが, 1年間余りの期間で基礎的な日本語を習得できた。これらの同志は建校5周年記念パーティーで, 彼ら自身が編成した現代劇を日本語で披露し, 高い評価を得た³³」とある。

「日常生活の日本語化」との教育手段は敵軍工作訓練隊の第1期生であった劉国霖の回想録でも確認できる。基礎的文法の教育が終わった後, 訓練隊には何回かの「日常生活の日本語化」週間が実施された。一定の時間内においては, すべての生徒の間の中国会話が禁止され, 何を言うにも日本語で言わなければいけない。言えないことがあれば, 日本人の吉積清または春田好夫に聞く, という仕組みだった。「私は時間があるときには必ず彼らのところに行って日本語会話の練習をしていた」という³⁴。

そのほかに, 日本語で物語を話したり, 日本語スピーチ会また討論会をしたり, 日本語歌, 日本語壁新聞を作ったり, 日本人捕虜を捕まえる演習などの形で, 日本語教育と敵軍工作教育を結びつけた。

(4) 敵軍工作訓練隊と政治教育

敵軍工作訓練隊では, 日本語教育は主だったが, 政治訓練も行っていた。政治訓練は政治報告と政治教学に分けている。学生を集め, 中国共産党中央指導者の演説を聞かせることはよくあった。その内容は抗日戦争の情勢, 民族統一戦線の方針と政策など様々であった。そのほか, 関連の学者を招いて, マルクスレーニン主義の理論講義も行っていた。たとえば和培元は哲学の講義を担当し, 呉允は中国現代革命史, ソ連共産党史の講義を担当し, 京都帝国大学経済学部及び大学院に留学した経験のある王学文は政治経済学を担当した。同時に, 総政治部敵軍工作部の劉型を招いて, 敵軍向けのプロパガンダ工作と敵軍工作の規律などの講義を行った。政治訓練においては, 『持久戦論』, 『新段階論』, 『矛盾論』, 『実践論』, 『ソ連共産党史』, 『レーニン主義問題論』, 『政治経済学』, 『通俗哲学講話』などの書籍は必修となっていた³⁵。

前述した通り, 「日文訓練隊」とも呼ばれる敵軍工作訓練隊のほとんどは初級クラスの生徒だった。日本語教育は訓練隊の中心であり, 政治教育は重点的に行ってはいなかった。敵軍工作訓練隊の第1期生であった劉国霖の回想録によると, 敵軍工作訓練隊を卒業すると, 劉国霖と他の10数名の同志は「八路軍軍政学院」に進んだ。「党の意図は明確的であり, われわれは日

本語ができるだけでなく、政治レベル、理論レベルも一層高めなければならないのだ³⁶」とある。

敵軍工作隊は、日本語教育と政治教育を終了し、前線における敵軍工作、日本兵捕虜の教育などのために、敵軍工作幹部となるべく養成された。



八路軍政治部編の『抗日戦士政治課本』³⁷

2.3.3 八路軍兵士向けの敵軍工作教育

中国共産党は一貫としてプロパガンダ工作を重視している。長征前後の「紅軍」時代には、毛沢東は「中国の紅軍は戦闘隊である同時に、工作隊、生産隊でもある」と述べていた³⁸。つまり、紅軍戦士はみんな戦闘員である同時に、宣伝工作員でもある。戦闘に勇敢であるだけでなく、群衆に宣伝する工作も上手でなければならないと考えていた。1936年6月から10月にかけて、初めて毛沢東取材したアメリカ記者であるスノウは、著作『中国の赤い星(Red Star Over China)』で、中国共産党の統一戦線政策について触れ、「紅軍は今すでに政治宣伝隊に変身しつつある」³⁹と指摘している。日本軍向けの敵軍工作についても同様ではなかったと考えられる。つまり、一部の敵軍工作員だけでなく、八路軍兵士全体に敵軍工作の教育を実施し、敵軍工作に協力してもらおうと考えた。

1944年に延安取材したアメリカ記者であるホワイトは、次のように記録している。前線戦区は自立していて、延安からの補給はない。延安から各前線に送り込まれるのは、思想を伝達できる「幹部」だけである⁴⁰。敵軍工作訓練隊の第1期生であった劉国霖の回想録によると、1941年5月に、「前線にも更なる多くの敵軍工作幹部を育成するために、日本語訓練隊を開くこととなった。そのため、私は前線の野戦政治部に派遣され、日本語教育工作に従事し始めた⁴¹」と述べている。1940年冬のときに新四軍第4師団の敵軍工作部長を勤めた劉貫一の回想によると、延安で育てられた敵軍工作幹部は各前線に派遣され、活躍していた。当時の新四軍第4師団の敵軍工作部だけでは、延安敵軍工作訓練班から卒業して派遣されて来た者は、張文華、劉滔、趙彤、呂風翔、呉振中、史華の計6名であった。彼らはみんな敵軍工作の中核となった⁴²。



八路軍政治部編の『抗戦日語読本』⁴³

(1) 日本語幹事による日本語教育

前述した通り、延安にある敵軍工作訓練隊で育てられた敵軍工作幹部は前線に派遣され、各部隊の敵軍工作や八路軍兵士向けの日本語教育に従事した。1940年7月25日に出版した『八路軍軍政雑誌』には、八路軍総政治部が出した『総政治部が120師団宛ての敵軍工作についての指示』(給120師団關於敵軍工作的指示信)が掲載された。この「指示信」によると、「われわれはすでに、敵軍工作訓練隊の卒業生の一部をあなたたちのところに派遣した。幹部の教育訓練に関しては、われわれは今まさに工作大綱、工作便覧及び日本語教材を作っているところで、期間まで完成する⁴⁴」とされている。前線に派遣された敵軍訓練隊の卒業生は、各部隊で日本軍向けの敵軍工作や八路軍向けの日本語教育に従事した。

日本語訓練隊は、各地の八路軍師団のために敵軍工作員の養成に当たった。前述した通り、1940年7月総政治部が120師団宛てに敵軍工作についての指示を出し、日文訓練隊の再開に向け、学生の派遣を要請した。八路軍、新四軍の各師団から旅団まで、それぞれ短期日本語訓練班が開かれ、日本語の呼びかけ訓練がおこなわれた。「一般戦士は3、4句のスローガンができ、中隊敵軍工作組は7、8句ができるようになり、いくつかの日本語歌曲も歌えるようになった。主力部隊の状況はそれを上回っている⁴⁵」との記録がある。敵軍工作訓練隊は継続的に、前線の部隊と連動させながら訓練を進めた。

延安だけではなく、前線にある各部隊においても、敵軍工作訓練班が作られたことは次の記録でわかる。1941年3月に出版された『敵我在宣伝戦線上』は、そのときまでの中国共産党の軍隊の対敵・偽軍プロパガンダ工作进行を系統的に記録している。それによると、前線部隊において、最初に敵軍工作訓練班を作ったのは129師団の政治部であった。その後、115師団、120師団、野戦政治部および冀察晋軍区がそれぞれ訓練班を作った。延安の敵軍工作訓練隊が作られた以前にすでに各前線部隊において敵軍工作の訓練工作が開始されていた。1938年末まで、全軍において20以上の敵軍工作訓練班を行い、600人以上の敵軍工作幹部を養成したとされている⁴⁶。

訓練班の主な科目は日本語、敵軍工作、部隊政治工作、軍事常識などがあり、中でも日本語

は一番中心となっている⁴⁷。

『敵我在宣伝戦線上』には、八路軍兵士向けの具体的な日本語教育過程が記録されている。1937年9月の平型関戦闘以後、八路軍では、日本語スローガンの教育が始まった。きっかけは、1937年10月の広陽戦闘で、「幹部が日本語スローガンの呼びかけで、意外に何名かの日本兵が投降してきた。この事実、日本語スローガンを勉強するブームが巻き起こった⁴⁸」ことによる。

『敵我在宣伝戦線上』の記載によると、115師団がとった教育手段は、各中隊の文化教員を召集し、日本語スローガンを教える。これらの文化教員は、各中隊に戻り、兵士に教えるという形であった。

120師団は違う手段をとっていた。120師団では、各分隊からまず1人を選出し大隊また中隊に送り込んで日本語スローガンを勉強させる。1, 2句を身につけたらすぐ各分隊に戻らせ、兵士みんなに教える。次には前回と違う者を大隊や中隊に送り日本語スローガンを勉強させる。徐々に兵士のみんなに何句ものスローガンを身につけさせた。

捕虜を利用して日本語スローガンと日本語歌を八路軍兵士に教える部隊もある。また行軍の休憩時間や、駐屯するとき朝晩の点呼のときを利用し、敵軍工作組の人または教員が日本語スローガンの復習を指導する手法も取られていた。その他、遊戯のときに全員一緒に大きな声で叫んだり、あるいは2つの組に分けて相手を日本軍だと想像して呼びかける形で日本語スローガンを練習する部隊もあった⁴⁹。

これらの工夫で、一般兵士は3句の日本語スローガンを発音し呼びかけることができるようになった。中隊の工作組になると、7, 8句の日本語スローガンと3曲の日本語歌を身につけることができた。

『敵我在宣伝戦線上』によると、部隊では115師団6連隊の日本語教育制度が最も優れていたと言われている。その制度は次のように記載されている。

115 師団6連隊の日本語教育制度：

- (A)一般兵士に対する教育。毎週土曜日の文化科目の時間を利用し、文化教員が日本語スローガンを教えると規定している。
- (B)工作組に対する教育。毎週大隊本部に呼び、3回の授業を行う。その内2回は日本語の授業で、1回は敵軍工作の授業である。実習幹部が教える。
- (C)中隊の文化教員と副指導員に対する教育。毎週大隊本部で2回受講する。教材は『日語速成教材』で、実習幹事が教える。
- (D)中隊幹部に対する教育。毎週大隊本部で1回受講する。実習幹事が教える。
- (E)大隊本部の実習幹事に対する教育。毎週1回連隊で受講する。教材は『捕虜を勝ち取る会話』(争取捕虜対話)である。連隊の敵軍工作股の日本語幹事が教える。
- (F)連隊政治処にある各股の幹事に対する教育。毎朝敵軍工作股で受講する。敵軍工作股の日

本語幹事が教える⁵⁰。

この資料から見ると、連隊政治処の敵軍工作股の日本語幹事→連隊政治処の各股幹事→大隊本部の実習幹事→中隊幹部(文化教員また副指導員)→工作組→一般兵士という流れで八路軍全体の日本語教育を展開させた。

129師団の日本語教育は、上記の115師団と一致している。八路軍129師団政治部敵軍工作科長につとめていた盧耀武と劉国霖の回想によると、中国語で日本兵向けの呼びかけ工作の失敗事件から、129師団は、一般兵士向けの呼びかけ訓練を実施した。呼びかけるスローガンは、「武器を差し出したら殺さない」「捕虜を優待する」「日本軍閥を打倒しよう」などがあつた。具体的な教育工作は次の通りである。

まず各中隊から3-5名の兵士を選出し、連隊の政治処で1週間くらいの集中訓練を受けさせる。この3-5名を選出する基準は、ある程度の教育を受けたこと、頭脳明晰であること、発音がはっきりしていることであつた。連隊政治処の集中訓練の内容は、敵軍を瓦解する意義、政策と工作を展開する方法のほか、日本語の呼びかけもあつた。訓練を受けた兵士は中隊に戻り、敵軍工作組を作る。中隊の兵士全員が日本語の呼びかけを習得できるように教育を実施する。この他、敵軍工作幹部は直接各中隊に行つて視察し、現地で日本語の補修を行う。このような日本語での呼びかけ訓練は、日中戦争が終わるまで続いた。「半世紀がたった今日でも、当時の兵士や幹部らは、まだ当時練習していた日本語の呼びかけを覚えている⁵¹。」

では、連隊政治処の敵軍工作股の日本語幹事はどこから日本語を習うのか。『敵我在宣伝戦線上』の記録によると、総政治部は6中全会開催後、敵軍訓練隊を創立し、150名の敵軍工作幹部を育成した。これらの幹部は敵軍の資料の翻訳や捕虜の訊問のできる幹部であり、その中の一部は宣伝ビラなどを作るために捕虜を訓練することもできる。これらの150名の幹部の内、半数は前線に派遣し、工作任務に当たらせる。⁵²

徐則浩の『従捕虜到战友』によると、1940年5月、総政治部敵軍工作訓練隊で1年以上の訓練を経て卒業した150人の内、50人程度が延安の軍委2局、軍政学院、総政治部敵軍工作部などに残つて工作活動を行つた。ほかの他の100人程度は華中、華北の前方部隊に送り込まれた⁵³。この2つの資料の記録は多少違うところがあるが、敵軍工作訓練隊の教育を受けた者を大量に前線に送り、敵軍工作に従事させたことがわかるだろう。これらの記録から見ると、延安の総政治部の敵軍訓練隊が育成した敵軍工作幹部の半数また半数以上は前線に送られた。これらの幹部は、各部隊の日本語幹事向けの日本語教育と敵軍工作の訓練に従事したと考えられる。

敵軍工作訓練隊の第1期生であつた劉国霖は延安から前線の野戦政治部が駐在している麻田村に派遣され、前線における八路軍の一般兵士向けの日本語教育に従事した。劉国霖はいつも覚醒連盟の同志と一緒に主力部隊である129師団385旅団に行つて日本語スローガンの教育を実施していた。「日本の兵隊さん！捕虜を殺さない。優待する。武器を棄てろ！止まれ！手を挙げよ！」などのスローガンを、中隊と小隊の幹部及び一部の一般兵士が身につけるようにな

った⁵⁴。

1941年6月30日付の『解放日報』には、晋察冀地区における八路軍向けの日本語教育についての記載がある。それによると、八路軍の中では、よく八路軍兵士が歌う日本語歌が聞こえる。しかし、3カ月前まで、彼らはまだ何も分からない農民だった。八路軍で彼らは日本語の仮名だけでなく、日本語の呼びかけ用語と日本語の歌も歌えるようになったとある⁵⁵。

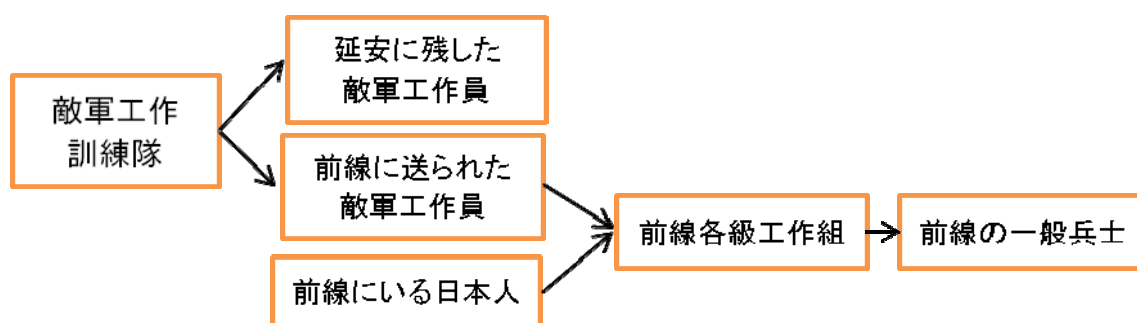
(2) 日本人による日本語教育

前線における八路軍の日本語教育においても、日本人の協力を得て実行させた部分の多くある。共産党の敵軍工作に協力した日本人の原清子は1937年末、山西省晋城にあった華北幹部訓練班に日本語教師として赴任し、2カ月間日本語を教えていた。華北幹部訓練班はのちに華北軍政幹部学校に改称された。訓練班の卒業生は八路軍などに配属された⁵⁶。1938年3月のとき、原清子は八路軍の地方部隊である晋豫辺遊撃隊の敵軍工作科長を務めたことがある。原清子の回想によると、前線で日本兵に呼びかけるための簡単な日本語会話を、友軍兵士たちに教えるのが主な仕事であった。たとえば、司令官の唐天際が「捕虜優待」「打倒日本帝国主義」などのスローガンを書き示し、日本語で清子が発音し、それを聞いて日本語の音に近い中国語をあててルビをふったメモを作らせ、前線の兵士に携帯させたのである。日本軍への呼びかけ工作は、捕虜が増えてくと元日本兵が行なうようになったのだが、戦争が始まったばかりの頃は中国兵がつかない日本語で呼びかけていた⁵⁷。その具体例についての記述は発見されていないが、長年にわたって総政治部敵軍工作部部長を務めた王学文の日本留学生活(1910～1927)についての回想によると、日本に来たばかりの中国人留学生は「タマゴ」という単語を知らなかったが、日本語の「タマゴ」は中国語の「他罵我」(タマウオ)の発音に近いので、彼は得意になって「他罵我」(彼は私を罵る)という覚えやすい中国語でタマゴという日本語に置きかえて覚えた⁵⁸。全く日本語の基礎のない中国兵士向けの日本語教育を考察するさい、敵軍工作部で活躍していた人々の日本留学経験は参考になったと思われる。

日本人捕虜を通じての日本語教育も多くの資料で確認できる。捕虜となった日本人兵士の水野靖夫の回想録『日本軍と戦った日本兵』では、中国兵士に日本語を教えたという記述がある。「正月も半ばすぎたころ、突然、兵隊に日本語を教えてくれという話が私たちのところにまいこんできた。」「翌日、私たちははじめて白さんと日本語教育の具体計画について論じあった。期間は1カ月とのことであった。目的は、日本軍と日本の居留民に対する呼びかけが中心であった。私はそれがすぐのみこめなかった。本気であなたたちは日本軍に呼びかける気なのかと念を押すと、白さんはキッパリと『それ以外に目的はない』といいきった。」「水野は結局「納得することはできなかった。しかし、やむをえなかった。私たちはいくつかの言葉をえらんで、2～30種のスローガンをつくりあげた。50音の一覧表と合わせて、5、6頁の冊子ができた。早速、翌日から小学校の教室をかりて授業をはじめることになった⁵⁹」と当時を回想している。同氏はその後、抗日軍政大学第4分校に配置され、八路軍向けの日本語教育に従事した。そこでのことを「軍政大学の

学生たちは、ほとんど 20 代の青年たちばかりで、いずれも全国各地から志願して来た者ばかりであった。彼らはここで1年半の期間、それぞれ軍事と行政の専門を学んで、新たな任務をまかされ、また各地に散っていった。」「私はここで、片仮名、平仮名の 50 音と、簡単な日常会話、前線での呼びかけ、壁にかくスローガンなどを教えた。日本人の生活習慣、暮らしぶりなどについても知るかぎりのことを教えた。農民兵の場合とはちがって、さすがによりすぐりの学生ばかりであった。彼らは、私の教えを、砂が水を吸うように吸収していった。私の授業は、毎週1回3時間で、終業期間は一応3カ月であった。ここで私が教えた 500 人の青年男女が、その後どのようになったか、私は知らない。しかし、おそらく戦中戦後にかけて、中国革命の成功に大きな役割を果たしていったのではないかと信じている⁶⁰」と記録している。

延安の敵軍工作訓練隊および前線の 115 師団で行われた日本語教育を考察した。延安で集中して日本語教育を受けた工作員たちは、どういう流れで習得した日本語を前線の兵士にどのような流れで教えたかについては次のようにまとめることができる。



八路軍に対する日本語教育の流れ

本節では、1938 年 11 月に創立され、12 月に開講された第1期の敵軍工作訓練隊を中心に、各部隊における八路軍兵士向けの日本語教育と政治教育を考察した。以上の分析から、日本語教育の特質は次の3点にまとめられる。

第1は、日本語教育の目的である。敵軍工作の目的は、日本軍を瓦解させることである。陝西省档案馆で発見した『抗戦日語読本』の内容のほとんどは、捕虜を獲得するための日本語だった。日本語教育の目的は、まさに日本人捕虜を獲得し、日本軍兵士の厭戦気分を増長させることであった。1937 年 12 月 25 日、毛沢東は『イギリス記者バートラムとの談話』で、政治工作の「3大原則」を始めて公表し、官兵一致の原則、軍民一致の原則、敵軍瓦解と捕虜優待原則を「政治工作3大原則」としてまとめた⁶¹。敵軍工作隊での日本語訓練と政治訓練は、その後の日本軍向けのプロパガンダ工作においては欠かせない準備工作となり、各部隊において、多くの敵軍工作幹部が養成された。八路軍の一般兵士向けの日本語教育と敵軍工作訓練は、プロパガンダを通じて日本軍を瓦解させるという中国共産党の敵軍工作思想を一般兵士に浸透させる一環となった。

第2は、系統的な日本語教育である。日中戦争期における中国共産党の敵軍工作訓練は、延安および前線各地で系統的、組織的に行われた。第1期の敵軍工作訓練隊は1938年12月から1940年4月まで延安で正式に行われた。訓練内容の7割は日本語教育で、3割は政治訓練だった。卒業した150人の内、10数人は八路軍軍政学院に進み、より高いレベルの政治訓練を受けた。150人の半数程度は、前線に送られ、各部隊の敵軍工作訓練、特に日本語訓練をつとめた。前線各部隊において、延安の敵軍工作訓練隊で訓練を受けた敵軍工作幹部が各部隊に送り込まれ、連隊の軍工作組織の日本語幹事を養成し、そこから大隊実習幹部→中隊幹部→一般兵士の順に日本語教育が浸透していったのである。同時に、前線の抗日軍政大学分校などにおいても、日本人捕虜などを利用し、将校や一般兵士向けの日本語教育が展開された。

第3は、日本語教育の効果が重視されたことである。当時の中国共産党は、まだ物質的にも人材的にも欠乏していたが、八路軍向けの日本語教育はある程度の科学性を持って行われた。延安や前線で行われた日本語教育の教員と学生は厳しい基準に基づき選出された。抗日軍政大学などから選出された150名の学生の中、120名程度は初級クラスで基礎から日本語を勉強し始め、30名程度は上級クラスで高等の日本語教育を受けた。訓練隊の教員には、朝鮮人の徐輝、日本人の森健(吉積清)と高山進(春田好夫)、中国人の江右書などがいた。上級クラスの学生は、初級クラスの学生に日本語を教えたこともあった。日本語講義、「生活日本語化」などの形を通じて、4割以上の者が「理論的文章、敵軍文書および新聞を翻訳できる」という高いレベルになった。

これらの工夫で、八路軍の一般兵士は、3句程度の日本語スローガンを発音し呼びかけることができ、中隊の工作人員は7、8句の日本語スローガンと3曲の日本語歌ができるようになった。これらの工作は、その後の八路軍の敵軍工作に対してきわめて大きな影響を及ぼした。八路軍兵士向けの日本語教育が実施されてはじめて、八路軍兵士を通じての対日本軍プロパガンダ工作は可能となったのである。

敵軍工作訓練隊は1940年に廃止され、総政治部敵軍工作訓練部の直轄下に新たに「敵軍工作幹部学校」が設立された⁶²。

- ¹八路軍第115師は山西省平型関で、旧日本軍第5師団第21旅団の一部部隊との激戦を繰り広げた戦闘。
- ²バートラム (James Bertram) 著、林淡秋等訳『華北前線』新華出版社、1986年7月、168頁。
- ³山本武利編訳『延安リポート—アメリカ戦時情報局の対日軍事工作』岩波書店、2006年2月、641頁。
- ⁴『敵我在宣伝戦線上』陝西省档案館、3018-11-3-23、211頁。
- ⁵「八路軍政治部關於開展日軍政治工作的指示」中国人民解放軍歴史資料従書編審委員会『八路軍文献』解放軍出版社、1994年5月、61-62頁。
- ⁶毛沢東「発刊辞」『八路軍軍政雑誌』(創刊号)、1939年1月15日出版、5頁。
- ⁷蕭向荣「部隊中の宣伝鼓動工作」『八路軍軍政雑誌』第2号、1939年2月15日、33頁。
- ⁸徐則浩『從捕虜到戰友』安徽人民出版社2005年7月、36頁。
- ⁹中共中央軍事委員会総政治部は1930年に作られ、1931年に中華ソビエト中央革命軍事委員会に改名された。さらに1937年8月から中共中央軍事委員会総政治部に改名され、対外には「八路軍総政治部」との名義が使われた。
- ¹⁰劉国霖、鈴木伝三郎『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』学苑出版社、2000年6月、21頁。
- ¹¹前掲書『從捕虜到戰友』37頁。
- ¹²許光達「抗大最近的動向」『八路軍軍政雑誌』1939年2月15日、第2期、102頁。
- ¹³『八路軍軍政雑誌』第2卷、第6期。
- ¹⁴前掲書『從捕虜到戰友』36頁。
- ¹⁵江右書「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」、十八集團軍政治部出版：『八路軍軍政雑誌』第2卷、第6期、1940年6月、73頁。
- ¹⁶「給120師関与敵軍工作的指示信」『八路軍軍政雑誌』第2卷、1940年7月25日、第7期、115頁。
- ¹⁷前掲書『從捕虜到戰友』37頁。
- ¹⁸前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』18頁。
- ¹⁹前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」73頁。
- ²⁰前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」73頁。
- ²¹「日人森健、当選辺区参議員候選人」『解放日報』1941年10月2日、4面。
- ²²前掲書『從捕虜到戰友』37頁。
- ²³たとえば、『反戦兵士物語：在華日本人反戦同盟員の記録』(反戦同盟記録編集委員会編、日本共産党中央委員会出版部、1963年9月)には森健と高山進両方の回想録がある。1940年7月7日に結成された反戦同盟延安支部のメンバーには、森健、高山進などの名前がいた(王庭岳『在華日人反戦運動史略』河南人民出版社、1989年、77頁)。
- ²⁴前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』187頁。香川孝志、前田光繁著、趙安博、吳從勇訳『八路軍内日本兵』解放軍出版社、1985年7月、75頁。
- ²⁵「華北士兵代表大会反戦団体大会昨日勝利閉幕、最後通過綱領及会章、成立反戦同盟統一機構」『解放日報』1942年8月30日、1面。
- ²⁶姫田光義、藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店、1999年9月18日、153頁。水谷尚子『「反日」以前：中国対日工作者たちの回想』文芸春秋、2006年7月30日、47頁。
- ²⁷前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』17-18頁。
- ²⁸前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」74頁。
- ²⁹前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」74頁。
- ³⁰前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」76-77頁。
- ³¹前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』18-23頁。
- ³²前掲「敵軍工作訓練隊日文教育的一些經驗」78頁。
- ³³小林清『一個「日本八路」的自述 在中国的土地上』解放軍出版社、1985年8月、105頁。
- ³⁴前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』22頁。
- ³⁵前掲書『從捕虜到戰友』38頁。
- ³⁶前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』24頁。
- ³⁷陝西省档案館、2028-8-11-53
- ³⁸毛沢東「關於糾正党內的錯誤思想」(1929年12月)『毛沢東選集』第2版第1卷、86頁。
- ³⁹埃德加・斯诺 著、董乐山 訳『西行漫記』三聯書店出版、1979年12月、304頁。
- ⁴⁰白修德 著、馬清槐 方生 訳『探索歷史』三聯書店、1987年12月、168頁。
- ⁴¹前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』26頁。
- ⁴²劉貫一「敵軍工作談片」『新四軍回憶資料(1)』、解放軍出版社、1990年、79頁。
- ⁴³陝西省档案館、2291-8-14-105
- ⁴⁴前掲「給120師関与敵軍工作的指示信」115頁。

-
- ⁴⁵姜思毅『中国共産党軍隊政治工作七十年史(2)』, 解放軍出版社, 1991年, 239頁。
- ⁴⁶前掲書『敵我在宣伝戦線上』211頁。
- ⁴⁷前掲書『敵我在宣伝戦線上』212頁。
- ⁴⁸前掲書『敵我在宣伝戦線上』214頁。
- ⁴⁹前掲書『敵我在宣伝戦線上』214頁。
- ⁵⁰前掲書『敵我在宣伝戦線上』215頁。
- ⁵¹盧耀武, 劉国霖「129師的敵軍工作」『八路軍回憶史料(3)』解放軍出版社, 1991年9月, 93—94頁。
- ⁵²前掲書『敵我在宣伝戦線上』222頁。
- ⁵³前掲書『從捕虜到战友』35頁。
- ⁵⁴前掲書『一個「老八路」和日本捕虜的回憶』56頁。
- ⁵⁵「敵軍工作在晋察冀」『解放日報』1941年6月30日2面。
- ⁵⁶前掲書『「反日」以前: 中国対日工作者たちの回想』28-29頁。
- ⁵⁷前掲書『「反日」以前: 中国対日工作者たちの回想』30頁。
- ⁵⁸王学文「河上肇先生に師事して」人民中国雜誌社編『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』東方書店, 1982年9月29日, 26頁。
- ⁵⁹水野靖夫『日本軍と戦った日本兵: 一反戦兵士の手記』白石書店, 1974年8月31日, 92—93頁。
- ⁶⁰前掲『日本軍と戦った日本兵: 一反戦兵士の手記』, 100-104頁。
- ⁶¹郭化若『中国人民解放軍軍史大辞典』吉林人民出版社, 1993年, 1276頁。
- ⁶²前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』, 247頁。

第3章 共産党の捕虜政策とその原点

3.1 中国共産党の捕虜政策

3.1.1 土地革命期の対国民党捕虜政策:「対敵2分法」の原点

1924年から1927年までの間に、中国共産党と国民党の間に国共合作の関係が成立した。1927年8月1日、中国共産党は江西省南昌での武装蜂起によって初めて自らの軍隊を持ったことから、中国では8月1日は「建軍記念日」とされている。1927年から1937年までの10年間は「土地革命期」と言い、この期間、中国共産党の紅軍と国民党部隊の間に長年にわたって戦いが続いた。国民党部隊の捕虜に対する政策は、その後の日中戦争期における日本人捕虜に対する政策と関連しているかは、ここで考察する。

共産党指導者は、これまで一貫して軍隊政治工作を重視してきた。敵軍の一般兵士とその政府や軍閥などと区別し、捕虜兵士を利用するため捕虜を優遇する思想は、早い時期にすでに形成されていた。南昌での武装蜂起から半年も経っていない1928年1月に、共産党の労農革命軍が、江西省の寧岡県を攻略し、多くの捕虜を確保したのを契機に、当時の共産党指導者は、捕虜の扱いに関し、以下のように定めた。1、捕虜を扱うとき、殴らない、罵らない、殺さない、虐待しない、差別しない、所持品を没収しない、生活面では我が労農革命軍の将兵と同様の待遇をあたえる。2、彼らに対して革命教育を行う。戻るか、残るかは本人の意思に任せる。3、捕虜の中に傷病兵がいれば治療を施す¹。

1928年当時、多くの紅軍の兵士は、国民党の共産党排除政策に恨みを抱いていたため、捕虜を厚遇する政策には、大きな抵抗があった。従来通り「目には目を、歯には歯を」というような対抗措置を取る部隊も少なくなかった。これに対し、毛沢東は「恨みを晴らすのであれば、それは彼らに対してではない。白軍兵士の大多数は、労働者、農民の子弟で、彼らを殺しても、地主や土豪劣紳らはすぐに又、新たな者を確保する。結局苦しめられるのは、貧しい民衆である」と説いた。さらに毛沢東は、「彼らを釈放して、私たちのために宣伝させるべきだ」とも述べている²。

中国共産党の早期戦略において、対敵宣伝は捕虜政策と緊密に関連している。毛沢東は1928年11月に『井岡山の闘争』の中で、「敵軍に対する宣伝で最も有効な方法は、捕虜を釈放することと、負傷兵を治療することである。敵軍の将兵を捕虜にしたら、すぐに彼らに宣伝活動を行うべきだ。戻りたいと希望するものと、残りたいと希望する者とを分け、戻りたい者には旅費を支給し釈放する。これによって、敵が吹聴している『共匪(共産党)は、人と見れば殺す』という流言飛語を直ちに打ち破ることができる」と述べている³。

1929年の『紅軍布告』には「敵軍将兵の帰順は認め、今までの行為は問わない⁴」と規定して

いる。さらに、1929年12月に毛沢東はまた『紅軍の宣伝活動の問題』の中で、捕虜政策を対敵宣伝に関連付けて論じている。「白軍兵士および下級将校向けの宣伝は非常に重要である」「捕虜またその郵便物から敵軍将兵の姓名及び部隊番号を調べ、宣伝物または手紙を送るべきだ。」「敵の捕虜兵士を優遇することは、対敵宣伝においては極めて有効な方法である。」と述べた。さらに捕虜政策の重要事項を4点挙げた。第1に、所持品を取り調べる身体検査をしない。今まで捕虜の所持品を取り調べる行為を断固して禁ずる。第2に、親切に捕虜を歓迎し、精神的に不快な感じを持たせない。捕虜に対して言語上・行動上の一切の侮辱を禁ずる。第3に、捕虜に対して、常連兵と同様な物質待遇を与える。第4に、残りたくない者に対して、宣伝を与えた後に、旅費を与えて釈放する。白軍の中で紅軍の影響力を及ぼしてもらう。兵士の員数確保のために無理矢理残す行為を禁ずる⁵。

上記の事柄から毛沢東は早い時期にすでに俘虜を優遇する政策をとっていたことと、俘虜を優遇する政策が強い対敵宣伝の意図を持ち、対敵宣伝政策の一環となっていたことが分かる。

土地革命期前の1929年7月31日、周恩来は、省港同盟罷業労働者第6回代表会議で『労農兵士を連合させ、帝国主義を打倒せよ』という政治報告の中で以下のように述べている。「強奪をほしいままにする兵士や強盗は、確かに憎い、しかし、彼らには、私たち労農階層と同じ苦しみがある。私たちは、彼らに同情して救ってあげる責任がある。救う唯一の方法は、帝国主義者や軍閥に利用されている彼らを、革命の方向に転向させ、我々と同じ敵に向かわせることだ⁶。」周恩来のこの講話からは、共産党の「階級意識」が見て取れる。これらの思想と方針には、日中戦争時における中国共産党の捕虜政策との深いかわりがある。土地革命期の捕虜政策は、まさに日中戦争期における対日「2分法」政策の原点であったと言える。

敵軍の政府や軍閥と一般兵士を区別する「2分法」はその後、「捕虜優遇政策」として、敵軍の戦意を喪失させる手段となった。1929年12月の古田会談の決議では、敵軍に対する宣伝活動の強化と、捕虜を寛大に扱う政策が確認された。古田会議決議の「中国共産党紅軍第四軍第九次代表大会議案」で、毛沢東は敵軍工作について、「敵の捕虜兵士を優遇することは、対敵宣伝においては極めて有効な方法である」と具体的なやり方も述べた。「第1に、捕虜のお金や所持品を取り調べることを禁ずる。第2に、捕虜兵士を大いに歓迎し、精神的に安定させる。捕虜兵士に対する言語的、行動的な侮辱を一切禁ずる。第3に、捕虜兵士に対して、紅軍兵士と同等の物的待遇を与える。第4に、残りたくない捕虜に対して、宣伝工作を終えた後、旅費を与え帰らせる。白軍で紅軍の影響力がおよぶように仕向ける。兵士員数を増やすために、残りたくない捕虜を無理に残らせることを禁ずる⁷。」

1930年9月25日、紅軍第一方面軍総政治部が公布した『紅軍兵士会規定』において、有名な「三大紀律、八項注意」が制定され、「敵軍兵士の所持品を取り調べない」ことが明確に定められた⁸。1935年の遵義会議では、毛沢東の党における地位が確固なものとなった。1935年11月、紅軍が陝北(陝西省北部)の延安に到着した後、紅軍の総司令部により捕虜政策が詳しく策定され、中国労農紅軍総司令官朱徳から、以下の6項目が発布された。1、紅軍に投降してきた

敵は、将校か兵卒かを問わず、一切殺害してはならず、むしろ厚遇する。2、紅軍への入隊を望む者はすべて入隊させる。3、戻りたい者には旅費を支給する。4、敵軍の傷病兵には治療を施す。5、敵軍の武器を持参して投降する者には、報奨金を与える。6、売国奴の高級官吏を殺して投降する者は抜擢する⁹。

賀龍が率いる鄂西特委が1930年5月に中央宛の電報で捕虜政策についての考えを示した。「今までの戦いでは、多くの農民兵士が参加している。我々の兵士の多くは農民出身である。彼らは常練隊(現地の土匪部隊)に対して恨み骨髄であるため、捕まえたすべて殺すのが当然だった。それにより、相手は殺されても投降しなくなり、我々はそれまで今までの方式が間違っていたことを気づいた。その後兵士を優待する方法を決めた。第1に、武器を持って自発的に投降してきた人に10元のを奨励金を支給する。帰りたいたいに旅費を与える。第2に、前線で捕虜となった者に5元を支給し、もし帰りたいたいならば3元を支給する。それ以来、敵兵は非常に動揺し始め、江、公、石各県の常練隊は瓦解する情勢である¹⁰。」

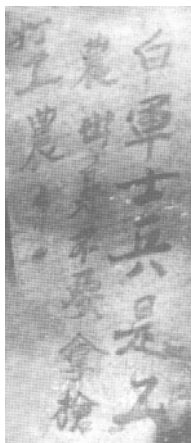
戦局の拡大につれ、捕虜の増加を背景に、1931年3月20日に『通例』が発表され、「捕虜が通過する地区の政府は捕虜を優遇し、豚を殺し食べさせる¹¹」とされている。捕虜教育は、3つのステップに分けて行われた。第1、審査を行う。それぞれの出身、家族状況、政治思想、技術などを詳しく調べる。第2に、政治教育を行う。討論クラス、個別談話などの方式を通じて、その階級覚醒を高める。第3に、それぞれの状況に基づいて処理する。年配や体の弱い人に旅費を与え実家に帰らせる。若くて体力のある者は紅軍に入隊させる。「それは紅軍兵力増強のための主要な供給源となった¹²。」

捕虜を厚遇するとともに、その政策を敵軍に宣伝し、敵軍兵士の戦意を喪失させ、厭戦感を醸成する戦略は、1935年に公布された周恩来の『白軍に報奨金を支給する規定』にも示されている。「自らの武器を差し出して、釈放された者には、2元を支給し、紅軍に入隊した場合は、更に1元を支給する。敵軍の武器を持参して投降した者には5元を与え、紅軍に入隊すれば更に3元を支給する¹³。」このように捕虜を厚遇する政策は一貫して行われた。戦局の進展と共産党の党勢拡大により、捕虜政策は次第に確立していった。

日中戦争期においても、中国共産党は中国国内の「反共派」の捕虜に対して「不殺政策」を実施していた。1940年10月18日に中共中央書記処から指示が出され、国内の反共派が送り込んできた将校、探偵工作員、特務工作員などがいかに反動的で極悪非道であっても、原則的には一律殺してはいけない。「この政策は反共派を孤立させ、瓦解させるにはもっともよい方法である」と強調している¹⁴。

中国共産党の捕虜政策自体は、そのプロパガンダ工作の一環であり、統一戦線工作と併せて総合的に行われた。中国の共産党支配地区に初めて入り、毛沢東、周恩来などと6カ月間生活をともにして、中国共産党の実体を世界に紹介したスノーによると、中国共産党の軍隊は張学良の東北軍に向けて、「中国人を殺すな、われわれと共に祖国を取り戻そう」などのスローガンを通じて、プロパガンダ活動を積極的に行い、東北軍の士気を急速に減退させた。同時に、国民党

軍の捕虜に対しても、捕虜優遇政策を一貫した。紅軍が重要な戦闘に勝利し、東北軍の将軍を逮捕すると、客人のようにかれらを扱った。毛沢東と周恩来は数日かかって、彼らは真に平和を欲し、日本に対抗するための統一戦争を結成したいのだと説得した。そして周恩来は捕虜にした将校と兵隊のほとんどを彼らの前哨戦まで案内して連れ戻したのである。スノーによると、このような戦術は奇跡なような効果を生んだ。「説得」された東北軍の将校たちは彼らの体験のすべてを張学良に報告し、張は紅軍の使者を西安に招き、懇談した¹⁵。



紅軍が井岡山の新城の農家の壁に書いたスローガン:

「白軍兵士は労農出身なので、銃で労農を撃たない¹⁶！」

共産党の「2分法」政策は、その階級意識と深く関連している。分析したとおり、敵軍の一般兵士と政府・軍閥などの支配者を区分する「2分法」は 1920 年代の土地革命期にはすでに形成していた。共産党は、敵軍の一般兵士のほとんどは労農の出身であると主張している同時に、共産党がまさに労農階級の代弁者であると主張している。敵軍の一般兵士と共産党部隊は同じ階級に属しているため捕虜を優遇するのである。そこから自然に、捕虜優遇政策と「2分法」は、形成された。国民党との戦いの中で、敵軍を瓦解するためのプロパガンダ工作、捕虜優遇、捕虜返還などを通じての捕虜工作は、大きな効果を収めたという事実があり、それは1937年から日本軍向けのプロパガンダ工作に影響を与えたと考えられる。

3.1.2 対日捕虜政策の変遷

1937 年から始まった日中戦争において、共産党は今まで国民党軍捕虜を扱うときの政策を続行しようとしたが、相手の日本軍は今までの国民党軍とかなり違っていた。投降しない日本兵の問題や民族や言葉の違いなど、共産党の敵軍工作は多くの難問に直面せざるを得なかった。土地革命期と同様で、共産党軍隊には、日本軍に対して深い憎しみを抱いている兵士が多く、日本人捕虜を殺害したり、虐待したりすることが多くあった。そういった背景の下で、中国共産党の捕虜政策の模索は再スタートした。その捕虜政策は、主に日本軍捕虜に対する政策に示されている。

1939年5月の『八路軍軍政雑誌』によると、「現今の敵軍工作は、今までと著しく違っている。そのおもな違いは、日本人だけではなく、朝鮮人、台湾人、主に我が国土に侵入してきた異民族軍隊との戦うことである¹⁷」。

日露戦争後の日本軍において、軍紀引き締め、士気高揚策、軍事情報漏洩防止策として「捕虜否定思想」が形成している。さらに、1941年1月8日に東条英機陸軍大臣で出された『戦陣訓』に捕虜になることを明確に禁止している¹⁸。そのため、日本兵には、捕虜になることを恥だと思いい、「玉砕」しても投降しない傾向があった。

「帝国軍人」としての日本兵にとって、投降は許されない行為であった。投降捕虜の扱いを担当していた趙安博の回想によると、「抗日戦争のはじめの頃、わが軍は山西、河北、河南、山東などの地域に独立自主の遊撃戦を展開し、多くの勝利を収めた。だが殺傷したのが殆どで捕虜は極めて少なかった。1937年9月の平型関の戦いにおいて、日本軍3000余名をせん滅したが、1人の捕虜も確保できなかった。その原因は日本軍将兵がファシスト教育の害毒を深く受けており、戦争の性質も判っておらず、八路軍の捕虜政策も知らない故であった¹⁹。」1937年10月6日の中国共産党総政治部文書には、平型関の戦いでは、日本兵は死んでも投降しないことが記載され、投降しない日本兵を「今後の政治工作の重要な課題」としている²⁰。1937年9月の平型関戦闘の直後、イギリス記者であるジェームス・バートラム(Bertram)の取材を受け、周恩来は投降しない日本兵について「われわれは何人かの捕虜を捕まえた。われわれは日本民衆に対する友好政策を極めて彼らに説明したい。日本兵捕虜を捕まえるのが容易ではない。中国人は捕虜を殺すと聞いているので、負傷しても戦死まで戦うのである²¹」と述べている。

(1)「捕虜釈放・送還」政策

趙安博の回想によると、日中戦争の初期の頃は、日本軍兵士は「共産軍が捕虜を虐待して殺害する」と教え込まれて、「敵軍デマを打ちくだきわが軍の影響を広めるため、日本捕虜の希望に基づき、釈放する政策をとっていた²²」。捕虜釈放・送還政策の背景には、まさに「共産軍が捕虜を虐待し、殺す」とのイメージを打ち破る狙いがあった。

1937年9月25日に発表された『八路軍の日本兵士に告げる書』において、「中国の軍隊は日本兵士を決して虐待しない、殺さない。」「中国軍隊で仕事することを望むのなら、仕事を与える。望んでいなければ、武装解除さえすれば、前線で直ちに送還する」としている²³。同日、『中国共産党の日本陸海空軍兵士に告げる宣言』が発表され、中国軍隊は日本兵士を一人といえども殺しはしない。日本兵士が武装解除さえすれば、直ちに優遇する。帰りたければ送還する。中国軍隊で仕事をしたいければ仕事を与える」と述べ、日本兵の投降を促している²⁴。

日中戦争が始まった直後、毛沢東はイギリス人記者のジェームス・バートラムの取材を受け、八路軍の政治工作について「第1は、将兵一致の原則、第2は、軍民一致の原則、第3は、捕虜を寛大に扱い、敵軍を瓦解させる原則である」と3つの基本原則を示した同時に、共産党の捕虜

を釈放する政策を紹介した。「これまでのところ、第3の捕虜に関する原則は、効果が顕著ではないが、将来必ず効果をあげる。我々は、この捕虜対策を堅持する。最近、日本軍が八路軍に対し、毒ガス攻撃を行うと公言しているが、我々はそれでも、この原則を変更しない。我々は、捕虜になった日本軍兵士と、やむなく戦闘に加わっている下級士官を寛大に扱う。侮辱や叱責をせずに、日中両国人民の利益は一致していることを彼らに説き、釈放する。戻りたくないものは、八路軍に入隊させ、将来抗日戦線で『外国人義勇軍』が編成されれば、そこに参加させ、日本帝国主義との戦いに向かわせる」と述べている。²⁵毛沢東は欧米の記者に向けて、日本軍捕虜を寛大に扱う政策をアピールすると共に、日本帝国主義者と日本国民を区別して対応する考えを強調した。即ち土地革命期における「敵軍の一般兵士と軍閥を区別する2分法」を「日本帝国主義と日本国民を区別する2分法」に応用したのである。

1937年10月6日の中国共産党総政治部文書では、投降しない日本兵を政治工作の重要課題とし、「敵の捕虜を優遇し負傷兵に治療を施す。断固投降しない日本兵に対しては殺すべきだが、武器を供出した者を我が方に連れて政治宣伝を実施した後に処置すべきだ。断られても危害を加えてはいけない。」と規定し、捕虜優遇政策を明確にしている²⁶。さらに、1937年10月25日に朱徳と彭徳懐の名義で八路軍総指揮部命令が出され、捕虜政策を4条に明確化された。第1に、我が軍の捕虜となった日本兵を殺してはならず、優遇する。第2に、自発的にやってきた者に対して、その生命の安全を保障しなければならない。第3に、戦場で負傷した者に対して、階級の友愛に基づき治療を施す。第4に、故郷に帰りたい者に旅費を支給する²⁷。さらに同日の10月25日に、総政治部が前線各部隊の責任者宛に日本兵捕虜扱いに関する指示が出され、「敵軍では殺されても投降するなど命じられている。われわれが捕まった捕虜を殺したら、必ず恐怖感をいっそう強くするに違いない。今後捕虜になった敵兵を、連行できない場合、武装を解除し、3元を支給して釈放すべきだ」と規定している²⁸。

釈放する政策の背景として、共産党に2つの思惑があったと考えられる。第1には、すぐには釈放せずに、捕虜に教育・宣伝を加え、捕虜の転向を仕向けることである。敵軍工作部の担当者の蔡前は1939年に、「国際慣例によれば、戦争が終わったら、捕虜は釈放すべきである。しかし、日本帝国主義者の瞞着を暴露するため、より覚醒できた捕虜を選出し、送り返すべきである。送り返す前に、民衆を動員して歓送会をやったほうが、より深く印象づけることができる²⁹」と述べている。『八路軍軍政雑誌』が初めて「捕虜への扱い」に関する記事を掲載したのは1939年3月だった。「若本(26歳、農民出身)と笠原(工場労働者出身)という2名の日本軍捕虜を捕まえ、訊問で敵情情報を得て、「2分法」教育を加え、釈放した」とある。捕虜政策をより広範に中国軍民に教育するための一つの手法であると考えられる³⁰。

捕虜になった香川孝志の回想によると、捕虜になった日本人鉄道員は、「すぐ帰してほしい」とその場で申し込んだが、「ここからすぐお帰しするわけにはいかない。あなたがたの職場はみなつぶれている。すこしおちついたらかならず帰してやる」と共産党幹部の張香山が答えた³¹。

その後、捕虜に対して優遇や教育を与え、それでも帰してほしいと思う人に対して、希望に応

じて日本側に帰らせる。香川孝志の回想によると、「前述した3人の日本人鉄道員は、『いつのまにか姿が見えなくなった。希望に応じて日本側に帰せたらしい³²』。100日ぐらい経つと、共産党の捕虜優遇政策や、捕虜教育工作の影響で、捕虜の気持ちは徐々に変わる³³」とある。

第2の思惑は、親切ごかしの「捕虜返還」政策の実施である。捕虜になること自体は日本軍で禁止されており、日本軍に帰隊しても軍法会議にかけられる。陸軍省が1939年9月に支那派遣軍総参謀長宛の通牒には、「捕虜ト為リ帰還セル者ニ就テハー率ニ捜査ヲ行ヒ有罪ト認メタルモノハ総ヲ之ヲ起訴スヘキ」とされ、不起訴または無罪とされた者に対して「嚴重ナル懲罰処分ヲ行フ」、「刑ヲ執行修了者」を教化隊に服役させると規定している³⁴。香川孝志は自身の経験についてつぎのように回想している。「すでに捕虜になってからそのときまでに、百日を経過していたから、たとえ帰隊しても軍法会議にかけられるのは確実である。」1940年12月になると、香川孝志は日本軍隊に帰らずに、「腹を決めて延安に行こう」と決めたという³⁵。

共産党は日本軍の軍令を把握しており、本当に釈放する者に対して、必ず釈放する前にある程度の教育や宣伝を行い、日本軍を瓦解させる狙いがあった。1938年10月22日に八路軍総政治部が毛沢東、王稼祥、譚政に宛てた電報には、捕虜釈放政策について「捕虜の話によると、日本軍兵士が戦いが終わって一週間以上連絡が取れずに帰隊した場合みんな銃殺刑にされているとのことである。今後、捕虜を捉えたら、特別の者だけ人を我が軍に残るように勧誘するのではなく、どんな態度の者であれ一律優遇をする。捕虜を慰問するように大衆を動員し、プラス影響を与えてからすぐ釈放する。(釈放まで)3日間を超えてはいけない。秘密がばれないように、この項は書面で書いてはならず、口頭で連隊まで通知する³⁶」と記されている。

捕虜を優遇・教育・利用する段階に入っても、捕虜を送還する政策をすべて中止したわけではない。1941年4月6日に八路軍野戦政治部から出された指示には、「送還した捕虜の一部は殺されずに日本軍で活動しているので、我が軍の影響を多少日本軍に送り込める。しかし送還されたら死刑に処される」とされ、今後捕虜を送還するさいには、ファシズム的な拠点に送らずに、見識のある日本軍将校の拠点に送るように、命じている³⁷。

捕虜送還政策は、結局「対日プロパガンダ工作」の一環として位置付けで行われた。八抗日軍政大学教育長の羅瑞卿(のち八路軍野戦政治部主任)が1938年11月に書いた文章によると、優遇を受け心が動かされた優待と感動を受けた日本兵捕虜を敵軍の内部に大量に送りこめば、日本軍に対するプロパガンダ工作となる。「われわれが敵軍にとってもいい宣伝隊を送ったと同様である³⁸」と指摘している。さらに、1941年に八路軍総政治部敵軍工作部編の「敵軍工作ハンドブック第5版」には、「彼らが釈放され、原隊に帰れば、我々が彼らを処刑しないことや寛大に扱うという我々の方針が深く日本軍に浸透する³⁹」と強調し、捕虜釈放の目的を明確に述べている。

(2) 捕虜優遇政策

日中戦争初期には、捕虜を優遇・教育せずに釈放する政策だったが、徐々にきちんとした優遇・教育を施してから釈放するようになった。

毛沢東は、1938年5月に発表した『持久戦論』において、八路軍政治工作の3つの基本原則を有効に実行するには、「兵士の尊重、人民の尊重、及び敵軍捕虜の尊重というこの根本態度より出発すべきである⁴⁰」と述べている。1940年6月公表された『総政治部の日本軍捕虜工作に対する指示』によると、「敵軍の文書を積極的に収集する。抵抗を停止した日本軍兵士と将校を銃殺することを禁止する。日本軍捕虜を侮辱することを禁止する」、「敵軍捕虜を確保したら、丁寧に扱い、宣伝をする」、「各司令、各縦隊、各軍区、各戦略部門は、出来るだけ進歩的な捕虜を選んで訓練し、対敵工作に協力してもらえるように努めるべきだ。これはとても重要で、決して軽視してはならない⁴¹」とある。1940年7月7日、八路軍総政治部の朱徳、彭徳懐は、『中国国民革命軍第八路軍司令部命令』を發布した。この命令には当時の共産党の日本軍捕虜政策の全ての内容が含まれている。それによると「日本の兵士は、勤労大衆の子弟である。彼らは、日本の軍閥、財閥に騙され、強制されて、仕方なく我が軍と戦っているのだ」として、日本軍国主義者と日本軍の一般兵士を区分する「2分法」と「捕虜を厚遇する」政策を改めて示した⁴²。この命令は中国語と日本語両文で印刷されており、中国共産党軍隊の命令である同時に、日本語向けの宣伝ビラでもあり、これは日本軍も承知していた⁴³。

1941年9月15日に、総政治部から日本兵捕虜を優遇する規定が出され、「一般優待」、「特別優待」と「捕虜教育用の費用」に分けて、優遇政策を詳しく規定している。「一般優待」には、毎月の手当てを5元にし、食費は八路軍の2倍にし、祝日のとき部隊の指導者が捕虜を招待する他、食糧・衣服・日用品などの面での優遇するとしている。「特別優待」には、新来捕虜・軍職の高い捕虜・送還予定の捕虜に対して特別に優遇すると規定し、その他の旅費・優待費などの特別優待政策を規定している。「捕虜教育用の費用」では、文房具・書籍の購入費用、反戦団体の経費などを規定している⁴⁴。

共産党の捕虜優遇政策は、日本人捕虜となった人々と回想録で確認でき、一定の効果があったようである。1940年の百団大戦で捕虜となった中村善太郎(通名・中小路静夫)の回想録によると、捕虜となって以降について「まず八路軍部隊の大隊本部に連れて行かれた。死ぬことと脱走することばかり考えていて、ことごとく八路軍の兵士に対して反抗的な態度をとった。たとえばその八路軍には日本語ができる者がおらず、片言で『捕虜はユウタイする、ユウタイする』と言っていたのに、出された食べ物はコーリヤンの飯だったので、ぼくは『こんなものが食えるか、何が優待だ』といってポーンと投げ捨ててしまった。なにがいいのかと聞かれたので、日本人は白米の飯に卵や肉を御菜にして食うのだと言ってやったところ、今度は卵を二〇個も三〇個も持ってきた。オレを馬鹿にするのかと怒ったが、彼らはニコニコしていて怒らなかった。この出来事が、ぼくの八路軍に対する認識の変化の第一歩だった⁴⁵」と述べている。延安にいた日本人捕虜は、「食べ物は全部辺区政府が供給してくれたし、小遣いは月に3円(元)もらっていた。これは軍でいえば中隊長クラスの優遇だ。有名な大生産運動でも、労農学校は生産運動をやらなくてもよいとされた。このとき、生産運動に携わらないで全部供給されていたのは、幼稚園、病院と労農学校だけだった⁴⁶。」大和田廉の証言によると、「当時の中国共産党部隊においても、一般

の兵隊で1円、師団長でも3円、党の中央委員で5円だったので、優遇されている実感がしていた⁴⁷」とある。

捕虜優遇政策は日本軍向けのプロパガンダのコンテンツとして使われていた。日本軍の記載によると、「我が共産軍ノ後方ニハ日本人約四百名アリ、吾等ハ特別ニ彼等ヲ優待セリ。マタ彼等日本人ノタメニ特ニ白米ノ□□ヲ準備セリ⁴⁸」と共産党のプロパガンダ内容が記載されている。

(3) 捕虜を訓練・利用する政策

本論文の第4章と第5章では、捕虜を訓練・利用する段階を詳しく考察するため、ここでは簡潔に触れるだけにする。

1940年、日本工農学校の創立で、捕虜政策は新しい段階に入った。それは捕虜に長期の訓練、と教育し、利用する段階である。この段階から、共産党の捕虜教育と捕虜改造工作は本格的に始まったのである。系統的に日本人捕虜を収容するため、延安労農学校が設立された。ここでは、日本人捕虜に対して、当時の中国共産党の「捕虜を厚遇する政策」に基づき、捕虜教育が実施された。

1940年までは捕虜釈放(返還)政策はほとんどで、本格的・系統的な捕虜教育は展開されていなかった。1940年7月8日に、総政治部から日本軍捕虜を扱う指示が出され、本格的に捕虜を利用するように命じている。この指示では、「帰りたくない者の強制送還を禁止」、「各部隊は十数名の進歩的捕虜を訓練し、我が軍の敵軍工作(日本語の教育、宣伝物の起草、捕虜の訓練など)に従事させる」と規定しており、捕虜を送還せずに積極的利用する意図が示されている⁴⁹。

1941年6月に捕虜となった小林寛澄の回想によると、「捕虜となって1, 2カ月は反戦同盟だか覚醒連盟だか、そんなものをやる気はまったくなかった。私は毎日何度も何度も大隊幹部のところへ行き、希望者は日本へ帰すと言っているのだから早く帰してほしいと懇願した。しかしその都度、『近いうちに帰す、それまでお待ちなさい』という返事で、その件は諦めざるをえなかった⁵⁰」1941年ころには共産党の捕虜政策は、変わりつつあった。「捕虜返還」から「捕虜を教育して利用」との政策に転換している段階だと考えられる。

更に1944年になると、『敵軍工作に関する総政治部の指示』では、「日本の革命勢力を養成するため、今後原則的に捕虜を釈放しないことを決める⁵¹」と明記している。

捕虜優遇政策は、捕虜返還政策と捕虜訓練・利用政策と緊密に関連しており、はっきりした切れ目がない。1941年になっても、捕虜釈放の政策は存在していた。それは「全ての日本人捕虜が日本人革命家や、反日活動のシンパになると期待するのは根拠に欠け、また無益だからである⁵²。」つまり、日中戦争初期には「捕虜釈放」は主流だったが、捕虜優遇と捕虜教育の政策もあった。また1940年延安工農学校の創立後に、捕虜教育の政策は重視される同時に、捕虜釈放の政策は中止されていない、ということである。

土地革命期においては、国民党軍や軍閥などの捕虜に対して、優遇を通じて利用する試みが行われた。日中戦争期に入ると、言葉、文化の違い、投降しない日本軍兵士などの新たな難問

に直面し、中国共産党の捕虜政策も徐々に進展した。

3.1.3 一般軍民の「2分法」に対する抵抗

アメリカ軍事視察団のレポートによると、日中戦争当時、ほとんどの中国人にとって、日本人は冷酷な侵略者であり、彼らの日本人に対する敵意は強かった。中国の若者たちは、しばしば、ただ復讐のためだけに八路軍に参加した。そして日本人捕虜はほとんどの場合、殺害された⁵³。

中国共産党は、『八路軍軍政雑誌』、『解放日報』及び『大衆日報』など各地のメディアを通じて、「2分法」思考法と「捕虜優遇政策」を広く宣伝した。周知のように、抗日動員のため、全国範囲において、抗日宣伝は行われていた。「悪魔の日本軍」というイメージはその後の捕虜優遇と「2分法」政策の実行に不利な条件となってしまう。八路軍兵士が日本軍捕虜を殺害したり、農民たちが日本軍捕虜を農機具で殺したりする事件が相次いだ⁵⁴。八路軍においても、捕虜政策の精神をまだ把握しておらず、日本人捕虜を虐待するまた殺害する事件があった⁵⁵。八路軍に新兵が多く、故郷で日本軍の暴行を見たため、投降した日本兵を銃殺した事件も相次いだ⁵⁶。八路軍の敵軍工作員でさえ、日本人捕虜を優遇することは簡単に理解できなかった。八路軍野戦政治部敵軍工作部で活躍していた常化知の回想によると、「私たちには食べるものがなく、彼らが豊かに食べているのは本当に悔しかった⁵⁷」と述べている。一般兵士と民衆は「2分法」に対する抵抗が強く、捕虜優遇と「2分法」の合理性を宣伝するため、八路軍兵士と民衆向けの教育・説得工作が展開された。

(1) 一般軍民の抵抗

129 師団 386 旅団長の陳賡は 1938 年 2 月 24 日の日記に一般民衆の抵抗について、「長生口の戦いの勝利で、道の両側に並んだ民衆の歓迎を受けた。民衆がお茶と食べ物で兵士を慰問し、特に戦利品と東洋兵(日本兵)をわれ先に見ていた。民衆の意見は、日本人を馬に載せるべきではなく、殺すべきだということである。われわれの釈明を聞いても不満そうだった」と記録している。4日後に、戦利品と日本人捕虜を民衆に見せるさい、多くの少壮である民衆が日本兵を怒った目で睨み、「何で中国侵略するのか」と詰問していた。陳賡は日記で、「我が部隊がなければ、(日本兵捕虜が)間違いなく民衆に殴られ殺されてしまう」と記している⁵⁸。

八路軍の捕虜となった水野靖夫の回想によると、「捕虜になったばかりのとき日本軍服をきた水野が八路軍の車に乗ってある部落に入った。子どもづれの女が水野に気づき大きな声で叫んだ。二人三人と農民たちが車に近づいてきた。老人の子供が多いようで、どこからか小石がとんできた。「日本兵だ」「東洋鬼子(クイズ)」と農民たちが険しい顔で鋭く叫んだ。護送してくれる八路軍の李青年が大声で農民たちにしゃべり続けていたが、小石が水野をめがけてとんできた。結局李青年が車に対して出発を命じ、部落をはなれることができた⁵⁹」とある。

『敵我在宣伝戦線上』によると、「冀中の八路軍部隊が日本軍との戦いで、中隊長を含む日本兵を捕虜にした。捕虜を連れて後方に向かう途中、ある部落を通るとき、村の農民が農機具を武

器にして日本人捕虜と八路軍の護送兵を包囲した。『直ちに日本兵を銃殺しろ』と農民が要求した。さもないと、八路軍護送兵の武装を解除するというので繰り返して説得したが効果はなかった。農民らが鋤で十数人の日本兵捕虜を殺してしまった⁶⁰。」とある。

(2) 一般軍民向けの「捕虜優遇」教育

一般軍民に対する捕虜優遇政策の教育の根本は、やはり「2分法」であった。一般兵士に対して、「敵軍がわが国での侵略行為は、少数の日本軍閥、日本統治者の罪であり、広範な日本兵士には責任がない。彼らの利益と中国人民の利益は一致しているのだ」という教育内容であった⁶¹。さらに、日本兵捕虜を優遇する理由について、「なぜ敵軍捕虜を優遇するのか。その理由は、日本軍隊の兵士及び偽軍の中の大部分の将兵が、皆強制されて中国を侵略しに来たのからである。彼らは日本軍閥の利益と対立している位置にある。だから我々は敵偽軍の下級将兵を確保し、彼らを覚醒させ、日本軍閥を打倒する立場に立たせる。中国人民と助け合って協力するように転換させる。敵偽軍を獲得するには、一般的政治宣伝のほか、敵偽軍捕虜を優遇することが一番よい方法である⁶²」とされている。

第1に、八路軍敵軍工作員による口頭教育と教材による教育である。前出した水野靖夫が中国の農民に批判されそうときに、その護衛兵が繰り返し農民向かって、「これは日本の農民である。日本の軍閥や財閥にくるしめられている気の毒な農民だ。われわれの朋友なのだ」と説明した。水野は「八路軍の兵隊たちにはこうした考え方の教育が徹底しているようであった」と回想している⁶³。その後も、水野が通る各部落で、農民に対する教育が行われた。「日本の軍閥と財閥の犠牲者」という名の看板で、抗日統一戦線の必然性とその勝利についての確信を強めた⁶⁴。1940年9月に八路軍の捕虜となった渡辺三郎にも同じような状況があった。「日本兵を殺して復讐しよう」と叫ぶ農民を説得できた八路軍の人道主義行為によって、渡辺の思想は変わり始めた⁶⁵。八路軍のこのような教育は、中国の民衆を教育する同時に、捕虜を護衛し優遇するのが本気だと日本人捕虜に信じさせることもできただろう。こういう意味では、各部落で行われた民衆向けの捕虜優遇教育は、捕虜を転向させるうえで効果があり、一石二鳥の政策だった。

回想録によると129師団で敵軍工作に従事していた盧耀武、劉国霖は、日本語での呼びかけ練習と日本語スローガンを作るとともに、一般民衆に「敵軍瓦解政策」を教育していた。「一般民衆は日本軍の犯行に対して憎しみを募らせていたが、掃蕩の行軍中落後した日本兵を捕まえても殺害せず、侮辱せずに我が軍に連れてくる。武器を放棄した日本兵捕虜に対して、差別せずに友好的に扱う⁶⁶」と述べている。

共産党軍隊の政治教育教材には、ほとんど「捕虜優遇」、「敵軍を瓦解」などの内容がある。たとえば新四軍第5師団政治部が『政治読本』を刊行し、捕虜政策と敵軍瓦解政策を含む政治工作を一般兵士に向けて教育を行った。また各地方の民衆大集会で共産党の敵軍工作を講義し、一般兵士と民衆の理解を得た⁶⁷。八路軍においても、政治教科書を刊行し、政治工作教育

を実施した。初級政治教科書は2冊に分け、第1冊は中日問題であり、第2冊は統一戦線問題である。特に新兵に対して政治教育を実施した⁶⁸。

第2に、日本人反戦組織及び転向した日本人捕虜による教育である。八路軍の一般兵士や民衆に捕虜政策を教育するため、敵軍工作部は日本人捕虜を前線に送り込み始めた。これらの捕虜はすでに反戦組織を結成して、組織的に活動していた。『延安リポート』の記載によると、これらの捕虜たちは、かなり再教育が進み、八路軍の思想を十分に理解した者たちであった。八路軍の支援の下、政治部工作員によって準備された大衆集会在旅団司令部や師団司令部で開催され、捕虜たちはそこで「いかにして私は軍国主義者にだまされたか」との内容の話をした。農村でも農民向けの集会在祝日や祭りの際に開催された⁶⁹。

スピーチのほか、演劇などさまざまな形があり、その内容はやはり「日本兵の一般兵士は軍国主義者に騙され、強制されて中国に来た。みんなと同じように、普通の農民だ」との内容だった。秋山良照の回想によると、秋山ら日本人たちが中国人と一緒に中国語で『活路』(生きる道)との演劇を中国の一般軍民の前で上演した。貧農の息子である木下が徴兵され、年老いた父母を置いて出征する。父親が地主の仕打ちを呪いながら自殺してしまう。内務班で木下は虐待・侮辱を受け、戦争に疑問を持つ木下が覚醒連盟のピラに共感を持ち逃亡した、という内容の劇である。劇が終わったら通訳が「ごらんささい、中国の農民も日本の農民も、日本の軍閥に苦しめられている。中国人民と日本人民は手をたずさえて、日本の侵略に反対しよう」と農民を勇気づけた⁷⁰。

第3に、軍紀や制度による強制的な制約である。共産党軍隊には、多くの命令と指示が出され、捕虜優遇政策は軍紀として、強制的に実施された。1937年10月25日に朱徳と彭徳懐が「日本兵捕虜を優遇する」と八路軍総指揮部命令を出し、「命令」という形で強制した。129師団343旅団のある小隊長が投降してきた日本兵を銃殺したことがあったが、その小隊長に行政処分が下され、兵士教育のための部隊大会が開催された⁷¹。さらに、日本工農学校の副校長だった趙安博は1943年4月に、日本人捕虜を殴り、共産党中央で問題視され、副校長を辞任した事件もあった⁷²。

中国共産党の敵軍工作に協力した日本人の原清子の回想によると、中国共産党の軍隊は開戦当時から「捕虜優待」を唱え、武器を下ろした捕虜は手厚く扱えと軍規「三大規律八項注意」として説き、これを歌にして日常的に歌わせるなどの形で繰り返し教育した。自分たちは決して食えない米の飯を捕虜に与え、ヤケを起こして暴れる日本兵をなだめ、罵られても殴られてもにこやかにしていなければならないとされた。まだ少年の八路軍兵は、日本の捕虜を扱いきれず、しくしく泣き出すことさえあったという⁷³。

抗日宣伝を行うさいには、捕虜政策の実施が考慮されていた。たとえば、1939年1月の『八路軍軍政雑誌』には、「歴史において日本が中国を侵略する原因及び経過をはじめ、盧溝橋事変及び日本が大挙して中国を侵攻し、わが国を滅亡させ、我が種族を消滅させようとする行為を告

発し、中国国民の民族的覚醒を啓発する。日本獣軍が中国での姦淫、強奪、焚焼、虐殺、爆撃、毒ガス行為、アヘンなどの残忍非道の獣行に対して、戦士全員の民族覚悟と民族的憎しみを高める」。さらに、「もちろんそれはただ日本軍閥への憎しみであり、日本労苦大衆への憎しみではない」と特別に説明が加えられている⁷⁴。

- 1 劉曉農「我軍優待捕虜政策的產生」『党史文彙』2004年7号, 25頁。
- 2 『中国共産党軍隊政治工作七十年史(1)』解放軍出版社, 1991年5月版, 157頁。
- 3 『毛沢東選集(2)』北京人民出版社, 1991年版, 69頁。
- 4 「紅軍捕虜政策的變化」『解放軍報』2006年9月19日, 10面。
- 5 中国共産党中央文献研究室, 新華通信社編『毛沢東新聞文選』新華出版社, 1983年12月版, 22頁。
- 6 前掲書『中国共産党軍隊政治工作七十年史(1)』111頁。
- 7 『軍隊政治工作歴史資料(第2冊)』, 戦士出版社, 1982年, 213頁。
- 8 前掲書『中国共産党軍隊政治工作七十年史(1)』148頁。
- 9 前掲「紅軍捕虜政策的變化」『解放軍報』2006年9月19日, 10面。
- 10 周逸群「鄂西遊撃戦争の経過及其現状(1930年5月)」『周逸群文集』中共党史出版社, 2006年6月。
- 11 前掲書『軍隊政治工作歴史資料(第2冊)』, 369頁。
- 12 前掲書『中国共産党軍隊政治工作七十年史(1)』315頁。
- 13 前掲「紅軍捕虜政策的變化」『解放軍報』2006年9月19日, 10面。
- 14 「反共派捕虜問題的指示」中央档案館編『中共中央文件選集』(第12冊), 中共中央党校出版社, 1989年, 520頁。
- 15 E・スノー著, 松岡洋子訳『目覚めへの旅』紀伊國屋書店, 1963年9月30日, 135頁。
- 16 前掲「我軍優待捕虜政策的產生」, 25頁。
- 17 傅鐘「八路軍抗戰中政治工作的經驗」『八路軍軍政雜誌』第5号, 1939年5月15日, 4-5頁。
- 18 姫田光義, 藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店, 1999年9月18日, 27-28頁。
- 19 趙安博「延安日本労農学校」『アジア經濟旬刊(1246-1247)』1983年1月1日, 15頁。
- 20 「八路軍政治部關於開展日軍政治工作的指示(1937年10月8日)」中国人民解放軍歴史資料叢書編審委員会, 『八路軍・文献』, 解放軍出版社, 1994年5月, 61頁。
- 21 バートラム(James Bertram)著, 林淡秋 等訳『華北前線』新華出版社, 1986年7月, 168頁。
- 22 前掲「延安日本労農学校」15頁。
- 23 「八路軍告日本士兵書(1937年9月25日)」前掲書『中共中央文件選集』(第11冊), 357頁。
- 24 「中国共産党告日本陸海空軍士兵宣言」前掲書『中共中央文件選集』(第11冊), 341頁。
- 25 「和英国記者貝特蘭的談話」(1937年10月25日), 小林清『在華日人反戦組織史話』, 社会科学文献出版社, 1987年9月, 1-2頁。
- 26 「八路軍政治部關於開展日軍政治工作的指示(1937年10月8日)」前掲書『八路軍・文献』, 61頁。
- 27 「第八路軍總指揮部關於日軍捕虜政策的命令」前掲書『八路軍・文献』82頁。
- 28 「中共中央軍委總政治部關於對捕虜處理弁法的指示」前掲書『八路軍・文献』83頁。
- 29 蔡前「八路軍抗戰以來敵軍工作經驗」『八路軍軍政雜誌』第5号, 1939年5月15日, 64頁。
- 30 康濯「捉放捕虜記」『八路軍軍政雜誌』第3号, 1939年3月15日, 122頁。
- 31 香川孝志, 前田光繁 著『八路軍の日本兵たち—延安労農学校の記録』サイマル出版会, 1984年6月, 18頁。
- 32 前掲書『八路軍の日本兵たち—延安労農学校の記録』24頁。
- 33 前掲書『八路軍の日本兵たち—延安労農学校の記録』25-26頁。

-
- 34 「今次事変ニ於ケル捕虜帰還者ノ取扱方ニ関スル件」アジア歴史資料センター, C01003544100。
- 35 前掲書『八路軍の日本兵たち—延安労農学校の記録』25—26 頁。
- 36 「第十八集團軍総政治部關於対日軍捕虜政策的決定致毛沢東, 王稼祥, 譚政電」前掲書『八路軍・文献』83 頁。
- 37 「八路軍野戦政治部關於釈放日軍捕虜應注意的問題致各級政治機關電」前掲書『八路軍・文献』627 頁。
- 38 羅瑞卿「対敵軍的政治工作」『八路軍回憶史料1』解放軍出版社, 1991 年 9 月, 189 頁。)。
- 39 「延安リポート第四十六号 捕虜の扱い方——敵軍工作ハンドブック第五版」山本武利編訳『延安リポート—アメリカ戦時情報局の対日軍事工作』岩波書店, 2006 年 2 月, 478 頁。
- 40 毛沢東著, 尾崎庄太郎訳『持久戦論』, 人民社, 1946 年 9 月, 120 頁。
- 41 中国人民解放军政治学院党史教学研究室編『中国共産党史参考資料(第 8 冊)』430 頁。
- 42 前掲書『中共中央文件選集』(第 11 冊)434-435 頁。
- 43 篠塚部隊「石太線襲撃ニ於ケル八路軍ノ宣伝工作の觀察」1940 年 10 月, アジア歴史資料センター, C04122582100, 8 頁。
- 44 「第十八集團軍政治部關於優待日軍捕虜的規定」前掲書『八路軍・文献』696—697 頁。
- 45 前掲書『日中戦争期下中国における日本人の反戦活動』123 頁。
- 46 前掲書『日中戦争期下中国における日本人の反戦活動』127 頁。
- 47 前掲書『日中戦争期下中国における日本人の反戦活動』138 頁。
- 48 篠塚部隊「石太線襲撃ニ於ケル八路軍ノ宣伝工作の觀察」1940 年 10 月, アジア歴史資料センター, C04122582100, 11-12 頁。
- 49 「中共中央軍委総政治部關於対日軍捕虜工作的指示」前掲書『八路軍・文献』530 頁。
- 50 前掲書『日中戦争期下中国における日本人の反戦活動』149 頁。
- 51 「総政關於敵軍工作的指示」(敵軍工作に關する総政治部の指示), 陝西省档案馆, 5495-13-24-26。
- 52 前掲「延安リポート第四十六号 捕虜の扱い方——敵軍工作ハンドブック第五版」, 478 頁。
- 53 「延安リポート第四十八号 八路軍部隊と民間人の捕虜教育法」前掲書『延安リポート—アメリカ戦時情報局の対日軍事工作』506 頁。
- 54 文化教育研究会編『敵我在宣伝戦線上』文化教育研究会出版, 1941 年 3 月, 陝西省档案馆, 3018-11-3-23, 218 頁。
- 55 徐則浩『從浮虜到戦友』安徽人民出版社, 2005 年 7 月, 83 頁。
- 56 前掲書『敵我在宣伝戦線上』, 212 頁。
- 57 前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』211 頁。
- 58 『陳賡日記』戦士出版社 1982 年, 63 頁。
- 59 水野靖夫『日本軍と戦った日本兵: 一反戦兵士の手記』白石書店, 1974 年 8 月, 59 頁。
- 60 前掲書, 『敵我在宣伝戦線上』, 218 頁。
- 61 前掲, 羅瑞卿「対敵軍的政治工作」『八路軍回憶史料1』, 189 頁。
- 62 蕭向荣「115 師的政治教育工作」『八路軍軍政雜誌』創刊号 1939 年 1 月 15 日, 26 頁。
- 63 前掲書『日本軍と戦った日本兵: 一反戦兵士の手記』74 頁。
- 64 前掲書『日本軍と戦った日本兵: 一反戦兵士の手記』84 頁。
- 65 中共河北省委党史研究室, 河北政協文史資料委員会『在華日人反戦紀実』河北教育出版社, 2005 年 8 月, 192 頁。
- 66 盧耀武, 劉国霖「129 師的敵軍工作」『八路軍回憶史料3』解放軍出版社, 1991 年 9 月, 94 頁。
- 67 周煥中 主編『特殊的戦線』武漢大学出版社 1991 年 11 月, 22 頁。
- 68 前掲「115 師的政治教育工作」29 頁。
- 69 前掲「延安リポート第四十八号 八路軍部隊と民間人の捕虜教育法」507 頁。
- 70 秋山良照『中国戦線の反戦兵士』徳間書店, 1978 年 11 月, 83-84 頁。
- 71 前掲書『敵我在宣伝前線上』213 頁。
- 72 水谷尚子『『反日』以前: 中国対日工作者たちの回想』文芸春秋, 2006 年 7 月, 83-84 頁。
- 73 前掲『『反日』以前: 中国対日工作者たちの回想』34 頁。
- 74 前掲「115 師的政治教育工作」23—24 頁。

3.2 国民党の対日プロパガンダ活動とのつながり

1945年8月15日午前10時に、蒋介石の演説「抗戦勝利告全国軍民及世界人士書」(抗戦勝利を全国の軍民および全世界の人士に告げる書)が中国と世界に向けて放送された。中で、日本軍閥と日本人民を区別してみる姿勢が見える。

「われらは終始一貫、ただ侵略する日本軍閥のみを敵とし、日本人民は敵としない旨を声明してきた。(中略)けっして報復したり、更に敵国の無辜の人民に対して、侮辱を加えてはならない。われらはただ日本人民が、軍閥に駆り立てられている事に同情を寄せ、錯誤と罪悪から、抜け出ることだけを望むのである¹。」

「以德報怨」(徳を以て怨に報いる)の精神を主張するこの演説の中から、「日本軍閥」と「日本人民」を区別する方針がわかる。つまり、対日「2分法」は中国共産党だけではなく、国民党にもあったのではないかと考えられる。本節では、日中戦争期における国民党の対日プロパガンダ機構及びその出版物を踏まえ、国民党の対日「2分法」の実態を考察する。

3.2.1 国民党政府の対日プロパガンダ機構

国民党軍の政治部には、多くの共産党員が活動していたため、共産党の対日プロパガンダ工作と共通する点が多い。1938年11月18日に陸軍省寺内部隊参謀部によって作られた『共産軍の政治部について』によると、政治部は共産党特有の組織であり、政治部を有することは共産軍の重要な特徴である。政治部には「非凡な組織者及び扇動者」が配属され、その任務は、軍紀風紀の尊重、士気高揚、対敵宣伝などがある²。1927年までの第一次国共合作時期において、黄埔軍校政治部主任の周恩来などの提唱によって国民党部隊には政治部が設置されていた。その後、国共合作の崩壊につれ、国民党部隊の政治部制度が廃棄され、「政訓処」となった。

日中戦争の勃発によって、第二次国共合作が始まり、1938年1月に国民政府軍事委員会の下には政治部は結成された。政治部の部長には、国民党の陳誠が就任し、周恩来と黄琪翔が副部長の任に当たった。黄琪翔は国民党党員だったが、1949年後に中華人民共和国の幹部となり、1970年「文革」で亡くなった。当時の政治部の下には4つの庁が配置され、それぞれは総務庁、第一庁、第二庁、第三庁である。総務庁は人事などの担当で、第一庁は軍隊の政治訓練及び軍事学校の政治訓練の担当である。第二庁は民衆動員及び国民軍事訓練の担当で、第三庁はプロパガンダの担当であった。「三庁」の主な任務はプロパガンダであり、対日プロパガンダと国際プロパガンダがその主要な工作であった³。1938年から共産党に秘密入党した郭沫若

がその庁長を担当し、敵情研究、対日放送、日本語プロパガンダ資料の編集など、日本軍向けのプロパガンダ工作を展開した。政治部結成当初、周恩来は第三庁を中国共産党党员を中心となる部署にするつもりで運営していた⁴。ここでは、第三庁を重点的に考察する。

政治部の総務庁、第一庁、第二庁は国民党が支配する部署だが、第三庁は完全に共産党の支配する部署となった。第三庁には、多くの中国共産党員が配置され、庁と処レベルの幹部の中に、周恩来を中心とする共産党の秘密小組が結成され、そのメンバーは郭沫若、陽翰笙、杜国庠、馮乃超、田漢がいた。その下の科レベルにも複数の共産党秘密特別支部が結成された⁵。

国民政府軍事委員會政治部	総務庁 (総務・人事)		
	第一庁 (軍隊政治訓練)		
	第二庁 (国民軍事訓練)		
	第三庁 庁長 郭沫若(共) 副庁長 范寿康 范揚 主任秘書 陽翰笙(共) 任務 プロパガンダ	第五処 処長 胡愈之(共)	第一科(文章編集) 科長 徐寿軒
			第二科(民衆動員) 科長 張志讓
			第三科(総務・印刷) 科長 尹伯休(共)
		第六処 文芸プロパガンダ 処長 郭沫若(共) 田漢(共)	第一科(演劇・音楽) 科長 洪深
			第二科(映画) 科長 鄭用之
			第三科(絵画・彫刻) 徐悲鴻(未就任)
		第七処 対日プロパガンダ 国際プロパガンダ 処長 范寿康	第一科(日本語翻訳) 科長 杜国庠(共)
第二科(国際情報) 科長 董維健(共)			
第三科(日本語プロパガンダ 資料作成) 科長 馮乃超(共)			

「三庁」成立当時の組織⁶

三庁成立初期、周恩来はその工作方針について、「十大綱領⁷」の宣伝を堅持し、共産党の主

張を宣伝する⁸」と規定した。国共合作政府の一部門ではあるが、「三庁」の実際の活動は周恩来など共産党員が担当していた。対日プロパガンダ工作を担当する第七処には、特に共産党員が多い。3つの科があり、3人の科長がみんな共産党員だった。第一科科長の杜国庠(1889-1961)は1907年から1919年の間に日本に留学し、京都大学河上肇の弟子の一人であり、1928年に中国共産党に入党した。1949年後、広東省文教庁庁長などを歴任した⁹。第二科の科長董維健はアメリカ留学経験のある人物で、コロンビア大学の哲学博士号を有し、共産党員でもあった。1938年3月に、武漢で周恩来の紹介で郭沫若と緊密な関係を持つようになった¹⁰。第三科科長の馮乃超(1901-1983)は日本留学経験者の一人で、長期にわたって左翼文学活動を行い、1928年に中国共産党に入党した。第三科科長として対日プロパガンダ工作に携わり、鹿地亘の中国人民反戦同盟の工作にも協力した。1949年後、共産党の幹部として中央宣伝部、広東省にある中山大学などで活動していた¹¹。

第三庁の活動は、中国共産党史においては、「中国共産党の統一戦線政策の勝利である」と位置づけられている¹²。

郭沫若は、日本人反戦作家の鹿地亘夫婦、緑川英子(長谷川照子)などの協力を得て、日本人反戦士の協力を求め、宣伝活動をより有効なものにしようとした。鹿地亘、緑川英子など日本の反戦作家は実際に「三庁」のメンバーとなり、具体的な宣伝活動を行っていた¹³。周恩来は抗日戦工作の方針に基づき、郭沫若と相談の上、鹿地夫婦を政治部設計委員(少将待遇)として、1938年3月に武漢に迎えた¹⁴。

1940年3月汪精衛政権の成立により、親日派の何応欽が台頭し、政敵であった政治部部长の陳誠は罷免された。政治部の大規模な組織変更が行われ、周恩来、郭沫若は一旦任を解かれ、新たに「文化工作委員会」が成立し、郭沫若が主任となった¹⁵。

3.2.2 国民党政府の対日プロパガンダ活動

日中戦争において、国民党政府は中国政府として、日本軍の中国進攻を非難し、日本語で中国にいる日本人だけではなく世界各地の日本人に向けてプロパガンダ工作を展開していた。日中戦争の初期において、「連盟戦略」を取り、国民党政府の『日本人民に告ぐ』には、「我々は広大な国際的同情を獲得した¹⁶」とある。イギリス、アメリカの支持を得るための外交工作を展開する同時に、対日プロパガンダ工作も着実に行われた。

(1) 在華日本人向けのプロパガンダ活動

「三庁」は鹿地亘など日本人の協力を得て、日本軍向け及び日本国民向けの宣伝活動など抗日文化宣伝を行っていた。前出の第七処は対日プロパガンダと国際プロパガンダ担当で、プロパガンダ出版物の編集・印刷・発行、演劇・音楽によるプロパガンダ、美術活動によるプロパガンダ、プロパガンダ映画の作成と発行、日本語の翻訳と編集などの担当部門に分け、敵情研

究、対日放送、日本語宣伝資料の編集など、日本向けプロパガンダ活動を展開した。ビラ、パンフレットのほか、国民党政府は日本人の協力を得て、対日日本語ラジオ放送を行った。1939年2月6日に国際広播電台が正式に放送を開始し、その放送局からは中国語のほか、英、仏、独、日本語など十数カ国語による海外向けの放送も発信され、諸外国からは確かな「中国の声」の重要な情報源と見做されていた。ここには日本語のアナウンサーが長谷川テルなどがいた。これらの放送がどれほど効果があったか、今となっては検証するのは困難であるが、テルの反日放送を聞いた日本軍の通信兵宮西直輝はそのことを次のような歌として記録している。

まず、童謡が聞こえ重慶放送は 妨害電波しきりなる夜を
長沙作戦軍の動きをつぶさに伝う 重慶放送に耳を傾ける
鼻にかかった女の声す 重慶放送 いかなる過去を持ちたる人や
重慶放送 その流暢な日本語を ひそかに聞いて穏やかならず
(1941年9月 於 長沙戦線 通信兵 宮西直輝)¹⁷

1941年12月12日付の『解放日報』によると、国際広播電台が対日ラジオ戦を強化し、11日14時に、青山和夫など5人の日本語アナウンサーが日本語の座談会を開き、太平洋戦争と日本の前途を議論した¹⁸。

(2) 日本本土向けのプロパガンダ活動

対日プロパガンダ工作はさまざまな形式で行われ、日本本土にも及んだ。1938年5月6日の『董頭光致蒋介石簽呈』によると、「4人の日本人が日本軍暴行を記録している中英文の宣伝物を隠密裏に日本に持って行った。日本軍の蛮行を示す400フィートのフィルムを東京にもっていき、東京駐在の各大使館の人々と開明的な日本人に見せた。同時に「耳語宣伝」(顔と顔を突き合わせての秘密宣伝)の成果も蒋介石に報告された」。つまり、各国の駐日大使館、駐日記者、日本商工会リーダー、日本キリスト教信者及び日本政党要員、政府公務員などと会い、日本の対中作戦が理不尽であること、それはいかに日本市場を破壊し、いかに日本軍の戦力を壊滅するかをつたえた。さらに中国民衆抗戦気運が高まり、最後まで抗戦する決心を固めていることに加え、全世界で広がっている日本製品のボイコット運動と国際間で蔓延している日本の侵略戦争への不満などを宣伝した¹⁹のである。

それと同時に、『日本人民に告ぐ』、『日本国民に告ぐ』、『ひとつの真実』、『日本兵士に告ぐ』など多くのパンフレットとビラが作成され、日本国民・日本軍向けのプロパガンダが行われていた²⁰。1938年5月20日深夜、中国空軍一隊の8人が戦闘機で、日本の長崎、福岡、九州などの上空から『日本国民に告ぐ』などを百万部以上のプロパガンダ出版物がを投下された²¹。在カルカタ(シムラ)総領事吉田丹一郎が1938年9月8日に作成した報告によると、カルカタでは、「中華民國全国民衆」の名義で作られた『日本国民に敬告す』を発見し、これらの対日プロパガンダ出版物は「飛行機に依り本邦内地に撒布の目的を以て書かれた²²」と判断したとある。『日本国民に敬告す』には、「今日、我が中華民國の飛行機は貴国の領空に入った。我々は爆弾を投下し

度ければ、投下し得たものだ、がしかし罪なき平民を爆撃することは貴国の軍閥の残酷な遣り方であって、我々は決してそんな真似をしたくない²³」と記されていた。

(3) 第3国在住の日本人向けのプロパガンダ活動

中国、日本本土のほか、世界各国に在住する日本人向けのプロパガンダ工作も行われた。1938年9月から11月前後、多くの国にある日本大使館・領事館が外務大臣宛の秘密電報を出し、『日本人民に告ぐ』、『日本国民に告ぐ』などの対日プロパガンダ出版物について報告した。たとえば、在河内総領事宗村丑生が1938年10月13日に出した報告によると、「中日人民大同盟竝に中日人民反侵略大同盟の名を以て昨今当地方居留邦人各戸宛に武昌の日付消印ある小冊子『日本人民に告ぐ』竝に『日本国民に告ぐ』を送付越せる件に関しては不取敢拙電を以て稟報の次第有之処右内容が別記の通我が帝国陸軍を非難し居る点竝に民衆、民族などの解放を強調し且武昌より発送せられ居れる点よりみて支那側共産分子の我軍隊特に武漢攻略皇軍等に対する宣伝工作なるやにも考察せらる²⁴」と述べている。

1938年9月13日に在バタヴィア総領事の馬瀬金太郎の報告によると、『日本人民に告ぐ』、『日本国民に告ぐ』などの対日プロパガンダ出版物が当地多数邦商に対して武昌の消印ある郵便物が配布された。各地方日本人会より報告もあり、相当広範囲に配布されたと見られる²⁵。1938年9月8日に在カルカタ(シムラ)総領事吉田丹一郎の報告によると、武昌より郵送された『日本人民に告ぐ』と『日本国民に告ぐ』の2冊のパンフレットを発見した。それは支那中央部よりの宣伝と考えられる。配布の範囲は正金銀行、三菱、郵船、対印輸出組合、小学校、海員倶楽部のほか、個人宛のものを合わせ12通があった。その内容は「日本軍閥ノ私欲ノ為ニ起サレタルモノナルコトヲ説キ我同胞間ニ反戦思想ヲ鼓吹セムトスルモノ²⁶」とされている。同じような報告があった国と地域には、スラバヤなどからもあった。

『日本人民に告ぐ』、『日本国民に告ぐ』、『日本国民に敬告す』などの対日プロパガンダ出版物に関して、日本大使館・領事館の報告から2点が読み取れる。すなわち、①郵送の消印は武昌であり、「支那中央部よりの宣伝」とのこと、②「支那側共産分子の我軍隊特に武漢攻略皇軍等に対する宣伝工作」との判断である。「三庁」に関する次の2点から、これらのプロパガンダ出版物はまさに政治部の第三庁が作成し、世界各地にいる日本人宛に郵送したと判断できる。

第1に、政治部の第三庁は、1938年4月1日に武昌にある曇華林に結成された²⁷。現在でも武昌の曇華林にある武漢市第14中学校構内には、第三庁の建物が残っている。第三庁の活動はこの建物で行われ、郵便消印の「武昌」と一致している。

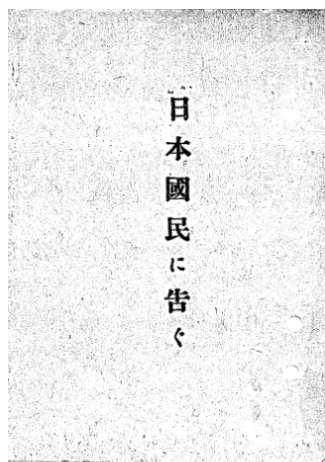
第2に、第三庁で対日プロパガンダの担当者のほとんどは共産党員で、「共産分子」とする日本側の判断と一致している。

この2点から推測すれば、日本の各国にある大使館・領事館が1938年9月から報告した『日本人民に告ぐ』、『日本国民に告ぐ』などの対日プロパガンダ出版物は、まさに政治部の第三庁が作成し、世界各地にいる日本人宛に郵送したと判明できる。

3.2.3 プロパガンダ出版物に見る国民党の「2分法」

前述したとおり、国際プロパガンダと対日プロパガンダ工作を担当する政治部の「第三庁」は、実質的には共産党の支配の下にあった。それゆえ、日中戦争期における国民党の対日プロパガンダ工作と共産党の工作とは近い性格を持っていた。つまり、日本に対して、ファシストと一般国民を「2分」する姿勢を見せている。

前出の『日本人民に告ぐ』には、次のような記述がある。「日本の民衆及び兵士諸君は決して我々の仇敵ではない。反って諸君は我々の友人でこそある。東亜両大民族の共同の利益のために、我々は熱烈なる握手を諸君に求める²⁸。」「親愛なる日本人民諸君！貴国のファシスト軍閥は不断に貴国内の民衆を搾取し、労働大衆を馳って中国の兄弟と互いに殺し合ふようなことをさせた。今はもうかかる暴挙に反抗する時が来た！我々中日両国の人民は堅く手を握って共同の敵、暴口な日本ファシスト軍閥を打ち倒そう²⁹！」



『日本国民に告ぐ』の表紙³⁰

1938年4月に「中日人民大同盟」の名義で作られた『日本国民に告ぐ』にも、「対日2分法」の発想がある。その中には、「中日関係の悪化、今日の様な状態に到ったのは誠に最大なる不幸と言わざるを得ない。このような不幸の状態を醸し出したことは、決して中国国民の本意でもなければ、日本国民の企図でもありませぬ。一切の禍は皆日本軍閥の野心に由て造り出されたのである³¹」とある。「我等全中国の国民は貴君方の御不幸に対しては、誠に同情の至りである。我等に捕虜された日本の将校や兵士等に対しても、やはり十二分な同情を以て、優待に努め、家族との通信を許し、且安全に御国へ送還するやように準備して居る³²。」「東亜の平和の破壊した責任は、全部日本軍閥の負ふべきものである。我等が信ずる。日本の本当の愛国者は、きっと軍閥の野心に、又は対華侵略戦争に、反対して居るに違ひない³³。」「我等が希望する。日本の平和を愛護する人民達が聯合して立上り、軍閥の残虐なる統制を倒し、戦争の苦痛から解除し、東亜の平和を恢復して立ちに中日の真正なる合作に口進しろ！³⁴」

前出の『日本国民に敬告す』にも、似たような記述があった。「中日両国は共に東亜に相隣接

せる同文同種の友邦である。両国人民の間には固より何の恨も仇もなく、根本的に戦争をする必要はない³⁵。」「日本の軍閥は唯爵位の獲得、利潤の追求及び政権の独占のために熱中している。人民の生命と財産、権利と自由等は全然眼中にない。」「諸君！貴国の人民の敵は中華民國ではなく、貴国の軍閥だ！諸君は大和民族のために、自分の権利と自由とのために早く団結してこの国を禍する軍閥を打ち倒さなければならぬ。我々は一向貴国人民に対して厚い友情と深い同情を持っている。これらかも両国は堅く握手し、互いに相助け、真摯の良友となることを我々は切に希望している³⁶。」

日本人捕虜に対しても、思想教育を行う方針をとっていた。1939年1月から、日本人の鹿地は第三庁の指導の下で、桂林で日本人捕虜収容所から数人の者を選び、一定期間の政治教育を行い、12月25日に在華日本人民反戦同盟西南支部を組織した。その後の1940年3月、鹿地はまた重慶にあった和平村の日本人捕虜主要所からメンバーを選出し、反戦同盟重慶本部を結成した。康大川の回想によると、反戦同盟の仕事は全て第三庁が責任を負っていた³⁷。1941年1月の皖南事変により国民党と共産党の関係は悪化し、「不祥事を口実に何応欽(軍政部部長・参謀総長)の名のもとに、一方的に反戦同盟の解散を命じた³⁸。」

1944年に蒋介石の岡野進への電報にも、日本人民を敵にしない姿勢があった。「延安にいる郭仲容連絡参謀が転送した岡野進先生の一月五日の電文から、日本軍部を倒すために共に奮闘したいとのことを知り、大変嬉しく思います。中国の抗戦は、中華民族の独立と自由の尊厳を維持するためのものであるだけでなく、貴国のすべての善良であり無辜である人民の解放のためのものでもあります。この努力が、中国の抗戦を擁護し、軍部に強迫され、侵略の道具となっている貴国の内外の軍民を覚醒させ、すみやかに立ち上がって自らを救うことを望みます。これによって、われわれの共通の目標は必ず達成できるでしょう³⁹。」

以上の記述から、国民党政府に共産党と同様の「2分法」思想があったことが分かる。その理由として次の3つの要素があると考えられる。

第1に、国共合作の影響である。前述したとおり、第一次国共合作の時期と同様に、国民党の政治部には、多くの共産党員が送り込まれた。特に日中戦争期の第二時国共合作において、対日プロパガンダ工作、捕虜扱い工作などの分野には、多くの共産党員が参与し、階級区分という共産主義的な考えが現れている。共産党の「2分法」思想の影響を受けている可能性が考えられる。

第2に、歴史上、国民党の共産党の間には緊密な関係があり、共産党員と国民党員の個人的なつながりもある。彼らの対日態度に関しても共通の面が多い。日中戦争が勃発する前、日本で留学していた多くの中国人留学生と一緒に日本で反帝国主義活動に参加していた。日本で活動したときの仲間らが、帰国するときにそれぞれ共産党部隊に入隊した人もいれば、国民党部隊に入隊した人もいる。共産党が創立される前には、一部の中国人留学生が孫文の革命組織に入り、その後それぞれ共産党と国民党に入党した。たとえば前出の共産党有力者の林伯渠は1913年に孫文の中華革命党に入党し、1921年に上海の共産主義小組に入った。共産党の呉

玉章も 1906 年に孫文の同盟会に入会し、1925 年に中国共産党に入党した。林植夫は日本留学期間中に孫文の同盟会に入会し、結局共産党に入党せずに新四軍で活動していた。第2章で共産党内の「知日派」を考察したが、その中、京都大学の経済学学者である河上肇に学んだ人物として、延安にある日本工農学校で教鞭をとった王学文がいた。それだけではなく、文学部の留学生で河上肇の講義を聞いたとされる李初梨も共産党の敵軍工作に深く携わった。京都大学で河上肇に学んだ周仏海は帰国後日本の傀儡政権とされる汪兆銘政権に参与していた。

第3に、共産党も国民党も中国文化の影響を受けているため、共通の中国伝統思想の影響の可能性があると考えられる。共産党のプロパガンダ資料にも、国民党のプロパガンダ資料にも、同じような記述がたくさんある。たとえば、「中国人が世界中で最も平和を愛する民族である」。日本の侵略に対して、「中国民衆も到底忍ぶことができなくなり、我々はやむを得ず侵略者に抵抗しているのだ」のような記述は、一種の攻心術で、「以德服人」を重視する中国の古典文化との関連のあると考えられる。

3.2.4 中国古典思想のなかの「2分法」

毛沢東の対敵プロパガンダ工作と敵軍工作部を考察するさいに、『孫子の兵法』、『三国志』などの中国古典とのつながりを考えることができる。ここでは中国古典の中の攻心術と捕虜政策・「2分法」思考法に触れて分析する。

中国共産党の対日「2分法」は中国古典思想と多くのつながりがある。そのつながりは、日中戦争期当時の当事者に関する記録から知ることができる。新四軍敵軍工作部部長を務めていた林植夫によると、中国の敵軍工作の始祖は、漢の時代の張良である。当時の「四面楚歌」は、まさに張良が項羽軍隊に対する心理戦のひとつである⁴⁰。『三国志』においては、「七擒孟獲」という話がある。諸葛孔明が7度にわたって敵である孟獲を捕らえ、また7回にわたって放免し、ようやく孟獲の帰順を獲得できた。1941年8月17日に、毛沢東が「七擒孟獲」を引用し偽軍捕虜政策を説明した。「偽軍捕虜に対して、原則的に殺さない」。「原則的には我慢強く七擒孟獲の政策を採る⁴¹。」それは毛沢東の捕虜政策における「捕虜釈放」政策の根拠の1つだと考えられる。

中国古代において、戦争が多発し、捕虜を大量殺害する事件も多くあった。『史記』の記録によると、紀元前260年(秦昭王47年)に秦と趙の間にあった長平の戦いで、40万の趙軍の投降者を、秦が生き埋めにして殺した(「尽坑殺之⁴²」)。さらに『史記』には「夜撃坑秦卒二十余人新安城南」との記載がある。つまり、長平の戦いの54年後、項羽が20万人の秦軍の捕虜を生き埋めにして殺した⁴³。捕虜を大量殺害する事件が多くあった一方で、捕虜優遇、敵の統治者と民衆を区分する見方などの事例ともある。

(1) 中国古典思想における攻心術

中国の古典思想において、儒家の道德思想によく出てくる「仁」「徳」で相手の心の征服する攻心術がある。

『孟子』によると、「以力服人者、非心服也、力不贍也。以德服人者、中心悦而誠服也⁴⁴」との記述がある。それは日本語で、「力を以て人を服する者は心服するに非ざるなり。力贍らざればなり。徳を以て人を服する者は、中心悦びて誠に服するなり⁴⁵」と解釈されている。つまり、武力ではなく、「徳」で相手の心を征服することがは真の征服となるというのである。

儒家のほかに、老子によると、「将欲去之、必固举之。将欲奪之、必固予之」との論点があり、「追い出そうとするなら、まず味方に引き入れる。取ろうとするなら、まず与えてやる⁴⁶」との趣旨の記述である。これらは、道義で相手を征服すべきとするもので、日中戦争期の共産党の「2分法」思想と関連していると考えられる。

(2) 古代經典から見る捕虜政策

儒教の基本經典・五經あるいは十三經の1つである『詩經』には、戦争に関する記載が多く、当時の捕虜政策と関連する記載もある。『詩經・小雅・出車』には、「執訊獲醜、薄言還歸」との記載がある。戦勝を歌うこの詩では、凱旋している軍隊が捕虜を連れてきた晴れ姿を記載している。趙月恒の分析によると、周の時代の捕虜政策は、服従者を殺さずに訊問を加え、服従しない者を殺し、左耳をとり功績の記録にする、との政策だった⁴⁷。さらに、『詩經・大雅・皇矣』には、「執訊連連、攸馘安安」(訊を執ふること連連たり、馘する攸安安たり)⁴⁸との記載があり、捕虜を訊問する場面の記載である。訊問するさい、激しい訊問ではなく、ゆっくりとした訊問を行い、ゆったりとした気分にし、帰順を期待する。殺された敵の耳を切り取るときも、捕虜の心理状態を考慮し、乱暴な動作を避ける。

『詩經・大雅・常武』には、周宣王がリードした征伐を記録し、「仍執醜虜、截彼淮浦、王師之所」(仍いて醜虜を執ふ、截たる彼の淮浦、王師の所)⁴⁹との記載があり、捕虜を殺さずに、王師のところに護送する当時の捕虜政策が分かるだろう。

中国古代兵書の『三略』には、『三略・上略』には、「帰者招之、服者居之、降者脱之」⁵⁰との記載があり、「帰するものをば之を招き、服するものをばこれおを活かし、降るものをば之を脱す」⁵¹と日本語の解釈がある。つまり、「帰順者を招き寄せ、征服されたものを適切な職位に置き、投降者を寛大に処分する」との趣旨であった。『荀子・議兵』には、「服者不禽、格者不赦、犇命者不獲⁵²」との記述があり、戦わずに退陣した者は捕らえず、抵抗者は見逃さず、帰順者を捕虜にしない、との趣旨である。

(3) 古代兵書から見る「2分法」

中国戦国時代に書かれた『司馬法』は中国歴史において重要な兵書である。その戦争観はその後の中国歴史で重要な影響力を発揮した。『司馬法』では、「仁義」が強調されている。『司馬

法・仁本第一』には次のように戦争観が表れている。「古者以仁爲本，以義治之。之謂正。正不獲意則權。權出於戰。不出於中人。是故殺人安人，殺之可也。攻其國，愛其民，攻之可也。以戰止戰，雖戰可也。故仁見親，義見説，智見恃，勇見方，信見信。」『国訳漢文大成』は次のように日本語で解釈している。「古は仁を以て本と爲し，義を以て之を治むるを，正と謂ふ。正，意を獲ざるときは權す。權は戰より出づ。中人より出でず。是故に人を殺して人を安んぜば，之を殺すも可なり。其國を攻て，其民を愛せば，之を攻むるも可なり。戰を以て戰を止めば，戰ふと雖も可なり。故に仁は親まれ，義は説ばれ，智は恃まれ，勇は方せられ，信は信ぜらる⁵³。」「親，義，智，勇，信」との戦争原則がまとめられた同時に，この中では，相手国を攻撃するさい，その国の民を愛さなければならないと規定している。これは，相手国の政權と民衆を分ける一種の「2分法」ではないかと考えられる。

さらに，『司馬法・仁本第一』にはつぎのような記述もある。「入罪人之地，無暴神祇。無行田獵。無毀土功。無燔牆屋。無伐林木。無取六畜，禾黍，器械。見其老幼，奉歸勿傷。雖遇壯者，不校勿敵。敵若傷之，醫藥歸之⁵⁴。」『国訳漢文大成』では，次のように日本語で解釈している。「罪人の地に入りて，神祇を暴すことなかれ。田獵を行ふことなかれ。土功を毀つことなかれ。牆屋を燔くことなかれ。林木を伐ることなかれ。六畜，禾黍，器械を取ることなかれ。其老幼を見れば，奉じ歸りて傷ふことなかれ。壯者に遇ふと雖も，校せずんば敵することなかれ。敵若し之を傷けば，醫藥して之を歸らせよ⁵⁵。」つまり，「敵地に入ると，宗廟の位牌を冒瀆しない。狩を禁止，水利工事を破壊しない。家屋を焼却しない。林木を伐採しない。庶民の家畜，食糧，器具を略奪しない。老人と児童を殺害せずに家に戻す。少壯者であっても，抵抗しない限り敵にしない。負傷したものに治療を与え家に戻す」という趣旨の内容である。「老人と児童を殺害せずに家に戻す。少壯者であっても，抵抗しない限り敵にしない」などの内容から，敵軍の兵隊と敵国の一般民衆を区別する「2分法」の考えがあると分かるだろう。

これらの古典資料から，古代中国において，すでに投降者を殺さずに寛大に扱い，相手国の庶民と統治者を区分して見る思想があった。

(4) 毛沢東と古代兵書

1936年にアメリカ記者のスノウの取材を受けたとき，毛沢東は，少年時代中国の古い小説，特に造反関係の小説が好きだったといった。『岳飛伝』『精忠伝』，『水滸伝』，『隋唐演義』，『三国志』，『西遊記』などを読んだという。「私たちは多くの話をほとんどそらでおぼえ，何度も何度もそれを論じ合った」「私は感じやすい年ごろに読んだこういう本によって多くの影響を受けたと信じている」と毛沢東は語ったという⁵⁶。

1935年の遵義会議では、毛沢東は凱豊に「あなたはマルクスレーニン主義が分かっているのか？あなたが読んだのは『三国演義』、『孫子の兵法』くらいだろう」と批判された。1962年1月12日に、毛沢東が日本社会党代表団と会見するさいに、「あの時、私はその中の一冊『三国演義』しか読んだことなく、『孫子の兵法』は当時まだ読んだことない」と回想している⁵⁷。

谷峰の考察によると、1936年から1938年の間、毛沢東は系統的に兵書を読んでいた⁵⁸。1936年10月22日に、毛沢東は葉劍英宛の手紙で、「買ってくれた軍事書籍の多くは適用できないものだ。その多くは戦術技術に関するもので、私たちが欲しがっているのは戦役指揮と戦略関係の本で、この基準で何冊か買ってきてくれ。『孫子の兵法』を一部買ってくれ」と指示している。⁵⁹毛沢東が1960年に回想した内容によると、「その後陝北に来て、私は8冊の本を読んだ。『孫子の兵法』を読んで、クラウゼヴィッツの本を読んで、日本人が書いた軍事操典も読んで、ソ連人が書いた戦略論も読んで、複数兵種作戦の本も読んだ⁶⁰。」兵書だけではなく、毛沢東は『三国志』から多くの軍事知識、戦争知識を得て、演説や文章ではよく『三国志』の事例を引用していた⁶¹。

¹ 傅啓学『中国外交史 下冊』台湾商務印書館 1972年4月改定一刷、2007年3月改定九刷、654頁。

² 『共産軍ノ政治部ニ就テ』アジア歴史資料センター、C04120650600

³ 王謙「郭沫若與国民政府三庁」『文史精華』2004年第4号、45頁。

⁴ 前掲「郭沫若與国民政府三庁」47頁。

⁵ 周韜、李彩素「論中国共産党與抗戰時期的国民政府政治部第三庁」『湖南科技大学学報(社会科学版)』2010年3月、113頁。

⁶ 周韜、李彩素「論中国共産党與抗戰時期的国民政府政治部第三庁」、王謙「郭沫若與国民政府三庁」などの資料に基づいて作成した。

⁷ 十大綱領は「中国共産党抗日救国十大綱領」の略称。1937年8月22日から25日にかけて開催された洛川会議において、中国共産党が発表した抗日を呼びかける綱領である。その内容は「日本帝国主義打倒」、「全国軍事総動員」、朝鮮・台湾及び日本国内の労農人民を聯合し日本帝国主義に反対する「抗日的外交政策」など十綱がある。

⁸ 文天行『周恩来與国統区抗戰文芸』四川省社会科学院出版社 1985年、26頁。

⁹ 呉士余、劉凌『中国學術名著大詞典(近現代卷)』漢語大詞典出版社、2001年、80頁。

¹⁰ 郭沫若等『郭沫若佚文集(1906-1949)』四川大学出版社、1988年、7頁。

¹¹ 上海社会科学院文学研究所編『三十年代在上海的「左聯」作家(第1卷)』、上海社会科学院出版社、1988年、62-64頁。

¹² 前掲「論中国共産党與抗戰時期的国民政府政治部第三庁」113頁。

¹³ 前掲「郭沫若與国民政府三庁」49-50頁。

¹⁴ 康大川 著、中古苑生 訳「私の抗日戦争——在華日本人民反戦同盟とともに」『中国研究月報』(470)1987年4月、33頁。

¹⁵ 前掲「私の抗日戦争——在華日本人民反戦同盟とともに」34頁。

¹⁶ 『日本人民に告ぐ』アジア歴史資料センター、B05014003900、6頁。

¹⁷ 『長谷川テル』編集委員会『長谷川テルー日中戦争下で反戦放送をした日本人女性ー』、せせらぎ出版、2007年8月15日、115頁。

¹⁸ 「我加強対日広播電戦」『解放日報』1941年12月12日3面。

¹⁹ 中国第二歴史档案館、《董頭光彙報國際宣伝処派赴日本揭露南京大屠殺真相致蒋介石密呈》、《民国档案》、2000年第4号、7頁。

²⁰ 『抗戰時期西南的文化事業』成都出版社 1990年、82頁。

²¹ 江涛、劉芳『蒋介石宋美齡在重慶的日子』華文出版社 2003年、95頁。

-
- 22 在カルカタ(シムラ)総領事吉田丹一郎『支那側宣伝関係第三卷・ラングーン, アジア歴史資料センター, B05014004500
- 23 『日本国民に敬告す』, アジア歴史資料センター, B05014004500, 8頁。
- 24 在河内総領事宗村丑生『支那側宣伝関係第三卷—仏領印度支那』アジア歴史資料センター, B05014003900。
- 25 在バタヴィア総領事馬瀬金太郎『支那側宣伝関係第三卷—バタヴィア』アジア歴史資料センター, B05014004100。
- 26 在カルカタ(シムラ)総領事吉田丹一郎『支那側宣伝関係第三卷・ラングーン』アジア歴史資料センター, B05014004500。
- 27 温賢美『抗戦時期的国共関係』北京出版社, 1997年, 121頁。
- 28 前掲『日本人民に告ぐ』10-11頁。
- 29 前掲『日本人民に告ぐ』11頁。
- 30 アジア歴史資料センター, B05014003900。
- 31 『日本国民に告ぐ』アジア歴史資料センター, B05014003900, 1頁。
- 32 前掲『日本国民に告ぐ』3-4頁。
- 33 前掲『日本国民に告ぐ』4頁。
- 34 前掲『日本国民に告ぐ』5頁。
- 35 前掲『日本国民に敬告す』, 6頁。
- 36 前掲『日本国民に敬告す』, 7頁。
- 37 前掲「私の抗日戦争——在華日本人民反戦同盟とともに」, 33頁。
- 38 前掲「私の抗日戦争——在華日本人民反戦同盟とともに」, 36頁。
- 39 加藤哲郎『野坂参三・毛沢東・蒋介石』往復書簡『文藝春秋』2004年6月号, 345-346頁。
- 40 陳子谷, 「懐念林植夫同志」, 『革命人物』1985年第S1号, 38頁
- 41 前掲書, 『中国共産党軍隊政治工作七十年史』(2), 168頁。
- 42 司馬遷『史記』岳麓書社, 1988年, 564頁。
- 43 司馬遷『史記』岳麓書社, 1988年, 81頁。
- 44 黄俊傑, 『孟学思想史論』(第1卷), 東大図書公司, 1991年, 441頁。
- 45 鶴田久作『国訳漢文大成』(経子史部第1卷), 国民文庫刊行会, 大正12年4月25日3版発行, 「国訳孟子, 公孫丑章句上」56-57頁。
- 46 守屋洋, 『中国四〇〇〇年の智恵 賢者たちの言葉』PHP研究所, 2009年2月12日, 128頁。
- 47 趙月恒, 「『詩経』与周代的捕虜政策」, 『文史知識』1996年8号, 30頁。
- 48 鶴田久作『国訳漢文大成』(経子史部第三卷, 詩経), 国民文庫刊行会, 大正13年3月, 850頁。
- 49 前掲書, 『国訳漢文大成』(経子史部第三卷, 詩経), 972頁。
- 50 謝祥皓『中国兵学: 漢唐卷』山東人民出版社, 1998年, 169頁。
- 51 鶴田久作『国訳漢文大成』(経子史部第10卷), 国民文庫刊行会, 大正13年2月5日3版発行, 「三略・上略」3頁。
- 52 何志華, 朱国藩, 樊善標編著『「荀子」與先秦兩漢典籍重見資料彙編』, 香港中文大学出版社, 2005年, 137頁。
- 53 鶴田久作『国訳漢文大成』(経子史部第十卷), 国民文庫刊行会, 大正13年2月5日3版発行, 「司馬法・仁本第一」1頁。
- 54 趙明義『当代国際法導論』五南図書出版公司2001年9月出版1刷, 23頁。
- 55 鶴田久作『国訳漢文大成』(経子史部第十卷), 国民文庫刊行会, 大正13年2月5日3版発行, 「司馬法・仁本第一」4頁。
- 56 エドガー・スノウ著, 宇佐美誠二郎訳『中国の赤い星』築摩書房, 1964年9月20日, 95頁。
- 57 邵維正『文図並説中国共産党80年大事聚焦』(第1卷)解放軍出版社, 2001年, 187頁。
- 58 谷峰「毛沢東と兵書」『毛沢東思想研究』第20巻第5号(2003年9月)119頁。
- 59 『毛沢東書信選集』人民出版社, 1983年, 81頁。
- 60 薛沢石『跟毛沢東学史』赤旗出版社, 2000年, 167頁。
- 61 毛応民「出神入化縁自酷愛—毛沢東与『三国演義』」『党史縱横』1995年2号, 10頁。

第4章 日本人捕虜教育と反戦組織

4.1 日本工農学校と捕虜教育

中国共産党の捕虜政策と捕虜教育の準備工作を考察した上で、本節では実際の日本人捕虜教育工作を考察する。日本人捕虜教育といえば、日本工農学校がもっとも重要な研究対象となる。

延安工農学校については何度も延安にある学校の旧跡に足を運んだ。延安工農学校での教育工作は、中国共産党の対日プロパガンダ政策と「2分法」の効果を見るには欠かせない要素である。この部分では、まず日本人捕虜の概況を考察し、それから延安日本工農学校と各地の分校を考察する。同時に、日本軍捕虜に対する具体的な教育手段を明らかにする。

4.1.1 日本人捕虜の概況

1937年の平型関の戦いと1940年8月の百団大戦で、中国共産党は戦場で捕虜にした日本軍の将兵は徐々に増加した。1941年5月には1800人にも達した¹。1943年12月まで八路軍が捕虜にした日本人は2407名で、その内2085名は日本軍隊に戻った²。1945年3月に、八路軍が公布した捕虜についてのデータは以下の通りである。

	捕捉数	投降者数	合計
1937.9—1938.5	124	/	124
1938.6—1939.5	385	/	385
1939.6—1940.5	689	19	708
1940.6—1941.5	326	12	338
1941.6—1942.5	284	16	300
1942.6—1943.5	296	23	319
1943.6—1944.6	303	45	348
合計	2407	115	2522

表：日本人捕虜の人数推移³

日本人捕虜人数の増加につれ、日本共産党指導者である野坂参三が提案し、中国共産党中央委員会と中央軍事委員会が協議し、1940年10月に延安で捕虜教育学校を創立することが決まった。学校は八路軍総政治部の指導を受け、校訓は「平和、正義、友愛、労働、実践」であった。延安で誕生した「延安日本工農学校」は日本軍捕虜を教育する専門学校となった。1940年から1945年までの間では、500人くらいの日本軍捕虜はここで中国共産党の教育を受けた。一部の者は八路軍、新四軍また日本人在中反戦連盟に参加した⁴。

4.1.2 日本工農学校とその分校

(1) 延安日本工農学校

「俘虜を優遇し、敵を友に転化させる」政策は延安日本工農学校で具体的に執行された。俘虜を優遇することと敵軍を瓦解することはつながっている。敵軍捕虜を教育し、立場を転向させてからまた捕虜を利用して、敵軍に向けてプロパガンダを行わせて、敵軍を瓦解させた。1940年6月に公表された『総政治部が日本軍捕虜工作に対する指示』によると、「自発的に投降してきた人は、真相を明らかにし、強制的に返すことを一律に許さない。我々のために敵軍工作を協力してもらおうべきだ。」「今までの捕虜工作が難しかった原因は、協力してくれる日本人はいなかったからだ。もし、同調してくれる捕虜を何人か訓練できたら、今後の捕虜工作と一般敵軍工作に役立つ⁵。」これらの政策は、延安日本工農学校が創立される政策背景となった。



筆者が2007年10月に撮影した延安工農学校の旧跡

現在、延安日本工農学校遺跡の記念碑には、以下の内容が刻まれている。「日本工農学校は日本反戦学校ともいい、1940年に八路軍政治部が創設し、1945年抗日戦争勝利後撤廃した。学校は相前後して500数名の学生を育成した。主には我が軍が捕虜にした、またはわが軍に投降した日本兵士と下級将校である。校長は岡野進で、副校長は趙安博、李初黎だった。現存するのは6軒の瓦ぶき家(もと教室)および近くの窑洞⁶である⁷」。学校は宝塔山の下にあり、16の窑洞と1軒の平屋があった。校長の岡野進の本名は野坂参三で、副校長が趙安博で、王学文、何思敬、李初梨、廖体仁、江右書などの教員がいた⁸。1943年4月以後、敵軍工作部副部長の李初梨が副校長を兼任した⁹。

工農学校の発足について、1940年と1941年との2つの説がある。趙安博の回想によると、「日本工農学校は1941年5月に開校し、1945年8月の抗日戦争が勝利するまでの4年数カ月間に、日本軍からやってきた数百名に上る学生を育成した。彼等は中国人民と共に、日本軍国主義が起こした侵略戦争に反対して闘い、広範な中国人民と深い友情を結んだ」という。¹⁰中国共

産党機関紙『新中華報』の1941年5月8日付の報道によると、当学校を創立する目的は「日本兵士に対する政治教育を実施」することである。「去年11月20日、東方人民革命史上において重要な位置を占めている日本工農学校はもうすでに予定を繰り上げて開講した。」この報道の中では、学校の場所と在学の人数を明らかにしていない。「日本工農学校の校舎は、延水のほりにある××山の下にある。××人の優秀な日本工農子弟は立派なヤオトンの中で楽しく自由に生活している」という¹¹。

上述した『新中華報』は1941年5月15日に廃刊とされ、1941年5月16日に『解放日報』が創刊され、共産党の機関紙となった。創刊当日の1941年5月16日付の『解放日報』の報道によると、1941年5月15日午後6時から夜の12時まで、延安日本工農学校開校式典は八路軍大礼堂で行われた。日本工農学校生徒全員、朱徳総司令および各界代表2000人が出席。会場には「全世界無産階級聯合起来(万国のプロレタリア、団結せよ)」の横幕が飾られている。朱徳の演説には、「近い将来、日本工農学校の生徒の皆さんは、帰国して日本の『八路軍』を作ってほしい。中国の八路軍と連携し、共同で中日人民の解放事業のために奮闘しよう」とせいとを鼓舞した。在華日人反戦同盟延安支部の日本人代表は、日本ファシズムと徹底的に戦うと誓った。日本工農学校の生徒が日本語で演劇『前哨』を演じたという¹²。

日本工農学校開校式典について、劉国霖の回想録で確認できた。それによると、敵軍工作訓練隊から卒業した劉は、総政治部敵軍工作部の付属機関である敵軍工作幹部学校の一員として、日本工農学校の開校式典に出席した。会場に飾られた横幕の「万国のプロレタリア、団結せよ！」は劉国霖が書いたという。劉はその後の日本語劇『前哨』でエキストラとして登場した。「日本人捕虜と同じ部隊で劇を演じるのは、奇妙な感覚だった」と劉の感想だった¹³。

以上の資料から、日本工農学校は1940年にすでに開講し、1941年に正式に開校式典が行われたことがわかる。発足当初、学校には11人の日本人学生しかいなかったが、1945年8月になると、300数人に達した¹⁴。

1942年5月26日に延安工農学校を見学した劉菊初によると、学校には40人の日本人がいた。科目は中国語、社会科学、時事、日本問題、文化科目などがある。学生のほとんどは中国語ができる。劉菊初は学生の松本、交山、南八雄と話した。家に帰りたいかと聞かれたら、日本人は「帰りたいが、日本帝国主義が敗北したら帰る」と答えた。学校の壁には、王家祥が書いた「中日人民聯合起来、反对日本帝国主義」とのスローガンが飾られている¹⁵。

延安の日本工農学校は各地にある日本人反戦組織と緊密なつながりがあった。1941年5月19日付の『解放日報』には覚醒連盟が送った日本工農学校開校祝電が掲載され、学校の創立は、「史上初めての試みで、東方民族解放史上の偉大な1頁である同時に、中日人民が共同の敵の日本帝国主義との闘争の中、提携する新しい標識となった。抗戦3年以来、中共の正しい政策およびその着実な実行によって、何百人の日本被圧迫工農兵士を革命道路に導いた。今日、日本工農学校の設立は、将来日本革命運動のために日本人幹部を育てることができる」と指摘している。署名は、杉本一夫、坂田太郎、高木敏雄、松井英夫であった¹⁶。

敵軍工作訓練隊を考察するときにすでに引用したとおり、1944年に延安を取材したアメリカ記者であるホワイトは、次のように記録している。延安では、政治は何よりも重要であり、延安は思想の工場である。前線戦区は自立していて、延安は前線に補給を行わない。延安から各前線に送られるのは、思想を伝達できる「幹部」だけである¹⁷。延安の工農学校で教育を受けた日本人は、共産党の各根拠地に送られ、日本軍向けのプロパガンダ工作に従事させたり、工農学校の分校で活動させたりしていた。



「国際友人と日本捕虜学校の学生」とのタイトルされている写真(1942年)¹⁸。後ろの「祝賀会場」の左側に、「日本軍部打倒せよ」「在華日人反戦同盟…」「中日両国人民…為打倒日本…」と書かれていることが分かる。手前の列左から3人目メガネをかけている人はイギリス人の Michael Lindstay 氏。写真は 1942 年に撮ったとされている。1942 年から 1944 年の間、Michael Lindstay は晋察冀地区で八路軍に無線電信の技術を協力してあげていたため、この写真も晋察冀で撮った可能性が高く、反戦同盟晋察冀支部の可能性が高いだろう。

(2) 日本工農民学校晋西北分校

1943年6月30日の『解放日報』の報道によると、日本工農民学校晋西北分校は7月7日「抗戦6周年記念日」の日に開業式典を行うと決まった。校長は茂田江、隊長は永井二である。¹⁹茂田江は延安工農学校からの卒業生で、同級生的小林と一緒に晋西北に送られ、日本工農民学校晋西北分校の創立任務を命じられた。小林は工農学校で講義を担当する同時に、反戦同盟晋西北支部の工作も担当している²⁰。1945年初めの頃西北分校に来た高山進の回想によると、終戦のとき、この学校に15人くらいの日本人がいた。校長は茂田江純で、自衛隊隊長は永井だった²¹。

高山進の回想によると、学校は山西省西北部の黄河のほとりナツメ園に囲まれた部落の一隅にあった。茂田江、永井のほかの2、3の延安より派遣された同志を教職員として、そのころ戦線から到着した20数名の日本兵士(捕虜)が生徒となり発足した²²。

晋西北分校の科目は主に政治教育であり、政治常識、日本問題、時事、中国語、修養講座との5科目がある。校長の茂田江と反戦同盟支部の小林氏が講師を担当している。中国語だけは軍区敵工部の同志が教授している²³。

整風運動の最終段階に発足したこの学校では、自己批判、他人批判と洗脳が注目される。今までの自分への批判、他人への批判、頭の中の「垢」の洗浄は、「進歩」の現われとされた。1943年8月27日付の『解放日報』の報道によると、冀中から来た三蒲同志はもうすでに大きな進歩を実現した。八路軍の指導の下で永遠にがんばっていきたくてみんなの前で示している。たとえどんな困難があっても、彼は八路軍を離れないという。討論会では、彼の発言はとても情熱的だ。当初彼は自分のことだけを厳しく批評していて、他人に対しては遠慮して寛容だった。今、彼はもうすでに他人の欠点を厳しく指摘できるようになってきた。今までの認識を否定できた場合は、彼らにとって一番楽しいときとなるのだ。最近、「共産党の自己批評の武器は、自分の進歩を進めるため、われわれも使える」と提案する人がいた。したがって、全学校の政治生活はいつそう緊張してきた。すべての人がすべてのチャンスを捕まえて、頭の中の垢をきれいに洗い、新しい思想で自分を武装させる。この前、彼らは「整風」報告で自分の思想改造を加速させようと提案した²⁴。

(3) 日本工農学校山東分校

1944年11月2日付の『解放日報』によると、1944年10月1日に、日本工農学校山東分校および朝鮮革命軍政学校の創立式典が行われた²⁵。校長は本橋中である²⁶。

工農学校学生と現地農民との相互扶助の関係が宣伝されている。1944年12月30日付の『解放日報』によると、日本工農学校山東分校と朝鮮軍政学校山東分校の学生は、民衆団結仕事を重視しているという。それまでの1カ月間、民衆と11回合唱活動を行った。住まいを提供してくれる農家にてんびん棒で水を運んであげる制度も作られている。沂水日本商民会会長だった岡田は40歳過ぎだが、水を運んであげている。ある村は日本工農学校山東分校と朝鮮軍政学校山東分校両校に250個のタマゴ、400個の柿を提供した²⁷。

1945年2月4日に、日本工農学校山東分校が第1期生の卒業式と第2期生の入学式が行われた。山東軍区司令員の羅榮桓が式典に出席し、日本工農学校は形式的には東京の大学に及ばないが、中身的にも実質的にはあちらの大学より熱烈な演説をしている²⁸。1944年10月に入学したとき、70%の学生が来たばかりの捕虜だった。4カ月の学習を経て、第1期生から川田、□青、山野、□川、青木、田中と6人の行軍参加の模範生が生まれた。「在校生は発足当初の43人から1945年2月現在の83人となった」と報道している²⁹。

山東軍区の下で魯中軍区、魯南軍区、渤海軍区においても、それぞれ日本工農学校魯中分校、魯南分校、渤海分校が創立された。山東分校は日本工農学校山東総分校に変身した³⁰。

(4) 日本工農学校華中分校

1942年5月に、華中にある新四軍政治部敵軍工作部は日本捕虜学習班を行ったことがあり、1944年2月6日、正式に日本兵士訓練班が発足し、その後、日本工農学校華中分校に改称した³¹。

滝沢三郎が日本工農学校華中分校の校長に就任し、教育主任は香河正男で、総務主任は岡崎克美、教員は加藤肇、遠藤信一郎がいた。政治指導員は山本一三だった。学校は各地から送られてきた日本人捕虜など400人の学生がいた。学校は1945年12月から開校し、社会発展史、中国問題、日本問題などの科目があった。社会発展史は滝沢三郎が担当していた³²。教務主任だった香河正男の回想によると、1945年10月ごろ、淮陰に日本工農学校華中分校が設立され、校長は滝沢三郎で、生活主任は岡崎克美、中国問題教員は加藤肇、日本社会史担当教員は遠藤信一郎という陣容だった。500人の日本人捕虜を収容していた³³。校長の滝沢三郎は延安から来た。新四軍敵軍工作部の李亜農の指導で、洪沢湖北部にある淮陰で開校したが、特に式典などはなかった³⁴。1999年に日本で直接滝沢三郎に確認した孫金科によると、華中分校は具体的に淮陰市宝応県にあり、蘇中公学構内にあった。20隊と呼ばれ、国際兄弟隊とも呼ばれた。隊内には43人の学生が実在し、12人の朝鮮人と31人の日本人がいた。すべての日本人が解放連盟の盟員だった。³⁵

OSSの日本人民解放連盟組織図には、日本工農学校晋察冀分校も記載されているが、それに関する資料が極めて少なく、ここでは省略する。

4.1.3 日本軍捕虜に対する教育手段

(1)「2分法」による階級意識の強化

日本工農学校が創立される前に、中国共産党はすでに日本軍捕虜に対して具体的な政策と措置を行った。1940年6月に公表された『総政治部が日本軍捕虜工作に対する指示』によると、「捕虜を訓練するとき、多くの具体的なことをやらせるべきだ。例えば、敵軍工作部幹部の日本語教育、宣伝品の下書き、新しい捕虜の教育、自発的に日本国内の親友に手紙を出すことなどがある。」「捕虜を訓練するとき、簡単な内容から深い内容へ、徐々に彼らの階級意識を啓発すべきだ。最初からマルクス・レーニン主義の重要著作を教材とすべきではなく、長期的、漸進的な教育計画がなければいけない³⁶。」日本軍国主義の影響を受けた日本軍兵士は、捕虜になった瞬間、普通非常に複雑な気持ちであった。八路軍に対して、「極悪非道、残忍無比の野蛮人」や「日本軍兵士を捕らえたらすぐ殺す」などの印象があり、それは捕虜になった日本軍兵士に恐怖を感じさせるのであろう。一方、軍国主義の影響で、戦争を「聖戦だ」と信じ、天皇のために死することを最高の道徳とし、殺されても捕虜にならないという「捕虜否定観」も普遍的にあった。

そのような捕虜の気持ちを和らげるため、新しく捕虜になった人には『日本の兵士諸君へ』というパンフレットが配られる。それは日本人捕虜の複雑な気持ちや不安を解消するためであり、捕虜教育の第一歩であった。

パンフレットは主要な内容は工農学校が成立される前にはもうすでにあつた。1937年9月25日に出来た『八路軍が日本の兵士諸君へ』は、日本軍を瓦解させる工作に使われてきた。その

中には、「日本軍閥に銃剣の向きを変えよう」、「日本工農を解放するため、中国人民を解放するため、助け合って奮闘しよう」など「2分法」に基づいた記述が多く書かれている。その後、『日本の兵士諸君へ』は内容が豊富になり、また具体的になった。

延安工農学校で配られた『日本の兵士諸君へ』という宣伝パンフレットは、日本軍の一般兵士が分かる簡単な日本語で書かれた。八路軍は捕虜を敵として扱わない、捕虜を殺さないなどの内容である。「銃剣をすてた君は、もはや日本の兵隊ではなくて、入隊前の一般人である。つまり勤労者にかえったわけだ。」日本軍にかえりたい人には「出来るだけの便宜をはかる」と書かれている³⁷。中国共産党は日本兵士の出身をよく知っている。それに基づいて「2分法」、「敵から友へ」などの具体的な洗脳攻勢を行った。1944年11月15日に学校の98人の学生を対象に実施させた調査によると、農民、漁民、鉱山労働者などの勤労者は63人、商人、店員は19人、会社員は8人、その他も8人であった。教育程度からみると、小学校卒は80人で、中学校は14人、大学また短大は4人であった³⁸。これらの事実を元に、中国共産党は捕虜と日本帝国主義者を区分して扱うのである。即ち、日中戦争の主な責任者は一部の軍国主義者であり、日本軍兵士は勤労者階層の出身で、みんなはだまされ強制され参戦したので、彼らも戦争の被害者である。「2分法」は延安日本工農学校の捕虜教育の重要な指導理念でもあった。

1944年11月21日、アメリカ軍事視察団は日本工農学校を視察した。エマーソンによると、「工農の学校の学生の思想を転換させたのは、次の要素である。第1に、彼らは八路軍が捕虜を殺さないことと捕虜を虐待しないことが分かる。第2に、教育を受け、共産党の立場に立っている日本人捕虜と出会い衝撃を受ける。第3に、八路軍の優遇。第4に、外部の情報との接触により、日本が敗戦するかもしれない、新たな政府が現れるかもしれないと認識する。最後に、工農学校の教育により転向する³⁹。」

(2) 娯楽活動など柔軟な教育手段

娯楽などの交歓活動は、日本人の警戒心を緩める手段となった。工農学校で教育を受けた小林清朝の回想によると、いつもの授業と討論以外に、皆さんはよく一緒に歌を歌ったり、踊ったり、スポーツ活動をしたり、パーティーをしたりしていた。「これらの活動のおかげで、我々異国にいるときの寂しさをあんまり感じていなかった。」授業の余暇でやっていた活動の中、一番盛り上がるのが野球だった。「我々はいつも宝塔山のふもとで、或は延河の練兵場で、簡単にベースラインを引いて、楽しく野球をやっていた。敵工部と敵軍幹部学校の同志たちは、野球のルールを興味深く聞いていた。その後、彼らも思い切ってバットを持って野球を勉強し始めた。時には、散歩している中央の上級指導者たちは、野球をやっている私たちを興味深く観ていた⁴⁰。」

野球の話は1942年1月4日付の『解放日報』でも確認できた。『熱烈に新年を祝う』という特集の中で、延安にいる日本人が野球をやる場面が掲載されている。「公共運動場には各種の球技が行われていたが、一番注目されるのはやはり野球だった。これは日本工農学校の生徒たちの独特の娯楽だ。日本兄弟たちは、自由にしゃべり笑い、楽しく野球をやっている。皆勢いよく、上

手くやっている。日本国民は野球をやって体を鍛錬することが一番好きなようだ。しかし、戦争勃発後、無数の野球愛好者はファシズム軍閥に無理やりに送り込まれ中国に來た。野球の腕は無駄になった⁴¹と報道している。反戦同盟晋察冀支部が出した第 15 号の『日軍の友』(1942 年 4 月 11 日付)には、当支部創立 1 周年の記念大会の予告が掲載され、そのプログラムの 1 つは「野球大会」だった⁴²。



延安日本工農学校の学生とされる人たちが延河付近で野球をやっている様子⁴³。

高山進の回想によると、日本工農民学校晋西北分校においては、野球、バレーボール、バスケットボール、ピンポンなど各種のスポーツが行われた。八路軍には野球がなく、日本人たちはグローブ、ミット、球にいたるまで自分でこしらえて使った。八路軍の司令官から、体育上非常によい運動だから兵に教えて欲しいと指導を依頼されることもあった。文化娯楽では、囲碁、将棋、トランプなどの室内娯楽や、各出身地の民謡や流行歌、浪曲など、のど自慢を競う演芸会が行われ、八路軍の将兵を招待し夜のふけるのも忘れることもあったという⁴⁴。



アジア歴史資料センターで発見した 1942 年 6 月 30 日付の『実話報』には、「日本人捕虜は八路軍で楽しく生活している。これは彼らの娯楽活動の 1 つ(弾棋⁴⁵)」を説明と付けている写真が掲載されている⁴⁶。

写真展。スポーツのほか、写真展覧も教育の手段の 1 つとなった。1944 年 12 月 1 日付の『解放日報』によると、11 月 25 日から、日本工農学校でアメリカ写真展が行われた。「日本軍部が宣伝

している赫々たる戦功は、うその宣伝に過ぎないことを、日本学生に認識させた。」その写真の多くは、太平洋戦場でのアメリカの戦果と日本の敗勢を意味する写真である⁴⁷。

(3) 参与意識を助長する教育

日本工農民学校では、日本人捕虜に対する教育が巧妙に行われた。選挙への参加、或いは議員への立候補などを通じて、自己実現が可能な教育が行われた。

生産活動。1944年12月24日付の『解放日報』によると、日本工農学校は本来、生産任務を中央に免除されているが、学校の学生は農業、紡績、大工との3組に分けて積極的に生産活動を行った。66石以上の粟相当の生産量を実現したと報じている⁴⁸。

選挙。1941年10月2日付の『解放日報』によると、敵軍工作訓練隊日本語教員をつとめている森健は辺区参議員候補者になった⁴⁹。森健の選挙演説は日本語で行われ、趙安博はその通訳をつとめた。森健は無事当選した⁵⁰。1941年11月3日付の『解放日報』は「辺区参議員紹介」とのコラムで森健の演説理念と経歴を詳細に紹介した⁵¹。同時に、日本工農学校の中小路静男は延安市参議会議員に当選した。彼らは直接民主政府の活動に参加した⁵²。

1945年1月14日付の『解放日報』の報道によると、1月6日から7日まで、日本工農学校では、「模範学習者選挙大会」が行われ、A組の春日、B組の大坂、C組の光江が当選した。その基準は、「努力して学習し、習得した理論を日常生活に運用し、工作与生産を両立できること」とされていた⁵³。模範選挙活動において、当選された人はもちろん、投票した人にも、自分には決める権力があると思わせることができただろう。当選された3人に『解放日報』に登場させたこと自体も、教育手段の1つであると考えられる。

校舎建設。1945年4月15日付の『解放日報』の報道によると、そのときまで半年前から、日本工農学校の学生人数が急増し、旧校舎は足りなくなった。日本籍の学生が「学校は自分で建設する」と申し出て提唱し、洞窟作り組、石作り組、大工組、左官組に分けて作業に当たった⁵⁴。

自主教育。1942年に、中小路静男と大山光義は教育幹事に任命された。1943年になると、森健は教務主任となり、高山進は教育幹事になり、中小路静男は行政工作をつとめ、前田光繁は政治工作をつとめていた⁵⁵。そのほかに、辺区政府の政策も日本語に翻訳され、工農学校に伝達されて学生に討論させた⁵⁶。

(4) 新古捕虜の相互教育

来たばかりの捕虜と転向した捕虜の間には、意識・情報などのギャップと立場の矛盾が存在しており、それは捕虜教育に利用されている。古い捕虜との交流などを通じ、八路軍の捕虜優遇の実態を見せ、ある程度転向を実現させた。八路軍の捕虜になった小林清の回想録である『在中国的土地上』ではその過程を詳しく記載している。さらに小林の後に捕虜となった日本兵との

間にも、日本軍の「瞞着的宣伝」を暴露しようとする動きもあった。捕虜となったばかりの瀬古は、小林の古い戦友で、同じ部隊の上司だった。八路軍五支部政治部敵軍工作科に連れられたら、「お前、まだ生きているのか。皆戦死したと思っているよ」と驚いていた。「私は死んでいないよ。負傷して捕虜になったことは皆知らないのか。」「知らないよ。…大隊長はあなたの家族にも『戦死通知書』を送ったそうだよ⁵⁷。」こういった会話の中で、小林は日本軍に対する不満をもち、瀬古は八路軍が捕虜を殺害しない政策をとっていることを認識することができた。

新四軍新六団政治処敵軍工作股の股長をつとめた陳子谷の回想によると、新四軍の捕虜となった後藤勇は、殺されることを恐れ、最初「朝鮮人」だと偽称した。いつも朝鮮の民族歌謡を歌い、朝鮮人だと強調していた。新四軍敵軍工作部長だった林植夫は説得したが、結局同じ日本人捕虜である香河正男に説得された。その後、後藤勇は反戦同盟に入り、活動した⁵⁸。

(5) 教育の影響

1944年11月15日に、アメリカ軍事視察団が98名の日本軍捕虜に対して行った調査によると、軍国主義思想に影響された彼らの思想はある程度変わったことが分かった。例えば、「支那事変において、日本は正しいですか」に対して、「はい」と答えた人は2名で、「いいえ」と答えた人は96名もいた。「日本は戦争に勝ちますか」に対しては、「はい」と答えたひとは2名で、「いいえ」と答えた人は94名だった。保留と無回答はそれぞれ1名だった。「現戦争で、一番責任がある人は誰ですか」については、「軍国主義者」と答えた人は82名で、「大資本家」、「天皇」と回答したのはそれぞれ4名で、「軍国主義者と資本家」と答えたのは2名、「大地主」答えたのは2名、無回答は2名だった。「戦争が早く終わらせるために、あなたは八路軍に協力しますか」に対して、96人の人が「はい」と答えた⁵⁹。

怖くて真実ではない内容を回答した人もいるかもしれないが、「調査が秘密であることと、無記名であることが説明された」ため、教育を受けた日本人捕虜の転換はある程度分かるだろう。1939年1月2日に、日本工農学校の教育を受けた前田光繁、小林武人、岡田義雄がある大会の現場で八路軍に入隊したい要望を出し、八路軍総司令官朱徳の許可と歓迎を受けた。1945年8月15日の『解放日報』は「日本工農学校3百人余りの学友が我が軍のあとについて前線へ行く予定」と報道している⁶⁰。日本軍捕虜は日本工農学校の教育を受け、多くの人が思想や立場を転向した。しかも、このような転向は連鎖の効果を齎した。立場を変えた古い捕虜は新しい捕虜の教育に協力しただけではなく、八路軍や新四軍に参加し、前線の日本軍に対して宣伝と瓦解工作も行った。八路軍の兵士として、直接に参戦した人もいた。

1940年に教育が始まり、1941年に正式に発足した延安日本工農民学校は、日中戦争期における中国共産党に日本軍向けのプロパガンダ工作にとって重要な意味があった。集団討論、自己批判、娯楽活動などの教育手段を通じて、多くの日本人の立場がある程度変わり、反戦意識を持つ日本人が増えた。延安の日本工農学校を卒業した日本人を中心に、工農学校晋西北、山東分校、華中分校が発足した。人材・思想の工場である延安にあったこの学校は、全国各地

の反戦組織、工農学校分校に多くのプロパガンダ人材を送り出した。延安工農学校およびその分校は、日本人による対日本軍プロパガンダ工作の人材準備となった。

¹杜玉芳「延安日本労農学校述論」『理論学刊』2000年1月、105頁。

²山本武利 編訳『延安リポート』岩波書店、2006年2月、223頁。

³前掲書『延安リポート』638頁。

⁴肖冬「抗日戦争時期在根拠地創弁の日本工農学校」『党的文献』2002年第6号、58頁。

⁵中国人民解放军政治学院党史教学研究室編、『中国共産党史参考資料(第8冊)』、430頁。

⁶窑洞とは、山崖の洞穴式住居のこと。

⁷延安日本工農学校遺跡の記念碑から。

⁸夏明星、蘇振蘭「延安日本工農学校」『文史春秋』2002年11号、46頁。

⁹小林清『在華日人反戦組織史話』社会科学文献出版社、1987年9月、51頁。

¹⁰趙安博「延安日本労農学校」『アジア経済旬刊(1246-1247)』1983年1月1日、14頁。

¹¹「介紹延安日本工農学校」『新中華報』1941年5月8日、3面。

¹²「延安日本工農学校挙行開学典礼」『解放日報』1941年5月16日、第2面。

¹³劉国霖、鈴木伝三郎「一個「老八路」和日本捕虜的回憶」学苑出版社、2000年6月、26頁

¹⁴前掲書『在華日人反戦組織史話』、51頁。

¹⁵劉菊初「1942年延安參觀日記」『山西文史資料』2000年9号、36-37頁。

¹⁶「前方日本弟兄 電賀日本工農学校開学」『解放日報』1941年5月19日第2面

¹⁷白修徳 著、馬清槐 方生 訳『探索歴史』三聯書店、1987年12月、168頁。

¹⁸林邁可(Michael Lindstay)著、楊重光、郝平 訳『八路軍抗日根拠地見聞録——一個英国人不平經歷的記述』国際文化出版公司出版、1987年6月、58頁。

¹⁹「日本工農民学校晋西北分校開学」『解放日報』1943年6月30日、1面。

²⁰黄義祥「在華日本人民の反戦闘争」『中山大學學報』、1995年第3号、92頁。

²¹姫田光義、藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店、1999年9月18日、159頁。

²²高山進「黄河のほとり」反戦同盟記録編集委員会 編『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』、日本共産党中央委員会出版部、1963年9月、167頁。

²³「記日本工農民学校晋西北分校」『解放日報』1943年8月27日、4面。

²⁴「記日本工農民学校晋西北分校」『解放日報』1943年8月27日、4面。

²⁵「山東成立日本工農民学校、朝鮮革命軍政学校分校」『解放日報』1944年11月2日、2面。

²⁶杜玉芳、王衛紅「抗日戦争時期山東の日人反戦活動」『山東档案』2003年5月、44頁。

²⁷「山東日本工農学校朝鮮軍政学校與群衆互助關係親密」『解放日報』1944年12月30日、1面。

²⁸「山東日本工農学校朝鮮軍政学校第一期挙行卒業典礼」『解放日報』1945年2月19日、1面。

²⁹「日本工農学校山東分校學員倍增學習積極」『解放日報』1945年2月20日、1面。

³⁰前掲「抗日戦争時期山東の日人反戦活動」、44頁。

³¹前掲、「在華日本人民の反戦闘争」、92頁。

³²中共河北省委党史研究室、河北政協文史資料委員会『在華日人反戦紀実』河北教育出版社、2005年8月、231頁。

-
- ³³前掲書,『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』,171頁。
- ³⁴前掲書,『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』,188頁。
- ³⁵孫金科「在日本举行的日中戦争時期在華日本人反戦運動国際研究会綜述」『抗日戦争研究』,1999年2号,237頁。
- ³⁶前掲書,『中国共産党史参考資料(第8冊)』,430頁。
- ³⁷前掲書,『延安レポート』,236頁。
- ³⁸前掲書,『延安レポート』,189頁。
- ³⁹何立波「抗戦期間的延安日本戦俘学校」『湘潮』2007年11号,44頁。
- ⁴⁰小林清『一個「日本八路」的自述 在中国的土地上』解放軍出版社,1985年8月,104頁。
- ⁴¹「日本朋友棒球表演」『解放日報』1942年1月4日,4面。
- ⁴²「予告」『日軍の友』第15号,1942年4月11日,1面。「10 中共側新聞伝単等送附ノ件2」,在中華民國(北京)日本大使館調査室,昭和17年8月21日,アジア歴史資料センター, B02032461900
- ⁴³王光荣「日軍戦俘在延安『洗礼』」『百年潮』,2004年9号,37頁。
- ⁴⁴前掲,「黄河のほとり」,168頁。
- ⁴⁵遊戯の一種,はじき将棋のようなもの。
- ⁴⁶『実話報』1942年6月30日4面,「10 中共側新聞伝単等送附ノ件2」在中華民國(北京)日本大使館調査室,昭和17年08月21日,アジア歴史資料センター, B02032461900。
- ⁴⁷「本市日本工農学校,举行美国照片展覽」『解放日報』1944年12月1日,2面。
- ⁴⁸「日本工農学校生産値66石」『解放日報』1944年12月24日,2面。
- ⁴⁹「日人森健当选辺区参議員候選人」『解放日報』1941年10月2日,4面。
- ⁵⁰前掲「延安日本工農学校」,47頁。
- ⁵¹「辺区参議員紹介 日人森健」『解放日報』1941年11月3日,4面。
- ⁵²小林清『在華日人反戦組織史話』社会科学文献出版社,1987年9月,57頁。
- ⁵³「日本工農学校選挙模範学習者」『解放日報』1945年1月14日,2面。
- ⁵⁴「日工校学生自己動手擴大校舍」『解放日報』1945年4月15日,2面。
- ⁵⁵前掲「抗戦期間的延安日本戦俘学校」,42頁。
- ⁵⁶「日本工農学校,施政綱領訳成日文,以便学生進行討論」『解放日報』1941年6月27日,2面。
- ⁵⁷前掲書,『一個「日本八路」的自述 在中国的土地上』57頁。
- ⁵⁸陳子谷「懷念林植夫同志」『革命人物』1985年第S1号,37-38頁。
- ⁵⁹前掲書『延安レポート』,189-190頁。
- ⁶⁰「日工校三百余同学準備随我軍上前線」『解放日報』1945年8月15日,1面。

4.2 共産党支配地区の覚醒連盟及びその支部

日本人の反戦運動は日中戦争以前からあった。日中戦争が勃発した後、中国共産党は捕虜を優遇する政策を打ち出し、日本人捕虜の転向を図った。日本人捕虜と捕虜教育の深まりにつれ、共産党支配区において、共産党は日本人捕虜による反戦組織の結成を積極的に進めた。それは、共産党の敵軍工作の重要課題あり、共産党の日本軍向けのプロパガンダ工作の一環でもある。本節では、共産党支配地区における日本人反戦組織の結成と各支部のメンバー、結成期日、活動範囲、出版した宣伝物などを取りあげながら、各支部の概況を考察する。既刊活字資料では、食い違っている記載がかなり多くあり、その真偽を見分け考察する。

ゲリラ戦を中心に行う中国共産党の部隊であるので、部隊の位置や政治部の拠点などは常に移動し、ほとんどは秘密であった。反戦同盟冀中支部で活動していた和田真一の回想によると、「長い時は1週間、早いときはその日のうちに移動する軍区政治部¹」であった。各支部の結成地と発動範囲を正確に確定することは困難であるが、本節では、できる範囲でその努力をした。

覚醒連盟は共産党支配地区にしかなかった組織で、共産党が日本人反戦組織に対する政策を考察するときに重要な対象となる。

1, 最初の覚醒連盟の結成経緯

1939年11月7日、めざまし連盟が山西省遼県麻田鎮で結成式を行った。主な設立者と指導者は杉本一夫と吉田太郎。その後、「めざまし」は日本人の反感を引き起こすかもしれないので、杉本一夫の提案に従い、「覚醒連盟」にした²。設立式に参加した日本兵は、杉本一夫、小林武夫、岡田義雄、高木敏雄、吉田太郎、石塚修、松井英男の、計7名だった³。この覚醒連盟の結成はもっとも早かったので、その後の覚醒連盟各支部に対しては本部の役割を果たし、晋東南本部とも呼ばれた⁴。

1940年8月の「百団大戦」が終わった後、日本兵捕虜が急増した。すでに八路軍に入隊していた杉本一夫、小林武夫、岡田義雄の3人は、反戦工作の新たな局面を開くため、多くの日本人を吸収する組織を作らなければならないと考えた。ちょうどそのころ日本共産党が重慶で「在華日本反戦同盟」を組織したとの知らせを聞き、3人は、太行地区でも支部を作りたいと重慶にいた鹿地亘に手紙を出したが、なかなか返信がなかった。敵軍工作部は、組織を「めざまし連盟」と提案し、「めざまし」は、敵軍工作員である江右書が留学先の日本から帰国するときに持

って来た雑誌から由来したものである。来たのである。雑誌には、沢村貞子の左翼啓蒙劇団である「めざまし隊」の写真が掲載され、その「めざまし」を取ったという⁵。

前田光繁の回想でもほぼ一致している記載が確認できた。鹿地亘が重慶で日本人反戦同盟を作ったというニュースをきいて、共産党支配地区でも反戦団体を作ろうとする動きが活発化した。敵軍工作部と相談すると、「日本人反戦団体の結成にはもちろん大賛成だが、まず鹿地亘と連絡して反戦同盟支部を作り、彼のアドバイスも受けたらどうか」ということであった。さっそく鹿地亘氏に手紙を書いたが、いくら待っても返事がない。それで敵軍工作部の助言を受け、「めざまし連盟」を作ろうときめた。1939年11月7日の十月革命記念日を選び、めざまし連盟結成の式典を行った⁶。それは、1963年に出版された『反戦兵士物語：在華日本人反戦同盟員の記録』でも確認することができる⁷。

覚醒連盟結成の1939年11月7日に重慶や桂林などで反戦活動が盛んに行われていたが、反戦同盟はまだ正式に発足されていない。王庭岳の考察によると、1939年12月23日、桂林で「在華日本人民反戦同盟」が創立されたとのことである⁸。1940年7月26日『新中華報』1面の記載によると、重慶で結成された「在華日人反戦革命同盟」は同年7月20日のことである⁹。以上の記録から、覚醒連盟の創立と重慶にある反戦同盟の創立は時間的矛盾があることがわかる。桂林の西南支部は1939年12月23日に正式に創立され、重慶の反戦同盟は1940年に作られた。覚醒連盟の設立はその前の年である1939年11月7日だった。1939年に覚醒連盟が設立されたことは複数の記載で確認できた。重慶で「在華日本人反戦同盟」を作った鹿地亘から返信がなかったので「覚醒連盟」を作った、というのは事実ではないと考えられる。「覚醒連盟」を作った日本人らは、反戦同盟支部を作るために鹿地亘に手紙を出したか、或いは1939年11月以前の鹿地亘などの反戦活動を聞いて手紙を出したと考えられる。

覚醒連盟冀南支部の支部長をつとめた秋山良照の回想によると、冀南軍区敵軍工作部部長の張茂林(本名は張有萱)に次のように聞かれた。「秋山さんも重慶の鹿地亘氏のところに電報を打って、支部を結成したらどうか。」秋山の回想によると、「それは思いがけない話であった。しかし、ただ1人で支部を作ったところでどうにもならない。それに私にはまだそれだけの自覚も、考えもなかった¹⁰」。この対話は1939年11月7日覚醒連盟が結成された後の1941年春のことだった。それは後述する1941年8月7日の覚醒連盟冀南支部の結成に繋がった。

1939年12月に覚醒連盟本部によってその機関紙である『覚醒』が創刊された。編集者は杉本一夫、吉田太郎などであった¹¹。

2, 覚醒連盟太行支部

孫金科の考察によると、1940年6月23日、覚醒連盟第1支部(後「太行支部」に改名)がは結成された。支部書記は松井英男(その後は吉田太郎に)。『反戦報』(後『同胞報』に改名)を出版。太行支部は国際劇団(後「同胞劇団」)を作り、日本軍占領区で中国民衆や日本軍兵士向けの反戦劇を演出していた¹²。覚醒連盟太行支部の出版活動に関しては、違う記録によると、『反戦』のほかに、『日本軍の友』との月刊誌を出版していた。編集者は杉本一夫などであったとある¹³。

王庭岳の『在華日人反戦活動史略』の記載によると、1940年6月23日に結成した覚醒連盟第1支部は、冀魯豫支部とも呼ばれ、後には太岳支部に改称した¹⁴。複数の資料で確認したところ、「太岳支部に改称した」記録はあやまりだと判定できる。

1940年6月23日に八路軍第129師団で設立された覚醒連盟太行支部の主な工作の対象は、山西省潞城を中心としている日本軍第36師団、陽泉を中心としている独立混成第4旅団、平漢線の独立混成第7旅団であった¹⁵。この支部の主な活動は山西省潞城を中心とした範囲であったと推定できる。

覚醒連盟第1支部の活動に関して、中国共産党機関紙である『解放日報』は盛んに報道を行った。たとえば、1941年6月23日当連盟が結成された1年記念日のとき、『解放日報』はその記念大会を報道した。彭徳懐と朱徳から祝電が送られ、また129師団政治委員である鄧小平は「日本人民を解放させる、中国人民を解放させる、世界革命を応援する活動においては、覚醒連盟は大きな役割を果たす。将来、覚醒連盟はほかの日本革命団体と連合し、革命の大きな流れとなるだろう」と挨拶した¹⁶。

3, 覚醒連盟冀南支部

孫金科の考察によると、1941年8月7日、覚醒連盟冀南支部は秋山良照、水原健次、成洋鬼彦¹⁷によって設立された。支部書記は秋山良照がつとめた。その後、支部のメンバーが増え、筱原正義、吉田清去、小林春夫、原広見、大谷、山下、橋本なども加入した。『日本兵士の友』『戦友』などを出版した。現代劇『活路』で、盟員の水原健次が出演した¹⁸。

しかし、『解放日報』の記録によると、覚醒連盟冀南支部は1941年6月に設立されたと記載している¹⁹。徐則浩の考察によると、覚醒連盟冀南支部は1941年8月7日に冀南軍区政治部で結成された²⁰。秋山良照によると、1941年7月になると、張茂林部長から支部の結成について再度話があった。それは南宮県と棗強県の県境に近い西賈荘という村であった。8月7日に、捲子鎮の町はずれに大きな会場が作られ、覚醒連盟冀南支部の結成大会が行われた²¹。現在の中国

地図で確認すると河北省南部の衡水市の棗強県と南宮市の間に、卷子郷があり、南卷子村と北卷子村に分かれている。結成場所は河北省南部衡水市棗強県卷子郷であると確定できよう。

つまり、1941年8月7日、河北省南部衡水市棗強県卷子郷で覚醒連盟冀南支部が結成された。

4, 覚醒連盟山東支部

孫金科の考察によると、1940年6月2日、八路軍115師団で本橋朝治、国保などによって覚醒連盟山東支部が創立された。支部長は本橋朝治がつとめた²²。王庭岳の考察によると、山東支部の結成は1942年5月19日だという²³。徐則浩の考察によると、1940年6月2日に八路軍115師団政治部駐在地で結成大会が行われたという²⁴。

1942年8月11日付の『解放日報』の記事によると、覚醒連盟山東支部が1941年5月1日に結成されたと記載している。²⁵1942年5月19日付の『解放日報』には、新華社山東18日電を引用し、「日人覚醒連盟山東支部及び華北朝鮮青聯山東分会がこの前、115師団で正式結成大会を行った²⁶」と記されており、具体的な期日は記載されていない。

山東支部の結成期日は、1940年6月2日、1941年5月1日、1942年5月19日の3つの説がある。今の資料ではまだ確定できていない。

戦争時代の共産党軍隊は、常に移動していた。極端なときは1日の中で何回も移動したこともある。115師団も同様に、常に移動していた。1939年から1940年末までの2年間、羅榮桓が115師団を率いて、山東省蒼山県下村郷上大炬村で活動していた²⁷。覚醒連盟山東支部の活動は、主に山東省蒼山県付近だと考えられる。

5, 覚醒連盟冀魯豫支部

『在華日人反戦運動史略』の記載によると、冀魯豫支部の結成は1941年10月9日だった²⁸。徐則浩によると、1941年8月15日、黄河に近い濮県楊集(八路軍冀魯豫軍区政治部の駐在地)で、覚醒連盟冀魯豫支部設立大会が行われた。司会者は黒田嗣彦で、9名のメンバーが参加した。初期の支部書記は小野靖夫がつとめた²⁹。この「小野靖夫」は、正確には「水野靖夫」のことであると考えられる。

水野靖夫の回想によると、1941年8月15日に、日本兵士覚醒連盟冀魯豫支部が結成されたということである。連盟員は10人弱で、支部書記(支部長)には水野靖夫が選ばれた。副支部長は宮川英男だった³⁰。水野靖夫はさらに次のように回想している。「私たちの任務は、河北、山西、河南3省の接触点を中心に、付近一帯の地域を糾合して、あらたに日本人覚醒連盟の新支

128

部を作ることであった。支部の名にこの地方の名にもとづいてキロヨ支部と呼ばれた³¹。」1942年に、「覚醒連盟冀魯豫支部」を「日本人反戦同盟冀魯豫支部」に改称した³²。冀魯豫支部の結成は黄河に近い濮陽楊集(八路軍冀魯豫軍区政治部の駐在地、現在河南省濮陽市濮陽県)だったので、その主な活動もこの付近で展開されたと推定できるだろう。

冀魯豫支部の結成期日は1941年10月9日との説があるが、本論文では、1941年8月15日であるとする。

支部の機関紙として、『士兵的呼声』(『兵士の叫び』)『黎明』(『あかつき』)などの新聞が発行されていた³³。『兵士の叫び』は1941年末、冀魯豫軍区の範県(現在河南省濮陽市範県)で創刊された。編集長は水野靖夫であった³⁴。

1942年4月7日付の『解放日報』は次のように報道している。「(新華社晋冀魯豫6電)覚醒連盟の魯豫支部³⁵が『戦友』『時事新聞』などの新聞を出版し、敵軍兵士に歓迎されている³⁶」という。

6, 覚醒連盟膠東支部

覚醒連盟膠東支部で活動していた小林寛澄の回想によると、1941年9月18日に小林寛澄、布谷、山中と3人で覚醒連盟膠東支部を結成したとのことである。「敵工部の説明では日本人の反戦組織には『反戦同盟』と『覚醒連盟』とがあるがどちらにするかと言われたが、私たちはその違いがわかるはずもなく、八路軍側もよくわかっていなかったようだった。結局、どちらでもよいということになったが、『反戦同盟』はやや過激で耳障りがよくないということで、『覚醒連盟』とした。」山中が支部長、布谷が書記長、小林寛澄が宣伝部長となった。1942年9月頃、渡部三郎が支部長となり、覚醒連盟膠東支部が正式に発足した³⁷。小林清が反戦同盟膠東支部に関する回想を参考し、覚醒連盟膠東支部の主な活動範囲は、威海市と煙台市付近だったと考えられる。

7, 覚醒連盟太岳支部

1942年、八路軍太行軍区において渡辺三郎、森岡正明、加藤、北野千歳などによって覚醒連盟太岳支部が創立された。渡辺三郎が支部長につとめた。日本語新聞『士兵的呼声』を出版³⁸。違う資料によると、結成当初のメンバーの1人は、森岡正明であった³⁹。「森岡正明」と「森岡正明」は同一の人物だと考えられる。

太岳軍区で作られたので、主な活動はその周辺で行われたと推定できる。太岳軍区は1940年5月に山西省長治市沁源県閻寨村で正式に創立された。1942年10月20日に、太岳軍区は

南にある隣の安沢県に移動した⁴⁰。覚醒連盟太岳支部の活動も、山西省南部の沁源县、安沢県付近だと推定できよう。

8, 津冀魯支部

津冀魯支部に関する資料はきわめて少ない。筆者が考察した限り、唯一の記録は姫田光義・藤原彰の『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』である。それによると、津冀魯支部支部長は小島金之助で、メンバーは山口、桐山がいた⁴¹。いつ結成したのか、どの地区で活動したのかはまだ不明である。

秋山良照の回想によると、1939年から1942年にかけて、覚醒連盟は太行支部、太岳支部、晋東南支部、冀南支部、冀魯豫支部、山東支部の6つの支部を持っていたとされている⁴²。1944年4月の統計によると、覚醒連盟や反戦同盟の同盟員は223人、支部数は13となっている⁴³。

1942年8月15日から29日まで延安で開催された「華北日本兵士代表大会」及び「日本人反戦団体華北大会」が終わってから、太行や山東など各地に結成されていた「覚醒連盟」は一斉に名称を「反戦同盟」に変えた。正確には延安で野坂参三のもとに結成された「反戦同盟」と、各地に支部をつくっていた「覚醒連盟」を合併させて名称統一したのだった⁴⁴。



覚醒連盟分布図

- ◆①覚醒連盟晋東南本部、1939年11月7日、覚悟連盟が山西省遼県麻田鎮で設立式を行った。
- ◆②1940年6月23日、山西省潞城付近で覚醒連盟第1支部(後「太行支部」に改名)が結成された。
- ◆③1941年8月7日、覚醒連盟冀南支部は八路軍冀南軍区駐地(河北省南部衡水市棗強県卷子郷)で結成された。
- ◆④覚醒連盟山東支部が1941年5月1日(1940年6月2月、1942年5月19日との説もある)に山東省蒼山県付近で結成された。

- ◆⑤1941年8月15日、黄河に近い濮県楊集(八路軍冀魯豫軍区政治部の駐在地、現在河南省濮陽市)で、覚醒連盟冀魯豫支部設立大会が行われた。
- ◆⑥覚醒連盟膠東支部は1941年9月18日に威海市と煙台市付近で結成された。
- ◆⑦覚醒連盟太岳支部は1942年に八路軍太行軍区(山西省南部の沁源県、安沢県付近)において結成された。
- ◆⑧津冀魯支部、支部長は小島金之助で、メンバーは山口、桐山がいた。結成期日と活動範囲は不明。

¹ 和田真一「冀中平原地下道戦」反戦同盟記録編集委員会 編『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』日本共産党中央委員会出版部, 1963年9月, 187頁。

² 劉国霖, 鈴木伝三郎, 「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」, 学苑出版社, 2000年6月, 42—43頁。香川孝志, 前田光繁 著『八路軍の日本兵たち—延安労農学校の記録』サイマル出版会, 1984年6月, 176頁

³ 王庭岳『在華日人反戦運動史略』河南人民出版社, 1989年, 60頁。

⁴ 「華北日人反戦団体大会進行各地工作報告」『解放日報』1942年8月21日, 1面。

⁵ 前掲書, 「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」, 42頁。

⁶ 香川孝志, 前田光繁 著『八路軍の日本兵たち—延安労農学校の記録』サイマル出版会, 1984年6月, 174—176頁。

⁷ 杉本一夫, 吉田太郎, 渡辺三郎「覚醒連盟の誕生」前掲書『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』, 153頁。

⁸ 前掲書, 『在華日人反戦運動史略』, 65頁。

⁹ 「在華日人反戦革命同盟在渝成立——並設支部於×戦区」『新中華報』1940年7月26日1面

¹⁰ 秋山良照『中国戦線の反戦兵士』徳間書店, 1978年11月10日, 68頁。

¹¹ 王庭岳, 傅義桂, 「抗戦時期的日人反戦新聞事業」, 『新聞研究資料』1990年1号, 133頁。

¹² 孫金科『日本人民的反戦闘争』北京出版社, 1996年2月, 43—45頁。

¹³ 前掲, 「抗戦時期的日人反戦新聞事業」, 133頁。

¹⁴ 前掲書, 『在華日人反戦運動史略』, 79頁。

¹⁵ 徐則浩『從浮虜到戦友』安徽人民出版社, 2005年7月1日, 84頁。

¹⁶ 「日本覚醒連盟第1支部 举行成立周年記念会 願与中国人民携手奮闘」『解放日報』1941年6月23日第2面

¹⁷ ここの「成洋鬼彦」は正確に「成沢鬼彦」である。

¹⁸ 前掲書, 『日本人民的反戦闘争』, 47—49頁。

¹⁹ 「覚醒連盟」『解放日報』1942年8月11日2面。

²⁰ 前掲書, 『從浮虜到戦友』, 86頁。

²¹ 前掲書, 『中国戦線の反戦兵士』, 75—76頁。

²² 前掲書, 『日本人民的反戦闘争』, 55頁。

²³ 前掲書『在華日人反戦活動史略』79頁。

²⁴ 前掲書, 『從浮虜到戦友』, 89頁。

²⁵ 「覚醒連盟」『解放日報』1942年8月11日2面。

²⁶ 「打倒日本法西斯 日人覚連山東支部等成立」『解放日報』1942年5月19日第1面

²⁷ 蒼山県誌編纂委員会『蒼山県誌』中華書局, 1998年。

-
- ²⁸ 前掲書、『在華日人反戦運動史略』, 79 頁。
- ²⁹ 前掲書、『従浮虜到戦友』, 88 頁。
- ³⁰ 姫田光義, 藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店, 1999 年 9 月 18 日, 117, 118 頁。
- ³¹ 水野靖夫『日本軍と戦った日本兵:一反戦兵士の手記』白石書店, 1974 年 8 月 31 日, 106-107 頁。
- ³² 前掲書, 『日本軍と戦った日本兵:一反戦兵士の手記』, 126 頁。
- ³³ 前掲書, 『日本人民的反戦闘争』, 50-51 頁。前掲書, 『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』, 117 頁。
- ³⁴ 前掲, 「抗戦時期的日人反戦新聞事業」, 133 頁。
- ³⁵ 支部書記が水野であることなどから, 魯豫支部ではなく, 冀魯豫支部であろうと推測する。
- ³⁶ 「覚醒連盟加緊宣伝 敵軍心更厭戦動揺 寇兵逃亡自殺事件日衆 敵酋進行『思想防御』」『解放日報』1942 年 4 月 7 日 第 2 面
- ³⁷ 前掲書, 『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』, 149-150 頁。
- ³⁸ 前掲書, 『日本人民的反戦闘争』, 55 頁。
- ³⁹ 前掲書, 『従浮虜到戦友』, 90 頁。
- ⁴⁰ http://www.czkdw.com/news_view.asp?newsid=8435, アクセス: 2010 年 5 月 12 日。
- ⁴¹ 前掲書, 『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』, 150 頁。
- ⁴² 前掲書, 『中国戦線の反戦兵士』, 195 頁。
- ⁴³ 前掲書, 『八路軍の日本兵たち—延安労農学校の記録』, 179 頁。
- ⁴⁴ 前掲書, 『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』, 274 頁。

4.3 共産党支配地区の反戦同盟及びその支部

反戦同盟は、先に国民党支配地区である桂林と重慶で結成された。前述のした覚醒連盟に関する考察からもわかるように、共産党支配地区における日本人反戦組織の結成はある程度、鹿地亘などの国民党支配地区の反戦運動の影響を受けたと考えられる。

前述したとおり、1939年12月23日、桂林で「在華日本人民反戦同盟」が創立され、反戦同盟西南支部といった¹。支部長は坂本秀夫であった²。1940年7月26日『新中華報』1面の記載によると、重慶で「在華日人反戦革命同盟」を結成したのは同年7月20日のことである³。しかし、秋山良照の回想によると、1939年12月25日に、鹿地亘氏の指導のもとで重慶に日本兵士反戦同盟が結成された⁴。本論文は、共産党支配地区で結成された反戦同盟を中心に考察する。

1, 反戦同盟延安支部

1940年7月7日、日本人の森健、高山進、市川春夫などが延安で反戦同盟延安支部を結成した⁵。1940年7月26日付の『新中華報』によると、「先月初め、延安にいる在華日本人が春田好雄、近藤勇三、市川常夫等が日本人民反戦同盟延安支部を作った⁶。」1940年5月1日に、反戦同盟延安支部の結成宣言が発表され、同年5月から日本語月刊誌『兵士の友』の発行が始まった⁷。徐則浩によると、延安支部委員長は大山光美が就任したとの記録がある⁸。「大山光美」は「大山光義」のあやまりだと考えられる。『解放日報』の記載によると、1941年12月のとき、支部書記は小林で、盟員は大谷、秋田、浅井、梅田、茂田江、海田、中小路、森健などがいた⁹。

『解放日報』によると、1943年7月10日に、反戦同盟延安支部結成3周年記念大会が開かれた¹⁰。そこから、延安支部の結成は1940年7月であると考えられる。

1940年秋、反戦同盟延安支部の機関紙である『兵士の友』は延安で創刊され、森健がその編集長となった。『兵士の友』は最初、月刊誌であったが、その後、半月刊となった。『兵士の友』は日本語の活字印刷である。反戦同盟延安支部の機関紙である『兵士の友』は実際には在華日本人反戦運動最高指導機関の機関紙の役割を果たしていた。『兵士の友』は延安で印刷し、各根拠区に運ばれ、各地の日本人反戦運動を指導していた¹¹。

2, 反戦同盟冀中支部

反戦同盟冀中支部で活動していた和田真一の回想によると、1941年2月23日、ソ連赤軍創立記念日を選んで、田中、東、中山、吉田、多々良、小松ら6人によって反戦同盟冀中支部が結成された¹²。支部の結成地は、八路軍冀中軍区にある平漢路の西側の唐県南洪城村(現在の河北省保定市唐県南洪城村)であった。その後、和田真一、松山一郎、林義雄、西村、津田、吉村、浅見、三木、渡辺、水戸、三浦などがメンバーとなった¹³。OSSの日本人民解放連盟組織図には、解放連盟冀中支部の部員の一人は林一雄となっている。中国語では「一」と「義」の発音は同じであるため、ここの林義雄は正確には「林一雄」であると考えられる。

別の記載によると、1941年2月23日に田中などの日本兵捕虜が反戦同盟冀中支部を作る準備を始めたのである。同年7月24日に正式な成立大会が行われた。6名のメンバーがいて、田中、東忠はそれぞれ支部長、副支部長に選ばれた¹⁴。

1943年7月に八路軍冀中軍区が取り消されたため、反戦同盟冀中支部は晋察冀支部に合併された。1944年冀中軍区が回復されたため、元冀中支部の中山、渡辺、津田、水戸などは冀中軍区に戻り、1945年2月12日に日本人民解放連盟冀中支部を作った¹⁵。

1942年、冀中地区で『日本人民の友』、『光明月刊』が創刊され、田中、東忠が編集者となった¹⁶。1941年8月16日付の『解放日報』によると、「7月24日、在華日本人民反戦同盟冀中支部を応援する大会が開催され、1万人以上が参加した。当支部の責任者である田同志は当支部の設立過程と奮闘綱領を紹介した。当支部宣伝部長車中同志も演説した¹⁷。」この中の「宣伝部長車中」は東忠のことだと考えられる。「責任者である田同志」は支部長の田中のことだと判断できよう。

3, 反戦同盟晋察冀支部

1941年5月4日、晋察冀軍区駐地の平山県小北頭村(現在の河北省石家荘市平山県小北頭村)で結成大会が開催された。宮本哲治が支部長に就任し、中原は宣伝部長に就任した。支部のメンバーは、藤中岸、古沢、夏川中西、安藤、小島、浅野、渡辺、上野、山川、中村、鎌田、西川、小村、有川、大城、岡島などがいた。『前進月刊』を出版している¹⁸。

別の記録によると、反戦同盟晋察冀支部の支部長は宮川哲治である¹⁹。本論文では、『解放日報』(1944年5月7日3面に掲載されている「晋察冀日本人民解放連盟成立、盟員暢談対八路軍観感」には、副委員長は宮本哲治となっている)など複数の資料で確認した結果、正確には

「宮本哲治」であると判断する。

反戦同盟晋察冀支部成立2周年の際、聶榮臻(115 師団副師団長、晋察冀軍区司令員兼政治委員)は記念のため支部に題辞を提供した。「共同奮闘、打倒日本軍閥、消除戦争、実現和平、建立中日両国人民真正的友善！反戦同盟支部2周年記念、聶榮臻 題²⁰」との内容である。

反戦同盟晋察冀支部で多くの反戦宣伝印刷物が出版された。1941年夏に創刊された月刊誌の『戦友』の編集長は宮本哲治であった。そのほか、1941年秋に創刊された月刊誌の『日軍の友』、1942年に創刊された『前進』と1943年に創刊された『前進画報』の編集長は津田秀であった²¹。

日本アジア歴史資料センターで、日本外交資料館収蔵の『日軍の友』紙(1942年4月4日付の第14号、1942年4月11日付の第15号、1942年5月23日付の第18号)と『前進月刊』(第2期及び1942年3月5日付の第3号)が発見された(付録参照)。1942年4月11日に発行した第15号の『日軍の友』には、反戦同盟晋察冀支部結成1周年の集会の宣伝を行っていた。その集会が行われた後、「(新華社晋察冀6日電)成立1周年記念日に、日人反戦同盟晋察冀支部の同盟員全員が記念集会を行った²²」と『解放日報』の関連報道がある。



支那創刊一周年記念大会三参加セヨ!



左:1942年4月11日付の『日軍の友』第15号の紙面²³

右:1942年3月5日付の第3号『前進月刊』の表紙²⁴

4, 反戦同盟山東支部

資料によって、山東支部の結成期日に関する記載が違ふ。王庭岳の考察によると、1941年5月12日、反戦同盟山東支部が結成され、大西正は支部長、上申庄が副支部長に就任した²⁵。しかし、違ふ研究によると、1941年6月2日、八路軍山東縦隊にて反戦同盟山東支部が結成されたとある。大西正は支部長、上中慶太郎が副支部長に就任した。宣伝部長は中野博で、メンバーは坂谷政三、上田正雄などがいた²⁶。1941年6月2日、反戦同盟山東支部が設立され、大西正は支部長に就任した。1年後の1942年8月中旬、反戦同盟山東支部と覚醒連盟山東支部が合同会議を開き、両団体を合併することが決められた。合併された後の団体は「反戦同盟山東支部」であり、本橋朝治は支部長となり、大西正は副支部長となった²⁷。

山東支部はいつ結成されたのかについて、複数の資料で確認したところ、本論文では、反戦同盟山東支部の結成は1941年6月2日であると判断する。1941年7月21日付の『解放日報』によると、反戦同盟山東支部は「先月八路軍山東縦隊某駐地で設立された」という²⁸。1941年6月30日付の山東省『大衆日報』の記載によると、「在華日人反戦同盟山東支部は今月2日に八路軍山東縦隊駐在地××で正式に結成された²⁹」と記載されている。

1943年5月18日付の『解放日報』には、「萊蕪我対敵展開政治攻勢、『桜花宣伝』収効宏大、日人反戦同盟山東支部成立」との報道がある。「新華社魯南16日電」とされている記事の中、「日本人反戦同盟山東支部は、この間某地で正式に結成された。日本反戦同盟盟員の小島、田中、北後、山口、日本兵士代表の高橋叢、魯南軍区張司令員などが出席した。小島同志は支部長に選ばれ、田中同志は組織部長となった³⁰」と報じられている。この報道が報じている山東支部の結成は、上記した1941年『解放日報』と『大衆日報』の報道と矛盾している。おそらくここで報道している「山東支部の結成」は、1942年8月に延安で開催された「華北日本兵士代表大会」と「日本人反戦団体大会」のあと、覚醒連盟を反戦同盟に再編する活動の中で、「再編」を意味する「山東支部の結成」だと考えられる。

支部長と副支部長についても資料によってだいぶ違ふ。1941年7月21日付の『解放日報』によると、「大西正会長は設立の意義と今後の工作綱領を宣言した。副会長上中、今野同志も演説した」との記載がある³¹。上記の『大衆日報』は「会長の大西正から演説した。副会長は上中庄太郎と今野博も挨拶した」との記述がある³²。王庭岳の研究の中の「上申庄」は「上中庄太郎」のあやまりだと考えられる。孫金科の研究の中の「上中慶太郎」も、「上中庄太郎」のあやまりであると考えられる³³。本論文では、山東支部の支部長は大西正で、副支部長は上中庄太郎と今野博

であると結論付ける。

結成位置や活動範囲については、今までの研究では「八路軍山東縦隊」だけが判明した。それは1941年7月21日付の『解放日報』の記事で「八路軍山東縦隊某駐地」とのことが確認できる。筆者の考察によると、現存している八路軍山東縦隊の遺跡がいくつかある。山東省臨沂市費県にある「八路軍山東縦隊後勤部被服廠」、山東省臨沂市沂水県にある「八路軍山東縦隊創建地」、山東省臨沂市沂水県にある「八路軍山東縦隊衛生部直属後方医院記念館」、山東省臨沂市沂南県にある「八路軍山東縦隊司令部旧址」などがある。

さらに、小林清の回想によると、「1942年5月末に延安工農学校を出た小林は、沂蒙山区に位置する山東軍区司令部にたどりついた。ここで反戦同盟山東支部の本橋、大西正、渡部三郎などに会った」³⁴とある。ここから、反戦同盟山東支部の活動は、沂蒙山区(現在山東省臨沂市付近)にあったと判断できよう。

5, 反戦同盟膠東支部

1941年9月18日、八路軍膠東第5旅団司令部で、反戦同盟膠東支部設立大会が行われた。支部書記は小林清で、組織委員は布谷が担当し、宣伝委員は石田が担当した。1942年渡辺三郎が山東軍区政治部から膠東に戻り、支部長に就任した³⁵。徐則浩の『従捕虜到戦友』も「反戦同盟膠東支部は1941年9月18日に結成大会を行った」と記述している。

1942年8月末、小林清は延安工農学校の1年間の教育を終え、膠東に戻ったのである。延安工農学校から配られた文書を敵軍工作部の張昆に渡し、「われわれの任務は、できるだけ早く反戦同盟膠東支部を作ることである³⁶」という。1942年9月、反戦同盟膠東支部を設立する準備工作は大体終わり、膠東第5支隊司令部で「在華日本人民反戦同盟膠東支部」の結成大会を開催した³⁷。小林清は支部書記となり、布谷は組織委員となり、石田は宣伝委員となった³⁸。その後、山東反戦同盟の指示に従い、渡辺三郎が反戦同盟膠東支部の支部長に就任し、小林清は依然として支部書記だった³⁹。

結成期日が矛盾している記載もある。小林清の回想録によると、反戦同盟膠東支部の設立は1941年ではなく、1942年9月のはずである⁴⁰。

結成位置に関しては、孫金科の考察によると、前述した通り、「八路軍膠東第5旅団司令部」で結成大会が行われた。筆者の考察によると、八路軍膠東第5旅団の前身は八路軍山東縦隊第5旅団だったと考えられる。その創立は1938年に山東省掖県沙河鎮で行われた⁴¹。さらに、小

林清の回想によると、結成された後、支部は敵軍工作科課長張昆と相談し、膠東地区で大規模な政治宣伝攻勢の実施を決めた。渡部が西海地区(現在煙台市掖県など)に行き、小林などは東海地区(威海, 文登, 榮成, 海陽など)の文登県近くの泊石荘を拠点として活動していたとのことである⁴²。現在の中国地図で確認したところ、山東省威海市管轄区域にある文登市南には、西泊石村があった。膠東支部の活動は威海市と煙台市付近だったと考えられる。



1944 年末、『膠東画報』に掲載された「山東抗日根拠地地図」⁴³

6, 反戦同盟鄂豫支部(第5支部)

反戦同盟鄂豫支部に関する考察も資料によって違う。反戦同盟鄂豫支部は第5支部とも呼ばれた。1941年11月、鄂豫辺区で反戦同盟鄂豫支部が設立され、責任者は森田義男だった。1943年、新四軍第5師団で鄂豫支部成立大会が正式に開催された。華中地区にはすでに4つの反戦同盟支部があったので、鄂豫支部は第5支部とも呼ばれた。支部長は坂本義次郎で、メンバーは森増太郎、森田義男、松原秀雄など10数人がいた⁴⁴。

徐則浩の研究によると、1941年11月11日に、新四軍第5師団の駐在地である湖北大悟山八角門楼で反戦同盟第5支部が設立された。支部長は坂谷義次郎で、副支部長は森田博美だった。メンバーは20人以上がいた。なぜ第5支部と呼ばれたかという、第5番目に成立した順番ではなく、第5師団で作られたからであった⁴⁵。

曹晋傑が1941年11月10日付の『七七報』(中国共産党鄂豫辺区委員会機関紙)で確認したところ、反戦同盟鄂豫支部は11月7日に結成され、その支部長は坂谷義次郎、副支部長は森田博美であるとされている⁴⁶。鄂中地委敵偽工作部の部長をつとめた黄民偉氏の回想によると、反戦同盟第5支部の支部長は坂谷義次郎で、森田博美は副支部長であったとのことである。主

な盟員は、大久保良志、中野重美、星文治、佐々木更三、松原秀雄、森増太郎などがいた⁴⁷。
孫金科の考察に出た「坂本義次郎」とこの「坂谷義次郎」は、同じ人物であると考えられる。

曹晋傑の考察によると、反戦同盟鄂豫支部は中国共産党辺区委員会と抗日大学第 10 分校が駐在している義和店(現在河南省洛陽市金鷄鎮)で結成されたと考えられる⁴⁸。張劍南などの考察では、1942 年春から 1945 年正月にかけて、坂谷義次郎が支部長としている反戦同盟第 5 支部は、何度も漲渡湖地区で活動していたとある。支部の駐在地は、汪大房湾、陶家大湾、程底下湾などだった⁴⁹。1944 年 2 月、反戦同盟第 5 支部は漲渡湖地区の浜湖嘴汪大湾で、当地の農民と旧暦のお正月を過ごした⁵⁰。湖北応山(現在湖北随州市広水市にある)には日本軍第 3 師団が駐在していた。反戦同盟第 5 支部は応山の日本兵士に対して多くのプロパガンダ工作が行われていた⁵¹。

上記の通り、徐則浩の考察では、反戦同盟鄂豫支部は湖北大悟山「八角門楼」で結成されたとしている。上記の張劍南の考察に出た漲渡湖は、現在の湖北省武漢市新州区にあり、大悟県から 100 キロ程度離れているところにある。陶家大湾は大悟県南 50 キロ程度のところにある。趙曉泮の研究に登場した湖北随州市広水市にある応山は、大悟県西 30 キロ程度のところにある。第 5 支部の活動は、大悟県付近だったと結論付けられるだろう。

現在、湖北省孝感市が管轄している大悟県芳畷鎮白果樹湾に、「新四軍第 5 師司令部旧址」がある。1 キロ離れている白果樹湾の北西のほうに、「八個門楼」という部落がある。敵軍工作員だった周煥中の回想によると、1944 年ごろ、第 5 師団司令部駐在地の白果樹湾に近い「八個門楼」という部落に、敵軍工作部が駐屯していたとのことである⁵²。敵軍工作部は筆者が大悟県芳畷鎮政府に確認したところ、当地の方言では、「八角門楼」と「八個門楼」はほぼ一緒で、正式には「八個門楼」というが、民間では「八角門楼」ともいう。徐則浩が指摘している結成地の「八角門楼」は、正確には「八個門楼」であると考えられる。

本論文では、反戦同盟鄂豫支部は 1941 年 11 月に結成され、支部長は坂谷義次郎、副支部長は森田博美であると結論付ける。その主な活動は湖北省孝感市大悟県付近である。

第 5 支部の中国側工作員の回想には、坂谷義次郎、副支部長は森田博美のほか、平松□□、岡島□□、大久保良志、星文治、中野重美、北村憲夫、松原秀雄、岩崎美佐夫、西部□□、山本□□、山本□太郎、藤崎□□、平松啓二、高野重一、田中□□、鈴木□□、森増太郎、藤池□□、佐々木更三、中島□□、平崎□□、川島□□、松野□□、松本□□、中川□□、鈴木瀬太郎、平尾□□との 29 人の名前が確認できた⁵³。

1942年に反戦同盟鄂豫支部によって創刊された『赤旗報』, 1941年に創刊された『日本軍の友』の編集長は坂谷義次郎であった⁵⁴。

7, 反戦同盟淮北支部

反戦同盟淮北支部は1942年2月26日, 洪沢湖に近い半城鎮(新四軍第4師団・淮北軍区政治部)で結成され, 後藤勇は支部長となった。盟員は, 矢口庄司, 林博二男, 池田太郎など7人がいた。同年末, 小井勇, 瓦国義, 太田延子(女)など10数人が入部した⁵⁵。現在江蘇省泗洪県にある半城鎮は, 洪沢湖の西岸にあり, 新四軍第4師団の所在地だった。

淮北支部は日本語で『兵士の声』という新聞を出版していた。編集長は矢口庄司であった⁵⁶。別の記録によると, 編集者は, 後藤勇, 大田などであった⁵⁷。

8, 反戦同盟蘇中支部

1942年3月15日に, 新四軍第1師団(蘇中軍区)で反戦同盟蘇中支部が作られた。支部長は香河正男で, メンバーは浜中政志, 横山岩吉, 田畑作造, 後藤勇, 合わせて5人がいた。後には松野博は新しく加入した。1943年5月, 香河正男が新しくできた反戦同盟華中地方協議会の会長に就任し, 蘇中支部の支部長は浜中政志がつとめた⁵⁸。蘇中支部の成立日期は, 香河正男の回想録でも確認できた⁵⁹。新四軍敵軍工作員であった陳泉の回想によると, 1943年12月に蘇中軍区で結成された「日本人民反戦同盟」支部の支部長には浜中政志がつとめたとされている。香河正男, 岡本一夫などは支部の指導メンバーだった⁶⁰。当時, 浜中政志は「李平」という中国名を使った⁶¹。

1944年3月25日付の『解放日報』の報道によると, 蘇中支部の宣伝委員は, 松野覚だった⁶²。

香河正男の回想によると, 1944年3月の車橋の戦いで多くの捕虜が出た。このうち, 山本一三から14名が反戦同盟蘇中支部に加入し, 同盟員は24人となった⁶³。

徐則浩の考察によると, 1942年3月15日に東台县三倉河付近にある新四軍第1師団(蘇中軍区)で結成されたとのことである。日本兵向けの雑誌『新時代』を発行していた⁶⁴。曹晋傑の考察によると, 反戦同盟蘇中支部は東台县一倉村で結成されたのである。地図で確認したところ, 一倉村は三倉鎮に管轄され, 三倉河のすぐそばにある。徐則浩と曹晋傑の考察は一致していることがわかる。

1942年春から, 新四軍第1師団の師団部は江蘇省啓東に入り, ここに駐屯し始めた⁶⁵。現在,

江蘇省啓東市海復鎮に「新四軍第1師師部駐地」の記念碑がある。新四軍第1師団(蘇中軍区)で作られた反戦同盟蘇中支部の活動は、江蘇省東台市及び啓東市の付近だと推定できよう。

1944年初、蘇中東台地区で反戦同盟蘇中支部によって創刊された『新時代』の編集者は、香河正男、浜中政志などであった⁶⁶。

9, 反戦同盟蘇北支部

孫金科の考察によると、1942年7月15日、新四軍第3師団(蘇北軍区)で反戦同盟蘇北支部が結成された。支部長は古賀初美で、メンバーは香河正男、田畑作造、堀本龍蔵、坂橋、古橋、竹田、村田などがいた。結成されてしばらく経ち、香河正男、田畑作造は蘇中軍区に戻った。1943年、支部のメンバーは古賀、堀本、坂橋、竹田、松田謙次、坂本節未などがいた。1944年、古賀初美は華中地方協議会に配置され、蘇北支部は吉春、清水が新しく入った。1945年に入ると、蘇北支部には青柳、森垣などが新しく入ってきた。古賀初美は蘇中支部に戻った⁶⁷。1942年7月15日という蘇北支部の成立期日は、香河正男の回想録でも確認できる⁶⁸。

1943年、岡野進の秘密身分の公開につれ、反戦団体各支部は次々と「岡野同志来延を歓迎」との電報を出した。反戦同盟蘇北支部が1943年6月8日に出した電報は1943年7月2日付の『解放日報』に掲載され、その盟員は、古賀初美、古橋角五、竹田信、堀本龍蔵、林田謙次、坂磯節支の名前があった⁶⁹。

「林田謙次」と「松田謙次」は非常に似ていることがわかるが、OSS所蔵の日本人民解放連盟組織図で「松田謙次」という名前が確認できたので、「松田謙次」のほうが信憑性が高いと考えられる。同じように、『解放日報』記載の「坂磯節支」と孫金科のいう「坂本節未」も似ている名前で、OSS所蔵の日本人民解放連盟組織図で調べたところ「坂本節史」という名前が確認できたので、「坂本節史」のほうが信憑性が高いと考えられる。

別の研究によると、1942年7月11日、江蘇省阜寧県板湖鎮にある新四軍第3師団政治部で「在華日人反戦同盟蘇北支部」結成大会が行われた⁷⁰。以上の研究を総合的に考えると、盟員の名前は多く不明な点や一致しない点があるが、反戦同盟蘇北支部は、1942年7月15日に江蘇省阜寧県板湖鎮にある新四軍第3師団政治部で結成されたとの結論をつけることができよう。

1943年夏に反戦同盟蘇北支部によって創刊された『日本兵隊の声』の編集長は堀本龍蔵、古賀初美、松田などであった⁷¹。

10, 反戦同盟太行支部

1942年8月27日午前、在華日本共産主義者同盟太行支部の結成大会が太行軍区の反戦同盟倶楽部でおこなわれた後、覚醒連盟太行支部が反戦同盟太行支部に改称した⁷²。1942年8月15日から29日まで延安で開催された「華北日本兵士代表大会」及び「日本人反戦団体華北大会」が終わってから、太行や山東など各地で結成されていた「覚醒連盟」は一斉に名称を「反戦同盟」に変えた。1943年、反戦同盟太行支部となって最初の支部長は松井英男だった⁷³。1943年の後半に、松井英男が延安に赴くと、太田隆司が支部長になった⁷⁴。1943年4月6日付の『解放日報』には、吉田太郎の署名文章が掲載され、「吉田太郎は日本人反戦同盟の支部書記である⁷⁵」と説明している。

覚醒連盟からきた反戦連盟太行支部の活動範囲は、覚醒連盟太行支部に近いと推定され、山西省潞城付近だと考えられる。

1942年10月に反戦同盟太行支部によって創刊された『報道新聞』、1943年3月1日に創刊された『同胞新聞』の編集長は吉田太郎であった⁷⁶。

11, 反戦同盟冀魯豫支部

1942年8月、延安で開かれた華北日本人反戦団体大会で、日本兵士覚醒連盟は在華日本人反戦同盟と合併し、在華日本人反戦同盟華北連合会とすることが決まった。これにともない、覚醒連盟各支部は反戦同盟の各支部へと組織の再編が行われた。覚醒連盟冀魯豫支部も反戦同盟冀魯豫支部となり、この頃には、捕虜となったり投降してきたりする日本兵が増え、支部同盟員は数10人に達していた⁷⁷。

1943年4月6日付の『解放日報』の報道「日人反戦同盟冀魯豫支部対敵反戦宣伝収効宏大」によると、「晋察冀魯豫在華日人反戦同盟支部代表の野清夫が太行地区の新聞で演説を發表した」と報じている⁷⁸。

反戦同盟冀魯豫支部は覚醒連盟冀魯豫支部から再編されてきたので、その主な活動範囲も覚醒連盟冀魯豫支部に近いと考えられ、濮陽楊集(八路軍冀魯豫軍区政治部の駐在地、現在は河南省濮陽市范県楊集郷)だったと推定できよう。

1943年3月、山西省林県で冀魯豫地区日本人反戦団体代表大会と同地区日本兵士代表大会が開かれた。水野靖夫は冀魯豫支部を代表してこの大会に参加した。反戦同盟冀魯豫地区

協議会が結成され、水野はその執行委員となった⁷⁹。上記の『解放日報』の報道で出た「野清夫」が「水野靖夫」のあやまりである可能性が高いと考えられる。

1942 年末に反戦同盟冀魯豫支部によって創刊された月刊誌『あかつき』の編集長は水野靖夫であった⁸⁰。

12, 反戦同盟晋西北支部

除則浩と孫金科の考察によると、1942 年 9 月、反戦同盟晋西北支部が設立され、小林武夫が支部長に就任した。1942 年 8 月、小林武夫が延安から八路軍 120 師団に配置され、120 師団で反戦工作に従事し始めたのである⁸¹。1944 年 4 月、晋西北支部の工作を強化するため、延安から森健が送られてきた。同年 7 月 1 日に、森健は支部長となり、茂田江純、永井、大谷などの盟員がいた⁸²。『解放日報』の記載によると、1942 年 11 月 13 日に、反戦同盟晋西北支部の結成大会がおこなわれたとされている。支部長は小林武夫だった⁸³。当時の 120 師団は、現在山西省呂梁市興県付近で活動していたので、反戦同盟晋西北支部の活動範囲も山西省呂梁市興県付近だったと推定できよう。

13, 反戦同盟清河支部(のち渤海支部)

反戦同盟清河支部は 1942 年 9 月 18 日に八路軍清河軍区で作られた。1943 年、清河軍区は渤海軍区に改名したため、反戦同盟清河支部も反戦同盟渤海支部に改名した⁸⁴。清河支部の支部長は松木嘉次郎、副支部長は鈴木一宏である⁸⁵。王庭岳の考察によると、反戦同盟清河支部の支部長は田村で、副支部長は鈴木だった⁸⁶。松木嘉次郎は本名松木春一である。松木嘉次郎は 1941 年 6 月下旬に山東省寿光県の東北河村戦闘で八路軍新河軍区第 3 旅団第 3 連隊に捕まったのである⁸⁷。龍田勝正の回想によると、反戦同盟渤海支部が結成された当初、僅か 5 名の盟員しかいなかった⁸⁸。

清河支部に関する記載や資料は極めて少ないため、その活動範囲を判明するにはかなり困難である。八路軍清河軍区は山東省北部の小清河流域に位置し、広饒県、博興県などを管轄していた⁸⁹。渤海軍区はもと清河軍区とも言われたが、1943 年ごろいっそう広い地域を包括して渤海軍区となった。この地方の北には天津から徳県、済南にいたる津浦線・膠濟線の鉄道があり、東には渤海沿岸にまたがる広大な平原地帯がある⁹⁰。河北省、山東省の隣接地区に近い山東省広饒県、博興県、寿光県付近は、清河支部(渤海支部)の活動拠点であると考えられる。

14, 反戦同盟淮南支部

1942年11月、反戦同盟淮南支部は新四軍第2師団・淮南軍区で結成された。支部長は高峯紅志だった⁹¹。反戦同盟淮南支部は1943年8月3日に結成された説もある⁹²。滝沢三郎に回想によると、1945年の初めごろ、滝沢が淮南支部に到着したとき、20人くらいの日本人がいた⁹³。反戦同盟淮南支部の盟員に関する記録は少ない。1943年、岡野進の秘密身分の公開につれ、淮南支部が祝電を出し、その祝電は1943年7月2日付の『解放日報』に掲載された。その文末の署名は、高峯、紅志、吉春務、清水、□□、藤井文章、加東肇があった⁹⁴。この中の「高峯」と「紅志」は2人の人物ではなく、明らかに「高峯紅志」のあやまりである。

曹晋傑の考察によると、1942年11月に反戦同盟淮南支部は新四軍第2師団駐在地の天長県で結成された⁹⁵。1941年から1945年2月28日の間、新四軍第2師団の師団部は、江蘇省盱眙県の城南にある黄花塘鎮にあった⁹⁶。江蘇省盱眙県の城南40キロ程度離れている黄花塘鎮は、曹晋傑の研究の中に出た安徽省天長市の北に40キロ程度の距離があり、反戦同盟淮南支部の活動は主に江蘇省淮安市盱眙県付近だと考えられる。

15, 反戦同盟浜海支部

反戦同盟浜海支部は1942年11月に八路軍浜海軍区で作られた⁹⁷。小林寛澄の回想によると、1944年8月頃には、浜海支部の国保庫治(本名・野中吉次)支部長が山東労農学校の教務主任のような仕事に転出し、かわって小林寛澄が浜海支部長になった。その年の暮、延安から市川常夫と滝沢三郎(本名・大和田廉)がやってきて、延安の方針などを直接伝達した⁹⁸。『中共抗日部隊発展史略』の記載によると、浜海軍区の部隊はかつて濰河に東に渡り、高密市西郊外にある双羊店で偽軍と戦った⁹⁹。それによると、浜海軍区は莒南県(現在山東省臨沂市莒南県)大店に駐屯していた。管轄地区は莒南、莒県、日照、臨沭、竹庭、東海、鄭城、臨沂などがあつた¹⁰⁰。現在、大店鎮に八路軍115師団司令部記念館がある。

16, 反戦同盟魯南支部

反戦同盟魯南支部は1943年5月18日に八路軍魯南軍区で作られた¹⁰¹。当時の魯南軍区文工団の主な活動範囲は臨沂、蒼県、蘭陵、滕県、鄒県一帯であつた¹⁰²。滕県は現在の滕州市で、蒼県と蘭陵は現在の蒼山県にあり、鄒県とは現在の鄒城市で、魯南支部の活動は、現在山

東省臨沂市と曲阜市の間の地区であると推定できる。

1943 年春に反戦同盟魯南支部によって創刊された『魯南報道』は、支部の機関紙となった¹⁰³。

17, 反戦同盟魯中支部

小林寛澄の回想によると、1943 年か 1944 年に、反戦同盟魯中支部副支部長となった。支部長には今野博が就いた¹⁰⁴。これはほかの研究でも確認できた。たとえば「抗日戦争時期山東的 日人反戦活動」では、反戦同盟魯中支部の第1任支部長は、金野博であるとしている¹⁰⁵。この「金野博」とは、今野博のことであろう。いつ成立したのかは不明である。秋山良照のその回想録である『中国戦線の反戦兵士』で、日本人民解放連盟魯中支部が作ったビラを引用した。その署名には「衣四二九四部隊乗馬隊 陸軍兵長 川上次男」とある¹⁰⁶。

『中日関係全書』の記載によると、日中戦争のとき、魯中軍区の部隊が臨朐、萊蕪、博山などの県を解放し、済南の近くまで進攻した¹⁰⁷。同時に、魯中軍区の部隊が南にある臨沂まで進攻したとある¹⁰⁸。ここから、魯中軍区の活動範囲は、萊蕪、泰安の南、臨沂の北にあったと推定できる。

18, 反戦同盟冀魯辺区支部

反戦同盟冀魯辺区支部の支部長は小島金之助、副支部長は山口勝であり¹⁰⁹、結成期日は今の資料では不明である。覚醒連盟の津冀魯支部の支部長が小島金之助で、メンバーは山口、桐山がいたことから、覚醒連盟津冀魯支部と反戦同盟冀魯辺区支部の間に、緊密なつながりがあったと推測でき、反戦同盟冀魯辺区支部は覚醒連盟津冀魯支部から発展してきたことも考えられよう。

19, 反戦同盟冀南支部

反戦同盟冀南支部に関する記載は少ない。1943 年7月 13 日の『解放日報』によると、日本共産主義者同盟結成1周年記念と在華日本人反戦同盟延安支部結成3週年記念大会に、反戦同盟冀南支部書記の秋山良照が出席した¹¹⁰。敵軍工作に従事していた王書波の回想によると、1942 年の「9・12 大掃蕩」以降、秋山良照の派遣で、反戦同盟冀南支部の袁広見、小林、滕沢の3人が冀県敵軍工作站に行き敵軍工作を展開した¹¹¹。反戦同盟冀南支部の組織そのもの

は、覚醒連盟冀南支部からきたと考えられる。活動範囲も覚醒連盟冀南支部と同様で、河北省南部の衡水市の棗強県と南宮市付近だと考えられる。

1942年8月に、延安で日本兵士代表大会が開かれ、華北日本兵士代表大会を結成した。大山光美は華北兵士代表大会常務委員会会長に選ばれ、中小道静男、松井英男、茂田江純、滝沢三郎は常任委員に選ばれた。1942年8月20日から29日まで、延安工学校で華北日本人民反戦団体代表大会が開催された。「在華に本人民反戦同盟華北連合会」が結成され、覚醒連盟を反戦同盟に改称した。在華日本人民反戦同盟華北連合会の会長は杉本一夫に選ばれ、森健、松井英男は副会長に、高山進、茂田江純、滝沢三郎、梅田照文は執行委員に選ばれた

112。



反戦同盟分布図

支部名	結成期日	結成地 (または活動地域)	支部長	出版物
反戦同盟延安支部	1940年7月7日	延安	委員長:大山光義 森健, 高山進, 市川春夫 支部書記:小林	『兵士の友』
反戦同盟冀中支部	1941年2月23日	河北省保定市唐県南洪 城村	支部長:田中実 副支部長:東忠	『日本人民の友』 『光明月刊』
反戦同盟晋察冀支部	1941年5月4日	河北省石家荘市 平山県小北頭村	支部長:宮本哲治 宣伝部長:中原	『戦友』『日軍の友』 『前進』『前進画報』
反戦同盟山東支部	1941年6月2日	沂蒙山区(現在山東省 臨沂市付近)	支部長:大西正 副支部長:上中庄太郎 今野博	
反戦同盟膠東支部	1941年9月18日	威海市と煙台市付近	支部書記:小林清 (のち渡辺三郎) 組織委員:布谷 宣伝委員:石田	
反戦同盟鄂豫支部	1941年11月	湖北省孝感市付近大悟 県芳畝鎮白果樹湾	支部長:坂谷義次郎 副支部長:森田博美	『日本軍の友』 『赤旗報』
反戦同盟淮北支部	1942年2月26日	江蘇省泗洪県半城鎮	支部長:後藤勇	『兵士の声』
反戦同盟蘇中支部	1942年3月15日	江蘇省東台市及び啓東 市付近	支部長:香河正男(のち浜 中政志) 宣伝委員:松野覚	『新時代』
反戦同盟蘇北支部	1942年7月15日	江蘇省阜寧県板湖鎮	支部長:古賀初美	『日本兵隊の声』
反戦同盟太行支部	1942年8月27日	山西省潞城付近	支部長:松井英男(のち太 田隆司) 支部書記:吉田太郎	『報道新聞』 『同胞新聞』
反戦同盟冀魯豫支部	1942年8月	河南省濮陽市范県楊集 郷	支部長:水野靖夫	『あかつき』
反戦同盟晋西北支部	1942年9月	山西省吕梁市興県付近	支部長:小林武夫	
反戦同盟清河支部 (のち渤海支部)	1942年9月18日	山東省広饒県, 博興 県, 寿光県付近	支部長:松木嘉次郎 副支部長:鈴木一宏	
反戦同盟淮南支部	1942年11月	江蘇省淮安市盱眙県	支部長:高峯紅志	
反戦同盟浜海支部	1942年11月	山東省臨沂市莒南県大 店鎮	支部長:国保庫治 (のち小林寛澄)	
反戦同盟魯南支部	1943年5月18日	山東省臨沂市と曲阜市 の間の地区		『魯南報道』
反戦同盟魯中支部		山東省萊蕪, 泰安, 臨 沂の間の地区	支部長:今野博 副支部長:小林寛澄	
反戦同盟冀魯辺区支部			支部長:小島金之助 副支部長:山口勝	
反戦同盟冀南支部		河北省南部の衡水市の 藁強県と南宮市付近	支部書記:秋山良照	

反戦同盟一覧表

- ¹王庭岳,『在華日人反戰運動史略』,河南人民出版社,1989年,65頁。
- ²趙松茂,梁纘「在華日人反戰始末」『文史精華』2005年第5号,總第180号,13頁。
- ³「在華日人反戰革命同盟在渝成立——並設支部於×戰区」『新中華報』1940年7月26日1面。
- ⁴秋山良照,『中国戦線の反戦兵士』,徳間書店,1978年11月10日,68頁。
- ⁵前掲書,『在華日人反戰運動史略』,77頁。
- ⁶「歡迎在華日本人民反戰同盟延安支部的設立」『新中華報』1940年7月26日2面
- ⁷孫金科,『日本人民的反戰闘争』,北京出版社,1996年2月,146—147頁。
- ⁸徐則浩,『從浮虜到戰友』,安徽人民出版社,2005年7月1日,91頁。
- ⁹「反对日寇新的侵略戦争,在延日人反戰同盟集会」『解放日報』1941年12月18日第4面
- ¹⁰「岡野進同志指示留延日人,一致参加保衛边区」『解放日報』1943年7月13日2面。
- ¹¹王庭岳,傅義桂「抗戰時期的日人反戰新聞事業」『新聞研究資料』1990年第1号,127頁。
- ¹²和田真一「冀中平原地下道戦」反戰同盟記録編集委員会 編『反戦兵士物語:在華日本人反戰同盟員の記録』日本共産党中央委員会出版部,1963年9月,187頁。
- ¹³前掲書,『日本人民的反戰闘争』,150—151頁。
- ¹⁴前掲書,『在華日人反戰運動史略』,79頁。
- ¹⁵前掲書,『日本人民的反戰闘争』,154—155頁。
- ¹⁶前掲,「抗戰時期的日人反戰新聞事業」,133頁。
- ¹⁷「冀中軍民万人 与日本反戦志士聯歡」『解放日報』1941年8月16日第2面
- ¹⁸前掲書,『日本人民的反戰闘争』,155頁。
- ¹⁹前掲書,『在華日人反戰運動史略』,80頁。
- ²⁰前掲書,『從浮虜到戰友』,94頁。
- ²¹前掲,「抗戰時期的日人反戰新聞事業」,133頁。
- ²²「日人反戰同盟記念成立1周年」,『解放日報』1942年5月8日第2面。
- ²³「10 中共側新聞伝單等送附ノ件2」,在中華民国(北京)日本大使館調査室,昭和17年8月21日,アジア歴史資料センター, B02032461900。
- ²⁴「14 中共側新聞伝單等送附ノ件6」,在中華民国(北京)日本大使館調査室,昭和17年8月21日,アジア歴史資料センター, B02032462300。
- ²⁵前掲書,『在華日人反戰運動史略』,80頁。
- ²⁶前掲書,『日本人民的反戰闘争』,158頁。
- ²⁷前掲書,『從浮虜到戰友』,95頁。
- ²⁸「在華日人反戰同盟山東支部成立」『解放日報』1941年7月21日第2面。
- ²⁹「在華日人反戰同盟山東支部隆重成立」『大衆日報』1941年6月30日1面。
- ³⁰「業蕪我对敵展開政治攻勢,『桜花宣伝』收効宏大,日人反戰同盟山東支部成立」『解放日報』1943年5月18日1面。
- ³¹「在華日人反戰同盟山東支部成立」『解放日報』1941年7月21日第2面。
- ³²前掲,「在華日人反戰同盟山東支部隆重成立」,『大衆日報』1941年6月30日1面。
- ³³「慶」は中国語で「庆」と書き,「庆」と「庄」は間違いやすいからである。
- ³⁴小林清「一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上」解放軍出版社,1985年8月,123頁。
- ³⁵前掲書,『日本人民的反戰闘争』,158頁。
- ³⁶前掲書,『一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上』,127頁。
- ³⁷前掲書,『一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上』,131頁。
- ³⁸前掲書,『一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上』,133頁。
- ³⁹前掲書,『一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上』,137頁。
- ⁴⁰前掲書,『一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上』,131頁。
- ⁴¹中国共産党中央組織部,中共中央党史研究室,中央档案館『中国共産党組織史資料』(第6卷)中共党史出版社,1991年,724頁。
- ⁴²前掲書,『一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上』,138頁。
- ⁴³李恕「烽火丹青記抗戰——膠東八路軍对日戰略反攻前後」『百年潮』2006年第4号,75頁。
- ⁴⁴前掲書,『日本人民的反戰闘争』,161頁。
- ⁴⁵前掲書,『從浮虜到戰友』,96頁。
- ⁴⁶曹晋傑「日本人反戰同盟在華中的組織与活動」『抗日戦争研究』1995年第2号,124頁。
- ⁴⁷黄民偉「我所知道的反戰同盟支部」『湖北文史資料』,1995年第1号,199頁。
- ⁴⁸前掲,「日本人反戰同盟在華中的組織与活動」,124頁。
- ⁴⁹張劍南,余文祥「日本反戰同盟第5支部在漲渡湖的活動」『湖北文史資料』1995年第1号,202頁。
- ⁵⁰許愷景「日本反戰同盟在新洲」『武漢文史資料』2003年10月,22頁。

- 51 趙曉沖「從反戰同盟5支部到日軍46人集体暴動」『党史博覽』2007年第6号, 55頁。
- 52 周煥中 主編『特殊的戰線』武漢大学出版社1991年11月, 111頁。
- 53 前掲書,『特殊的戰線』, 278—279頁。
- 54 前掲,「抗戰時期的日人反戰新聞事業」, 133頁。
- 55 張文華「日本人民解放連盟淮北支部始末」『党史縱覽』1994年第6号, 39頁。
- 56 前掲書,『從浮虜到戰友』,97—99頁。
- 57 前掲,「抗戰時期的日人反戰新聞事業」, 133頁。
- 58 前掲書,『日本人民的反戰鬭爭』, 161—162頁。
- 59 姬田光義, 藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店,1999年9月18日,170頁。
- 60 陳泉「並肩戦闘的日本戦友」『福建党史月刊』2005年第S1号, 22頁。
- 61 前掲,「並肩戦闘的日本戦友」, 21頁。
- 62 「日人反戦同盟の光栄, 車橋戦闘中松野覚同志英勇犠牲」『解放日報』1944年3月25日1面。
- 63 前掲書,『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』,170—171頁。
- 64 前掲書,『從浮虜到戰友』,97頁。
- 65 黄森「悠悠懇牧揺藍情」『大衆科技報』2009年9月1日。
- 66 前掲,「抗戰時期的日人反戰新聞事業」, 133頁。
- 67 前掲書,『日本人民的反戰鬭爭』, 163頁。
- 68 前掲書,『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』,170頁。
- 69 「日人反戦同盟蘇北分盟電岡野進」,『解放日報』1943年7月2日2面。
- 70 張威, 張学忠「華中区『日人反戦同盟』活動紀実」『党史縱覽』, 2005年第8期, 36頁。
- 71 前掲,「抗戰時期的日人反戰新聞事業」, 133頁。
- 72 「在華日共產主義者同盟成立太行支部」『解放日報』1942年10月19日2面。
- 73 前掲書,『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』,274頁。
- 74 前掲書,『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』,275頁。
- 75 「在發展中的日人反戦同盟太行支部」『解放日報』1943年4月6日2面。
- 76 前掲,「抗戰時期的日人反戰新聞事業」, 133頁。
- 77 前掲書,『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』,118頁。
- 78 「日人反戦同盟冀魯豫支部对敵反戦宣伝収効宏大」『解放日報』1943年4月6日1面。
- 79 前掲書,『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』,118頁。
- 80 前掲,「抗戰時期的日人反戰新聞事業」, 133頁。
- 81 前掲書,『從浮虜到戰友』,94頁。
- 82 前掲書,『日本人民的反戰鬭爭』, 299頁。
- 83 「朝鮮独立同盟日人反戦同盟成立晋西北分盟」『解放日報』1942年11月21日1面。
- 84 前掲書,『從浮虜到戰友』,95頁。
- 85 符浩「憶山東戦区『在華日人反戦同盟』」『人民日報』, 1995年8月28日。
- 86 前掲書,『在華日人反戦運動史略』, 331頁。
- 87 中共河北省委党史研究室, 河北政協文史資料委員会『在華日人反戦紀実』河北教育出版社, 2005年8月, 366頁。
- 88 龍田勝正「望楼」前掲書『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』, 208頁。
- 89 張濤之『中国人民解放军演義』(第2卷)作家出版社, 1997年, 496頁。
- 90 龍田勝正「望楼」前掲書『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』, 208頁。
- 91 前掲書,『從浮虜到戰友』,99頁。
- 92 前掲,「華中区『日人反戦同盟』活動紀実」, 37頁。
- 93 前掲書,『從浮虜到戰友』,140頁。
- 94 「日人反戦同盟蘇北分盟電岡野進」『解放日報』1943年7月2日2面。
- 95 前掲,「日本人反戦同盟在華中的組織与活動」, 125頁。
- 96 張伝英, 張肇俊「新四軍軍部變遷」『党史博采』(紀実版)2007年第8号, 43頁。
- 97 前掲書,『從浮虜到戰友』,95頁。
- 98 前掲書,『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』,151頁。
- 99 張廷貴『中共抗日部隊發展史略』解放軍出版社, 1990年, 139頁。
- 100 『中国共產党山東臨沂地区組織史資料(1923—1987)』, 中共党史出版社, 1991年, 249頁。
- 101 前掲書,『從浮虜到戰友』,95頁。
- 102 山東省文化庁文化芸術誌編集弁公室『文化芸術誌資料彙編』(第23卷)山東省文化庁『文化芸術誌』編集弁公室, 1984年, 66頁。
- 103 前掲,「抗戰時期的日人反戰新聞事業」, 134頁。
- 104 前掲書,『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』,160頁。
- 105 杜玉芳, 王衛紅「抗日戦争時期山東の日人反戦活動」『山東档案』2003年5月, 44頁。
- 106 前掲書,『中国戦線の反戦兵士』, 126頁。

¹⁰⁷ 閔捷, 譚汝謙, 李家巍『中日關係全書』(第 1 卷) 遼海出版社, 1999 年, 748 頁。

¹⁰⁸ 李新, 陳鉄健, 李義彬『中国新民主主義革命通史』(9) 上海人民出版社, 2001 年, 508 頁。

¹⁰⁹ 前掲「憶山東戰区『在華日人反戰同盟』」。

¹¹⁰ 「岡野進同志指示留延日人, 一致参加保衛边区」『解放日報』, 1943 年 7 月 13 日 2 面。

¹¹¹ 王書波「反戰同盟在冀東」『党史博采』1995 年第 7 号, 41 頁。

¹¹² 「華北士兵代表大会反戰团体大会昨日勝利閉幕, 最後通過綱領及会章, 成立反戰同盟統一機構」, 『解放日報』1942 年 8 月 30 日 1 面。

4.4 日本人民解放連盟と共産主義者同盟

4.4.1 日本人民解放連盟の結成

1943年10月に、延安で「日本人民解放同盟」(仮)の結成準備工作が展開された。その委員は杉本、松江、西、和田、秋山、夏川、森、高山、大山、梅田など17人であった。「日本人民解放同盟」の目的は、「中国にいる日本人民及び国内にいる日本人の覚醒を推進するため¹」とされた。

1944年1月5日から8日まで、日人反戦同盟拡大執委会予備会議が延安日本工農学校で行われ、各支部の対敵宣伝工作が討論された²。

その後、1944年1月15日午前から、在華日人反戦同盟華北連合会拡大執委会が延安王家坪大礼堂で開幕式を行った³。朱徳八路軍総司令官が演説し、「日本軍部は従来中日両国人民共同の敵である。反戦同盟は中日両国人民が助け合う原点であり、日本で人民政権が確立されたら、皆さんが自ら勤労生産し、対外略奪をやめ、中日両国人民の間には2度と現在のような戦争がないように⁴」と強調した。岡野進も演説し、次のように指摘している。「反戦連盟支部はもうすでに××個になり」「反戦同盟自身の勢力も大きく成長した。人数の増加だけではなく、多くの幹部を育った。たとえば日本工農民学校の教務主任、教員はみんな学生から抜擢された者たちである。前方においても、良いピラ、スローガンができる多くの宣伝幹部が現れている。入り込んだ日本特務を識別し、白状させる幹部も育った。したがって、現在、広範な政治闘争を行う客観条件と主観条件を備えており、『日本人民解放連盟』を結成する必要がある。『解放連盟』には、反戦・反軍部の人民を組織し、人民戦線を進める大きな任務がある⁵。」同日の『解放日報』には、『日本人民解放連盟』(仮)を結成する準備委員会提案が掲載されている。

日人反戦同盟拡大執行委員会は1944年1月15日に開幕し、1カ月間の会議を経て、同年2月16日に延安工農学校の講堂で閉幕した。閉幕式において、岡野進は「日人反戦同盟拡大執行委員会と日本人民解放連盟の結成」と題した演説した。演説において、会議の2つの任務に触れ、「1つ目の任務は、これまでの2年間における華北にある反戦同盟各支部の工作を検討し、今後の新しい方針を決めることである。もう1つの任務は、日本人民解放連盟を結成することである⁶」と述べた。2月16日、日本人民解放連盟創立準備委員会が発足した。岡野進、森健、杉本一夫が準備委員会の華北委員に選ばれた⁷。

1944年3月25日付の『解放日報』の報道によると、華中日本人反戦同盟の各支部長の連席会議の決議により、反戦同盟を解散し、日本人民解放連盟を結成することが決定された⁸。

1944年4月12日付の『解放日報』は、「日本人民反ファシズム闘争の新段階、解放連盟正式結成、華北華中相次いで支部を設立」と報じた。各地方協議会、地区協議会及び各支部の結成は、延安にある解放連盟創立準備委員会の指導の下で行われた⁹。解放連盟の結成期日は解放連盟創立準備委員会及び解放連盟華北地方協議会が結成した1944年2月16日であると言えよう。

4.4.2 日本人民解放連盟の組織構成

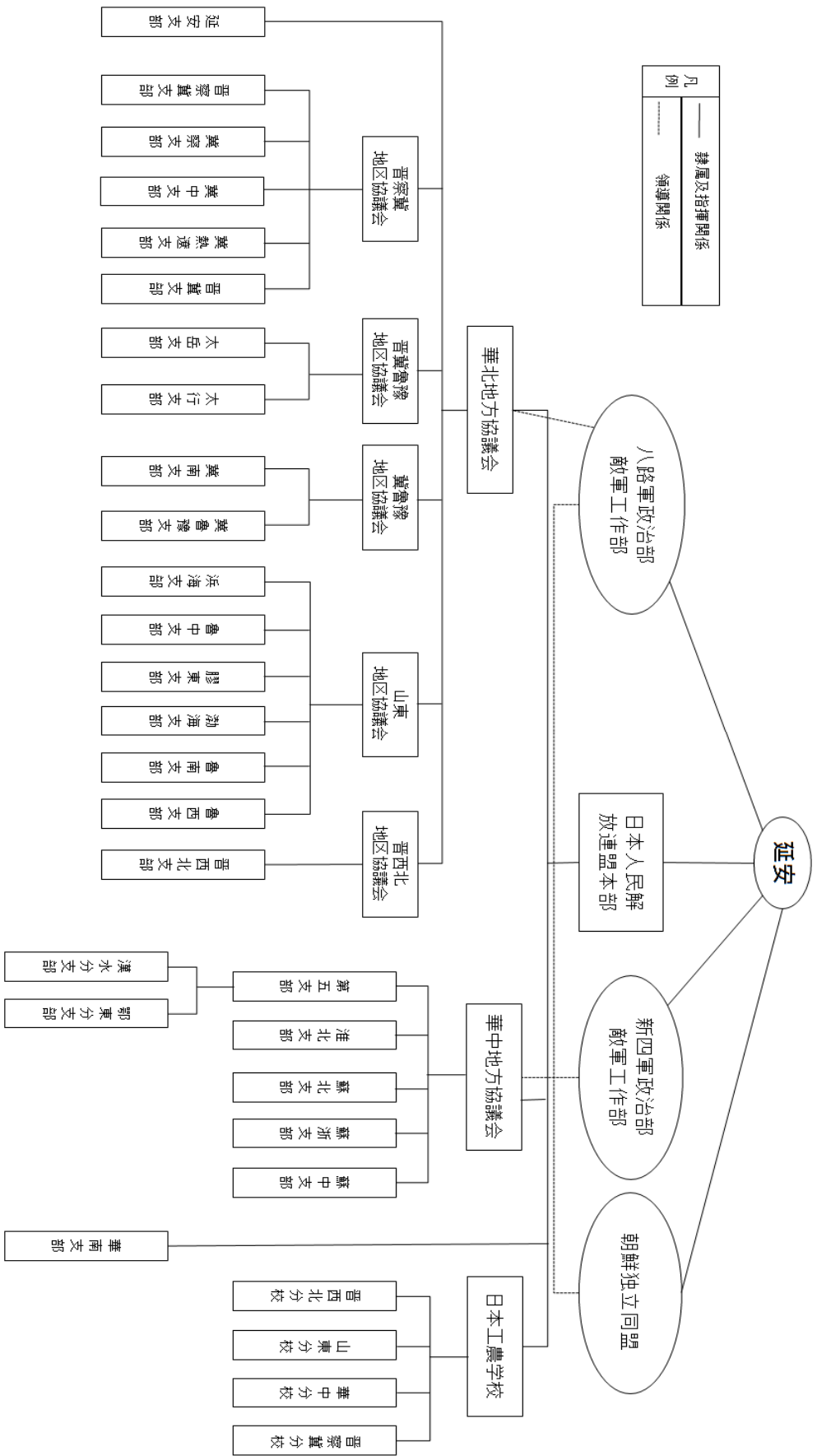
解放連盟の組織構成は次の通りである。解放連盟創立準備委員会—地方協議会—地区協議会—各支部の順で上下関係が明確にされているのである¹⁰。1944年2月20日付の『解放日報』には、「日本人民解放連盟綱領草案」が掲載された。解放連盟組織図も次のように公開されている¹¹。各地方組織のほか、連盟中央委員会の下には、いくつかの団体が設置されており、たとえば、日軍暴行調査委員会、解放連盟日本軍隊研究会などがあった¹²。

中国学者の研究によると、1945年5月までには、華北、華中の各地において、延安支部、晋西北支部、晋察冀支部、晋東南支部、冀中支部、冀南支部、冀魯豫支部、太行支部、太岳支部、浜海支部、魯中支部、魯南支部、清河支部、膠東支部、蘇中支部、蘇北支部、淮北支部、淮南支部など21の支部があった¹³。

ここでは、『延安リポート』所収の「日本人民解放連盟組織図」と対比しながら、更に早稲田大学山本武利先生のご好意で提供していただいた米国立公文書館所蔵の「日本人民解放連盟組織図」を参考し、解放連盟の各地方協議会、地区協議会、各支部を次のようにまとめる。

		支部長		部員	
延安支部		岡島邦彦			
		中山太郎	和田真一、林一雄、吉村誠、杉山達雄、吉田、水戸		
冀中支部		中村敬夫	小林、山川照、山田博原、成瀬三郎、福田、村岡、山口通、夏川晋、高田口夫		
晋察冀地区協議会		委員長 津田修 副委員長 宮本哲治	大谷		
委員 渡辺晃、小林重一、荒井正雄、中西久夫		冀熱遼支部	五名		
		重田唯好			
冀魯豫地区協議会		太行支部	岡村義次	松井英男、水口、清水、山崎、鈴木、黒川口、櫻原、平山、小沼、松本、福田、田中、小山、 渡辺三郎 以外数名	
委員長 松井英雄、後藤光昭、渡辺俊夫		太岳支部	小林重一	運沼、松井	
冀魯豫地区協議会		冀南支部	秋山照良照	木下英雄、小島	
委員長 秋山良照 委員 森山、宮川英男		冀魯豫支部	水野清夫	木下英雄、小島	
		滨海支部	本橋朝治	國保康治、山口九藏、青山口一、中田川、初瀬、磯木、大野米三、田村、和田、木村 義男、山田静馬、森田長五郎、村上 田中、上中庄太郎、今井、小林清一郎、佐藤晃、勝田、森明、伊藤口、佐藤口、小林寛 遠、地島口、岡泰清治、太田一郎、佐藤敏	
山東地区協議会		魯中支部	小島金之助	松本嘉次郎、青山口、鈴木 山口口剛、中込口	
委員長 本橋朝治、櫻川剛嗣、桐山孝一、岡本清二、 委員 上田正雄、渡辺三郎、藤原真明、小 小林辰五郎、和田国夫、田村伸樹、國保康治、 市川正一、板倉政造(政三)、松本嘉次郎、荒井、 大西正、上杉富雄、丸山鶴雄、多田行雄		渤海支部	板倉政造	小林清、横田正雄等	
		魯南支部	田村伸樹		
		魯西支部	中島口		
		膠東支部	渡辺三郎		
晋西地区協議会		晋西北支部	森健	岩崎口、西川兼一、山崎、吉澤秀雄、松原良口、山本三郎、西部松市、松永一義、鈴木誠 浄、森山善一、星倉之助、北村、金井由国居、大久保良志、森川口夫(TATSUO)、片山 明、尾形口、飯谷、篠崎、佐藤政男、小山留口、杉浦一郎、金口男、黄口 輝	
		晋西北支部	森田博美	古賀初美、久保和夫等	
華北支部		坂本節史			
冀中支部			山本一三、岡本忠、清水誠、市村一郎、神八多郎、石川芳夫、宮本銀吾、吉田忠雄、神八 多郎、和泉清、太倉晋和、中沢留義、近口民男、口田義夫、口井孝口郎、H、yanah口、口 田進、口久保口、口田正一、香河正男		
淮北支部		後藤勇	矢口庄司、佐々木正、高山進、窪田義、太田口子、森光子、藤井文章等		
蘇浙支部		吉永久寿秀			
華南支部			盟員 15名		
日本人民解放連盟本部					
華北地方協議会					
委員長 吉田太郎 副委員長 岡島邦彦 委員 小林武夫、水野清、和田稗忠、一真					
晋察冀地区協議会					
委員長 津田修 副委員長 宮本哲治 委員 渡辺晃、小林重一、荒井正雄、中西久夫					
冀魯豫地区協議会					
委員長 松井英雄、後藤光昭、渡辺俊夫 委員 山田三郎、後藤光昭、渡辺俊夫					
山東地区協議会					
委員長 本橋朝治、櫻川剛嗣、桐山孝一、岡本清二、 委員 上田正雄、渡辺三郎、藤原真明、小 小林辰五郎、和田国夫、田村伸樹、國保康治、 市川正一、板倉政造(政三)、松本嘉次郎、荒井、 大西正、上杉富雄、丸山鶴雄、多田行雄					
晋西地区協議会					
華北支部					
委員長 香川正男 副委員長 高峰紅志 委員 田畑作造、矢口庄司、加藤肇、清水安夫、杉田練治					

日本人民解放連盟組織表



——	隶属及指挥关系
.....	领导关系

日本人民解放同盟组织图

延安地方協議会。延安には、解放連盟の中央委員会があるが、「延安地方協議会」という記載は『解放日報』には1回だけ確認できる¹⁴。『延安リポート』の解放連盟組織図には、延安にある解放連盟組織は、「日本人民解放連盟本部」となっている。本論文では、「延安本部」扱う。

華北地方協議会。『解放日報』の報道によると、1944年2月16日、日本人民解放連盟創立準備委員会が発足したとある。岡野進、森健、杉本一夫が準備委員会の華北委員に選ばれた。解放連盟華北地方協議会も同日に結成された¹⁵。『延安リポート』の組織図によると、岡野進、森健、杉本一夫などは延安にある「解放連盟本部」のメンバーとなっており、華北地方協議会の委員長は吉田太郎で、副委員長は岡島邦彦で、委員は小林武夫、水野靖夫、堺清、西忠、和田真一となっている。華北地方協議会の委員長、副委員長と委員は、小林清『在華日人反戦組織史話』の記述と一致している¹⁶。

小林清の回想によると、華北地方協議会の下には、膠東支部(13人)、延安支部(75人)、浜海支部(15人)、太行支部(29人)、太岳支部(11人)、晋西北支部(7人)、冀中支部(7人)、冀南支部(15人)、魯中支部(9人)、魯南支部(7人)、冀魯豫支部(13人)、晋察冀支部(16人)、清河支部(6人)と13の支部があり、盟員は223人とある¹⁷。

華中地方協議会。1944年3月25日付の『解放日報』は、華中日人反戦同盟は声明を出し、反戦同盟の解散と解放連盟の結成に同意する意を表明したと報じている¹⁸。1944年5月5日に、解放連盟華中地方協議会は淮南で結成された。香河正男は委員長で、高峰紅志は副委員長に就任した。田畑矢口、加藤清水、松田の3同志は委員に選ばれた。解放連盟華中地方協議会の結成により、反戦宣伝を日本僑民にも拡大させようと考えた¹⁹。曹晋傑が1944年9月2日付の『新浙東報』で確認したところ、香河正男が委員長で、高峰紅志が副委員長に就任したほか、委員は田畑作造、加藤肇、矢口司庄(正確には矢口庄司)、清水松田がいたとされている²⁰。上記の『解放日報』で記載した「田畑矢口」、「加藤清水」、「松田」という3人は、田畑作造、矢口庄司、加藤肇、清水魯吉、松田謙次の5人のことだと考えられる²¹。『延安リポート』の組織図によると、委員長は香川正男で、副委員長は高峰秀雄で、委員は田畑作造、矢口庄司、加藤京一、清水安夫、杉田練治となっている。「香川正男」と「香河正男」、「高峰秀雄」と「高峰紅志」、「加藤肇」と「加藤京一」、「清水魯吉」と「清水安夫」、「松田謙次」と「杉田練治」はそれぞれ同じ人物であると考えられる。本論文では、香河正男、高峰紅志、加藤肇のほうが正確だと考える。

委員長の香河正男の回想によると、1944年5月5日に、淮南の黄花塘で華中の反戦同盟各支部の代表大会が開催され、反戦同盟華中地方協議会を結成したとされている。香河正男が委員長となり、高峰紅志は副委員長となった²²。『解放日報』が記載している「解放連盟華中地方協議会」と香河正男が回想している「反戦同盟華中地方協議会」は実質的には同じ組織であると考

えられる。

小林清の回想によると、解放連盟華中地方協議会の下に、鄂辺支部、蘇中支部、蘇北支部、淮北支部、淮南支部と5つの支部があった²³。

晋察冀地区協議会。1944年4月12日付の『解放日報』の報道によると、1944年3月15日に、反戦同盟晋察冀支部と冀中支部をメインとした日本人民解放連盟晋察冀地区協議会が結成されたとある²⁴。1944年5月7日付の『解放日報』は、晋察冀地区協議会の詳細を報道した。津田秋は委員長に選ばれ、宮本哲治が副委員長に選ばれた。渡辺、晃林一雄、中山太郎は委員に選ばれた²⁵。『延安リポート』の解放連盟組織図によると、委員長は津田修、副委員長は宮本哲次、委員は渡辺晃、小林重一、荒井正雄、中西久夫となっている。「津田秋」と「津田修」、「宮本哲治」と「宮本哲次」は同じ人物であると推測できる。複数の資料によると、『延安リポート』の解放連盟組織図にある「宮本哲次」は正確には「宮本哲治」であると考えられる。『解放日報』に出た「渡辺、晃林一雄」は「渡辺晃と□□□」の誤りであると判断できる。

更に、晋察冀日人解放連盟は1945年5月7日に日本兵士座談会を開き、新たに参加した9名の日本軍兵士を歓迎した²⁶。

晋冀豫地区協議会。1945年1月25日に、解放連盟晋冀豫地区協議会が結成された。会長は田村義次で、副会長は渡部である²⁷。『延安リポート』の日本人民解放連盟組織図には、晋冀豫地区協議会との記載がなく、「晋冀魯豫地区協議会」となっており、委員長は松井英雄で、副委員長は田村義次で、委員は山田三郎、後藤光昭、渡辺俊夫がいた²⁸。

冀魯豫地区協議会。1944年12月18日、華北地方協議会の指示に従い、冀魯豫支部と冀南支部が解放連盟冀魯豫地区協議会を結成した²⁹。会長は秋山良照で、副会長は宮川英男である³⁰。1945年8月15日以後、日人解放連盟冀魯豫協議会の百人以上の盟員、及び解放連盟晋西北支部の同志は、日本捕虜を収容するため、大量の宣伝物を運び、八路軍と同行で前線に入った³¹。『延安リポート』の日本人民解放連盟組織図によると、委員長は水野靖夫、副委員長は秋山照雄(岡部)、委員は森山、宮川がいた。『延安リポート』に出た副委員長の秋山照雄は秋山良照である可能性が高く、委員の宮川は宮川英男だと考えられる。

山東地区協議会。解放連盟山東地区協議会の会長は橋中で、副会長は大西正である³²。1945年8月のとき、山東地区協議会の下には、浜海支部、膠東支部など5つの支部があり、200名の盟員がいた³³。結成期日は不明であるが『延安リポート』の日本人民解放連盟組織図には、委員の名簿は詳細に記載されている。それによると、委員長は本橋朝治で、委員は上田正雄、横川剛嗣、桐山孝一、岡本清二、小林辰五郎、和田国夫、渡辺三郎、藤原真明、小林寛澄、浜田一男、田村伸樹、板倉工、国保康治、市川正一、板倉政造(政三)、松本嘉次郎、荒井、大西正、上杉富雄、丸山鶴雄、多田行雄がいた。

この「国保康治」は複数の資料で確認したところ、正確には「国保庫治」(本名:野中吉次)である可能性が高い。

反戦同盟清河支部を考察するときに述べた通り、この「松本嘉次郎」は正確には「松木嘉次郎」(本名:松木春一)であると判断できる。

1944年3月6日付の『解放日報』の記載によると、在華日人反戦同盟華北連合会山東分会の責任者本橋は、記者に対して、解放同盟の結成を擁護する立場を表明した³⁴。さらに、1945年2月20日付の『解放日報』には、「山東日人解放連盟、瓦解敵軍効果良好」との報道があった³⁵。「山東支部」については直接の記述がなく、これらの報道は、解放連盟山東地区協議会のことだと考えられる。

晋西北地区協議会。筆者が考察した『解放日報』などの資料には、晋西北地区協議会についての記述はないが、『延安レポート』の日本人民解放連盟組織図には晋西北地区協議会が記載されている。しかし、その委員長などのメンバーと組織構成は一切記載されていない。

冀察支部。中国共産党冀察辺区委員会敵軍工作部の工作員だった劉震の回想によると、日本人民解放連盟冀察支部の結成大会は1945年7月27日か28日に、敵軍工作部駐在地の河北省涿水県聚鹿村で開催されたとある。15、6名の日本人が参加した³⁶。創立が終戦直前の1945年7月だったので、米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には冀察支部が記載されていない。

蘇浙支部。1944年にさらに蘇浙支部が結成された。蘇浙支部の支部長は吉永久寿秀である³⁷。1945年8月22日の『解放日報』の報道によると、華中解放連盟蘇浙支部の盟員はもうすでに前線に到着し、日本軍向けの政治攻勢を展開していた³⁸。1944年秋に、解放連盟蘇浙支部の機関紙である『解放週報』が創刊され、編集は吉永久寿秀などが当たった³⁹。『延安レポート』の日本人民解放連盟組織図には蘇浙支部が記載されていない。

延安支部。日本人民解放連盟延安支部が1944年7月27日に、「小磯軍閥内閣を反対する」声明を出した⁴⁰。日本人民解放連盟延安支部が1945年1月15日から米国写真展覧会を開催した⁴¹。1945年8月17日に、「延安日本人民解放連盟本部」との名義で、ソ連のスターリン委員長、アメリカのトルーマン大統領、イギリスのアトリー(Clement Attlee)首相宛の電報を出した⁴²。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、延安支部の支部長は岡島邦彦だと記載されている。

太行支部。1944年3月9日、在華日人反戦同盟太行支部が会議を某地で開催され、反戦同盟太行支部を取り消し、解放連盟太行支部の結成を決めた⁴³。日本人民解放連盟太行支部の盟員である砂原利男、住野尺七⁴⁴が、1945年5月末に、現在山西省長治市に管轄されている襄

垣県内の白晋線付近⁴⁵で日本軍のトーチカに対して呼びかけをしていたところ、日本軍に撃たれ戦死した⁴⁶。日本人民解放連盟太行支部は日本が投降するという情報を聞き、各種の宣伝物を3万部近く作り、前線に運び込んだ⁴⁷。

米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、支部長の岡村義次、部員の松井英男、水口、清水、山崎、鈴木、黒川□、篠原、平山、小沼、松本、福田、田中、小山、□□との名前が記載されている。

太岳支部。日本人民解放連盟太岳支部は日本が投降するという情報を聞き、1945年8月12日に徹夜して宣伝物を大量作り、13日にわが軍各部隊に同行して、同蒲線⁴⁸、白晋線の各鉄道沿線に多くの日本人捕虜を迎えに出た⁴⁹。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、支部長の小林重一、部員の渡辺三郎の名前が記載されている。

冀中支部。1944年5月4日に、日本人民解放連盟冀中支部が結成された⁵⁰。1945年3月23日付の『解放日報』も「日人解放連盟、成立冀中支部」と報道した⁵¹。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、支部長の中山太郎、部員の和田真一、林一雄、吉村誠、杉山達雄、吉田、□□□□、水戸の名前が記載されている。

晋察冀支部。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、**晋察冀支部**支部長の中村鉄夫、部員の小林、山川照、山田博原、成瀬三郎、福田、村岡、□□通、夏川晋、島田□夫名前が記載されている。

冀熱遼支部。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、支部長の松本(池本)、部員の大谷の名前が記載されている。

晋冀支部。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、晋冀支部の支部長の重田唯好の名前が記載されている。部員が五名いるという。

冀南支部。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、冀南支部支部長の秋山照雄(良照)と部員の蓮沼、松井の名前が記載されている。

冀魯豫支部。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、冀魯豫支部支部長の水野靖夫と部員の木下英雄、小島の名前が記載されている。

浜海支部。『解放日報』の記載によると、日本解放連盟浜海支部は1945年3月15日に「三一五」記念会を開催した。主席の小林が「三一五」記念日を紹介した。諸城から逃亡してきた日本兵士の市村幸治が日本軍兵士の生活状況を紹介した⁵²。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、解放連盟浜海支部の支部長の本橋朝治、部員の岡保庫治、山口九蔵、青山□一、中出川、初瀬、礎木、大野米三、田村、和田、木村義男、山田静馬、森田辰五郎、村上(部員13人)の名前が記載されている。この「岡保庫治」は「国保庫治」の誤りである可能性は否定できない。

魯中支部。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、魯中支部支部長の小島金之助、部員の田中、上中庄太郎、今井、小林清一郎、佐藤晃、勝田、森明、伊藤□、佐藤□□、小林寛澄、地島□□、岡森清治、太田一郎、佐藤巖の名前が記載されている。

膠東支部。解放連盟膠東支部は反戦同盟膠東支部に改称したものである。支部長は渡辺三郎である⁵³。1944年10月20日付の『解放日報』には、日本、朝鮮友人が国民党の軍令を批判する日人解放連盟膠東支部の支部長渡辺の談話が掲載された⁵⁴。さらに、1944年9月17日に、解放連盟膠東支部で新しく捕虜になった25人の日本人と2名の挑戦兵を集め座談会を開いた。支部長の渡辺は司会者をつとめ、和田肇一等兵、秋山、□太郎上等兵、岡田上等兵、鉾井二等兵などが発言した⁵⁵。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、支部長の渡辺三郎と部員の小林清、横田正雄などの名前が記載されている。

渤海支部。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、渤海支部支部長の板倉政造、部員の松木嘉次郎、青山□、鈴木などの名前が記載されている。

魯南支部。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、魯南支部支部長の田村伸樹、部員の山口□剛、中込□□の名前が記載されている。

魯西支部。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、魯西支部支部長の中島□と部員の名前が記載されている。

鄂豫支部(第5支部)。1944年6月に支部長の坂谷義次郎が戦死した後、1945年1月に、解放連盟本部は延安から岡島邦彦を大悟山に派遣し、解放連盟鄂豫支部の代理支部長となった。1945年8月に、鄂豫支部の盟員は100人を超えた⁵⁶。

米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、第5支部支部長と部員が記載されている。米国立公文書館スタッフの英語メモに基づき、記載されている名前は次のように識別できる。支部長の森田博美、と岩崎□、西川兼一、山崎、吉澤秀雄、松原良□、山本三郎、西部松市、松永一義、鈴木誠浄、森増太郎、村山健□、平松啓二、吉原實太郎、高野勉、足立盛勇□、RAZONO憲二、森山善一、星倉之助、北村、金井由国居、大久保良志、森川□夫(TATSUO)、片山明、尾形□□、飯谷、篠崎、佐藤政男、小山留□、杉浦一章、角田一郎、金□勇、黄□輝の計32名の盟員が記載されている。

蘇北支部。1944年4月3日付の『解放日報』の報道によると、「日人反戦同盟蘇北支部を解散し、日本人民解放連盟蘇北支部を結成することが決まった⁵⁷」とある。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、支部長の坂本節史、部員の古賀初美、久保和夫などの名前が記載されている。

蘇中支部。1944年5月9日付の『解放日報』の報道によると、車橋戦闘で捕虜となった24名の日本兵士のなか、山本一三など14人は新四軍に残ると決めたとの記述がある。この14人は、

解放連盟蘇中支部で教育を受け、4月23日に連盟に入る宣誓式が行われた⁵⁸。



日本人民解放連盟蘇中支部の記念写真。裏側はみんなのサイン⁵⁹。

写真の裏側のサインから、山本一三、岡本忠、清水誠、市村一郎、神八多郎、石川芳夫、宮本銀吾、吉田忠雄、神八多郎、和泉清、太倉育和、中沢福義、近口民男、口田義夫、口井孝口郎、H. yaman口、口田進、口久保口、口田正一、香河正男などの名前がわかる。香河正男のサインは、下記の写真の裏側のサインと一致していることも分かる。



日本人民解放連盟蘇中支部の記念写真。右1は新四軍第1師団敵軍工作部部長陳超寰。後ろの列、右から6人目は香河正男。写真の裏には、「日本人民解放連盟蘇中支部」の印鑑と香河正男のサインが残っている。冒頭には「陳部長超寰同志へ」と書いてある⁶⁰。香河正男のサインは、上記の写真の裏側のサインと一致していることも分かる。

淮北支部。1944年5月19日午後2時に某地で会議が開催され、開き、反戦同盟淮南支部と淮北支部を解散し、解放連盟淮北支部に合併することを正式に発表した。後藤勇は支部長に就任した⁶¹。1945年の初め、在華日本人反戦同盟淮北支部は「日本人民解放連盟淮北支部」に改称したとの説もある。盟員は30人以上がいて、強い宣伝部隊となった⁶²。上記に2つの資料における解放連盟淮北支部の結成期日は矛盾しているが、『解放日報』のほうの信憑性が高いと考えられ、本論文では、解放連盟淮北支部の結成期日は1944年5月29日であるとする。

米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には、淮北支部支部長の後藤勇、部員の矢口

庄司, 佐々木正, 高山進, 窪田義, 太田口子, 森光子, 藤井文章などの名前が確認できた。

晋西北支部。『解放日報』の記載によると, 1944年7月1日, 日本人民解放連盟晋西北支部の正式結成大会が行われた。支部長である森健が演説し, 日本僑民向けの宣伝工作の重要性を強調した⁶³。盟員は茂田江, 永井, 大谷などがいた⁶⁴。東條内閣崩壊の1944年7月22日から一週間を経ずして, 日本兵士と居留民代表大会が開催された。20師団の海田, 26師団の岡本, 独立混成第2旅団の今田, 独立混成第4旅団の加藤, 独立混成第3旅団の村上永井, 及び居留民代表の保定の田中, 太原の石川, 開封の長塚などが出席した⁶⁵。

華南支部。1945年6月25日に広東省の東莞と恵陽の間の任崗で, 解放連盟華南支部が結成された。1945年8月に盟員は15名がいた⁶⁶。米国立公文書館の日本人民解放連盟組織図には, 華南支部に関する記載はない。

解放連盟の結成はほとんど1944年または1945年のことだった。日本敗戦まであまり長い年月がなかったので, 反戦同盟ほど活動していなかったと思われる。

4.4.3 在華日本共産主義者同盟

共産党支配地区の日本人反戦組織は, 覚醒連盟, 反戦同盟, 解放連盟のほか, 「在華日本共産主義者同盟」が挙げられる。

1942年6月23日午後, 延安日本工農民学校で「在華日本共産主義者同盟」結成大会が開かれた。スターリン, ゲオルギ・ディミトロフ, 市川正一, 毛沢東, 朱徳が大会の名誉主席団に選ばれた。朱徳, 総政治部の李初黎, 森健, 同盟代表の中小路静夫などが挨拶した。同盟結成の目的は, 「外部から日本の共産主義運動を促進することである⁶⁷」とされた。同盟の中心的任務は「共産主義の教育と錬磨で, 日本人の間で真のボルシェビキを創造することである」と決定された⁶⁸。

6月26日の『解放日報』には, 同盟の組織構成が紹介され, 革命根拠地で普遍的に支部を設立すると発表された。厳格な審査を経て, 延安にいる51名の日本人から24名を選出し, 入盟する許可を出した。24人の内, 労働者は33.3%, 農民は8.3%, 職員(公務員と会社員)は50%, 自営業者は8.6%だった⁶⁹。「在華日本共産主義者同盟」の本部は延安にあった⁷⁰。同盟本部は日本工農学校構内に設置し, 森健は同盟総書記, 高山進は副書記, 杉本一夫は常委に選ばれた⁷¹。日本共産主義者同盟と反戦同盟は, 緊密なつながりを持っていた。共産主義者同盟は, 反戦同盟が前に更なる一步を発展したものである⁷²。日本共産主義者同盟の思想教育は, 主に日本工農学校を通じて行われた⁷³。日本共産主義者同盟は1945年3月15日に日本工農学校で「三一五」記念大会を開いた。岡野進は革命に殉じた烈士の道で日本軍部を打倒しようと演説した⁷⁴。

山東支部。1943年8月14日に、山東魯中地区で山東支部が結成され、本橋、大西正、三田は常務委員に選ばれ、本橋中は支部書記に就任した⁷⁵。山東総支部の下に、膠東支部があった⁷⁶。

蘇中支部。1943年12月7日の『解放日報』によると、日本共産主義者同盟蘇中支部が結成された⁷⁷。

華中総支部。1944年2月6日に、華中某地で華中総支部結成大会が開催された。蘇北支部、蘇中支部、淮南支部、淮北支部など各支部からの代表が参加した⁷⁸。浜中政志は支部書記に就任した。華中総支部の下に、蘇北支部、蘇中支部、淮南支部、淮北支部があった⁷⁹。

鄂豫辺区支部。1944年3月、延安の日本共産党の批准を得て、在華日本人反戦同盟鄂豫支部(第5支部)内部で非公開の「日本共産主義同盟鄂豫辺区支部」が結成された。連盟支部長は坂谷義次郎で、森田博美、森増太郎、星文治、松原秀雄、北村憲夫、西部□□、山本□□、平松□□、田中□□の10人が盟員となった⁸⁰。

太行支部。1942年9月27日午前、在華日本共産主義者同盟太行支部の結成大会が太行軍区の反戦同盟倶楽部でおこなわれた⁸¹。

1942年7月から年末にかけて、同盟の太行支部、晋察冀支部、太岳支部、晋西北支部が次々と結成された。1945年8月に、華北、華中にある同盟支部は、延安支部、晋西北支部、晋察冀支部、太行支部、太岳支部、冀中支部、冀南支部、冀魯豫支部、魯中支部、魯南支部、膠東支部、渤海支部、浜海支部、蘇中支部、蘇北支部、淮北支部、淮南支部など17の支部があった⁸²。

¹ 「日人反戦同盟華北連合会、年底召開擴大執委會、將提義成立『日本人民解放同盟』、『解放日報』1943年10月10日、1面。

² 「日人反戦同盟擴大執委會召開予備會議、各地支部分別做工作報告」、『解放日報』1944年1月8日1面。

³ 「日人反戦同盟華北連合会擴大執委會明日開幕」、『解放日報』1944年1月14日、1面

⁴ 「朱徳指令講話、中日人民共同努力互相幫助、打倒軍部建立日本人民政府」、『解放日報』1944年1月18日、1面。

⁵ 「岡野進同志指示、『解放連盟』負有組織人民陣線の巨大任務」、『解放日報』1944年1月18日、1面。

⁶ 「日人反戦同盟擴大執行委員会和日本人民解放連盟の成立」、『解放日報』1944年2月20日、1面。

⁷ 「日人反戦同盟擴大執委會勝利閉幕、『日本人民解放連盟創立準備委員会』及『華北地方協議会』正式成立」、『解放日報』1944年2月20日、1面。

⁸ 「華中日本人反戦同盟、同意組織解放連盟」、『解放日報』1944年3月25日、4面。

⁹ 「日本人民反法西斯的新段階、解放連盟正式成立、華北華中相繼設立支部」、『解放日報』1944年4月12日、1面。

¹⁰ 「日本人民反法西斯的新段階、解放連盟正式成立、華北華中相繼設立支部」、『解放日報』1944年4月12日、1面。

¹¹ 「日本人民解放連盟綱領草案」、『解放日報』1944年2月20日、3面。

¹² 『解放日報』1944年4月21日。

¹³ 林谷良「抗日戦争時期侵華日軍官兵中的反戦運動」、『軍事歴史研究』1994年第2号、71頁

¹⁴ 『解放日報』1944年3月22日1面。

- 15 「日人反戦同盟拡大執委会勝利閉幕,『日本人民解放連盟創立準備委員会』及『華北地方協議会』正式成立」,『解放日報』1944年2月20日,1面。
- 16 小林清『在華日人反戦組織史話』,社会科学文献出版社,1987年9月,127頁。
- 17 前掲書,『在華日人反戦組織史話』126頁。
- 18 「華中日人反戦同盟,同意組織解放連盟」『解放日報』1944年3月25日4面。
- 19 「日本人民反戦同盟華中地方協議会成立,反戦宣伝扩大到日本僑民」『解放日報』1944年5月15日,2面。
- 20 曹晋傑「日人反戦同盟在華中の組織与活動」『抗日戦争研究』1995年第2号,126頁。
- 21 徐則浩,『從浮虜到戰友』,安徽人民出版社,2005年7月1日,167頁。
- 22 姫田光義,藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店,1999年9月18日,170頁。
- 23 前掲,「日人反戦同盟在華中の組織与活動」,126頁。
- 24 「日本人民反法西斯的新段階,解放連盟正式成立,華北華中相繼設立支部」『解放日報』1944年4月12日,1面。
- 25 「晋察冀日本人民解放連盟成立,盟員暢談对八路軍觀感」『解放日報』1944年5月7日,3面。
- 26 「晋察冀9位投誠我軍の日兵称,日兵及日人希望早些停戦」『解放日報』1945年5月23日,1面。
- 27 孫金科,『日本人民的反戦闘争』,北京出版社,1996年2月,356頁。
- 28 米国立公文書館,「日本人民解放連盟組織図」,RG226.E182.B16.F95。
- 29 「日人解放連盟成立冀魯豫協議会,電毛主席,岡野進同志致敬」,『解放日報』1945年1月25日,1面。
- 30 前掲書,『日本人民的反戦闘争』,356頁。
- 31 「解連盟員,紛紛赴前線」『解放日報』1945年8月18日,1面。
- 32 前掲書,『日本人民的反戦闘争』,356頁。
- 33 杜玉芳,王衛紅「抗日戦争時期山東の日人反戦活動」『山東档案』2003年5月,43頁。
- 34 「日人反戦同盟山東支部,擁護成立」『解放日報』1944年3月6日1面。
- 35 「山東日人解放連盟,瓦解敵軍效果良好」『解放日報』,1945年2月20日1面。
- 36 劉震「日本人民解放連盟冀察支部成立大会印象記」『北京党史』1999年第4号,49頁。
- 37 前掲,「日人反戦同盟在華中の組織与活動」,126頁。
- 38 「華中日本解放連盟,朝鮮独立同盟,台湾独立同盟蘇浙支部,随我軍到前方工作」『解放日報』1945年8月22日,1面。
- 39 王庭岳,傅義桂,「抗戦時期的日人反戦新聞事業」,『新聞研究資料』1990年1号,134頁。
- 40 『解放日報』1944年7月28日1面。
- 41 「日人解放連盟延安支部举行美国照片展覽」『解放日報』1945年1月28日,2面。
- 42 『解放日報』1945年8月18日1面。
- 43 「日人反戦同盟太行支部擁護成立日本人民解放連盟,9日正式成立太行支部」『解放日報』1944年3月22日1面。
- 44 1945年7月16日付の『解放日報』には「佐野」となっている。
- 45 白晋線とは山西省晋中市祁県白圭村から山西省晋城市までの300KM程度の鉄道線。襄垣県内を經過。
- 46 「日人解放連盟両盟員,在太行对敵闘争中犠牲」『解放日報』1945年6月20日1面。
- 47 「太行太岳日人解放連盟趕製宣伝品,盟員随軍出發準備处理日捕」『解放日報』1945年8月15日,1面。
- 48 同蒲線とは,山西省北部の大同から山西省南部の運城市永濟市蒲州鎮の風陵渡までの鉄道線である。全長865KM。
- 49 「太行太岳日人解放連盟趕製宣伝品,盟員随軍出發準備处理日捕」『解放日報』1945年8月15日,1面。
- 50 前掲書,『從浮虜到戰友』,161頁。
- 51 「日人解放連盟,成立冀中支部」,『解放日報』1945年3月23日1面。
- 52 「浜海区日人解放連盟召開『三一五』記念会」『解放日報』1945年3月31日2面。
- 53 前掲書,『從浮虜到戰友』,166頁。
- 54 「膠東日,韓戰友,反对国民党錯誤政策」『解放日報』1944年10月20日1面。
- 55 「膠東被捕日兵談称,敵兵吃不飽偷吃狗食,軍官傷亡很大士氣低落」『解放日報』1944年10月25日1面。
- 56 前掲書,『從浮虜到戰友』,170頁。
- 57 「日本人民解放連盟蘇北支部成立」『解放日報』1944年4月3日,1面。
- 58 「車橋戰役14個日本弟兄参加日人解放連盟,電岡野進及延安支部同志致敬」『解放日報』1944年5月9日,1面。
- 59 「敵工部長与『日本人民解放連盟』成員」,『福建党史月刊』2007年第2号。
- 60 前掲「敵工部長与『日本人民解放連盟』成員」。
- 61 「日人解放連盟淮北支部成立」『解放日報』1944年6月4日,1面。
- 62 張文華「日本人民解放連盟淮北支部始末」『党史縱覽』1994年第6号,39頁。
- 63 「日本人民解放連盟晋西北支部成立」,『解放日報』1944年7月26日,2面。
- 64 車国民,孫娟,「抗戦時期的山西日人反戦組織」,『文教資料』2006年9月号中旬刊,78頁。
- 65 「日人解放連盟晋西北支部召開土兵居留民大会」,『解放日報』1944年9月13日,2面。
- 66 前掲書,『從浮虜到戰友』,171頁。

-
- 67 「延安日本同志創立在華日共產主義者同盟」,『解放日報』1942年6月25日,1面。
- 68 「社說:『在華日本共產主義者同盟』底成立」,『解放日報』1942年6月25日,1面。
- 69 「在華日共產主義者同盟將在華北遍設支部」,『解放日報』1942年6月26日,1面。
- 70 「日本在華共產主義者同盟章程全文」,『解放日報』1942年6月30日,2面。
- 71 謝慧君「活躍在抗日戰場上的在華日本共產主義者同盟」『黨史縱橫』2005年第9號,16頁。
- 72 「岡野進同志指示留延日人,一致參加保衛邊區」『解放日報』,1943年7月13日2面。
- 73 「日本共產主義者同盟進行思想教育」『解放日報』1943年1月24日2面。
- 74 「日本共產主義者同盟紀念『三·一五』,岡野進同志号召踏着先烈們敵血跡,向日寇軍部心臟衝鋒」『解放日報』,1945年3月25日2面。
- 75 「在華日人共產主義者同盟山東支部成立」『解放日報』1943年9月11日1面。
- 76 前揭,「活躍在抗日戰場上的在華日本共產主義者同盟」,17頁。
- 77 「蘇中日人反戰革命志士,成立日本共產主義者同盟,日人反戰同盟」『解放日報』1943年12月7日1面。
- 78 「在華日本共產主義者同盟成立華中總支部」『解放日報』1944年2月10日1面。
- 79 前揭,「活躍在抗日戰場上的在華日本共產主義者同盟」,17頁。
- 80 周煥中 主編『特殊的戰線』武漢大學出版社1991年11月,279頁。
- 81 「在華日共產主義者同盟成立太行支部」『解放日報』1942年10月19日2面。
- 82 前揭,「活躍在抗日戰場上的在華日本共產主義者同盟」,17頁。

第5章 中国共産党の対日プロパガンダ工作と日本人反戦組織

5.1 日本人反戦組織と中国共産党との関係性

日本人の反戦活動は日本共産党と深く関連している。1922年11月の日本共産党コミンテルン第4回大会に提出された綱領には、「朝鮮，中国，台湾，サハリンからの軍隊の撤退」と書いてある¹。中国においては、「日本軍閥が満州で侵略の爆弾を投下したとき，日本人民，特に日本兵士はすでに秘密裏に反戦運動を行い始めていた²。」満州事変後の1933年の中国共産党はもうすでに「日本労働者の革命闘争を応援する」姿勢を見せている。1935年8月1日に中国共産党は更に『八一宣言』を發表し，日本国内の労苦民衆を含め，帝国主義を反対するすべての民衆を「友軍」にすべきだと呼びかけている。本論文で分析している通り，1937年の日中戦争勃発後，共産党は更に成熟しつつある「日本反戦観」を見せ，日本人捕虜を優遇する同時に，日本人反戦組織に対しても柔軟な態度と方針を採っていた。本節では，前節で考察した共産党支配地区の日本人反戦組織を踏まえ，中国共産党と在華日本人の反戦組織の関係性について分析する。

5.1.1 「日本人反戦組織」への態度と政策

(1) 日本人反戦運動への支援姿勢

第3章で分析したとおり，土地革命期において，中国共産党はもうすでに国民党軍の捕虜に対して「二分法」で扱い始めていた。1937年，日中戦争が勃発した後，中国共産党は日本軍内及び日本国内の反戦・厭戦気分を注意深く見守ると同時に，反戦・厭戦とつながりのありそうな事件について，『解放日報』など中国共産党が発行する新聞によって継続的に報道していた。それらの報道は，3つに分類することができる。1，日本国内の反戦運動に関する報道。2，厭戦・反戦に加担する日本軍兵士に関する報道。3，在華日本人反戦組織に関する報道である。ここでは，かつての中国共産党機関紙『新中華報』と『解放日報』の関連報道から，共産党の「日本人反戦組織」への態度を見ていきたい。

日本国内の反戦運動に関する報道。日中戦争が勃発後，中国共産党機関紙である『新中華報』と『解放日報』によると，日本国内の反戦運動に関する最初の報道は，1937年9月24日の『新中華報』だった。当日の報道では，「日本国内の強制徴兵に対して，農民などの労働者は反

対の声を上げている。その影響は民衆の不満を引き起こすので、徴兵に服従しない人は日本軍閥に即銃殺される。日本各地において、中国侵略を反対するビラとスローガンが出現している。日本国内の左翼分子の活動もだんだん活発化している。戦争が続くと、日本の財政経済は必ず崩壊する³。」と報じられている。日本軍兵士の厭戦気分とその日本国内の家族の厭戦気分と関連付けて報道されたものも多かった。日本が英米に対して宣戦した後、『解放日報』記者が延安にいる日本人をインタビューしてまとめた記事が、1941年12月10日の『解放日報』に掲載された。『太平洋戦争声中、在延日人訪問記』との題されている記事によると、「『今までの侵華戦争の中で、血が中国の土地で流れている。日本国民は、空襲の無い島で生活していた。しかし今、英米の飛行機……東京、大阪、神戸……私の母親、妹……』長井さんの声はだんだん低くなり、うつむいた。森健さんは次のように言った。『本国の国民全員が今度の更なる血生臭い戦争の中で、必ず早く普遍的に覚醒してくる。極悪非道であるこの東方ファシズムを共同で消滅させる⁴。』」似た立場の報道は、1945年までの8年間の『新中華報』と『解放日報』に一貫して掲載された。

日本軍兵士厭戦・反戦気分に関する報道。日中戦争が勃発した後、中国共産党機関紙である『新中華報』と『解放日報』の報道で、一番最初に日本軍兵士の反戦気分に関する報道があったのは、1937年10月24日の『新中華報』であった。この報道によると、「日本軍の中国侵略行為は、日本人民に反対されているだけでなく、日本軍の下級軍官までにも反対されている。日本軍捕虜の中で発見した日本軍中隊長の日記には、『連日の作戦で死傷者などの損失が極めて大きい。多くの仲間が大砲の弾に砕け散った。良心の呵責にさいなまれ、もうこれ以上戦争を支持できない』といった記述がある。このことから日本軍内における反戦、反ファシズム者の実態を窺うことができる。戦争が続くと、日本帝国主義者は崩壊するに違いない⁵」とある。

反戦・厭戦気分のほか、日本軍兵士の自殺や逃亡、日本軍内の規律の問題なども多く報道された。たとえば、1941年6月4日の『解放日報』では、日本軍空軍飛行士の自殺が報道されている。「敵空軍兵士は侵略戦争がなかなか終わらず、帰国できないことで、厭戦気分が濃い。先月30日、敵軍の戦闘機が弾薬を満載して離陸した後、空港の上空から急降下した。空港で爆発し、戦闘機の飛行士と敵兵20人以上が死傷。当機の飛行士である徳小五朗は戦闘機と共に滅びた⁶」と報じている。

『新中華報』や『解放日報』のこれらの報道は本当のことかどうか確認しがたいが、これらの報道から、中国共産党が積極的に日本軍を瓦解させるためのプロパガンダを展開したことが窺える。

在華日本人反戦組織に関する報道。覚醒連盟、反戦同盟、日本人民解放連盟などの日本人反戦組織に対して、中国共産党が運営している諸メディアは盛んに報道していた。1941年12月17日付の『解放日報』の社説「太平洋戦争与在華日本人反戦同盟大会的召集」では、中国共産党の日本人反戦組織に対する考え方を窺うことができる。社説では「八路軍と新四軍の中の日本兵士」を2つに分類して指摘している。「前方で中国兵士と協力しあい、敵軍工作を行っている日本人兵士もいれば、後方で将来の準備のために革命理論を勉強している日本人兵士もいる。」「まもなく開催する反戦同盟大会においては、主な課題は太平洋戦争という新しい情勢に対する対策と華北の反戦団体を統一することである。そこにおいて、日本軍隊向けの宣伝工作は中心的な問題である⁷。」と述べている。

そのような報道から、次の3つの目的があると考えられる。1つは、「日本崩壊論」を宣伝し、日本軍は最終的に失敗することを中国軍隊や民衆に教え込むことである。2つ目は、日本人民が戦争を支持しない事例を提示し、日本軍を孤立させ、中国軍民を励まそうとする目的である。3つ目は、中国共産党が日本軍や日本国を「2分法」で見えており、日本政府に対して不満や反対している日本民衆や日本軍一般兵士は、中国軍民にとって、敵ではなく、立場が一致している友なのだということを日本国民に知らしめることである。

(2)『保護反戦日本軍民条例』

『保護反戦日本軍民条例』は日本人反戦団体及びその盟員を保護する制度における規定のひとつである。『保護反戦日本軍民条例』は1943年5月に山東省戦工会によって発表された。それによると、「在華日人反戦同盟は、日本軍閥に反対し、日本人民の解放を実現するための革命団体として、我が根拠地内において、合法的な活動の自由があり、各級政府及び軍民全員は、日本人反戦団体の発展を積極的に援助すべきだ」とされている。さらに「反戦の立場の日本人軍民が我が方に來たさい、保護と優遇を与えるべきである。通る地区の軍民は、盟員を護送する義務がある。戦闘中、武器を放棄した日本兵に対して、虐待と個人財産を損害させる行為を一律に禁ずる。日本軍民を我が方に護送する者を奨励する⁸」とある。

第3章で分析した中国共産党の捕虜優遇政策と、第4章で分析した中国共産党の日本捕虜教育工作を振り返ってみると、中国共産党は日本人の反戦運動を応援する同時に、日本反戦団体及びその盟員を積極的に育成し、利用する政策へと変わり、さらに反戦団体を保護する態度も『保護反戦日本軍民条例』などからわかるだろう。

中国共産党はなぜ日本反戦団体を援助するかというと、もちろんその目的性がある。1937

年の暮、イギリス記者の J.M.バートラム (James Munro Bertram) が延安で毛沢東取材した。その著作の『華北前線』(North China Front) で、毛沢東の考え方について紹介している記述の中に、「中国人民の勝利と日本軍閥の敗北は、日本人民に歓迎される。それは、日本人民に革命闘争の好機を提供するからである。」「中国革命と日本革命は分けられない関係で、お互いに緊密に関連しているのである。日本革命運動の成功と中国抗日戦争の勝利は密接に繋がっていることが断言できるだろう⁹。」といった毛の発言がある。ここからも、日本反戦団体への支援は、中国革命のためでもあることが分かる。

「解連(解放連盟)は、勿論、中共によって育成された団体だが、しかし、もともとそれは日本人の自主的団体なので、これを中共自体の組織と同一に論じることはできない。」中国共産党内にも、日本人反戦団体の盟員を「捕虜」として扱う考え方と、反戦団体を中国共産党の敵軍工作部の付属組織とする考え方があった。そのような背景の下、1942年8月30日の『解放日報』の社説には、「われわれの中で、彼ら(反戦盟員)を『捕虜』として見なす傾向があり」「それは有害である。」「日本反戦同盟が敵工部付属品だとの考えを直すべきだ」との主張が見られた¹⁰。日本人盟員に対しては、反戦団体は「あなたたち日本人自身のための組織」だと強調していた¹¹。日本人反戦団体は、「八路軍のプロパガンダ機構ではなく、特殊的な革命性と独立性を持つ、日本人民の真の革命組織である」と日本人盟員に認識させた¹²。

一方、日本反戦団体は、中国共産党の援助を積極的に得ようとした。たとえば、1942年6月23日に採択された「日本在華共産主義者同盟章程全文」によると、「中共の援助を獲得し、その経験を吸収するため、本同盟及びその支部は、中国共産党指導機関が指定した顧問を招聘する。顧問はあらゆる会議に出席できるが、票決権を持たない¹³」としている。その前の1941年6月20日に覚醒連盟第1支部が結成1周年記念会を行った。「中国共産党中央委員会及び八路軍の直接の指導の下で、日本帝国主義を打倒するために最後まで努力する」との声明を出した¹⁴。

5.1.2 日本人捕虜の八路軍入隊

中国共産党は日本人反戦団体を育成し利用する同時に、八路軍、新四軍、中国共産党自体も積極的に日本人を吸収しようと努力した。ここでは、日中戦争期における日本人の八路軍、新四軍への入隊と中国共産党への入党を分析する。

当時の八路軍は、国民革命軍である同時に、積極的に農民ゲリラ隊を八路軍に編入しようと努力していた。正式に入隊式を行い、編入するのあれば、正式に編入せず、共産党組織で

ゲリラ隊を指導し、事実上八路軍の一部になっているものもいた。従って、日本人捕虜の「八路軍入隊」は曖昧な一面がり、正式に入隊式を行った者もあれば、正式に入隊せずに、日本人反戦組織で活動し、事実上八路軍のために戦っている者も多くいた。本節では、正式に八路軍に入隊した者を中心に分析する。

日本人とくに日本軍捕虜の八路軍入隊は、中国共産党にとって「敵軍の崩壊」の証拠として盛んに宣伝が行われた。本論分は主に『解放日報』の報道を中心に、八路軍や新四軍に入隊した日本人を対象に考察する。

日本帝国軍人のプライドを持っている日本兵捕虜は、簡単に八路軍入隊を認めるわけにはいかなかった。1940年9月7日に八路軍の捕虜となった秋山良照は、1941年春ごろに、冀南軍区敵軍工作部部長の張茂林から「八路軍に入らないか」とのすすめられた時の感想を、「日本人が八路軍に入隊する——私はやはり抵抗を感じた」、「『俺は日本軍人なんだ』と自分にいいかさせた」と述べている。このようにして悩んだり、迷ったりしながらも、次第に八路軍の中に引き込まれていた¹⁵。

1941年7月18日付きの『解放日報』によると、「(華北新華社晋冀魯豫16日電)この前、日本兵士覚醒同盟第2支部盟員杉本、星川など4人が八路軍に入隊した」とある¹⁶。

4人の内の一人である杉本一夫(前田光繁)の回想による、1939年1月2日、山西省武郷県内の村で、八路軍129師団の新年集会が開かれた。この集会で杉本一夫、小林武夫、岡田義雄の3人が八路軍に入隊した。「今はこの3人にすぎないが、やがて何十人、何百人になってゆくにちがいない」と朱徳が全將兵に向かって演説した¹⁷。これは『解放日報』の記載と一致していないが、前田光繁の回想とも一致する内容であり、劉国霖の回想でも確認できた¹⁸。1941年7月18日付きの『解放日報』の報道は、「日本兵士の八路軍入隊」で「敵軍の崩壊」を宣伝するため、1939年の杉本の八路軍入隊を1941年にまた報道したと考えられよう。

1941年以後、中国共産党の機関紙である『解放日報』は、日本人の八路軍入隊を盛んに報道した。

1941年7月28日付きの『解放日報』によると、「山東縦隊政治部の「七七」記念大会で、日本人同志坂谷、今野の2人は八路軍に参加した。中国同志と手を繋いで、日本ファシズム軍閥を打倒するために戦闘すると誓った¹⁹」とある。

1941年10月14日付きの『解放日報』は、「両日人 自動参加八路軍 共同打倒日本法西斯」を見出しに、渡辺三郎、戸村修の八路軍入隊を報道した。新華社晋冀魯豫12日電には、覚醒連盟第1支部盟員の渡辺三郎、戸村修の2人は「129師団のある懇親会で自らは八路軍に参加

すると要求した。会場のみみんなに熱烈に歓迎された²⁰」とある。

1942年11月5日付きの『解放日報』によると、「自ら八路軍に来た大地長秀は16歳のとき、日本国内の苦しい生活と兵役から逃げ出すため、父親のお金を盗み船で朝鮮を経由して満州に来た。奉天で百貨の商売をしながら、瀋陽、北平、包頭で流浪した。現地の農民や八路軍兵士から影響を受け、八路軍にきた」という²¹。

1943年3月31日の『解放日報』によると、1943年3月25日午前中11時に開幕した晋冀魯豫地区日本兵士代表大会と日本人反戦同盟大会では、口田、福田、清水土田などが正式に宣誓して八路軍に入隊した²²。

大規模な八路軍正式入隊は、1941年10月26日に延安で開催された「東方各民族反ファシズム大会」のときである。小林清など35名の日本人が八路軍に正式入隊した。小林清の回想は、日本人捕虜の八路軍入隊に関する比較的詳しい資料となっている。1941年10月26日、「東方各民族反ファシズム大会」が開催された。中国、日本、朝鮮、ベトナム、インドネシア、インド、タイなどの国々の代表と中国モンゴル民族、回民族、ミョウ族、壮族などの少数民族も参加した。大会に参加した日本代表団は、在華日人反戦同盟延安支部と日本工農学校から民主選挙で選ばれた。代表は、松井敏夫、大山光義、原清子など6名で、華北地区にあるいくつかの在華日人反戦団体の数百名のメンバーを代表している²³。

大会の最後の日、八路軍総部の代表が演壇に次のように発表した。小林清の回想によると、「私とほかの34名の日本工農学校の生徒の八路軍参加申請を批准した。そのとき、会場は湧き立った。感動と興奮の気持ちでいっぱい、拍手することさえ忘れていた。参加者の拍手の中、われわれ35名の日本工農学校生徒が演壇に上がり、朱徳総司令と中国人民にこう厳かに誓った」とある。

誓いの内容は

「わたくしは、国際主義の立場から、八路軍に入隊します。中日人民の共同的解放という総目標のために前進します。

今後は完全に八路軍の戦闘員の1人になり、ファシズム日本帝国主義を打倒するために徹底的に奮闘します。

いかなる困難の中でも、共産党八路軍の抗戦主張を堅持し、途中妥協は絶対しません。

絶対的に共産党八路軍の指導に従います。『三大規律八項注意』を守ります。

抗戦理論、マルクスレーニン主義を積極的に学習し、日本問題を積極的研究し、学習の模範となるためにがんばります²⁴。」

となっている。

35名の日本人の八路軍入隊に対して、鹿地亘夫婦が祝電を出した。その祝電は1941年11月21日の『解放日報』に報道された。



35名の日本人の八路軍入隊に関する鹿地亘夫婦の祝電²⁵

八路軍だけではなく、新四軍も日本人捕虜を入隊させた。例えば、1941年1月3日、坂谷義次郎が新四軍に入隊した。新四軍司令官李先念、任質斌政治委員が、豫鄂挺進縦隊の大会で、自ら新四軍に投降してきた坂谷義次郎の新四軍入隊式を行ったと述べている。その後、坂谷は反戦同盟第5支部の支部長をつとめた。



1940年2月2日に行われた式典で、香河正男など5名の日本人が新四軍に入隊した²⁶。

横幕には「日本兄弟新四軍入隊宣誓式典」と書いてある。

中国共産党の捕虜となった日本人のほか、原清子(中国名は原清志, 程清志など)の例がある。第2章で分析したとおり、1937年から、原清子は八路軍兵士向けの日本語教育に従事し、中国共産党の捕虜政策の執行に大きく貢献した。1937年11月に、朱瑞は自ら推薦者となって原清子を中国共産党に入党させ、その後「西安八路軍弁事処へ行って、延安に入る手続きをとりなさい」と紹介状を書いてあげた²⁷。1940年の初夏の頃、八路軍副総司令である彭徳懐が、自ら

原清子に会いに、原清子がいる山西省麻田にやってきた。まもなく延安で日本語ラジオ放送を始める計画があり、彭徳懐が積極的に原清子を招聘した²⁸。1941年秋、延安に着いた原清子は総政治部敵軍工作部に所属し、日本語放送を担当するようことの指示を受けた²⁹。総政治部敵軍工作部に所属した原清子も、八路軍に入隊した1人であると考えられる。

そのほか、中国共産党に入党した日本人捕虜もいた。たとえば、1939年7月に捕虜となった山田一郎は、1940年に八路軍野戦病院の内科医務主任となり、1943年に中国共産党に入党した³⁰。新四軍第2師団敵軍工作部部長、新四軍敵軍工作部部長などを歴任した劉貫一の回想によると、1913年に東京都で生まれた坂本賢階は、日本軍人として中国に来て、中国人に同情心を持っていた。新四軍に協力し、その後、新四軍のゲリラ部隊に入った。1945年、淮安で中国共産党に入党し、その後、華東野戦軍第1縦隊第3旅団で砲兵教官兼通訳を務めた。その後、戦死した³¹。

共産党軍は、敵軍の工作、敵情の把握、武器など戦利品の使用などにおいて、八路軍、新四軍に入隊した日本人をうまく活用した。八路軍、新四軍への入隊自体は、捉えられて間のない日本人捕虜を感化する手段の1つであり、中国軍民向けの「2分法」教育の一環でもあると考えられる。同時に、中国共産党敵軍工作部と日本人反戦団体の関係を緊密化・同一化させ、日本軍に対するプロパガンダ工作の効果を上げる策略のひとつでもあると考えられる。

5.1.3 敵軍工作部と解放連盟の分担・協力

1942年8月29日に延安で開催された「日本人反戦団体大会」で採択された「在華日本人反戦同盟華北連合会工作方針書」によると、「反戦同盟は、組織的に八路軍、新四軍政治部に所属する一部門ではないが、すでに総論でのべられているように、同盟の対日本軍宣伝工作は八路軍、新四軍の対日本軍政治工作の一翼を担い、その方針と指示を基礎として行われる。これをさらに具体的にいえば、同盟の宣伝工作の政治的方向は、八路軍、新四軍の政治的基本方針にしたがい、その指示、指導を受けるべきであるが、具体的な宣伝物の作成は、主として自分たちの手で行わなければならない。そしてさらに、宣伝物の配布については、両者の協力のもとに、主として八路軍、新四軍の手によっておこなわれなければならない³²」とされている。

陝西省档案馆で発見した「総政關於敵軍工作的指示」(1944年6月1日)には、中国共産党の敵軍工作部と日本人反戦団体の分担・協力を具体的に規定している。筆者の考察した限り、「総政關於敵軍工作的指示」は、共産党の敵軍工作部と日本人反戦団体の分担・協力を正式に

規定する中国共産党の初めての文書である。共産党の敵軍工作部と日本人反戦団体の分担・協力を具体的に規定する内容の一部をここで引用する。

敵軍工作に関する総政治部の指示(一部)

(1) 日本人幹部がおり、同時にこれらの日本人幹部が政治上には練れている地区においては、今後の敵軍工作は主に日本人解放連盟(元名反戦連盟)を通じて行なうべきである。(現在はまだ日本人幹部また解放連盟組織の無い個別の地区においては、今まで通りに敵軍工作を行う。)各級政治部の敵軍工作部門は力を集中し偽軍工作を行なうべきである。敵軍工作に対しては、方針的な指導と具体的な困難の解決だけを担当する。適切な対応のため、解放連盟と敵工部門間の関係を下記の通り、具体的に規定する。

(甲) 敵工部の分担する工作

子、敵軍工作に関する連盟の報告に定期的に耳を傾ける。そして日本人同志と共同で敵軍工作の新しい方針と政策などの諸問題を討論して決定する。

丑、連盟が起草した各種の工作(新来捕虜の宣伝教育、扱い、人事など)計画を審査し批准する。そしてその工作の実行を着実に支援する。

寅、連盟が上級機関に提出する報告は、自己の真剣な審査を経て、副署してから提出すべきである。

卯、日本人幹部教育の指示と支援。

辰、各種の資料と情報と収集・研究し、それを中国語に翻訳する。

巳、工作経費の審査と批准、そして連盟総務工作創立の支援とほかの困難の解決。

午、日本人同志を保護し、その安全を確保する。特に敵軍が掃蕩作戦を仕掛けてきたときは、特に日本人同志の保護を重視する。

(乙) 解放連盟が担当する工作

子、敵工部門に定期的に工作報告をし、その指導と指示を受ける。

丑、連盟内部の問題の解決。

寅、敵軍工作計画方案の提出と実行。

卯、新来者と連盟の一般成員の教育と審査。

辰、敵工部に敵国敵軍に関する各方面の資料を供給する。

巳、批准された経費の扱いと連盟自身の総務工作(必ず中国幹部を通じて行なう)³³。

この「指示」から、日本人反戦組織を「対日プロパガンダ組織」として扱う共産党の姿勢が分かる。日本人反戦団体に対して、中国共産党の敵軍工作部門は、「計画を審査し批准する」指導

権を握っている。一方、解放連盟は、「敵工部門に定期的に工作報告をし、その指導と指示を受ける」立場にあったことが分かる。指導される位置に置かれた。

つまり、事実上、日本人反戦組織を中国共産党の「対日プロパガンダ組織」として扱っているのであるが、日本人に積極的に働いてもらうために、「日本反戦同盟が敵工部付属品だとの考えを直すべきだ」、反戦団体は「あなたたち日本人自身のための組織」とであるとあえて強調したのであろう。要するに、反戦組織の独立性自主性を教え込むと言う建前のもとで、日本人反戦組織を対日プロパガンダ組織としてうまく利用していたのである。

- 1 『大原社会問題研究所雑誌』, No.592/2008.3, 45 頁。
- 2 宋斐如『日本人民の反戦運動』, 生活書店, 1938年6月第1版, 1 頁。
- 3 「日本国内的混乱 人民反对徵兵 反戦声浪高漲」『新中華報』, 1937年9月24日, 1面。
- 4 「太平洋戦争声中, 在延日人訪問記」『解放日報』1941年12月10日4面。
- 5 「日軍下級軍官反戦情緒很高漲」『新中華報』1937年10月24日1面。
- 6 「敵空軍厭戦, 駕機自殺」『解放日報』1941年6月4日第2面。
- 7 「太平洋戦争与在華日本人反戦同盟大会的召集」『解放日報』1941年12月17日1面。
- 8 「魯戦工会公布保護反戦日本軍民及朝鮮反日人民条例」『解放日報』1943年5月15日1面。
- 9 詹姆斯・貝特蘭 著, 林淡 等訳『華北前線』新華出版社, 1986年7月, 119 頁。
- 10 「日本士兵大会和反戦団体大会的收穫」『解放日報』1942年8月30日1面。
- 11 水野靖夫『日本軍と戦った日本兵:一反戦兵士の手記』白石書店, 1974年8月31日, 106 頁。
- 12 小林清『一個「日本八路」的自述 在中国的地上』解放軍出版社, 1985年8月, 67 頁。
- 13 「日本在華共產主義者同盟章程全文」『解放日報』1942年6月30日2面。
- 14 「日本覚醒連盟第1支部举行成立周年記念会」『解放日報』1941年6月23日2面。
- 15 秋山良照『中国戦線の反戦兵士』徳間書店, 1978年11月10日, 71 頁。
- 16 「日本兵士4人 参加八路軍」『解放日報』1941年7月18日第2面。
- 17 香川孝志, 前田光繁 著『八路軍の日本兵たち—延安労働学校の記録』サイマル出版会, 1984年6月, 139—142 頁。
- 18 劉国霖, 鈴木伝三郎「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」学苑出版社, 2000年6月, 41—42 頁。
- 19 「日本反戦同志2人 参加八路軍」『解放日報』1941年7月28日第2面。
- 20 「両日人 自動参加八路軍 共同打倒日本法西斯」『解放日報』1941年10月14日第2面。
- 21 「一個参加八路軍的日本小鬼」『解放日報』1942年11月5日第4面。
- 22 「晋冀魯豫举行日本士兵代表大会, 代表多人宣誓参加八路軍」『解放日報』1943年3月31日第1面。
- 23 前掲書, 『一個「日本八路」的自述: 在中国的地上』, 110 頁。
- 24 前掲書, 『一個「日本八路」的自述: 在中国的地上』, 111—112 頁。
- 25 「日本人反戦作家鹿地巨夫婦, 電賀日人参加八路軍」『解放日報』1941年11月21日第3面。
- 26 「新四軍與日俘反戦同盟」『福建党史月刊』2007年S1号。
- 27 水谷尚子「『反日』以前: 中国対日工作者たちの回想」文芸春秋, 2006年7月30日, 28 頁。
- 28 前掲書, 「『反日』以前: 中国対日工作者たちの回想」, 35—36 頁。
- 29 前掲書, 「『反日』以前: 中国対日工作者たちの回想」, 45 頁。
- 30 前掲書, 「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」, 66 頁。
- 31 劉貫一「敵軍工作談片」『新四軍回憶資料』(第1卷)解放軍出版社, 1990年, 83—84 頁。
- 32 前掲書, 『中国戦線の反戦兵士』, 271 頁。
- 33 「総関關於敵軍工作的指示」(1944年6月1日), 陝西省档案館 5495-13-24-26。

5.2 プロパガンダ工作の3段階

1937年7月7日から1939年11月に覚醒連盟が結成されるまでの間、中国共産党の日本軍に対するプロパガンダ工作は、主に中国人を通じて行われた。1940年以後、日本人反戦組織の発展につれて、日本人を活用しうまく利用し、日本軍に対するプロパガンダ工作に従事させ、中国人と日本人が共同で工作を進める段階に入る。1942年8月、延安で「華北日本兵士代表大会」と「日本人反戦団体大会」が開催され、中国共産党が戦術的、組織的に日本人反戦団体を活用し、対日プロパガンダ工作を推し進める段階に入った。

5.2.1 中国人によるプロパガンダ工作

戦争初期の対日本軍のプロパガンダ工作に関して、『敵我在宣伝戦線上』では次のようにまとめている。「日中戦争の初期、八路軍は始めて華北地区に向かって出発したとき、野戦政治部及び115師団政治部は先遣部隊に追いつけず、戦いの前に、対敵プロパガンダ工作の手配はできなかった。115師団の師団長である林彪が平型関戦闘直前の幹部大会で、捕虜を捕まえる競争と捕虜優遇問題を強調した。しかし、包囲された敵軍に中国語で呼びかけたが、中国語の分からない敵軍にとって、当然何の効果もなかった¹。」

1939年11月7日に、覚醒連盟が結成されるまで、中国共産党部隊には、日本人はほぼいなかった。そのときまでの対日本軍プロパガンダ工作は、主に敵軍工作部の中国人工作員を通じて行われていた。

(1) 対日プロパガンダ工作の3つの「壁」

中国人による対日本軍プロパガンダ工作は、決して有効であるといえない。**第1の壁は共産党八路軍がまだ敵軍工作や対日本軍プロパガンダ工作の重要性を認識していないことである。**『敵我在宣伝戦線上』によると、戦争の初期において、八路軍の一般兵士は敵軍工作について疑惑を抱いていただけでなく、政治工作幹部さえ敵軍工作について強い信念を持っていなかった。敵軍工作に対して、冷たい態度で扱い、この工作を嫌がり、敵軍工作の推進を阻害する行為もあった。たとえば、部隊の教育科目を設置するとき、敵軍工作教育の科目を設置しない場合

が多かった。敵軍工作の幹部訓練を行うとき、晋察冀地区は従卒や通信兵を参加させて、その場しのぎをしたり、任務に対する意識の低い人を訓練に参加させるなどした。敵軍工作部の幹部は、従属的な地位であり、勤務が安定しておらず、敵軍工作幹部は軽視され、手当てさえほかの幹部より低い²、と記録されている。

第2の壁は、言語と文化の問題だった。八路軍 129 師団政治部敵軍工作科長につとめていた盧耀武、劉国霖の回想によると、日中戦争初期、日本軍兵士は戦死しても決して投降しなかった。1937 年秋、八路軍 129 師団 769 連隊が山西省の東北(晋東北)で、部隊にはぐれた日本兵が池の端で水を飲んでいるのを発見した。この日本兵はもう何日も鬨部隊とはぐれたようで、顔はあかだけであった。八路軍は彼に向かって中国語で「繳槍不殺」(武器を差し出したら殺さない)と呼びかけたが、それは通じなかったようで、彼は銃で我が兵士に向かって射撃した。何人かの八路軍兵士が倒れた。「結局、その日本兵を銃殺した。このような事件は、我が軍幹部及び兵士の怒りと恨みを引き起こした³。」

1937 年 7 月、日中戦争が勃発した後、中国共産党は日本軍向けのプロパガンダ工作を開始した。第 2 章の「敵軍工作訓練隊」で分析したとおり、日本軍向けのプロパガンダを行うために、八路軍の一般兵士向けの日本語教育、特にスローガンや呼びかけの日本語用語を教えていた。最初、八路軍兵士全員が日本語で呼びかけられるスローガンは、「日本兄弟、武器を差し出したら殺さない、優待する」との内容だった。しかし、そのスローガンは不適切だった。なぜなら、武士道精神で教え込まれた日本兵にとって、武器の差し出しは一番の侮辱だと思われたからだった⁴。それは日本文化と日本兵の心を知らないことによる誤りであった。

第3の壁は、八路軍兵士が日本軍兵士に対する恨みだった。第 3 章で分析したとおり、中国共産党が提唱した「2分法」は、中国軍民の間に強く抵抗があった。特に、日中戦争の初期、中国軍民向けの「2分法」教育はまだ行われていなかった時期なので、八路軍兵士が日本人捕虜を殺さずに教育・宣伝を与えるまで、時間がかかった。対日本軍プロパガンダの重要性は十分認識されていなかった。「敵軍工作といっても、日本軍との戦闘でどう用いればよいのか。我々が欲しいものは銃のみである」。「日本兵たちが降服するのを見たことがない。スローガンやメッセージを叫んだところで、どんな効果があるのか」と言う将校もいた⁵。

(2) プロパガンダ工作の推進の遅れ

中国人によるプロパガンダ工作において、共産党は日本軍内の状況に対して、研究が不足しており、日本兵の心理もうまく把握できなかった。この時期の対日本軍プロパガンダ工作の効果は限られていた。

1937年9月25日に、八路軍総司令朱徳、副総司令彭徳懐の名義で、『八路軍告日本士兵書』が発行され、中国共産党の名義で『中国共産党告日本陸海空軍士兵宣言⁶』が発表された。日本軍兵士向けの組織的、戦略的なプロパガンダ工作が正式に展開された。その趣旨は、「日本兵士は日本軍閥のために戦うべきではない」「八路軍は常に日本労農と助け合いたい」「我が方に来なさい、殺さない」「帰国しなさい、親友が待っている」などというものだった⁷。

この時期のプロパガンダ工作は、民衆の協力を得て推進しようとした。1937年10月8日に発表された『八路軍政治部關於開展日軍政治工作的指示』によると、敵が活動する地区で中国語と日本語のスローガンを壁に塗り、民衆を組織し、敵軍を瓦解する各種の宣伝を行わせるべきであるとされた。宣伝隊は日本語でスローガンが書け、日本語でスローガンの呼びかけができ、簡単な日本語の間答ができるように日本語を勉強すべきであると、敵に接近して日本語でスローガンを呼びかけられる人を何人か育てるべきであるとされた⁸。

しかし、敵軍工作幹部が不足している当時、上記の『指示』は簡単には執行されることはなかった。1938年3月22日に毛沢東、劉少奇が彭徳懐、陳光、羅榮桓、肖克、関向応、劉伯承、徐向前、鄧小平宛ての指示を出した。それによると「華北における敵軍瓦解工作は極めて不十分である。敵軍を瓦解するスローガンが1句も見えない地区も多い。政治上に敵軍を瓦解し、民衆を教育し、友軍を影響するため、各部隊、各地党部及び民衆団体は、華北のあらゆる地区で、特に敵軍が頻繁に活動する通りで、中国語、モンゴル語、日本語と三種の言語で□□及びモンゴル偽軍向けのスローガンを書くべきである。各級政治機関は、各地党部及び民衆団体に宣伝資料を配るべきである⁹」とある。

1938年3月27日に、中共中央軍委総政治部が19句の対日本軍プロパガンダスローガンを公表した¹⁰。その中に、「武器を捨てなさい」「天皇を打倒しよう」など日本兵の反感を買うスローガンが消えた。「日本兵士諸君！解放を求めるために、日本に戻ってあなたたちを圧迫している軍閥、地主、資本家を打倒するしかない！」「日本兵士が中国軍隊と連合して日本ファシズムに反対することを歓迎する！」などこれらのスローガンは、まだ日本兵士の本当の思想状況とかなりの距離があり、理想的すぎるくらいがあり、日本兵士に受容されにくいスローガンが多かった。

日本軍及びその兵士の実際的な状況に合わせてプロパガンダを行うことは当時の八路軍にと

って困難だった。敵情研究の進展は、対日本軍プロパガンダ工作にも積極的な影響を及ぼした。1939年3月2日八路軍政治部が出した指示には、「平遥、介休、石家荘一帯の敵兵はみんな八路軍の捕虜不殺政策を知っているという。」「遼東で捕まえた捕虜によると、所属の部隊は非常に疲弊しており、運輸・補給物資は極めて不足している。我がゲリラ隊を一番怖がっている。士気は低く、自殺が多発しているという。」「対敵プロパガンダは特に馬力をかけるべきである。対敵プロパガンダ資料を大量に印刷し、民衆を利用して敵軍の中に送り、獲た資料を随時に報告すべきである」と敵情に触れながら日本軍向けのプロパガンダ工作の緊急性を強調している¹¹。

前述したとおり、敵軍工作の幹部の不足や敵軍工作へ軽視、及び敵軍工作進展の遅れによる緊急性の高まりに連れ、敵軍工作を推進する具体策も出されている。1939年5月9日に野戦政治部主任をつとめていた傅鐘が八路軍各部隊に指示を出し、次のように敵軍工作を指摘している。「敵偽軍工作を確実に展開するために、適切な幹部の手配を行わなければならない。師団には10人の工作隊を結成する。」「日本語の分かる幹部がいないと敵偽軍工作を推進できないという観念を改め、忠実で、果敢で経験豊かな幹部を選別し、敵偽工作部門を完備させる。日本語幹部が不足している。日本語に精通しているものを旅団に移動させる。連隊には日本語に精通している人がいなくてもかまわない。スローガンを教えられればいいのである¹²。」

その後、八路軍向けの日本語教育の展開につれ、日本語での呼びかけ工作も行われ始めた。1937年11月4日、八路軍115師団の343旅団は正太路広陽戦闘で日本人兵士を1人捕まえた。これは、共産党部隊が捉えた初の日本人捕虜であった¹³。

日本人捕虜の増加につれ、八路軍は彼らを利用し、呼びかけ工作に従事させた。1939年8月27日に朱徳、彭徳懐が蒋介石に出した電報によると、「教育・訓練を受けた捕虜が部隊作戦に参加させ、敵軍に向けて呼びかけた。顕著な効果があった」とあり、大小龍華の戦いで(河北省易県西)で14名の日本将校と兵士を捕虜にした。団山の戦い(河北省満城県北)で、7名の日本兵士を捕虜にしたことも報告された¹⁴。

1939年の後半から、日本人捕虜を活用し、日本軍向けのプロパガンダ工作に従事させる工作が始まった。日本人反戦団体の結成につれ、対日プロパガンダ工作は「日本人と中国が共同で行う」段階に入った。

第1段階の対日プロパガンダ工作の性格は次のようにまとめることができる。日本軍兵士の心理及び日本軍内部状況への理解が極めて不十分なので、「天皇を打倒しよう」などというような受容不可能で、日本軍兵士の考えと乖離したプロパガンダが一方的に行われた。日本語の訓練はある程度行われたが、ほとんどのプロパガンダは中国語で行われた。つまり、日本軍の実際から

離れたこの段階の対日プロパガンダ工作はほとんど効果がなかったと言えよう。

5.2.2 中国人と日本人共同のプロパガンダ工作

1939年11月に結成された覚醒連盟は、中国共産党支配地区において初の日本人反戦団体である。覚醒連盟の結成後、中国人も参加し、日本人を通じての対日プロパガンダ工作が始まった。

日本人の参入で、この段階において、日本人捕虜の尋問から日本軍兵士の心理、日本軍内の状況のある程度把握できたので、プロパガンダ工作の性格もある程度変わった。趙安博の回想によると、敵軍工作部では反戦ビラが印刷され、山西省などで日本語のビラが撒かれたが、当地の日本人捕虜は「シベリア出兵の時のソ連が作ったビラと同じで、文章があまりにも幼稚だから、日本兵は誰も見ないよ」と言った。このように、捕虜から意見を聞いて、ビラの改善に努めたという¹⁵。

(1) 日本兵の実際に近いプロパガンダ内容の提起

1939年10月2日に中共中央軍委総政治部が日偽軍工作に関する訓令が出された。それまでの方針より現実的、日本軍兵士の実際により近い方針であった。内容は「日本軍の現状に基づき、我が敵軍工作の方針と目標は高すぎてはいけない。日本軍との間で反侵略統一戦線の結成、日本軍の中で反戦堡壘の樹立、大量の日本軍兵士の反乱と投降などは、我々の遠大な目標であり、まだ現実的ではない。さまざまな段階を経て達成できるのである。」「今日の敵軍工作の方針は、各種の手段で日本軍の戦闘力を弱めて低下させる。日本兵が中国軍民に対する盲目的な敵視を解消させ、徐々に感情的接近から政治的接近に導く。したがって、プロパガンダ内容は、政治的口調であるべきでなく、刺激的で、感情豊かで煽動効果のある内容で、日本軍の厭戦、怠戦、自殺などの気分を強め、日本軍の戦闘力を低下させるべきである¹⁶」というものがある。これは、中国共産党が日本軍向けのプロパガンダ工作に関して執った初めての現実的な方針であった。その背景には、第1段階のプロパガンダ工作の効果が上がらなかったことと、日本人捕虜の尋問から日本軍兵士の真の心理の把握が進んだことなどが考えられる。

1940年6月8日に中共中央軍委総政治部が指示を出し、対日プロパガンダ工作の欠点を指摘し、スローガンを決めている。『指示』には、「プロパガンダ内容の空洞化、公式化により、日本兵の反感を引き起こしてしまう。」「プロパガンダは中国式な日本語で、文法的な間違いもある」な

どの欠点が指摘された。「直ちに戦争をやめる」「帰国するとみんなで請願する」「中国兵士と握手し、我々は諸君の友達である」「ご家族は諸君のために祈っている。死んで家族を泣かせるな」などのスローガンを規定した上、「天皇を打倒しよう」「帝国主義戦争を国内戦争にさせよう」「軍隊で暴動を起こし、長官を殺そう」「戦争で負けよう」などのスローガンは不適切とされ、今までのスローガンの使用停止を求めた¹⁷。

さらに、太平洋戦争の勃発は、日本軍兵士の郷愁や動揺を誘発し、「偽軍だけではなく、敵軍に対するプロパガンダ工作においても最高の好機を迎えている¹⁸」と分析している。日本軍兵士向けのプロパガンダプログラムがさらに詳細に作成された。1941年12月17日に中共中央軍委総政治部が出した指示には、「プロパガンダ内容に関して、普遍的な対象から特殊な対象に転換すべきである。新兵と古参兵，知識人と労農分子，常駐者と新たに来た兵士を区分してはじめてプロパガンダ工作が力を持つようになるのである。現在、守備が一番薄弱で、孤立し動揺している地区でプロパガンダ攻勢を行うべきである。直接的なプロパガンダ工作もしくは敵軍占領区人民の接近を通じて、手紙やプレゼントを渡し、相手の了解を求め、敵対行為をやめさせる¹⁹」とある。

(2) 日本捕虜の積極的利用

中国共産党中央委員会が1940年4月6日に出した『敵軍瓦解工作についての指示』では、日本人捕虜の戦略的利用を規定している。内容は「軍隊の敵軍工作部と地方の党の敵偽軍工作委員会を完備させなければならない」「ぜひとも腕利きの同志を選び出してこれらの仕事を担当させる」「敵軍各種の文書の収集は敵軍工作の重要な準備工作となりうるので、各部隊、各区党委が獲得した敵軍のすべての文書を延安に送り、研究すべきだ」「日本軍捕虜に対して今までと同様に帰りたい捕虜を帰す同時に、少数の進歩分子を選別し長期的訓練を与えるべきである。晋東南から3名を選出し(杉本も含む)、晋冀察軍区から3名、120師団から3名のもっとも進歩的日本人捕虜を延安に送り訓練を受けさせ、日本の革命者を育てることをと決定する²⁰」となっている。

1940年6月8日に中共中央軍委総政治部が出した『中共中央軍委総政治部關於日偽軍工作的指示』では、日本人捕虜の利用を明確にしている。「各地各自で起草したスローガンは、文章的表现を捕虜に修正してもらいべきである。日本、朝鮮捕虜をできるだけプロパガンダ内容の起草に利用すべきである。政治機関はそれを検閲しなければならない。」と規定している²¹。

1941年3月20日に出した『中央宣伝部關於反敵偽宣傳工作的指示』によると、「日本兵士の

郷愁、厭戦、長官の虐待への不満などの気分を把握し煽動し、その悲観と不満を助長させ、その戦闘力を弱める。「宣伝物の言語は、正確な日本語でなければならない。形式は短くて細かく、印刷はきれいにし、日本軍兵士の好みに合わせる。」「捕虜の銃殺を禁止する」「帰りたくないものに対して、政治教育と訓練を通じて階級覚醒を啓発する。彼らに仕事を配属する。進歩的な捕虜を訓練し、我々の対敵プロパガンダ工作に協力してもらおう²²」とある。

1941年8月13日に、中共中央軍委総政治部が指示を出し、日本人反戦団体華北代表大会の開催と八路軍の敵軍工作の会議の開催を規定した²³。1941年12月17日に中共中央軍委総政治部が出した指示には、「可能な範囲で、新しい捕虜を利用し、守備の弱い敵軍拠点に送り、時機を見て談判させる。または武装私服隊を出し、敵軍の単独人員または通信兵を捕まえ、宣伝を与え、敵軍に発見されずにその場で釈放し、意思疎通の任務を任せ、付近拠点まで送る²⁴。」とある。

前述のとおり、1942年8月15日から29日まで延安で開催された「華北日本兵士代表大会」及び「日本人反戦団体華北大会」を通じ、日本兵士覚醒連盟は在華日本人反戦同盟と合併し、多くの覚醒連盟支部は反戦同盟の支部へと組織再編を行った。していった²⁵。これにより日本人を通じてのプロパガンダ工作は大きく進展した。

前田光繁の回想によると、日本人反戦組織のメンバーは、「全般に文化水準は低く、社会経験もとぼしく、軍隊生活も長くない」「このようにわれわれの活動は発展していたとはいえ、質的向上の面で今1つということであったが、その発展に拍車をかけたのは、1942年8月に延安で野坂参三氏の指導を得て開かれたひらかれた『日本兵士代表大会』と、『全華北反戦大会』である²⁶。」

5.2.3 日本人反戦組織によるプロパガンダ工作

1941年末の太平洋戦争の勃発は、対日プロパガンダ工作の好機となった同時に、日本兵捕虜が主なメンバーとなっている日本人反戦組織も大きく拡大した。1942年8月から、中国共産党が日本人反戦団体を統合して、戦略的、組織的な活用を図ろうとした。1942年8月から、対日プロパガンダ工作は主に日本人反戦団体を通じておこなう段階にはいった。

1941年8月13日に、中共中央軍委総政治部が出した日本人反戦組織の活動を統一し拡大させることを趣旨とする「中共中央軍委総政治部關於召開日本人反戦団体華北代表会及対日工作會議的指示」は、1942年3月に延安で日本人反戦団体華北代表大会の開催と八路軍の敵軍工作の会議の開催を規定した。出席する代表は、1942年2月末に到着できるように手配するよう

命じた²⁷。

計画した 1942 年3月より半年くらい時期がずれ込み 1942 年8月 15 日に、延安で「華北日本兵士代表大会」と「日本人反戦団体大会」が開幕された。大会では「この2つの大会は、われわれの対敵政治工作を大きく促進するであろう。我々のこれまでの対敵工作、特に日本軍隊への考察はまだ不十分で、実際状況への把握も不十分である。この兵士代表大会は、日本内部の実際状況、日本兵士の真の要求、気分と思想に基づいて、今後の工作手段を作り出す。」「我々は、できるだけ日本人の兄弟に協力してあげ、彼らの活動の効率化を図る²⁸」などの意見が出された。

会議で、228 の項目を含める『日本士兵要求書』が採決された。1942 年 10 月 13 日付『解放日報』の社説では、「『日本士兵要求書』は我が敵軍工作にとって画期的な政治意義を持っている」と指摘している²⁹。

前述したとおり、1942 年8月 29 日に採択された「在華日本人反戦同盟華北連合会工作方針書」には共産党部隊と日本人反戦団体が共同でおこなう対日プロパガンダ工作を次のように規定している。「反戦同盟は、組織的に八路軍、新四軍政治部に所属する一部門ではないが、すでに総論にのべられているように、同盟の対日本軍宣伝工作は八路軍、新四軍の対日本軍政治工作の一翼を担い、その方針と指示を基礎として行われる。これをさらに具体的にいえば、同盟の宣伝工作の政治的方向は、八路軍、新四軍の政治的基本方針にしたがい、その指示、指導を受けるべきであるが、具体的な宣伝物の作成は、主として自分たちの手で行わなければならない。そしてさらに、宣伝物の配布については、両者の協力のもとに、主として八路軍、新四軍の手によっておこなわれなければならない³⁰。」

劉国霖の回想によると、1942 年以後の敵軍工作は、延安で結成された「華北連合会」によって大きく推進された。各地の敵軍工作部門の交流や各反戦同盟の協力は一層緊密になった。1942 年以後の敵軍工作は、主に反戦同盟を通じて行なわれるようになった。たとえば、捉えられたばかりの捕虜の訊問、談話、教育、獲得工作は、普通反戦同盟の幹部が担当するようになった。なぜなら、彼らは経験者であり、日本人の思想政治工作は、日本人が行うほうが、中国人を通じて行うより、民族的隔たりがないため、効率よくできた³¹。

日本人による工作と相まって、太平洋戦争の勃発は、反戦組織の日本人盟員に対して、決定的な影響を与えた。中国共産党が宣伝してきた日本軍の敗北をさらに信じるようになって、反戦運動を本心から行うようになったと考えられる。それは反戦同盟冀中支部で活動していた和田真一の回想には、「わたしの考えにも変化が起こった。真珠湾の奇襲に始まる太平洋戦争は大きな

ショックだった。中国における戦争が長期化し、人的、物的資源がかなり窮乏しているとはいっても、現地補給の道もつきはじめていたし、決定的打撃を受けるようには思わなかった。しかし、物量上においてははるかに勝るアメリカを相手では決定的だった。『日本もこれでおしまいかな？』と深刻だった。「たしかに日本軍が負ける。われわれが生きて帰る希望がみえてきた。」「いままでのようにうまくゆけば残っているが、うまくいけなければ逃亡してやろうという、二者択をすてて、反戦運動をほんとうにやってやろうという気になった³²」とある。

1942年10月、八路軍野戦政治部から『关于敵軍工作的指示』が出され、「最近、日本軍の政治気分は新たな変化があった。時機をつかんで、今までの日偽軍、偽組織に対する工作を基礎にし、更なる大きな力を日本軍に対する工作に入れる」と規定している³³。

1944年2月16日、日本人反戦同盟華北連合会拡大執委会が日本工農学校でひらかれた。岡野進は「日人反戦同盟拡大執行委員会和に本人民解放連盟的成立」と題し、談話を発表した。その中に、「今後の対日本軍工作は、日本人が担当したほうが最も適切である。いや、必ず日本人が担当しなければならない」と指摘している³⁴。

1944年6月1日に総政治部が出した「敵軍工作に関する総政治部の指示」には、「今後の敵軍工作は主に日本人解放連盟(元名反戦連盟)を通じて行なうべきである。(現在はまだ日本人幹部また解放連盟組織の無い個別な地区においては、今まで通りに敵軍工作を行う)」と規定している³⁵。

1945年1月25日に太行軍区政治部が出した指示によると、「今年は時事に関するプロパガンダを強化すべきである。日本帝国主義の敗北は恐れることなく、逆に日本人民の幸福であることを日本兵に知ってもらう。」「延安日本解放連盟が最近出した指示を参考し、日本僑民向けの組織工作を行い、日本僑民を通じて日本軍向けの工作を展開する³⁶」と述べている。

¹ 文化教育研究会編『敵我在宣伝戦線上』文化教育研究会出版、1941年3月、陝西省档案馆,3018-11-3-23, 210頁。

² 前掲書『敵我在宣伝戦線上』, 212頁。

³ 盧耀武、劉国霖「129師的敵軍工作」、『八路軍回憶史料3』解放軍出版社,1991年9月, 93頁。

⁴ 前掲書『敵我在宣伝戦線上』,230頁。

⁵ 山本武利編訳『延安リポート—アメリカ戦時情報局の対日軍事工作』, 岩波書店, 2006年2月。

⁶ 「中国共産党告日本陸海空軍士兵宣言」中央档案馆編『中共中央文件選集』(第11冊), 中央党校出版社, 1986年版, 341頁。

⁷ 中国人民解放軍歴史資料叢書編審委員会『八路軍・文献』解放軍出版社,1994年5月, 48頁。

⁸ 前掲書『八路軍・文献』62頁。

⁹ 「毛沢東、劉少奇關於在華北応加強瓦解日軍的宣伝工作致朱德等電」前掲書『八路軍・文献』156頁。

-
- 10 「中共中央軍委總政治部發布瓦解日軍的標語口号」前揭書『八路軍・文献』161 頁。
- 11 『第十八集團軍政治部關於日軍工作和青年工作致各兵團政治機關電』前揭書『八路軍・文献』311 頁
- 12 「傅鐘關於新段階日偽軍工作的指示致各兵團首長電」前揭書『八路軍・文献』345 頁
- 13 魏碧海「1937:英雄挺起民族脊梁,陳士榘活捉第一個日本兵」『中国国防報』2005 年7月5日,5面。
- 14 「朱德,彭德懷關於晋察冀軍区開展瓦解日軍工作狀況致蒋介石等電」,前揭書,『八路軍・文献』377 頁。
- 15 水谷尚子「『反日』以前:中国対日工作者たちの回想」文芸春秋:2006 年7月30日,85-86 頁。
- 16 「中共中央軍委總政治部關於日偽軍工作的訓令」前揭書『八路軍・文献』,388 頁。
- 17 「中共中央軍委總政治部關於日偽軍工作的指示」前揭書『八路軍・文献』,521 頁。
- 18 「1942 年1月22 日「八路軍野戰政治部關於対日偽軍開展政治攻勢致各戰略区政治機關電」前揭書『八路軍・文献』760 頁。
- 19 「中共中央軍委總政治部關於太平洋戦争爆發後対日偽軍及其占領区人民的宣伝与工作的指示」前揭書『八路軍・文献』741 頁。
- 20 「中共中央書処關於瓦解日軍工作的指示」中央档案館編『中共中央文件選集』(第12 冊)中央党校出版社,1986 年版,358 頁。
- 21 「中共中央軍委總政治部關於日偽軍工作的指示」前揭書『八路軍・文献』522 頁。
- 22 「中央宣伝部關於反敵偽宣伝工作的指示」,中央档案館編,『中共中央文件選集』第13 冊,中央党校出版社,1986 年版,63-64 頁。
- 23 「中共中央軍委總政治部關於召開日本人反戦団体華北代表会及対日工作會議的指示」,前揭書,『八路軍・文献』,683 頁。
- 24 「中共中央軍委總政治部關於太平洋戦争爆發後対日偽軍及其占領区人民的宣伝与工作的指示」,前揭書,『八路軍・文献』741 頁。
- 25 姫田光義,藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店,1999 年9月18日,118 頁。
- 26 香川孝志,前田光繁 著『八路軍の日本兵たち—延安労働学校の記録』サイマル出版会,1984 年6月,179 頁。
- 27 「中共中央軍委總政治部關於召開日本人反戦団体華北代表会及対日工作會議的指示」,前揭書,『八路軍・文献』,683 頁。
- 28 「社説:日本士兵代表大会与日人反戦団体大会開幕」『解放日報』1942 年8月14日,1面。
- 29 「日本士兵的要求書和敵軍工作」『解放日報』1942 年10月13日,1面。
- 30 秋山良照,『中国戦線の反戦兵士』,徳間書店,1978 年11月10日,271 頁。
- 31 劉国霖,鈴木伝三郎,「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」,学苑出版社,2000 年6月,72 頁。
- 32 和田真一「生と死の岐路」,反戦同盟記録編集委員会 編『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』日本共産党中央委員会出版部,1963 年9月,73-74 頁。
- 33 前掲,「129 師的敵軍工作」,『八路軍回憶史料3』,92 頁。
- 34 「日人反戦同盟拡大執行委員会和に本人民解放連盟的成立」『解放日報』1944 年2月20日1面。
- 35 「敵軍工作に関する総政治部の指示」陝西省档案館 5495-13-24-26。
- 36 「太行軍区政治部關於1945 年政治工作方針的指示」,前掲書,『八路軍・文献』1060 頁。

5.3 プロパガンダ工作と日本人反戦組織

5.3.1 プロパガンダ手段

中国共産党自ら展開した対外宣伝のほか、教育を受け転向した日本軍捕虜を積極的に利用し、日本軍向けの宣伝攻勢を展開した。延安日本労農学校と各地の分校で教育・洗脳を受けた日本軍捕虜は、八路軍、新四軍と一緒に、積極的に日本軍の瓦解工作を行った。これらの工作は、八路軍政治工作部の指導も下で行っていたので、中国共産党初期の対日宣伝活動の一部となる。当時、対日宣伝活動の主な手段は慰問袋と宣伝ビラ、手紙、呼びかけなどである。

(1) スローガン

スローガンを壁に書く、もしくはスローガンを書いたポスターを壁に張る作業は、部隊の敵軍工作部(科)の宣伝隊が担当していた。八路軍が通過したところに対日本軍プロパガンダスローガンを張った。『敵我在宣伝戦線上』の記載によると、115師団のある連隊が1938年4月に2000本以上のスローガンを書き、5月に5526本のスローガンを書いた。晋察冀軍区が1938年末の「反掃蕩」の中、2万本以上のスローガンを書いた¹。

スローガンでおこなう日本軍に対するプロパガンダ運動には、民衆や現地政府も動員されて参加した。1938年夏以後、長治、高平、陽城など山西省東南地区の各地において、民衆団体が張った日本軍を瓦解させるスローガンが大量現れた。長治と高平をつなぐ道路の両側には、農救会、犧盟会、小学校、自衛隊、児童団などの団体が書いた日本語スローガンが多く見られた²。

当初、多くの部隊がスローガンを民衆の家屋の壁に書かれた。日本軍はそのスローガンを発見すると直ちに家屋を焼き払った。それを恐れて、八路軍部隊が部落を出ると、民衆は八路軍が書いたスローガンを消すことが多かった。「今後、我々は交通の要所、部落の無人家屋、祠堂、廟宇、石碑などに張るべきである」の方針があり、129師団は木の皮を剥いて日本語スローガンを書く方法を使った³。

日本語教育の遅れなどで、日中戦争初期にスローガンの間違いが多かった。たとえば、山西省東南地区には、「捕虜を殺さない」を「捕虜を殺す」と間違ったことがある⁴。

朝鮮義勇武装宣伝隊も日本軍に対する宣伝工作に参加している。『解放日報』の記載によると、朝鮮義勇武装宣伝隊は八路軍と協力しあい、安陽台の敵軍に大きな打撃を与えた。戦闘が終わった後、敵軍の拠点付近に、中国語、韓国語、日本語で書かれた反日本ファシズムのビラを貼った。同時に、「朝鮮義勇隊告民衆書」を撒いたという⁵。

延安にある日本人反戦組織が多くの質の高い反戦宣伝品を作ったが、当時、輸送手段に制限があり、各地に届けることは困難であった。当時、延安からの文書は太行山まで少なくとも3カ

月間かかった。延安で決められたスローガンは新華社を通じて、モールス符号(Morse code)で各地に通信した。例えば、「Sinkyu o koheni site moraitai」というスローガンが届くと、盟員全員によって解読して、「進級を公平にしてもらいたい」と日本語に直した⁶。

(2) 呼びかけと日本歌謡

呼びかけでおこなう対日本軍プロパガンダもよく使われた手段の1つである。前述したとおり、日中戦争の初期において、中国語での呼びかけ工作がおこなわれた。その後、日本語教育の推進で、一般兵士も5、6句の日本語スローガンを呼びかけることができるようになった。しかし、多くの八路軍兵士は、その日本語スローガンの意味を知らずに呼びかけてしまうことがあった。日本軍の軽視とあざ笑いを引き起こした⁷。多くの戦いの中、「我々が呼びかけたら、敵もそれに応答する。しかし我々はその意味がわからない。敵軍を獲得するチャンスを多く見逃した⁸。」

『解放日報』には、日本軍向けの呼びかけ工作についての記載が残っている。例えば、反戦同盟太行支部が1942年11月におこなった山西省潞安県老頂山分遣隊に対する呼びかけ工作について報道している。そのほかに、晋察冀支部が夜の9時ごろに、日本軍のトーチカまで30メートルくらいの距離で呼びかけ工作をおこなった。盟員の中西が呼びかけするまえに、ハーモニカで『荒城之夜』の曲を吹いた。冀南支部は1942年9月に河南省南宮県一帯に駐屯している日本軍独混10旅団に対する呼びかけ工作についての記載が残っている。そこには盟員が「国賊」だといわれ、お互いに喧嘩する場面もある。トーチカの日本兵士は射撃したが、「銃弾の弾道はるかにわれわれの兵士より高く、本気に打ったわけではない」と回想している⁹。

『解放日報』の記事によると、1943年12月末、反戦同盟太岳支部の盟員である加藤佐吉を中心に、日本軍拠点に向けて呼びかけ工作をおこない、八路軍、反戦同盟と国際情勢を日本兵に紹介し、大きな効果を収めたという¹⁰。

日本歌謡は呼びかけのときによく使われた手段であった。水野の回想によると、「私たちはただちにとりかかった。長さ1メートルほおの紙の小旗を数百本と数百枚のビラを用意した。いくつかの呼びかけのスローガンと、日本の故郷を思い出させるような流行歌や替え歌を作って旗にかきこんだ¹¹」とある。

八路軍兵士向けの日本語教育には、日本語歌の教育もおこなわれた。『敵我在宣伝戦線上』には、「前線にて日本歌曲を歌うことは、敵の精神に対して大きな瓦解効果がある」と指摘している¹²。

(3) 電話や手紙のやり取り

『解放日報』の記事によると、日本人民反戦同盟は日本軍の中の兵士と手紙のやり取りを通じて、プロパガンダ工作を展開しようとした。1942年5月から、晋冀魯豫支部が清豊県に駐屯している独混第1旅団75大隊の兵士の出身、名前など内部状況を調査した上、多くの手紙を出した。75大隊から多くの返信があり、反戦同盟に入った人も現れた。75大隊の松本大佐からの手

紙には、「無駄なことはやめて、日本軍に来てください」などと反戦同盟の盟員を説得する内容のものもあった。

『解放日報』の記載によると、反戦同盟冀南支部が出した手紙の内、半数以上は返信があった。返信の半分くらいは、日本軍の憲兵、特務兵が書いたもので、残りの半分は日本軍の一般兵士のものだという。

戦死した日本兵士の死体を返送するときに、農民に日本軍中隊長宛の手紙を渡した。農民には10元の報酬を与えたという¹³。

『解放日報』には、反戦同盟が電話で日本兵に直接宣伝活動を展開している記事があり、「華北各地に、日本軍のトーチカが多く分布している。長官がいる中心のトーチカと兵士がいる各トーチカの間は、電話線につながっている。我が反戦同盟はこの電話線がとても気に入った。こっそりと我々の電話をこれらの電話線につなげ、トーチカの中の日本兵士と会話をするという方法は、各地では多く使われている。事実が証明している通り、日本兵士と交歓し、彼らに向けて宣伝するには、この方法はとても効果的である¹⁴」と紹介している。

1943年8月13日の夜、反戦同盟晋西北支部が日本軍トーチカの内部状況(日本兵10名、歩兵銃など武器の数、中国兵人数など)に関する情報を受け、八路軍の通信技術員が、電線でトーチカの中の電話とつなげた。各トーチカの間暗号を解明するには30分近くかかった。「北斗七星」「天中」「若本」「坂本」など各トーチカの呼称があった。この支部はトーチカの中の日本兵と電話で2回にわたって話をした。「八路軍の中に、日本人がいるということを多くの日本兵に知ってもらえた」という¹⁵。

小林清の回想によると、1943年9月に、小林が所属している武装宣伝隊が小廟後¹⁶と旧店¹⁷との2つの日本軍拠点へ向けて電話を通じてのプロパガンダ工作を行った。工作員は電話を日本軍の電話線につなげ、1時間盗聴して、日本軍各拠点の連絡暗号を解明した。日本軍に通話すると決め、電話のハンドルを回し、受話器から「ウンウン」の音が聞こえた。相手が電話に出たら、すぐ小廟後方向の電話線を切った。旧店拠点の日本軍兵士と電話で話をし、宣伝工作をおこなったという¹⁸。

(4) 直接訪問

『解放日報』の記載によると、日本人反戦同盟のプロパガンダ手段は、一般宣伝、呼びかけと捕虜教育のほかに、日本軍のトーチカまで日本人兵士を訪問し、雑談を通じて宣伝を行う手段もある。1人の盟員は、10数ヶ所数の日本軍トーチカの兵士との連絡仕事を担当している。盟員はトーチカの付近の村から、トーチカの中の日本兵に手紙を出したり、電話をしたりして連絡し、時間を決めて訪問する。1942年の年末、反戦同盟盟員の大谷は白荘付近のトーチカに入った。トーチカの日本兵と2時間も話しをし、「日本人民が圧迫され、瞞着されている事実、および革命の真理を日本兵に宣伝した」という¹⁹。

この手段は、『解放日報』にて記載されているが、盟員たちの回想では確認できていない。

(5)桜, お盆, 慰問袋など日本の伝統文化に関するプロパガンダ手段

八路軍 129 師団政治部は 1941 年 3 月 25 日に『關於加緊櫻花時節的對敵工作的訓令』(桜季節における對敵工作を強化する訓令)を出した。その中で、「3, 4 月の間は敵国の桜の季節であり, 日本人民は生活習慣によって, 大に行楽行事を行う。敵の厭戦と郷愁の気分を引き起こし, 戦闘の意志を緩ませるために, この好機をつかみプロパガンダを行わなければならない²⁰。」と指示している。

1944 年 3 月に延安でおこなわれたプロパガンダ工作座談会に出席した解放連盟太行支部の発言によると, 太行支部は日本旧来の習慣に従い, 毎年のお正月およびお盆のとき, 日本兵士に年賀状と慰問袋, 暑中見舞いの手紙などを送る。日本では, 5 月は男児のお祭りであり, 鯉のぼりを飾る。太行支部は 5 月 4 日よるに, 鯉の腹に「びんたをやめよう」と書いた鯉のぼりを日本軍のトーチカの近くに飾った。翌日, トーチカの中の日本兵士がそれを見て歓声を上げたという。さらに日本軍兵士はがその鯉のぼりをトーチカに持ち込んで飾ったということである²¹。

慰問袋は年に 2 回, 日本軍に送った。時期は年末年始と 7 月中旬(中国旧暦)のお盆のときである。反戦同盟太行支部は最初に慰問袋に食べ物を入れたが, その後日用品に変えた。晋西北支部は慰問袋にタオルとハンカチを入れた。晋察冀支部は棉のズボンを入れた。小さいトーチカに 1 つ, 大きなトーチカの 3 つの慰問袋を農民を通じて送った²²。

劉国霖の回想によると, 1941 年まで, 慰問袋の中身を様々検討したという。袋の中に, ビラのほか, 干し柿など太行山の特産物を入れた。その後, 捕虜から聞いた話によると, これらのものは, 毒が入っていると思われ, 日本軍で食べるのが禁止されたので, 効果的ではなかった。1942 年以後, 反戦同盟盟員の星川誠一が担当し, 慰問袋をもっと日本式に, もっと面白くした。長さ 30 センチで, 幅 20 センチの大きさの慰問袋に, 大きな文字と富士山, 桜などのイメージをあしらった。中には, ビラ, 棗, 干し柿, クルミ, タバコ, 下駄, 『同胞新聞』などを入れた²³。

アメリカ軍事視察団の記録によると, 慰問袋という手段は 1941 年 4 月から使われ始めたという。八路軍の慰問袋の中によく年賀状, 鶏肉, 米, ワイン, タオル, 文房具などがある。宣伝ビラも慰問袋に入れられている。食べ物は兵士から毒入りと勘ぐられないように, 卵, 落花生, 果物などが送られた。これらのビラは政治的な言葉を避け, 友好的な文面であった²⁴。

(6)ビラ

1938 年 3 月 24 日付の日本外務省の資料によると, 「去ル 3 月 6 日山西省娘子関付近ノ戦闘ニ於テ, 支那共産軍ガ散布セルモノ」を発見したと記述されている。「日本軍閥, 財閥打倒ヲ使喚セルモノ」とされ, そ主な内容の 1 つは支那共産軍との連合, 2 つ目は日本平和同盟の名を以て日支同志の連合, 3 つ目は国民革命第八路軍政治部の名を以て日本捕虜の優遇²⁵, と記されている。

ビラの撒布は, 対日本軍プロパガンダ工作の主要な手段の 1 つである。『中国共産党告日本

士兵書』など初期のビラは、政治的口調が強すぎて、日本軍兵士に感動させることはできなかった。²⁶それは政治覚醒を啓発するビラである。

もうひとつは、日本軍兵士の郷愁を誘うビラである。120 師団が戦闘の戦利品の中に、日本語新聞を発見した。その記事によると、航空兵大尉の佐藤主計氏が保定で戦死した。妻である梅子が夫の戦死の衝撃を受け、海に入って自殺した。120 師団政治部がこの記事を利用してビラを作った²⁷。

日本軍の長官と兵士の矛盾を暴露するビラも多かった。1938 年3月 16 日の神頭戦闘²⁸で、日本軍が負傷した日本軍兵士を燃やして殺した行為を発見し、それに基づいてビラを作った²⁹。

日本国内情勢を宣伝するビラも多かった。日本国内の「米騒動」、反戦運動などを採り上げビラを作った。1939 年6月、東京、大阪、神戸などのところで発生した洪水などもビラに記載した³⁰。

しかし、初期の宣伝ビラは、日本語が分かる中国人を通じて書いたもので、「日本軍部の侵略戦争に反対しよう」などスローガン的な内容が多かった。堅苦しい表現であったため、日本兵士に影響を与えることはほとんどなかった。1942 年8月に延安で開催された「華北日本兵士代表大会」と「日本人反戦団体大会」の後、中身のないスローガンをやめて、日本兵士が関心を持っていることに着目してビラを作った。「びんたをやめよう」「満腹まで飯を与えよう」など、日本兵士の立場からの内容が多くなった³¹。

日本陸軍省の資料には、八路軍が散布した日本語ビラに関する記録が残っている。1940 年10月に篠塚部隊宣伝班が八路軍のビラを分類して報告している。内容は軍閥・財閥に対する反感を指喚するものと反戦思想を鼓吹するものである³²。

(7) 小新聞などの出版活動

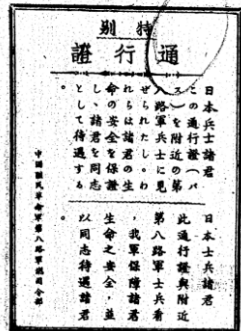
1940 年7月7日、日中戦争勃発3周年の際、延安にいる日本人兵士森健、高山進などが呼びかけて、「在華日人反戦同盟延安支部」が結成された。これは八路軍根拠地において、比較的早い時期に作られた在華日本人反戦革命組織である。この組織は主に宣伝工作を行うのである。当時、主な工作は機関誌『兵士の友』の編集・出版活動だった。『兵士の友』は日本語月刊誌で、支部が作られた直後に出版され始めた。最初、八路軍に来ている日本兵を対象にして宣伝を行っていた。その後徐々に対象を変え、日本軍隊にいる多くの兵士も対象として出版された。この出版物は、日本軍にいる日本兵にも、八路軍に来ている日本兵士にも大きな影響を及ぼした。同年の11月に、日本軍も兵士たちを対象に、毎週2回の無線ラジオ放送を始めた。放送の内容は、時事・戦況解説、八路軍にいる日本人兵士の日常生活と学習・活動状況、辺区の様況、日中戦争の性質の宣伝、などだった³³。

覚醒連盟は結成後、百種以上の宣伝品の編集・印刷の他に、反戦内容を主とした出版物『覚醒』を発行した。『兵士の友』の原稿のほとんどは、日本工農学校の生徒たちが書いたものである。その後延安広播電台で放送した毎週2回の日本軍向けの無線放送のほとんども、日本工農

学校の生徒たちが原稿を提供した³⁴。

(8) 通行証

八路軍本部の名義で多くの通行証が作られた。国民革命軍の名義で作られた通行証も多かった。³⁵『解放日報』1942年1月1日付の『解放日報』によると、延安で開催される在華反戦団体代表大会を行うため、覚醒連盟本部の責任者である杉山一夫、君留太郎は招待状と代表通行証を出し、華北にいる日本軍兵士の代表派遣を勧めているという³⁶。1942年1月16日付の『解放日報』の報道によると、在華日本人反戦同盟華北代表大会は本年4月に延安で開催することになっている。前線にある各反戦団体は多くの「招待状」と「通行証」を印刷し、日本軍隊および敵占区に配り、日本兵士および日僑の出席と参加を求めている³⁷。



アジア歴史資料センターで発見した八路軍総司令部発行の「特別通行証」の表には「日本兵士諸君、この通行証(パス)を付近の八路軍兵士に見せられたし。われらは諸君の生命の安全を保証し、諸君を同志として待遇する。中国国民革命軍第八路軍総司令部」と書いている。



「特別通行証」の裏には、1940年7月7日に下された日本捕虜を優遇する命令が、日本語と中国語で印刷されている。その内容は次のとおりである³⁸。

中国国民革命軍第八路軍總司令部命令(省略)

日軍兵士は勤労民の子弟であり、軍国財閥にだまされ、きょうせいされて、われらに銃をむけている。故に：

一、日本兵士の捕虜は殺傷、侮辱、其所持品の没収などすべからず。われらの兄弟として待遇すべし。違反者は処罰する。

二、傷病の日軍兵士には特別注意をはらひ、治癒せしむべし。

三、故郷又は原隊に帰る事を欲する者には、できるだけの便宜をあたふべし。

四、中国で働くことを欲する者には仕事をあたへ、勉学を欲する者は学校に入学せしむべし。

五、家族、友人と文通を欲する者には便宜をあたふべし。

六、戦病死者は埋葬し、墓標をたつべし。

中華民國二十九年(昭和十五年)七月七日

總司令 朱德

副總司令 彭德懷

(9)墓標

日本軍に対する恨みで、八路軍戦士は、戦場を清掃するとき、日本兵死体を裸にし、死体を銃剣で刺すこともあった。これは日本軍に対して悪影響を与え、日本軍の宣伝に利用された。日本兵死体を虐待する行為はまもなく禁止された。1938年に、日本兵墓標を作る指示が出された。戦場をかたづけるときには、できるだけ日本軍兵士の死体を埋葬し、墓標を作る。墓標には、兵士名、年齢、出身、所属部隊、死亡状況、埋葬期日などを明記する。さらに日本軍が戻った時に見せるために、八路軍の名義で、厭戦気分を引き起こす内容を書き加える。たとえば、「この戦士は、重傷を受け、われらの治療を受け、効果がなく死亡した。」「ここを通過する日本兵諸君！戦死した戦友のご家族に教えてくれ。八路軍は丁重に彼を埋葬した。ご家族が彼の死を知ったときの悲しみは想像に難くない。今日の他人のことが、明日になると諸君の身に降りかかる。家族に泣かせるな。戦争をやめ帰国しよう。それができなければ、八路軍に来なさい！諸君を兄弟として歓迎する」などの内容があった³⁹。

1942年7月4日付の『解放日報』には、次のように記事がある。「八路軍某部はこの間、榆社白莊付近で敵軍を待ち伏せ攻撃したとき、6人の敵兵を捕虜にした。1人が重傷で死亡したほか、中村、大木、酒井、佐藤、齋藤など5人が生き残っている。」「百团大戦で戦死した日本兵のために、八路軍が作った墓標を榆社で見て、大変感動したという⁴⁰。」

日本軍兵士の死体の埋葬を、中国軍民に向けて宣伝したこともあった。1942年6月14日付の『解放日報』は、「交口に駐屯している日本軍内部の反戦戦士2名は、秘密に処刑された。死体を外に出し、我方が殺害したと揚言した。当地の民衆は内幕をよく知り、死体を埋葬した⁴¹」と報

じている。1944年9月、沂水城の戦いで捕虜となった日本兵荒井を取材した記事が『解放日報』に掲載された。それには「一番感動したのは、八路軍が日本兵士死体をきれいに洗い、日本の風習に従い、白い布で死体を包み、日本軍に送還したことを見たことがある」とある⁴²。この日本兵死体への扱いを通じてのプロパガンダ手段は、墓標と同様に、日本軍を瓦解させる手段の1つとして使われたのだろう。

1942年9月晋西北の戦闘で、戦死した4人の日本兵士の死体が残された。反戦同盟の晋西北支部はこの4人を埋葬し、墓碑を立てた。その上に、「山本曹長など四名之墓、昭和18年9月1日戦死、日本人民反戦同盟晋西北支部立」と書いた。「その後、通る日本兵が墓碑を見ると、心に一種の感謝の気持ちが生まれ、八路軍と反戦同盟は、長官の言ったとおりではなく、人情味のある存在だと分かった。宣伝するために墓碑を立てたわけではないが、結果から見ると、とてもいい宣伝となった」と晋西北支部の代表が1944年3月に延安でおこなわれた「宣伝工作座談会」で発言した⁴³。

(10) 日本語ラジオ放送

国民党側は日本語ラジオ放送を行っていたが、共産党側は日本語ラジオ放送において、人材、設備などの制限があった。延安で日本語放送を担当していた原清子の回想によると、1941年秋、延安に着いた原清子は、総政治部敵軍工作部に所属し、日本語放送を担当するように指示を受けた⁴⁴。日本語放送を始めた目的は、敵軍中の日本兵や日本居留民に対して中国共産党の主張や政策を知ってもらうこと、両国の戦争を早期に止めさせることにあった⁴⁵。原清子が放送時に読む日本語原稿は、すべて敵軍工作部が指定、野坂がチェックを入れた文章だった。日本語放送は毎週水曜日、17時から17時30分まで。その後、設備の故障が発生したため、日本語放送は停止した⁴⁶。

(11) その他の手段

上述した手段のほか、日本人反戦組織はさまざまな宣伝手段を使った。例えば、日本軍と対峙し、しかも距離はそれほど遠くない場合、矢を射る方法と投げる方法が使われた。宣伝品を矢の先に付け、日本軍陣地に射る方法と、宣伝品で石を包み、日本軍陣地付近に投げる方法である。また、日本軍が河の下流にいる場合、木の板に宣伝スローガンを書き、河の流れで日本軍陣地に送る手段である⁴⁷。

5.3.2 日本人反戦組織の貢献度

日中戦争期において、中国共産党は捕虜となった日本人を教育し、八路軍や日本人反戦組織に入れて、積極的に利用しようとした。

日本人の積極的利用は、大きく3つに分けることができる。1つは、八路軍向けの日本語教育である。もう1つは、日本軍向けのプロパガンダ工作である。3つ目は、武器使用法、医療、戦術

などの分野の捕虜利用である。その中、一番注目すべきなのが、対日本軍プロパガンダ工作の展開における捕虜利用である。本論文の第2章で、八路軍向けの日本語教育における日本人の積極的利用を分析したので、ここで略する。上述のとおり、日本人によるプロパガンダ工作は、日本人反戦組織が中国共産党のために一番貢献しているのであろう。ここでは、プロパガンダ工作以外の分野において、日本人捕虜の利用および日本人捕虜の働きを考察する。

(1) 武器使用法の訓練

日本軍との戦いで戦利品としての多くの日本の武器は、八路軍の武器よりずっと優れていた。その武器の使用法などは、八路軍にはよく分からなかった。そのため、日本の武器の使用法を八路軍戦士に教えてもらうため、日本人捕虜を積極的に利用した。

外国記者団の1員として延安を訪問したスタインは、著作の『The Challenge of Red China』で、日本人捕虜および日本武器に関する記載がある。それによると、「南泥湾にある八路軍の連部を訪問したら、1/3以上の歩兵銃、2/3以上の機関銃と大砲のほとんどは、日本軍との戦いの中で獲得した戦利品であることが分かった。武器の使用法に関しては、日本軍捕虜は彼らを大いに助けた。それらの捕虜は、八路軍の助けの下で、ファシズム思想を捨て、八路軍に入隊し、東京の軍国主義に対抗する戦士となった。これらの日本人は、また八路軍に、日本皇軍の戦術も教えてあげた⁴⁸」とある。

(2) 日本軍戦術の伝授

八路軍は敵情研究を重視し、日本軍の戦術も研究し、それを学ぼうとした。例えば、日中戦争期には、日本軍の銃剣術は優れていると考えられており、八路軍は日本軍の資料からその銃剣術を学び、八路軍戦士に教えた。日中戦争期初期、八路軍兵士は日本軍兵士と白刃の戦いができる力はなかった。そのため、八路軍は日本軍の教材を参考し『刺殺教範』を編集した。この教材だけでは、銃剣術の訓練は実施しにくいいため、反戦同盟から銃剣術の強い盟員を選別し、その銃剣術を中隊、小隊レベルの幹部に教えてもらうことが決められた。129師団では、1期に30名近くの八路軍幹部に、日本人が銃剣術を教えてあげた。1期の期間は1週間であった⁴⁹。劉国霖の回想によると、「八路軍の3大戦闘技術は、射撃、手榴弾(投弾)、銃剣術だが、そのうちの銃剣術は日本兵捕虜から教授された戦闘知識であり、戦地においてこれほど役に立ったものはない。」「太岳支部では銃剣術の練習中、銃が暴発して日本人捕虜が八路軍兵士を殺してしまった」こともあった⁵⁰。

新四軍の捕虜となった山本一三(林勝ともいう)は、新四軍の要請があり、新四軍向けの砲兵教育をおこなった。1946年4月から砲兵学校をつくり、砲兵幹部を養成する教育を続けた。その後、中国人民解放軍第3野戦軍第29軍砲兵連隊の作戦参謀になった。その後、29軍砲兵連隊第1大隊長に任命された⁵¹。同様に、水野靖夫も八路軍側から、鹵獲した砲の操作技術を教えてほしいという要請があり、八路軍115師団3旅団第7団の砲兵連で軍事教育を始めたのである

⁵²。1941年春ごろに、秋山良照も八路軍側から同じような要請があった。11年式軽機関銃の操作を教えてほしいと、敵軍工作部の譚林夫から要請された⁵³。

冀中軍区司令部作戦科課長だった高存信の回想によると、「幹部の軍政素養を高めるため、1942年に冀中軍区幹部教導団が創立された。冀中軍区第10分区司令員の周彪が団長となり、高存信は副団長兼訓練処の処長をつとめていた。訓練内容の8割は軍事訓練であった。当時の八路軍の中には、軍事教員、特に日本軍から手に入れた日本武器の分かる教員が不足していたため、反戦同盟冀中支部から7人の盟員を軍事教員として来てもらった。それぞれ田中義雄、東忠、松山一郎、小島、渡辺義郎、池田、中西であった。彼らは日本軍で正式訓練を受けたことがあり、軍事的素質がよく、学識が豊かで、理論的講義もでき、実際の模範作業もできるので、良い効果が収められた」と評価している⁵⁴。

(3) 医療支援

中国共産党は、日中戦争期において積極的に国際支援を求めた。例えば、周知のカナダ人医師のノルマン・ベチューンの他に、オックスフォード大学の出身で、北平大学の教師であったイギリス人の Michael Lindsayha は、太平洋戦争が勃発したとき、北京を出て、共産党支配地区に入った⁵⁵。八路軍で、無線通信技術の仕事に従事した。アメリカ人医師である馬海徳は、1944年の時点まで6年間にわたって八路軍の病院で働いた。両氏とも共産党員ではないという⁵⁶。それらの外国人と同様に、日本人捕虜を医療などの分野で利用しようとした。例えば、前述した山田一郎は、東京帝国大学医学部の出身で、1939年7月に捕虜となり、1940年6月から八路軍野戦総司令部の模範病院で仕事をするようになった。1942年、病院の医務主任に任命され、1943年に副院長となった。山田一郎は、医師を養成する短期学校の衛生学校で講師を勤め、1冊しかないクレンペル著の診断学を中心に中国語で講義した。学生は1944年春に卒業し、前線に配属された⁵⁷。

(4) 直接参戦

反戦団体に加入した日本人捕虜を、対日プロパガンダ工作に利用するのが主だったが、日本人反戦兵士の直接参戦も少なくなかった。小林清の回想にはつぎのような記録がある。

村民を日本軍の包囲から脱出させようと援護するとき、八路軍は、反戦同盟を戦闘に参加させず、村民の中に混在させるようにと命令した。「反戦同盟の日本人同志たちは村民と一緒に行動する。村民の中に混在する。八路軍と連絡が取れない場合、軍区と連絡を取れるまで独立行動する」とされた。

小林は次のように主張した。「われわれは一般百姓ではなく、反戦同盟の盟員であり、八路軍の戦士でもある。村民の包囲突破を援護する戦闘への参加を要求する。」

参謀長は次のように述べた。「あなたたち日本人同志の主要な任務は、反戦宣伝工作だ。この任務は非常に重要だ。私たちはあなたたちを援護する。あなたたちの役割は、われわれ中国

同志にはできないからだ。」「最近、あなたたちはもう十分苦勞している。村民援護の戦闘に参加させることはできない。万が一何かあったら、反戦同盟本部と軍区指導者に申し開きできないのだ。」最終的には、反戦同盟の日本人は戦闘に参加した⁵⁸。

5.3.3 プロパガンダ工作の限界度

日本人反戦組織の盟員による対日本軍プロパガンダ工作は盛んに行われたが、徐々に日本人の犠牲者と逃亡者が現れ、日本人によるプロパガンダ工作の限界が見えてきた。

(1) 日本人の犠牲者

八路軍に入隊した日本人や、日本反戦組織に加入した日本人は、日中戦争期、中国の戦場で、中国共産党部隊と協力し合い日本軍と戦った。当時中国の戦場で犠牲となったものも少なくない。これまで研究では、中国における日本人反戦組織の犠牲者に関する考察はきわめて不十分である。本部分では、日中戦争期において、中国共産党の指導で日本軍と戦って犠牲となった日本人について考察する。

日中戦争期における日本人の犠牲者の状況に関する研究はきわめて少ない。ハリソン・フォアマンの『赤い中国からの報告』(Report from Red China)によると、延安を訪問しているフォアマンが解放連盟の学校を参観し、70名あまりの学生に歓迎された。学校の統計によると、「それまでの1年間、解放連盟の盟員が80%増えた。20%の盟員が前線での宣伝工作で殺害された」とのことであった⁵⁹。前田光繁の回想によると、1944年4月の時点で、反戦同盟で戦死あるいは病死した日本人は、約30人だった⁶⁰。1944年1月15日に延安で開催された「在華日人反戦同盟華北連合会拡大執委会」の報告によると、華北地区で犠牲となった反戦団体の日本人は、安藤清、浅野清、黒田嗣彦、大野静夫、吉田武、福岡留などがいた⁶¹。

小林清の回想によると、犠牲となった日本人反戦同盟の日本人盟員は、華北だけでは、安藤清、浅野清、黒田嗣彦、大野靖夫、吉田武、福田留、金野、鈴木などがいた。そのほかに、逮捕された人、病気で亡くなった人も数人いた。彼らの中に、「掃蕩」で犠牲となった人もいれば、前線の呼びかけで犠牲になった人もいた⁶²。

吉積清などの回想によると、「戦火のなかでの反戦活動は多くの尊い犠牲を出した」という。1941年から1948年の間に、つぎにあげられる反戦同盟の同志が犠牲となった。安藤清、浅野清、黒田嗣彦、大野静夫、吉田武、福田留、松野覚、宮川啓吉、中西勉、中川秋夫、戸田益、高木敏雄、田畑恙、原広見、小林春夫、青木定夫、後藤勇、中山正、初田清三郎、浜田真実、砂原、住野、与津、富田、紺田、ら25名の同志である⁶³。延安の日本工農学校で日本人捕虜の教育につとめた趙安博は、中国語版の『反戦兵士物語』の序言に、「1941年から1948年まで、戦場での反戦活動で犠牲になった者の内、名前が把握できるのは25人もいた。しかし実際の犠牲者はこの数字を遥かに超えている」と指摘している⁶⁴。

金野博(今野博, 中野博)

現今、江蘇省北部にある「抗日山烈士陵园」には、反戦同盟山東支部副支部長、魯中支部支部長をつとめていた金野博(今野博ともいう)⁶⁵の巨大な記念碑がある。筆者が 2009 年夏に、中国で日本反戦運動研究の第1人者である孫金科先生と一緒に、抗日山烈士陵园を訪ね、次のような写真を撮った。4.5 メートルの高さの記念碑は 1991 年4月に、江蘇省贛榆县政府によって作られた。



記念碑の記載によると、金野博は1919年秋田県生まれ。1939年の初め、中国に出征。同年8月3日に、山東省梁山県で捕虜となった。1941年6月2日に日本人民反戦同盟山東支部宣伝委員に就任。1941年7月7日に八路軍に入隊。1943年の初めから、反戦同盟魯中支部の支部長に就任。1943年夏、反戦同盟山東支部へ工作報告をしに行く途中、日照高興圩で敵偽の襲撃を受け捕まった。1944年春末夏初に、済南で犠牲となった。

符浩の回想によると、「今野博は日照県傅疃一帯で捕まえられた⁶⁶。』『解放日報』の報道によると、日本軍の訊問に答え、金野は「死ななければ、八路軍に戻る」と言ったとされている⁶⁷。

山東省浜海軍区第四武工隊隊長の于鏡清は1944年に、今野博と一緒に日本軍向けの宣伝工作を行っていた。于鏡清の回想によると、「1944年夏に、浜海軍区敵軍工作科から、今野博のことを紹介され、日本人であることを暴露しないように命じられた。その後、傅疃大橋の日本軍トーチカ向けの呼びかけ工作を行った。工作を展開させるため、トーチカの中の中国人通訳の孫志軒を獲得しようとした。孫の家族を通じて連絡と取り、トーチカの中の日本軍の状況を聞いた。1945年春、今野博は日照市高興区の村で日本軍の掃蕩部隊に捕まった。今野博と関連する八路軍や農民はまったく巻き込まれなかった。青島で殺害されたそうだ⁶⁸という。

宮川英男(本名:宮川啓吉)

水野靖夫の回想によると、1943年3月に反戦同盟冀魯豫地区行議会在結成された後、冀南から宮川が冀魯豫に来て、抗日軍政大学晋西北分校の日本語指導にあたっている水野のあとの活動を担っていた。しかし、のちに宮川は戦死したという。⁶⁹

秋山良照の回想によると、宮川は山梨県東八代郡御坂村の出身で⁷⁰、1943年、太行から冀魯豫にもどり、済南から20キロほど離れた泰山の西方の鉄道沿線崗山莊、張家莊、小万徳莊、大万徳莊、長城莊、官莊、界寿莊の一帯で活動していた。宮川が戦死したのは官莊であった⁷¹。大峰山の遊撃隊の根拠地で盛大な分区葬を行い、死体を埋葬したとのことである⁷²。

山東省済南市長清県革命烈士陵園には、解放連盟冀魯豫地区協議会副会長だった宮川英男のお墓がある。

砂原利男、住野甚七

1944年5月のある日、反戦同盟盟員である砂原利男らは、白晋線が経過する襄垣県の河口という拠点のトーチカの前で呼びかけ工作を行っていた。劉国霖の回想によると、「呼びかけ工作が始まると、砂原利男は肢部をに銃で撃たれ、重傷となった。八路軍は、撤退するように求めたが、彼は血を流しながら、同じ盟員である住野甚七にと大声で呼びかけていた。2人とも銃で撃たれ、八路軍部隊に運ばれたが、重傷で死亡した⁷³」とある。『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』に掲載された劉国霖の回想録には、それと一致する記述が残っている⁷⁴。『反戦兵士物語』も上記の記述とほぼ一致しており、両氏は1944年5月の呼びかけで犠牲になったと思われる⁷⁵。

しかし、1945年6月20日付の『解放日報』の記事によると、「日本人反戦同盟太行支部の砂原利男と住野尺七が1945年5月末、襄垣の白晋線の河口で敵軍向けの呼びかけ工作を行った。砂原の脚部に銃撃を受けが、住野と呼びかけを続けた。結局2人とも致命傷を負い戦死した⁷⁶。2人の遺体は129師団政治部の所在地である王堡村に運ばれ、盛大な追悼式がひらかれた⁷⁷」とのことである。

劉国霖の回想によると、「住野甚七は岩手県出身で、1943年8月に自主投降して捕虜となり、1944年1月に反戦同盟に加盟、当時25歳。砂原利男は三重県の出身で、1944年1月に捕虜となり、同年解放連盟に加盟し、27歳だった⁷⁸。上記の『解放日報』の記載によると、「砂原は現在23歳、三重県の出身。1940年に日本軍に入隊し、1944年8月に捕虜となり、1945年に解放連盟に加盟した。住野は現在25歳で、岩手県の出身、1944年自主投降してきた⁷⁹」とある。

その後の1945年7月12日に、延安日本工農学校で宮川英男、砂原利男、住野甚七の追悼会が行われた⁸⁰。

上記の資料では「住野甚七」、「住野尺七」、「住野甚七」という名前があるが、これらは全て同一人物であり、正確には「住野甚七」である。砂原利男、住野甚七が犠牲となった期日は、1944年5月と1945年5月と2つの可能性があるが、本論文で、1944年5月の可能性が高いと判断する。

山潜、渡辺政之輔

1944年5月7日付の『解放日報』の報道によると、日本人民解放連盟晋察冀地区協議会の結成大会の前に、「日本人民解放事業に献身した山潜、渡辺政之輔などの同志を追悼した」との記録がある⁸¹。

松野覚

1944年3月25日付の『解放日報』は「日人反戦同盟の光栄、車橋戦闘⁸²中松野覚同志英勇犠牲」の見出しで、反戦同盟蘇中支部松野覚の戦死を大きく報道した。この報道によると、「反戦同盟蘇中支部の盟員が戦いの中、日本軍トーチカに近づき、呼びかけ工作を行ったが、効果は

なかった。このとき、松野覚が隣の戦士から歩兵銃を取り、トーチカの中に向かって射撃し、2名の日本兵を射殺した。そのとき、松野覚は頭部を撃たれ死亡した。松野覚は広島県広島市の出身、26歳。1941年日本軍に入隊し、来華した。1941年春に南浦旅団に編入され、如皋豊利の戦い⁸³の後、新四軍に来て反ファシズム軍部の活動に従事し始め、新四軍の軍籍を取った。1943年反戦同盟蘇中支部の宣伝委員に就任し、在華日本共産主義者同盟蘇中支部に入部した⁸⁴とある。

1944年5月15日付の『解放日報』は、日本人民解放連盟華中地方協議会の結成大会を報道した。記事には、「最近の車橋戦闘の中、盟員である松野覚が壮烈に戦死した。」とある⁸⁵。



松野覚⁸⁶

黒田嗣彦

覚醒連盟冀魯豫支部の盟員である黒田嗣彦は、1942年9月22日に、反掃蕩の準備を行っていたとき、日本軍に包囲された。日本軍に呼びかけながら、八路軍から支給された手榴弾の最後の1つで自殺した⁸⁷とされていた。しかし、自殺説と違い、同じ支部で活動していた水野靖夫の回想によると、黒田嗣彦は群馬県の出身で、1943年日本軍との戦闘で、日本兵に撃たれて戦死した⁸⁸とある。この他、1943年7月30日付きの『解放日報』には、反戦同盟山東支部および山東日本反戦士兵代表大会の報道が掲載されている。大会で、「戦場で八路軍とともに壮烈に戦死した3人の優れた反戦戦士黒田、金野、寺沢の事績が紹介され、出席する全員の代表の敬意を得た⁸⁹」とある。

吉沢勇蔵

吉沢勇蔵については「1939年5月に自ら日本軍を離脱して八路軍に入り、1939年6月6日、山東省鄒平県における日本軍との激戦で壮烈な死を遂げた⁹⁰」という記録がある。また他の記録には、「吉沢勇蔵は日本反戦同盟盟員で、八路軍の分隊長をつとめた。1939年6月6日に桓台县で戦死した⁹¹」とある。この他、「1939年7月22日に、八路軍山東縦隊第3支隊の司令部とともに、桓台牛荘を出て東進する。大寨村に入ると、敵軍の待ち伏せ攻撃を受け、指令員とともに戦死した。24歳だった⁹²」との記録もある。

小林春男

小林春男は群馬県安中の出身である⁹³。1963年9月に出版された『反戦兵士物語:在華日本

人反戦同盟員の記録』には秋山良照の回想文「冀南平原」が掲載されている。それによると、「小林春男はマラリアにかかり、治療の甲斐なく病没した⁹⁴」とある。1978年11月に出版された秋山良照の回想録『中国戦線の反戦兵士』によると、「小林春男は急性気管支炎で死亡した⁹⁵」とある。覚醒連盟冀南支部の支部長を勤めた秋山良照と共同で活動していたので、冀南で捕虜となったと判断できる。捕虜となったのは1941年で、亡くなったのは1941年末か1942年だと推測できる。

原広見

「上等兵だった原広見は福岡県の出身で⁹⁶、第5分区に配属された原広見は日本軍時代に腹部にうけた古い傷が化膿し病没した⁹⁷」との記録がある。覚醒連盟冀南支部の支部長を勤めた秋山良照と共同で活動していたので、冀南で捕虜となったと判断できる。捕虜となったのは1941年、亡くなったのは1941年末か1942年だと推測できる。

鈴木一宏

渤海軍区敵軍工作部部長だった符浩(1977年—1982年、中国駐日大使)の回想によると、反戦同盟清河支部の副支部長を担当していた鈴木一宏は、博興県で活動していたとき、敵軍工作幹部の林殿卿とともに逮捕され死亡したとされている⁹⁸。1944年3月6日付の『解放日報』の報道によると、鈴木は処刑される前に、「中国共産党万歳」「日本共産党万歳」などと叫んだ⁹⁹という。

坂谷義次郎

鄂中地委敵偽工作部の部長をつとめた黄民偉氏の回想によると、反戦同盟第5支部の支部長をつとめた坂谷義次郎は、1944年7月、応城で活動したとき、日本軍憲兵に逮捕された。反戦同盟や新四軍第5師団のことを日本軍に教えず、死亡した¹⁰⁰。

またこれとは違う記録もある。新四軍に入隊し、反戦同盟第5支部の支部長をつとめた坂谷義次郎は、1945年8月の終戦後、ほかの日本共産主義同盟の盟員10人と中国に残ると決めた。1946年6月、彼らは中原軍区部隊とともに国民党部隊の包囲を突破する途中に死亡した。359旅団とともに陝甘寧辺区に到着できたのは中野重美と星文治の2人だけだった。ほかの8人は、病気、傷などの原因で、途中の農家に残された。ほとんど行方不明となり、死亡したと推測される。行方がはっきりしているのは、坂谷義次郎だけだった。坂谷は足の裏の潰爛で途中の農家に残され、その後国民党軍隊に捕まった。鎮南県警察局で警備の銃を奪い自殺したとの記録がある¹⁰¹。

田中義雄

冀中軍区司令部作戦科課長だった高存信の回想によると、反戦同盟冀中支部の田中義雄は、1941年の「五一掃蕩」の豆舖里戦闘で日本軍に捕まって、銃殺されたという¹⁰²。

記録されている25名の戦死者の半数以上の名前と死亡時の状況は、『解放日報』など各種の資料で確認できた。

(2) 日本人の逃亡者

八路軍の捕虜になった日本人のほとんどは逃亡しようとした。日本人反戦同盟に加入した日本人の中でも、逃亡者が現れている。

1939年冬るとき、日本人捕虜である瀬谷が、夜みんなが寝ているときに逃亡した。瀬谷が小林を誘ったが、小林が同行しなかったが、止めることも、告白することもしなかった。当時の小林は瀬谷の逃亡については、「1、私と瀬谷は同じ日本人で、中国人を助けて自分の同胞をやっつけるにはいけないと思った。2、瀬谷が日本軍に戻ったら、日本軍上司の前で、私が日本軍隊に損をもたらすことはしなかったとうまく取り持ってくれると思った。そうすると、私の国内の家族にに害が及ぶことはないだろう。それから今後日本軍につかまったら、殺されないだろうと思った¹⁰³」と考えた。

日本軍の掃蕩の中、反戦同盟に入った江川が、機に乗じて、八路軍と反戦同盟の資料を持って、日本軍に逃亡した。その後、日本軍の中に潜りこんだスパイによると、「江川は日本軍に戻ったが、上官の信用を得ることができなかった。さらに、八路軍の捕虜になって自殺しなかった事を理由に青島憲兵隊に護送された後、他の兵士への見せしめとして銃殺刑にされた。その後、反戦同盟の内部状況は日本軍憲兵隊に知られた。日本軍の掃蕩作戦のときには、渡辺三郎、石田、布谷など反戦同盟の中核をなす者を捜査すべく懸賞のついた告示が貼り出された¹⁰⁴。

¹ 文化教育研究会編『敵我在宣伝戦線上』文化教育研究会出版、1941年3月 陝西省档案馆、3018-11-3-23、232頁。

² 前掲書『敵我在宣伝戦線上』233頁。

³ 前掲書『敵我在宣伝戦線上』233頁。

⁴ 前掲書『敵我在宣伝戦線上』233頁。

⁵ 「平漢線上結集重兵、敵凶大挙『掃蕩』冀中、朝鮮義勇隊配合我軍作戦」『解放日報』1941年10月7日3面。

⁶ 劉国霖、鈴木伝三郎「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」学苑出版社、2000年6月、80頁。

⁷ 前掲書『敵我在宣伝戦線上』234頁。

⁸ 前掲書『敵我在宣伝戦線上』236頁。

⁹ 「喊話」『解放日報』1944年7月29日4面。

¹⁰ 「太岳反戦盟友加藤、対敵軍喊話収効宏大」『解放日報』1944年3月15日1面。

¹¹ 水野靖夫『日本軍と戦った日本兵：一反戦兵士の手記』白石書店、1974年8月31日、109頁。

¹² 前掲書『敵我在宣伝戦線上』236頁。

¹³ 「和日本兵士信件的来往」『解放日報』1944年6月16日4面。

¹⁴ 「日本人反戦同盟在這樣鬭争着（一）」『解放日報』1944年4月4日4面。

¹⁵ 「用電話和日本士兵談話」『解放日報』1944年8月5日4面。

¹⁶ 現在山東省煙台市栖霞市西城鎮小廟後村であり、当時は反戦同盟浜海支部の活動範囲にあった。

¹⁷ 現在山東省平度市旧店鎮であり、小廟後村との間の距離は100キロくらいである。

¹⁸ 小林清「一個『日本八路』的自述 在中国的土地上」解放軍出版社、1985年8月、185頁。

¹⁹ 「冀南日兵反戦工作開展」『解放日報』、1943年6月30日1面。

²⁰ 劉志堅、張友堂「冀南平原最艱難時機的武工隊和瓦解敵軍工作」『八路軍回憶史料3』、213頁。

²¹ 「宣伝工作座談会」『解放日報』1944年6月5日4面。

²² 「謝謝你的慰問袋」『解放日報』1944年4月26日4面。

²³ 前掲書「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」72頁。

²⁴ 山本武利 編訳「延安リポート」岩波書店、2006年2月、229頁。

- 25 警視総監安倍源基『支那共産軍ノ散布セル邦文反戦「ピラ」入手ニ関スル件』, アジア歴史資料センター, B05014003500。
- 26 前掲書『敵我在宣伝戦線上』238 頁。
- 27 前掲書『敵我在宣伝戦線上』240 頁。
- 28 1938 年3月 16 日に山西省潞城県神頭村で, 八路軍 129 師団が日本軍 108 師団芭尾部隊, 16 師団林清部隊の間で行われた戦いである。
- 29 前掲書『敵我在宣伝戦線上』240 頁。
- 30 前掲書『敵我在宣伝戦線上』240 頁。
- 31 前掲書「一個『老八路』和日本捕虜の回憶」70 頁。
- 32 篠塚部隊「石太線襲撃ニ於ケル八路軍ノ宣伝工作の観察」1940 年 10 月, アジア歴史資料センター, C04122582100。
- 33 前掲書『一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上』83 頁。
- 34 前掲書『一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上』102-104 頁。
- 35 前掲書『敵我在宣伝戦線上』247 頁。
- 36 「晋冀魯豫, 日本兵士覚醒連盟 積極準備参加今春反戦大会」『解放日報』1942 年1月1日第4面
- 37 「在華日人反戦同盟華北代表大会 4月在延安召開 各反戦団体紛紛派代表 籌委会通過同盟綱領草案」『解放日報』1942 年1月 16 日第4面
- 38 「10 中共側新聞伝単等送附ノ件2」在中華民国(北京)日本大使館調査室, 昭和 17 年8月 21 日, アジア歴史資料センター, B02032461900。
- 39 前掲書『敵我在宣伝戦線上』248-249 頁。
- 40 「敵捕虜感我待遇優厚」『解放日報』1942 年7月4日2面。
- 41 「日兵反戦被敵処死, 我民衆代為安葬」『解放日報』, 1942 年6月 14 日1面。
- 42 「我們再也不願打仗了」『解放日報』1944 年9月 25 日2面。
- 43 「宣伝工作座談会」『解放日報』1944 年6月5日4面。
- 44 水谷尚子「『反日』以前: 中国対日工作者たちの回想」文芸春秋 2006 年 7 月 30 日, 45 頁。
- 45 前掲書『『反日』以前: 中国対日工作者たちの回想』46 頁。
- 46 前掲書『『反日』以前: 中国対日工作者たちの回想』47-48 頁。
- 47 徐則浩『從浮虜到戰友』安徽人民出版社, 2005 年7月 1 日, 58 頁。
- 48 岡瑟・斯坦因 著, 馬飛海等訳『紅色中国的挑戰』(The Challenge of Red China) 上海訳文出版社 1999 年 12 月, 69 頁。
- 49 前掲書「一個『老八路』和日本捕虜の回憶」58-60 頁。
- 50 姫田光義, 藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店 1999 年9月 18 日, 284 頁。
- 51 前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』188-191 頁。
- 52 前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』116 頁。
- 53 秋山良照『中国戦線の反戦兵士』徳間書店, 1978 年 11 月 10 日, 68-70 頁。
- 54 高存信「懷念冀中幹部教導团的日本朋友們」『党史博采』1996 年4号, 13 頁。
- 55 林邁可(Michael Lindstay)著, 楊重光, 郝平 訳「作者小伝」『八路軍抗日根拠地見聞録——一個英国人不平經歷的記述』国際文化出版公司出版 1987 年6月, 3頁。
- 56 前掲書『紅色中国的挑戰』(The Challenge of Red China) 72 頁。
- 57 山田一郎「八路軍病院での医療活動」, 反戦同盟記録編集委員会 編『反戦兵士物語: 在華日人反戦同盟員の記録』日本共産党中央委員会出版部, 1963 年9月, 232-240 頁。
- 58 前掲書『一個「日本八路」的自述: 在中国的的土地上』156 頁。
- 59 哈里森・福爾曼 著, 陶岱訳『北行漫記』新華出版社, 1988 年2月。
- 60 香川孝志, 前田光繁 著『八路軍の日本兵たち—延安勞農学校の記録』サイマル出版会, 1984 年6月, 179 頁。
- 61 「在華日人反戦同盟華北連合会拡大執委会開幕」『解放日報』, 1944 年 1 月 18 日 1 面。
- 62 前掲書, 『一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上』, 224 頁。
- 63 前掲書, 『反戦兵士物語: 在華日人反戦同盟員の記録』, 1963 年9月, 9 頁。
- 64 趙安博「抗日戦争期間我党敵軍工作的光輝成就」, 趙惠才, 韓鳳琴訳『從帝国軍人到反戦勇士』中国文史出版社 1987 年4月, 5頁。
- 65 中国語では, 「金」と「今」の発音は同じである。
- 66 符浩「憶山東戦区」『在華日人反戦同盟』『人民日報』, 1995 年8月 28 日。
- 67 「日人反戦同盟山東支部, 擁護成立」『解放同盟』『解放日報』, 1944 年3月6日1面。
- 68 于鏡清「憶日本戰友今野博」臨沂地区出版弁公室『憶沂蒙』山東人民出版社, 972 頁。
- 69 前掲書, 『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』, 118-119 頁。
- 70 前掲書『中国戦線の反戦兵士』, 118 頁。
- 71 前掲書『中国戦線の反戦兵士』119 頁。
- 72 前掲書『中国戦線の反戦兵士』120 頁。

-
- 73 前掲書「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」76—77 頁。
- 74 前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』279 頁。
- 75 杉本一夫, 吉田太郎, 渡辺三郎「覚醒連盟の誕生」前掲書『反戦兵士物語』, 165 頁。
- 76 「日人解放連盟両盟員在太行対敵闘争中犠牲」『解放日報』, 1945 年6月 20 日 1 面。
- 77 前掲書『八路軍の日本兵たち—延安労農学校の記録』180 頁。
- 78 前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』279 頁。
- 79 「日人解放連盟両盟員在太行対敵闘争中犠牲」『解放日報』, 1945 年6月 20 日 1 面。
- 80 「延安日本人民解放連盟追悼宮川英男等3盟員」『解放日報』, 1945 年7月 16 日 2 面。
- 81 「晋察冀日本人民解放連盟成立, 盟員暢談対八路軍観感」『解放日報』1944 年5月 7 日, 3 面。
- 82 車橋戦闘とは, 1944 年3月 5 日から 13 日にかけて, 江蘇省淮安の南東に 20KM の車橋鎮を中心に, 新四軍と日本軍第 65 師団の間で展開された戦いである。
- 83 如皋豊利戦闘とは, 1941 年 12 月に江蘇省如皋市豊利鎮で行った新四軍が日本軍の掃蕩部隊の間の戦いである。
- 84 「日人反戦同盟の光栄, 車橋戦闘中松野覚同志英勇犠牲」『解放日報』1944 年3月 25 日 1 面。
- 85 「日本人民反戦同盟華中地方協議会成立, 反戦宣伝拡大到日本僑民」『解放日報』1944 年5月 15 日, 2 面。
- 86 「敵工部長与『日本人民解放連盟』成員」『福建党史月刊』2007 年第 2 号。
- 87 前掲書『從浮虜到戦友』89 頁。
- 88 前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』119 頁。前掲書『日本軍と戦った日本兵:一反戦兵士の手記』125—126 頁。
- 89 「魯日人反戦同盟等検討工作, 加緊打撃日本法西斯, 反戦士兵代表控訴敵閥罪行」『解放日報』, 1943 年7月 30 日 1 面。
- 90 前掲書『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』78—79 頁。
- 91 『革命烈士伝』編委会, 『革命烈士伝記資料目録』(第 2 卷)解放軍出版社, 1986 年, 62 頁。
- 92 <http://www.zbsq.gov.cn/html/2003/11/14/20031114142002.html>, アクセス:2010 年3月 1 日。
- 93 前掲書, 『中国戦線の反戦兵士』, 86 頁。
- 94 秋山良照「冀南平原」, 前掲書, 『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』, 185 頁。
- 95 前掲書『中国戦線の反戦兵士』117 頁。
- 96 前掲書『中国戦線の反戦兵士』86 頁。
- 97 前掲書『中国戦線の反戦兵士』118 頁。秋山良照「冀南平原」前掲書『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』185 頁。
- 98 前掲, 「憶山東戦区『在華日人反戦同盟』」, 『人民日報』, 1995 年8月 28 日。
- 99 「日人反戦同盟山東支部, 擁護成立『解放同盟』」『解放日報』, 1944 年3月 6 日 1 面。
- 100 黄民偉「我所知道的反戦同盟支部」『湖北文史資料』, 1995 年第 1 号, 201 頁。
- 101 趙曉泮「從反戦同盟第 5 支部到日軍 46 人暴動」『党史博覽』2007 年第 6 号, 55—56 頁。
- 102 前掲, 「懷念冀中幹部教導団的日本朋友們」, 13—14 頁。
- 103 前掲書, 『一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上』, 207 頁。
- 104 前掲書, 『一個「日本八路」的自述 在中国的的土地上』, 163 頁。

第6章 結論と展望

本研究は、日中戦争期の対日本軍プロパガンダが展開される中で、中国共産党の「対日2分法」はどのように形成されたかに着目した。そして、一次資料に基づき、中国共産党の敵軍工作組織、捕虜政策、共産党支配地区の日本人反戦同盟の実態を解明し、国民党の「対日2分法」とのつながり、及び背景としての中国古典文化にも触れて、日中戦争期における中国共産党の「対日2分法」の内容と実践活動を系統的に考察した。

本研究のまとめとして、各章で考察した史実を整理した上、本章では本研究で明らかになった点をまとめる。

6.1 本研究で解明した史実

(1) 中国共産党の国際世論工作

『持久戦論』など毛沢東の著作からは、毛沢東の対日プロパガンダ戦略が読み取れる。その中には、敵軍工作、捕虜優遇政策、日本の一般庶民と軍国主義者を区分する「2分法」に関する記述も多くある。具体的には、日本人民を含める国際抗日統一戦線、敵軍の瓦解などがあり、それらの指摘は、本研究の敵軍工作、捕虜政策、「2分法」、日本人の反戦運動と深くかかわっている。

日中戦争期の中国共産党には外交権はなかったが、「延安交際処」を通じて積極的に対外工作を展開した。特に、欧米ジャーナリストに対して積極的にプロパガンダ工作を進めた。本研究の第1章では、「交際処」設立の背景、役割などを考察し、「中外記者西北訪問団」の延安訪問を実現させるための共産党の努力を明らかにした。

(2) 中国共産党の敵軍工作組織

政治部を有することは、共産党軍隊の特徴の1つである。日中戦争期において、共産党の対日政策を実施する部署は、政治部の下にある敵軍工作部である。本研究では、総政治部及び敵軍工作部の変遷を考察し、第一次国共合作の時期の敵軍工作、土地革命戦争期の敵軍工作、日中戦争期の敵軍工作に分けて考察した。1927年から1945年まで総政治部の構成部署及びその責任者を明らかにし、野戦政治部、敵軍工作の変遷及びその主な活動を重点的に考察した。日中戦争期において、共産党は国民党軍に対して、「友軍」「中間派」「頑固派」に分けて工作を行った。日本軍向けの敵軍工作は本研究の中心的な部分であり、第2章ではその主な内容を提示し、第3章と第4章で詳しく分析した。

日中戦争期において、中国共産党の敵軍工作組織には、多くの「知日派」日本留学経験者が

活動していた。日本で受けた教育、日本人の友人を持つこれらの「知日派」は日本の一般庶民を好意的に見ていた。そして、日本の国内事情に詳しい「知日派」は、日本国内にも反帝国主義勢力が存在していることを認識していた。「知日派」たちは共産党の敵軍工作政策と緊密につながっている。「対日2分法」政策の中国の一般軍民への浸透はかなり困難だったが、「知日派」らは共産党の「2分法」政策の合理性を信じ、「2分法」遂行する勢力となった。「捕虜優遇」、「2分法」などの対日政策を推進する過程において、日本の一般民衆のことをよく知っている「知日派」の存在は重要であった。

共産党の敵軍工作組織を考察するとき、敵軍工作訓練隊の存在は無視できない。1937年の日中戦争が始まるまで、プロパガンダ工作を重視する中国共産党は国民党軍に向けて、呼びかけ、ビラなどのプロパガンダ工作を行っていた。日中戦争に入ると、それまでのやり方で行われた日本軍向けのプロパガンダ工作は、必ずしも成功しなかった。そこで、中国共産党は言語も文化も違う日本軍兵士に対して、日本語によるプロパガンダを行わないと、効果が得られないと認識した。第2章では、1938年11月に創立され、12月に開講された第1期の敵軍工作訓練隊を中心に、各部隊における八路軍兵士向けの日本語教育と政治教育を考察した。これらの工夫で、八路軍の一般兵士は、3句程度の日本語スローガンを発音し呼びかけることができ、中隊の工作人員は7、8句の日本語スローガンと3曲の日本語歌ができるようになった。これらの工作は、その後の八路軍の敵軍工作に対してきわめて大きな影響を及ぼした。八路軍兵士向けの日本語教育が実施されてはじめて、八路軍兵士を通じての対日本軍プロパガンダ工作は可能となったのである。敵軍工作訓練隊は1940年に廃止され、総政治部敵軍工作訓練部の直轄となり新たに再建された「敵軍工作幹部学校」となった。

(3) 中国共産党の捕虜政策

第3章では、土地革命期と日中戦争に分けて、中国共産党の捕虜政策を考察した。1928年1月、江西省の寧岡県で中国共産党は国民党軍捕虜に対して、捕虜優遇の政策を打ち出し、捕虜は労農出身の一般兵士なので優遇し団結すべきとの政策を実施した。本研究では、この捕虜政策を「共産党の対国民党軍捕虜2分法」の始まりと考える。対国民党軍のプロパガンダ工作の展開するときのビラ、スローガンなども「2分法」の思想に基づいて作られた。日中戦争には、この思考法は「投降しない日本兵」など新しい状況に直面しながら、土地革命期の「対国民党2分法」と似たような政策が続けられた。日本兵捕虜に対して、共産党は捕虜釈放・送還、捕虜優遇、捕虜訓練・利用などの捕虜政策を打ち出した。日中戦争期の初期において、「共産軍はが捕虜を虐待し、殺す」とのイメージを打ち破るために、主に捕虜釈放・送還政策を実施していた。その後、捕虜優遇政策が強化され、優遇を通じて日本兵の転向を図った。1940年日本工農学校の創立などがあり、捕虜を訓練し、利用する政策が共産党軍隊で広範に実施された。共産党支配地区で活動していた日本人反戦組織のメンバーの多くは、共産党の捕虜教育・訓練を受けたことのある人々である。

中国の一般軍民にとって、日本軍は残虐な侵略者であり、日本兵を優遇する政策は簡単には一般軍民に受け入れられなかった。多くの日本兵捕虜は虐待され、殺害されたため、共産党は一般軍民受けの捕虜優遇教育を実施した。その主な手段は、八路軍敵軍工作員による口頭教育と教材による教育、日本人反戦組織や転向した日本人捕虜による教育、軍紀や制度による強制的な制約などがあった。

共産党のこのような「2分法」思想は、その独自のものなのか、それとも国民党にもあったのかを明らかにするために、国民党の対日プロパガンダ政策も分析した。日中戦争の勃発によって、第二次国共合作が始まり、1938年1月に国民政府軍事委員会の下で政治部が結成された。政治部の総務庁、第一庁、第二庁は国民党が支配する部署だが、対日プロパガンダ及び国際プロパガンダ工作を担当する第三庁は完全に共産党の支配下の部署だったため、国民党の対日プロパガンダ工作にも「2分法」の考え運用されたと考えられる。日本の資料館で発見した『日本人民に告ぐ』、『日本国民に告ぐ』、『日本国民に敬告す』などの対日プロパガンダパンフレットは、第三庁のある武昌から送られ、共産主義分子が作ったと日本側が判断している。これらのパンフレットの内容は、日本の一般国民とファシスト軍閥を区分する姿勢を見せている。

共産党も国民党も似たような「対日2分法」思想を持っているため、このような考え方は中国の文化とどう関連しているかを考察する必要がある。『孟子』などの中国古典には、「以德服人」の攻心術が強調され、『詩経』には古代の捕虜優遇政策が記載されている。『司馬法』など中国古代兵法には、敵軍の兵隊と敵国の一般民衆を区別する「2分法」の記述が残っている。これらの古典は、中国では影響が強く、毛沢東などの人物もその影響を受けていると見られる。

(4) 日本人反戦組織と対日軍プロパガンダ工作

反戦組織で活動していた日本人のほとんどは日本人工農学校で教育をうけた。1940年に教育が始まり、1941年に正式に発足した延安日本工農民学校及び晋西北分校、華中分校は、対日プロパガンダ工作にとって重要な意味を持っている。集団討論、自己批判、娯楽活動などの教育手段を経て、多くの日本人の立場がある程度変わり、反戦意識を持つ日本人が増えた。人材・思想の工場である延安にあったこの学校は、全国各地の反戦組織、工農学校分校に多くのプロパガンダ人材を送り出した。延安工農学校およびその分校は、日本人による対日本軍プロパガンダ工作の人材準備機関となった。

1939年11月7日に山西省遼県麻田鎮で覚醒連盟が結成され、その後冀南支部など8つの支部が結成された。さらに、1940年に入ると、共産党支配地区の日本人反戦運動はさらに活発になり、1940年7月7日に延安で反戦同盟延安支部が結成され、山東支部など20近くの支部が作られた。1944年初頭、戦況の変化につれて、さらに解放連盟が結成された。1942年6月に、日本国内の共産主義革命の準備組織として、延安で「在華日本共産主義者同盟」が結成され、多くの支部を集めた。本研究では、覚醒連盟、反戦同盟、解放連盟、共産主義者同盟などの日本人組織の結成、責任者、活動地区、メンバー、プロパガンダ用の出版物、主な活動などを詳しく

考察し、明らかにした。

これらの日本人反戦組織は、中国共産党の支持の下で結成されたものである。それぞれの反戦組織と中国共産党の関係性を分析した。反戦組織は八路軍のプロパガンダ機構ではなく、特殊的な革命性と独立性を持つ、日本人民の真の革命組織である、と共産党は強調しているが、共産党の文書には、日本人反戦組織は「敵工部門に定期的に工作報告をし、その指導と指示を受ける」べきであると明確に規定し、反戦組織の経費も共産党が批准していた。つまり、実質的には、日本人反戦組織は共産党敵軍工作部と深く関連し、中国共産党の対日プロパガンダ工作部門の一部となっていた。多くの日本人が八路軍や新四軍に入隊し、対日プロパガンダ工作員として活動していた。

中国共産党の対日軍プロパガンダは3つの段階に分けて分析した。①日本人反戦組織が結成されるまでは、中国人によるプロパガンダの段階。この段階において、文化、言語などの壁があり、プロパガンダの効果は限られていた。②1939年から、共産党支配地区において、日本兵捕虜の増加によって、日本人反戦組織が結成され、日本人をうまく利用しプロパガンダ工作を行う段階。この段階では、プロパガンダの内容、形式などは段々改善された。③1942年前後、日本人反戦組織は大きく発展し、中国共産党が日本人反戦団体を統合して、組織的な利用を始め、日本人を中心に行うプロパガンダの段階。

具体的なプロパガンダ手段は、呼びかけ、ビラ、パンフレット、日本歌謡、電話、手紙、通行証、慰問袋など日本の伝統文化に関する手段などさまざまあった。日本人は共産党の軍隊で対日プロパガンダ工作を始め、武器使用法の訓練、日本軍戦術の伝授、医療支援、戦闘員として直接参戦などさまざまな形で貢献をした。しかし、日本人の犠牲者と逃亡者を多数出し、日本人によるプロパガンダ工作の限界を露呈した。

(5) 新しい一次資料の活用

本研究では、多くの一次資料を発見し、論述する際に活用した。

『解放日報』、『八路軍軍政雑誌』など当時の出版物を精読し、関連記述を引用した。1939年1月から1942年3月まで刊行されていた『八路軍軍政雑誌』は、中国共産党の政治工作を考察するときの重要な資料である。そして『新中華報』(1937年1月～1941年5月)と『解放日報』(1941年5月～1945年8月)は、中国共産党中央委員会の機関紙として、その対日プロパガンダ政策を分析するには欠かせない資料である。本研究では『解放日報』、『八路軍軍政雑誌』などの資料を全面的に読み込み、関連する記述や重要な論説を引用した。

陝西省、山東省など全国各地で収集した『敵我在宣伝戦線上』(陝西省档案館)、『敵軍工作に関する総政治部の指示』(陝西省档案館)、『抗戦日語読本』(陝西省档案館)、『抗日軍人読本』(陝西省档案館)は、共産党の対日本軍プロパガンダ工作の実態を解明するには貴重な資料となった。

日本の資料館で収集した『共産軍ノ政治部ニ就テ』、『支那共産軍ノ散布セル邦文反戦ビラ

入手ニ関スル件』、『石太線襲撃ニ於ケル八路軍ノ宣伝工作観察』、『中国共産党日本特別支部検挙事件』、『中原会戦俘虜調査報告7部』(防衛省防衛研究所)『俘虜とせる奸匪日本兵士奪取の件』(防衛省防衛研究所)『延安方面共産区状況の1端に関する件』(防衛省防衛研究所)など日本側の一次資料も収集して活用した。

八路軍敵軍工作部工作員であった原清子, 王学文, 李初梨, 趙安博などの回想録, 書簡などの活字資料, 教育を受けた日本軍捕虜であった水野靖夫, 前田繁光, 秋山良照などの回想録, エドガー・スノウの『中共雑記』及びニム・ウェールズの『人民中国の夜明け』など欧米記者の記述も本論文にとって貴重な資料となり, 共産党指導者への取材や共産党支配地区での見聞などを活用した。

反戦同盟晋察冀支部が出した『日軍の友』、『前進』月刊の発見は, 大変有意義であると自負する。日本外交資料館収蔵の『日軍の友』紙(1942年4月4日付の第14号, 1942年4月11日付の第15号, 1942年5月23日付の第18号)と『前進月刊』(1942年3月5日付の第3号)を発見した。新聞の『日軍の友』と雑誌の『前進』月刊は日本語で出版され, 反戦同盟晋察冀支部の日本人メンバーがその執筆者と編集者をつとめていた。共産党支配地区の日本人反戦組織が出した新聞, 雑誌などの出版物は今までの学者の研究ではまだ出ておらず, 非常に重要な発見になる。

6.2 中国共産党「2分法」思想の意味

「2分法」思考法は日中戦争期の対日プロパガンダ活動において広範に運用されていた。しかし, 「心をこめて日本人兄弟を優遇しよう」という表面的な政策と「うまく日本人を利用しよう」という「2分法」の真実が存在しているのではないかと考えられる。共産党の指導層は, 「日本人を利用しよう」という意図で「2分法」思考法を作り, 八路軍の一般兵士と民衆には, 「心をこめて日本人兄弟を優遇しよう」と, 軍紀の下で強制的に実行させた。

(1) 国際共産主義の影響。

日本に対する「2分法」は, 世界中の労働人民を解放する, という国際共産主義の理念の影響もあったと考えられる。初期の中国共産党は国際共産主義の影響を深く受けて, マルクス主義の指導の元で活動していた。「万国の労働者団結せよ」という『共産主義者宣言』のスローガンは, 当時の中国共産党の「2分法」思考法にも深く影響を与えたと考えられる。「労働者は祖国をもたない」というマルクスの名言があるが, 毛沢東にも「民族問題は, 根本的には階級問題である」との名言がある。つまり, 「民族より階級」という観点で, 違う民族の間の矛盾は主要ではなく, 違う階級の間の矛盾は主要である, という思考法である。それは日中戦争期における対日政策にも深く影響を与えたと考えられる。

(2) 中国古典思想と共産党の道義外交。

毛里和子は 1972 年日中国交正常化の際の中国共産党の道義外交について考察した¹。中国共産党のそういった道義外交は、中国の古典思想と深く関連していると考えられる。前述したとおり、中国の古典思想には、「仁」「徳」などの要素を含む道義で相手を征服することを強調する記述が多い。『孟子』、『三略』などの古典では、捕虜を大量殺害する事件が多くあった一方で、捕虜優遇、敵の統治者と民衆を区分する見方などの事例もある。道義外交は、中国共産党の外交史の中で多くあり、共産党の戦略政策の一部である。日中戦争期における中国共産党の対日政策は、道義外交の影響があったと考えられる。

(3) 「多数を団結，少数を孤立」：中国共産党の現実主義。

日中戦争期における共産党の対日政策を見るさい、「多数を団結，少数を孤立」(統一戦線)という共産党の一貫とした政策の影響があると見られる。敵の見方ではない勢力をすべて団結しようという考えである。たとえば、1944 年 12 月 13 日付の『解放日報』によると、12 月 8 日に、日本人民解放連盟と日本工農学校が合同で「太平洋戦争三周年記念大会」を開催した。岡野進と二人のアメリカの友人が出席した。日本人の白鳥は、「日本とアメリカの共同の敵である日本軍部を徹底的に打倒するために、同盟国と更に緊密に団結し、最後まで戦う」と発言している²。アメリカは共産主義ではなく、階級出身論の「2分法」は通用しないはずだが、これはまさに団結で同盟になれるのなら、「友」だと判断する現実主義の思考法であろう。

中国共産党のリアリズムとは、自分にとって有利な要素があれば、相手のどういう立場や思想の別なく、敵でも友でも関係なく団結し、協力を求めることである。アメリカの記者セオドア・H・ホワイト(Theodore H.White)は、日中戦争期において共産党統治下の各地を回って取材を行った。その著作である『中国的驚雷』には共産党の幹部や八路軍の兵士に対する考察が多くある。「彼らの考えを細かく考察し、彼らの話を聞けば、強情で譲らないアリズムがわかる。」同書では、マルクス主義を中国と緊密に結びつけて受け取る例を挙げ、「マルクス主義の教条はどんなにまとまりがなく、どんなに理論化としても、彼らは最終的にはわかりやすい基本的結論をまとめ、これらの結論を彼らのアイデアとして、一番無知な農民でさえ分かるようにし、しかも彼自身のアイデアかのように感じさせる³」とある。

外国記者を延安に招くときも、同様な考えが運用された。たとえば、アメリカ記者であるスノーの著作『西行漫記』によると、「中国人はリアリスティックな民族である⁴。」周恩来がスノーに次のように言った。「あなたは共産主義者ではない。でもそれはわれわれにとってかまわない。新聞記者なら誰でも革命根拠区の訪問を歓迎する⁵。」

そのほか、1945年8月、日本の敗戦が疑いないものとなったと知ると、中国共産党は北京にある日本軍特務機関である川口機関と秘密に接近し、秘密条約まで結んで、協力を求めようとした⁶。日本軍特務機関長である川口忠篤のような軍国主義者に対しても、団結し利用しようとした。

つまり、中国古典文化には、「仁」「徳」などの要素を含む道義の要素があり、日中戦争期の毛沢東などはその影響を受けていると考えられる。さらに、日本向けの「二分法」思想が形成する前、国民党と戦うときに「対敵二分法思想」はすでに形成されていた。日本国内の反戦活動でも中国における日本人の反戦活動でも、「軍閥、財閥を打倒しよう」などのスローガンがあり、戦争を主張する「日本帝国主義者」と戦争に反対する一般庶民（戦争を支持する一般庶民もいるが）の違いが明らかであった。日本研究を重視する中国共産党は、対日工作を行うときはその影響を受けたと考えられる。もともと「対敵二分法思想」があった中国共産党は、反戦活動を行う日本人もいるという事実を見て、自然に日本に対しても「二分法」政策を採るようになったのではないかと考えられる。

6.3 本研究の課題と展望

(1)「二分法」解明の意義

序章で述べたとおり、「共通の敵を打倒するために連合できる諸勢力と共闘する」戦略は、中国共産党の性格の重要な一部である。共産党は日中戦争に当たり、「軍国主義者に利用された」日本軍一般兵士とその政府や軍閥を区分する「二分法」を採っていた。現今の中日関係については、中日友好を望む多数の日本人民と中日友好を阻害する一握りの人を区別する「二分法」を採っている。中国国内においても、「文革」が終わったさい、利用された紅衛兵や群衆と4人組などの極少数の人を区別する「二分法」を採っていた。1989年の天安門事件後においても、利用された学生と反革命動乱を起こした極少数の人を区別する「二分法」を採っていた。最近の2008年3月14日のラサ騒動においても、ダライラマ集団に利用され騒動を起こした少数人と安定を望むチベット各族人民を区別する「二分法」を採っていた。多数人を獲得・団結するため中国共産党は少数人を敵にし孤立させ、多数を友にし、獲得しようとする「二分法」を一貫して採用してきた。「二分法」という共産党のプロパガンダ哲学は日中戦争期において成熟し、その後の中国共産党の多くの政策に深く影響を与えている。

現在の中国共産党及びその政権を見るには、その「二分法」思考法は重要な側面となる。本研究で解明した「二分法」の形成と日中戦争期の主な「二分法」活動は、現今の中国の対外政策を理解する上で非常に重要である。中国の対日政策策定を考える上で、「二分法」の性格は重要な側面となり、そこに本研究の現実的意義がある。

(2)「二分法」と国際共産主義及び「統一戦線」との関係

本研究では、中国共産党の「対敵二分法」が国際共産主義の「階級区分」理論と関連している可能性について述べた。そうすると、共産党の「対敵二分法」は国際共産主義との関連性は注目すべきものとなる。その場合、ソ連など共産主義政党の対敵政策と欧米など資本主義政党の対

敵政策の異同を考察する必要があるが、本研究は、日中戦争期における中国共産党の「対日2分法」思想の形成と対日プロパガンダ工作での運用を中心に研究しており、国産共産主義との関連性についてはを十分に分析していない。

「統一戦線」は国際共産主義の重要な戦略の1つであり、中国共産党の結盟工作の1つの手段として使われている。中国共産党の歴史において、「国共統一戦線」、「工農民主統一戦線」、「抗日民族統一戦線」、「人民民主統一戦線」などさまざまな形で「統一戦線工作」が行われた。現在の中国共産党中央委員会及び地方委員会には、「統一戦線工作部」(略称:統戦部)が配置され、民族・宗教、祖国統一工作、非共産党員の幹部養成などの業務が組み込まれている。

本研究では、日中戦争期において、中国共産党の日本軍捕虜を扱う政策を考察した。そのほかに、中国共産党の捕虜政策の一貫性に関する考察も必要である。本論文では、土地革命期において、国民党軍捕虜を扱うときの政策に触れた。その後については1945年から1949年までの国共内戦期、1950年から1953年までの朝鮮戦争、1959年の中印国境紛争、1979年の行われた中越戦争で中国共産党はいかなる捕虜政策をとっていたのかを系統的に分析する必要がある。

本論文は日中戦争期における対日プロパガンダ政策と「対日2分法」の真実を中心に考察する研究であり、深くかかわる「共産党の『弱者優遇』思考法」、「毛沢東の階級意識」などの問題を今後の課題にする。

(3)「知日派」と日中戦争期前後の中国政治刷新運動

本論文の第2章では、日中戦争期における八路軍の敵軍工作に直接参与した趙安博、王学文、張香山などを例にして分析することを通じて、彼らが日本人一般を好意的に理解していたこと、そして、その好意的な日本人観が共産党の敵軍工作政策の形成にきわめて大きな影響をもっていたことを明らかにした。さらに「知日派」留学経験者の好意的日本人観が捕虜教育、敵情研究と「2分法」などの形成に大きな影響をもっていたことを明らかにした。もっとも「知日派」留学経験者の影響力の大きさを測定し、全体像を理解するためには、総勢何名くらいの中国人留学経験者がおり、そのうち何名が共産党に入党したのかなどの疑問に答える必要がある。そのためには、新しい1次資料を収集し、それらを丹念に読み解く必要がある。更に、「知日派」の留学生たちは日本留学期間中、どのような知見を得、日本人及び「知日派」留学生の間にはどのようなつながりがあったのか、そして、彼らは帰国後国民党と共産党にどのような影響を与え、日中戦争期前後の中国の政治刷新運動といかなる関係を持っていたのか等の問題を明らかにすることが、今後の課題となる。

¹毛里和子『日中関係 戦後から新時代へ』岩波新書,2006年6月20日,88頁。

²「日本人民解放連盟記念太平洋戦争三周年」『解放日報』1944年12月13日2面。

³白修德,賈安娜 著,端納 訳『外国人看中国的抗戦:中国的驚雷』新華出版社1988年2月,257頁。

⁴埃德加・斯諾 著,董樂山 訳,『西行漫記』,三聯書店出版,1979年12月,372頁。

⁵前掲書,『西行漫記』42頁。

⁶川口忠篤『日僑秘録』太陽少年社,昭和28年3月20日。

あとがき

本論文は、小生が早稲田大学政治学研究科博士後期課程において、中国共産党の対日プロパガンダ工作に関する研究を取り纏めたものである。本論文を完成するにあたり、多くの方々のご指導・ご教示をいただき、心から御礼申し上げる。

2006年9月に来日以来4年半、恩師である早稲田大学教授の山本武利先生には、実に多くのことをご指導いただき、またメディア史家としての矜持において多大な影響を与えられた。研究の方向から日本語の使い方まで、丁寧なご指導、ご鞭撻を賜った。アメリカOSS所蔵の解放連盟組織図まで提供していただいた。

同大学の吉野孝教授、齊藤泰治教授には、ご多忙中にも関わらず、論文指導の労を煩わし、数々有益なるご助言とご教示を頂いた。博士課程在学中、両先生の講義を受けさせていただき、政党研究、中国語文献研究などの面でも大変勉強になった。

本論文の審査において、副査をご担当下さった一橋大学名誉教授折敷瀬興先生は学位論文の審査をしてくださり、心から御礼申し上げたい。

最後に、小生が論文を纏めている長い間、多大の心配を掛けた母国にいる両親、論文資料の整理などを手伝ってくれた妻郭曉茹、関心と励みを頂いた家族にこの論文を捧げたい。

趙 新利

2010年12月

参 考 資 料

一次資料:

- ◆『共産軍ノ政治部ニ就テ』アジア歴史資料センター, C04120650600
- ◆文化教育研究会編『敵我在宣伝戦線上』文化教育研究会出版, 1941年3月, 陝西省档案馆, 3018-11-3-23。
- ◆「総政関于敵軍工作的指示」(敵軍工作に関する総政治部の指示), 陝西省档案馆, 5495-13-24-26
- ◆抗戦日語読本, 陝西省档案馆, 2291-8-14-105
- ◆抗日軍人読本, 陝西省档案馆, 2502-10-1-57
- ◆中原会戦俘虜調査報告7部, 防衛省防衛研究所, C04123313500
- ◆延安方面共産区状況の1端に関する件, 防衛省防衛研究所, C04120692000
- ◆「10 中共側新聞伝単等送附ノ件2」, 在中華民国(北京)日本大使館調査室, 昭和 17 年8月 21 日, アジア歴史資料センター, B02032461900
- ◆内務省警保局保安課外事係, 「極秘, 中国共産党日本特別支部検挙事件」, 早稲田大学中央図書館, ヲ 1-5913-31
- ◆「今次事変ニ於ケル捕虜帰還者ノ取扱方ニ関スル件」アジア歴史資料センター, C01003544100
- ◆『俘虜とせる奸匪日本兵士奪取の件』防衛省防衛研究所, C08010761200。
- ◆『日本人民に告ぐ』アジア歴史資料センター, B05014003900
- ◆在カルカタ(シムラ)総領事吉田丹一郎『支那側宣伝関係第三巻・ラングーン, アジア歴史資料センター, B05014004500
- ◆『日本国民に敬告す』, アジア歴史資料センター, B05014004500
- ◆在河内総領事宗村丑生『支那側宣伝関係第三巻一仏領印度支那』アジア歴史資料センター, B05014003900
- ◆在バタヴィア総領事馬瀬金太郎『支那側宣伝関係第三巻一バタヴィア』アジア歴史資料センター, B05014004100。
- ◆在カルカタ(シムラ)総領事吉田丹一郎『支那側宣伝関係第三巻・ラングーン』アジア歴史資料センター, B05014004500
- ◆『日軍の友』, 『前進』, 『実話報』「中共側新聞伝単等送附ノ件2」, 在中華民国(北京)日本大使館調査室, 昭和 17 年8月 21 日, アジア歴史資料センター, B02032461900
- ◆篠塚部隊「石太線襲撃ニ於ケル八路軍ノ宣伝工作の観察」1940 年 10 月, アジア歴史資料センター, C04122582100
- ◆警視總監安倍源基『支那共産軍ノ散布セル邦文反戦「ピラ」入手ニ関スル件』, アジア歴史資料センター, B05014003500
- ◆OSS「日本人民解放連盟組織図」, RG226.E182.B16.F95
- ◆『新中華報』(1937 年1月—1941 年5月)
- ◆『解放日報』(1941 年5月—1945 年8月)
- ◆『八路軍軍政雑誌』(1939 年—1941 年)

中国語文献

- ◆蒼山県誌編纂委員会『蒼山県誌』中華書局, 1998年
- ◆温賢美『抗戰時期的国共關係』北京出版社, 1997年
- ◆廖国良等,『毛沢東軍事思想發展史』,解放军出版社,1991年11月
- ◆王憲志等,『毛沢東軍事思想』,海潮出版社,1992年10月
- ◆趙惠才,韓鳳琴訳,『從帝国軍人到反戰勇士』,中国文史出版社, 1987年4月
- ◆中国共産党中央文献研究室,新華通信社編.毛沢東新聞文選.新華出版社.1983年12月版.
- ◆『抗戰時期西南的文化事業』成都出版社1990年
- ◆江涛,劉芳『蒋介石宋美齡在重慶的日子』華文出版社2003年
- ◆朱金平.輿論戰.中国言実出版社.2005年版.
- ◆辛国恩,毛沢東改造罪犯理論研究,人民出版社,2006年3月
- ◆鄭萍,早期毛沢東的教育思想と実践,日本僑報社,2008年6月28日
- ◆中国革命博物館編,『抗日戦争時期宣伝画』,文物出版社,1990年10月
- ◆『毛沢東軍事論文選』(日本語版),外文出版社,1969年初版發行
- ◆日偽「治安強化運動」研究 洪沛 南開大学出版社 2006年4月
- ◆埃德加·斯诺 著,董乐山 訳,『西行漫記』,三聯書店出版,1979年12月
- ◆『毛沢東軍事文集』,軍事科学出版社,中央文献出版社,1993年12月第1版
- ◆『軍隊政治工作歴史資料』,中国人民解放军战士出版社1982年
- ◆侯敬智,『中国人民解放军政治工作發展史』,国防大学出版社,1995年
- ◆中国人民解放军全史,軍事科学出版社,2000年1月
- ◆中国人民解放军歴史資料叢書編審委員会,『八路軍文献』,解放军出版社,1994年5月
- ◆『回憶王稼祥』,人民出版社,1985年
- ◆『八路軍回憶史料』,解放军出版社,1991年9月
- ◆王庭岳,『在華日人反戰運動史略』,河南人民出版社,1989年
- ◆中央档案馆編,『中共中央文件選集』,中共中央党校出版社,1989年
- ◆中共中央宣传部办公厅,中央档案馆編研部編,『中国共産党宣伝工作文献選編』,学習出版社,1996. 9
- ◆鄭保衛,中国共産党新聞思想史,福建人民出版社,2004年12月第1版
- ◆程偉,『延安整風時期的理論教育及其当代価値研究』,中国社会科学出版社,2008年6月
- ◆馬建国,抗日戦争時期的中美軍事合作,解放军出版社,2007年
- ◆朱鴻召,延安日常生活中的歴史1937—1947,广西師範大学出版社,2007年
- ◆張延平,延安中央印刷厂編年記事,陝西人民出版社,1988年
- ◆樊建川.兵火の大地——日本側の戦時報道写真で見る抗日戦争.北京:外文出版社.2007年.
- ◆徐則浩,『從浮虜到戰友』,安徽人民出版社,2005年7月1日
- ◆尹均生主編.『中外名記者眼中的延安解放区』.華中師範大学出版社.1995年
- ◆中国共産党宣伝史,四川人民出版社,1990年

- ◆鄧高如等著,瓦解敵軍紀實叢書:天變川康(爭取劉文輝鄧錫侯潘文華起義紀實), 解放軍出版社, 2000年
- ◆白修德,賈安娜 著, 端納 譯. 外國人看中國的抗戰: 中國的驚雷. 新華出版社. 1988年2月
- ◆詹姆斯·貝特蘭 著, 林淡 等譯. 外國人看中國抗戰: 華北前線. 北京: 新華出版社. 1986年7月
- ◆班威廉, 克蘭爾著, 斐然 等譯. 外國人看中國抗戰: 新西行漫記. 北京: 新華出版社. 1988年1月
- ◆哈里森·福爾曼 著, 陶岱譯, 『外國人看中國抗戰: 北行漫記』, 新華出版社, 1988年2月 (ハリソン・フォアマン, 『赤い中国からの報告』Report from Red China)
- ◆高新民, 張樹軍 著, 延安整風實錄. 浙江: 浙江人民出版社. 2000年7月
- ◆劉国霖, 鈴木伝三郎, 「一個『老八路』和日本捕虜的回憶」, 学苑出版社, 2000年6月
- ◆孫金科, 『日本人民的反戰鬭爭』, 北京出版社, 1996年2月
- ◆岡瑟·斯坦因 著, 馬飛海等譯, 『紅色中國的挑戰』(The Challenge of Red China), 上海譯文出版社, 1999年12月
- ◆丁曉平, 『感動中國: 与毛澤東接觸的國際抗日友人』, 中央文獻出版社, 2005年5月
- ◆彼得·弗拉基米洛夫 著, 呂文鏡 等譯, 『延安日記』, 東方出版社, 2004年3月
- ◆小林清, 『一個「日本八路」的自述 在中國的地上』解放軍出版社, 1985年8月
- ◆『八路軍抗日根拠地見聞錄——一個英國人不平經歷的記述』[英]林邁可(Michael Lindstay) 著, 楊重光, 郝平 譯, 國際文化出版公司出版, 1987年6月
- ◆白修德 著, 馬清槐 方生 譯, 『探索歷史』, 三聯書店, 1987年12月
- ◆金城『延安交際處回憶錄』中國青年出版社, 1986年10月
- ◆姜思毅, 『中國共產黨軍隊政治工作七十年史(1)(2)』, 解放軍出版社, 1991年
- ◆宋斐如, 『日本人民的反戰運動』, 生活書店, 1938年6月第1版,
- ◆張廷貴, 『中共抗日部隊發展史略』, 解放軍出版社, 1990年
- ◆張濤之, 『中國人民解放軍演義』(第2卷), 作家出版社, 1997年,
- ◆中國共產黨山東臨沂地區組織史資料(1923—1987), 中共黨史出版社, 1991年
- ◆山東省文化庁文化芸術誌編集弁公室, 『文化芸術誌資料彙編』第23卷, 山東省文化庁『文化芸術誌』編集弁公室, 1984年
- ◆閔捷, 譚汝謙, 李家巍, 『中日關係全書』(第1卷), 遼海出版社, 1999年
- ◆李新, 陳鈇健, 李義彬, 『中國新民主主義革命通史』(9), 上海人民出版社, 2001年
- ◆中共河北省委黨史研究室, 河北政協文史資料委員會『在華日人反戰紀實』河北教育出版社, 2005年8月
- ◆中國共產黨中央組織部, 中共中央黨史研究室, 中央檔案館, 『中國共產黨組織史資料』(第6卷), 中共黨史出版社, 1991年
- ◆房成祥, 『毛澤東与延安整風運動』, 陝西人民出版社, 1993年9月
- ◆劉志堅, 張友萱, 「冀南平原最艱難時機的武工隊和瓦解敵軍工作」『八路軍回憶史料3』,
- ◆劉貫一, 「敵軍工作談片」, 『新四軍回憶資料』(第一卷), 解放軍出版社, 1990年, 79頁
- ◆毛澤東, 「為徐特立六十歲生日写的賀信」, 蔣建農, 『毛澤東著作版本編年紀事』(第1卷), 湖南人民出版社, 2003年

- ◆河上肇 著, 林植夫 訳,『資本主義経済学之歴史的發展』, 商務印書館, 1933 年
- ◆李一氓,『李一氓回憶錄』, 人民出版社, 2001 年
- ◆姜義華,『史魂:上海十大史学家』, 上海辞書出版社, 2002年
- ◆楊增培,『梅州市志』(第3卷), 廣東人民出版社, 1999 年,
- ◆中国人民政治協商会議全国委员会文史資料研究委员会,『文史集萃』(第5卷), 文史資料出版社, 1985 年
- ◆公騫姚, 汪叔子, 鄧光東,『中国百年留学精英伝』(第1卷), 百花洲文芸出版社, 1997 年
- ◆『董必武伝略』法律出版社, 1985 年
- ◆杜草甬, 楊木,『徐特立』, 人民出版社, 1987 年
- ◆尹高朝,『毛沢東和他的二十四位老師』, 中央文献出版社, 2001 年
- ◆黃達,『吳玉章与中国人民大学』, 山西教育出版社, 1996 年
- ◆北京図書館社会科学参考組,『革命烈士伝記資料目録』第1卷, 解放軍出版社, 1986 年
- ◆『新民主主義革命時期出版史学術討論会文集』, 中国書籍出版社, 1993 年
- ◆周恩来,『周恩来軍事文選』, 人民出版社, 1997 年
- ◆瀋殿成,『中国人留学日本百年史』, 遼寧教育出版社, 1997 年
- ◆北京図書館,『中国当代社会科学家』(第6卷), 書目文献出版社, 1982 年
- ◆廖盖隆, 范源,『中国人名大詞典』(現任党政軍領導人物卷), 上海辞書出版社, 1989 年
- ◆張香山,『回首東瀛』, 中共党史出版社, 2000 年 11 月
- ◆中国解放軍国防大学党史党建政工教研室編『中共党史教学参考資料』17 冊, 1985 年
- ◆小林清『在華日人反戰組織史話』, 社会科学文献出版社, 1987 年9月
- ◆劉菊初,「1942年延安參觀日記」『山西文史資料』2000年9号
- ◆司馬遷『史記』岳麓書社, 1988 年
- ◆謝祥皓『中国兵学:漢唐卷』山東人民出版社, 1998年
- ◆何志華, 朱国藩, 樊善標編著『「荀子」與先秦兩漢典籍重見資料彙編』, 香港中文大学出版社, 2005 年
- ◆黃俊傑,『孟学思想史論』(第1卷), 東大図書館, 1991 年
- ◆趙明義『当代国際法導論』五南図書館出版公司 2001 年 9 月出版 1 刷
- ◆周煥中 主編『特殊的戰線』武漢大学出版社 1991 年 11 月
- ◆張香山『中日關係管窺與見証』当代世界出版社, 1998 年
- ◆王振中, 錦文劇, 楊春学『中国経済学百年經典』(第3卷), 広州經濟出版社, 2005 年
- ◆中華名人協會等編『中国人物年鑑』(第20卷)華芸出版社1995年
- ◆邵維正『文図並説中国共産党80年大事聚焦』(第1卷)解放軍出版社, 2001年
- ◆薛沢石『跟毛沢東学史』赤旗出版社, 2000年
- ◆『毛沢東書信選集』人民出版社, 1983年
- ◆周恩来『周恩来書信集』中央文献出版社1988年版
- ◆胡喬木『胡喬木回憶毛沢東』人民出版社, 1994年
- ◆李克安『斯諾在中国』三聯書店, 1982年

- ◆竇其文『毛澤東新聞思想研究』中國新聞出版社，1986年6月
- ◆『朱德選集』人民出版社，1983年
- ◆中共中央文獻研究室編集委員會，『周恩來選集』(上)，人民出版社，1981年
- ◆王鴻賓，『東北人物大辭典』(第2卷，第2部)，遼寧人民出版社，1996年
- ◆郭化若『中國人民解放軍軍史大辭典』吉林人民出版社，1993年
- ◆周逸群「鄂西遊擊戰爭的經過及其現狀(1930年5月)」『周逸群文集』中共黨史出版社，2006年6月
- ◆『毛澤東選集(2)』北京人民出版社，1991年版
- ◆中國人民解放軍政治學院黨史教學研究室編『中國共產黨黨史參考資料(第8冊)』
- ◆『陳賡日記』戰士出版社1982年
- ◆傅啓學『中國外交史 下冊』台灣商務印書館1972年4月改定一刷，2007年3月改定九刷
- ◆文天行『周恩來與國統區抗戰文芸』四川省社會科學院出版社1985年
- ◆吳士余，劉凌『中國學術名著大詞典(近現代卷)』漢語大詞典出版社，2001年
- ◆郭沫若等『郭沫若佚文集(1906-1949)』四川大學出版社，1988年
- ◆上海社會科學院文學研究所編『三十年代在上海的「左聯」作家(第1卷)』，上海社會科學院出版社，1988年
- ◆「敵工部長與『日本人民解放連盟』成員」，『福建黨史月刊』2007年第2號
- ◆劉震「日本人民解放連盟冀察支部成立大會印象記」『北京黨史』1999年第4號
- ◆張佺英，張肇俊「新四軍軍部變遷」『黨史博采』(紀實版)2007年第8號
- ◆張威，張學忠「華中區『日人反戰同盟』活動紀實」『黨史縱覽』，2005年第8期
- ◆王書波「反戰同盟在冀縣」『黨史博采』1995年第7號
- ◆林谷良「抗日戰爭時期侵華日軍官兵中的反戰運動」『軍事歷史研究』1994年第2號
- ◆張劍南，余文祥「日本反戰同盟第5支部在漲渡湖的活動」『湖北文史資料』1995年第1號
- ◆許愷景「日本反戰同盟在新洲」『武漢文史資料』2003年10月
- ◆符浩「憶山東戰區『在華日人反戰同盟』」『人民日報』，1995年8月28日
- ◆趙曉泮「從反戰同盟5支部到日軍46人集體暴動」『黨史博覽』2007年第6號
- ◆張文華「日本人民解放連盟淮北支部始末」『黨史縱覽』1994年第6號
- ◆車國民，孫娟，「抗戰時期的山西日人反戰組織」，『文教資料』2006年9月號中旬刊
- ◆謝慧君「活躍在抗日戰場上的在華日本共產主義者同盟」『黨史縱橫』2005年第9號
- ◆黃民偉「我所知道的反戰同盟支部」『湖北文史資料』，1995年第1號
- ◆曹晉傑「日本人反戰同盟在華中的組織與活動」『抗日戰爭研究』1995年第2號
- ◆李恕「烽火丹青記抗戰——膠東八路軍對日戰略反攻前後」『百年潮』2006年第4號
- ◆趙松茂，梁纘「在華日人反戰始末」『文史精華』2005年第5號，總第180號
- ◆王庭岳，傅義桂，「抗戰時期的日人反戰新聞事業」，『新聞研究資料』1990年1號
- ◆杜玉芳「延安日本勞農學校述論」『理論學刊』2000年1月
- ◆肖冬「抗日戰爭時期在根坳地創立的日本工農學校」『黨的文獻』2002年第6號
- ◆陳子谷，「懷念林植夫同志」，『革命人物』1985年第S1號
- ◆李維賢，「華僑愛國志士陳子谷」，『中華魂』1999年12號

- ◆『史林』編集部,「光輝的一生——李垂農同志伝略」,『史林』1986年3号
- ◆陳修良,「懷念李垂農同志」,『史林』1986年第3号
- ◆新華社,「李初梨逝世」,『新文学史料』,1994年3号
- ◆王宜田,丁偉,「中共史上的東京事件」,『中共党史資料』2009年4号
- ◆劉曉農「我軍優待捕虜政策的產生」『党史文彙』2004年7号
- ◆王謙「郭沫若與国民政府三庁」『文史精華』2004年第4号,45頁
- ◆李彩素「論中国共產党與抗戰時期的国民政府政治部第三庁」『湖南科技大学学报(社会科学版)』2010年3月,113頁
- ◆康大川 著,中古苑生 訳「私の抗日戦争——在華日本人民反戦同盟とともに」『中国研究月報』(470)1987年4月
- ◆中国第二歴史档案館,文俊雄訳,国際宣伝処密派之外国友人赴日宣伝日軍在華暴行報告,《民国档案》,2001.1
- ◆朱宗漢,「回憶林植夫先生」,『党史資料与研究』1985年6号
- ◆趙月恒,「『詩經』与周代的捕虜政策」,『文史知識』1996年8号
- ◆毛応民「出神入化縁自酷愛—毛沢東与『三国演義』」『党史縱横』1995年2号
- ◆王曉秋,「中国留学生留学日本110年歴史的回顧與啓示」『留学生』2006年Z1号
- ◆杜玉芳,王衛紅,「抗日戦争時期山東の日人反戦活動」,『山東档案』2003年5月,44頁
- ◆黄義祥,「在華日本人民的反戦闘争」,『中山大学学报』,1995年第3号,92頁
- ◆孫金科「在日本举行的日中戦争時期在華日本人反戦運動国際研討会綜述」『抗日戦争研究』1999年2号
- ◆夏明星,蘇振蘭「延安日本工農学校」『文史春秋』2002年11号
- ◆高存信「懷念冀中幹部教導団の日本朋友們」『党史博采』1996年4号
- ◆何立波「抗戦期間の延安日本戦俘学校」『湘潮』2007年11号
- ◆王光荣,「日軍戦俘在延安『洗礼』」,『百年潮』2004年9号,37頁
- ◆劉景修「外国人記者何時提出赴延安採訪」『現代史研究』1989年第4号
- ◆張克明,劉景修「抗戦時期美国記者在華活動紀事(2)」『民国档案』1988年第3号
- ◆王曉嵐,戴建兵「中国共產党抗戦時期对外新聞宣伝研究」『中共党史研究』2003年第4号
- ◆劉景修,張釗「美国記者与中国抗戦」『民国档案』1989年第1号
- ◆袁本文「周恩来与西方記者」『北方工業大学学报』1999年6月
- ◆常涛,張正明「毛沢東人民戦争思想探源」『前沿理論』,2007年2月号
- ◆賀龍「回憶紅2方面軍」『近代史研究』1981年第1期
- ◆譚政「敵人在華北の現行政策」『八路軍軍政雜誌』第5号,
- ◆苗体君,寔春芳「中共『一大』代表中の四位留日成員」『党史天地』,2007年10号
- ◆葉世昌,丁孝智「王学文在民主革命時期的經濟思想」『江西財經大学学报』1999年3号
- ◆于青「宮崎滔天故居賞閱宝物」『人民日報』2006年11月14日
- ◆「早期留日学生與共產主義組織の萌発和創建」,『神州学人』2001年2号
- ◆王思華「敵軍の現状」『八路軍軍政雜誌』第1卷第5号,51-58頁。

- ◆王思華「戦争兩年後の日本政治経済」『八路軍軍政雑誌』第1巻第6号, 43-60 頁
- ◆毛沢東「発刊辞」『八路軍軍政雑誌』(創刊号), 1939 年1月15日出版
- ◆蕭向榮「部隊中の宣伝鼓動工作」『八路軍軍政雑誌』第2号, 1939 年2月 15 日
- ◆許光達「抗大最近の動向」『八路軍軍政雑誌』1939 年 2 月 15 日, 第2期
- ◆江右書「敵軍工作訓練隊日文教育的一些経験」, 十八集團軍政治部出版:『八路軍軍政雑誌』第2巻, 第6期, 1940 年6月
- ◆「給 120 師関与敵軍工作的指示信」『八路軍軍政雑誌』第2巻, 1940 年7月 25 日
- ◆傅鐘「八路軍抗戦中政治工作的経験」『八路軍軍政雑誌』第5号, 1939 年5月 15 日
- ◆「紅軍捕虜政策的变化」『解放軍報』2006 年9月 19 日, 10 面
- ◆康濯「捉放捕虜記」『八路軍軍政雑誌』第3号, 1939 年3月 15 日
- ◆蕭向榮「115 師的政治教育工作」『八路軍軍政雑誌』創刊号 1939 年1月 15 日
- ◆魏碧海「1937: 英雄挺起民族脊梁, 陳士榘活捉第一個日本兵」『中国国防報』2005 年7月5日, 5 面
- ◆于鏡清「憶日本戦友今野博」臨沂地区出版弁公室『憶沂蒙』山東人民出版社

日本語文献

- ◆『長谷川テル』編集委員会『長谷川テルー 日中戦争下で反戦放送をした日本人女性一』, せせらぎ出版, 2007年8月15日
- ◆山本武利編訳『延安リポート—アメリカ戦時情報局の対日軍事工作』岩波書店, 2006年2月
- ◆人民中国雑誌社編,『わが青春の日本—中国知識人の日本回想』, 東方書店, 1982年9月29日
- ◆水谷尚子『『反日』以前: 中国対日工作者たちの回想』文芸春秋, 2006年7月30日
- ◆水野靖夫『日本軍と戦った日本兵: 一反戦兵士の手記』白石書店, 1974年8月31日
- ◆毛里和子,『日中関係 戦後から新時代へ』岩波新書, 2006年6月20日
- ◆エドガー・スノー,『中共雑記』(小野田耕三郎・都留信夫訳) 未来社, 1964年11月30日
- ◆エドガー・スノー著, 宇佐美誠二郎訳『中国の赤い星』筑摩書房, 1964年9月20日
- ◆ニム・ウェールズ,『人民中国の夜明け』(浅野雄三訳) 新興出版社, 1971年9月25日
- ◆防衛庁防衛研修所戦史室:『北支の治安戦』<1><2>, 朝雲新聞社1968.8, 1971.10
- ◆抗日戦争と民衆運動 内田知行 創土社 2006年12月31日
- ◆山極晃,「米戦時情報局の『延安報告』と日本人民解放連盟」, 大月出版社2005年7月20日
- ◆秋山良照,『中国戦線の反戦兵士』, 徳間書店, 1978年11月10日
- ◆鹿地亘,『日本兵士の反戦活動』同成社, 1982年10月10日
- ◆鹿地亘,『日本人民反戦同盟闘争資料』同成社, 1982年10月10日
- ◆火野葦平,『麦と兵隊』, 改造社, 昭和13年9月16日
- ◆野坂参三,『風雪のあゆみ』, 新日本出版社, 1989年9月15日
- ◆菊池一隆,『日本人反戦兵士と日中戦争—重慶国民政府地域の捕虜収容所と関連させて—』, 御茶の水書房2003.5.28

- ◆反戦同盟記録編集委員会 編『反戦兵士物語:在華日本人反戦同盟員の記録』日本共産党中央委員会出版部, 1963年9月
- ◆毛沢東著, 尾崎庄太郎訳『持久戦論』,人民社,1946年9月1日発行,
- ◆バートラム(James Bertram) 1937: 詹姆斯・貝特蘭著, 林淡秋 等訳. 外国人看中国抗戦: 中国的新生.北京:新華出版社.1986年1月
- ◆バートラム(James Bertram) 著, 林淡秋 等訳『華北前線』新華出版社, 1986年7月
- ◆藤原彰,『資料 日本現代史1 軍隊内の反戦運動』,大月書店,1980年7月25日第一刷発行
- ◆姫田光義, 藤原彰 編『日中戦争下中国における日本人の反戦活動』青木書店,1999年9月18日
- ◆ガンサー・スタイン著, 野原四郎 訳『延安一九四四年』(The Challenge of Red China), みすず書房, 1962年6月30日
- ◆ピョートル・P・ウラジミロフ 著, 高橋正 訳, 『延安日記—ソ連記者が見ていた中国革命』, サイマル出版会, 1975年
- ◆香川孝志, 前田光繁 著『八路軍の日本兵たち—延安労農学校の記録』サイマル出版会, 1984年6月
- ◆香川孝志, 前田光繁 著, 趙安博, 呉従勇 訳, 『八路軍内日本兵』, 解放軍出版社, 1985年7月
- ◆E・スノー著, 松岡洋子訳, 『目覚めへの旅』, 紀伊國屋書店, 1963年9月30日
- ◆オットー・ブラウン 著 ; 瀬戸鞏吉 訳『大長征の内幕 : 長征に参加した唯一人の外人中国日記』恒文社, 1977年11月
- ◆鶴田久作『国訳漢文大成』, 国民文庫刊行会, 大正13年3月
- ◆守屋洋, 『中国四〇〇〇年の智慧 賢者たちの言葉』PHP研究所, 2009年2月12日
- ◆矢吹晋 編『周恩来, 十九歳の東京日記』小学館文庫, 1999年10月
- ◆公田連太郎『孫子の兵法』(兵法全集第1巻)中央公論社, 昭和10年6月20日
- ◆鞏長金訳『反戦士兵手記』解放軍出版社, 1985年6月
- ◆川口忠篤『日僑秘録』太陽少年社, 昭和28年3月20日
- ◆加藤哲郎『野坂参三・毛沢東・蒋介石』往復書簡『文藝春秋』2004年6月号
- ◆趙安博「延安日本労農学校」『アジア経済旬刊(1246-1247)』1983年1月1日
- ◆中国第二歴史档案館, 《董頭光彙報国際宣伝処派赴日本揭露南京大屠殺真相致蒋介石密呈》,《民国档案》,2000年,第4期

付 録

付録1: 敵軍工作に関する総政治部の指示 (陝西省档案馆, 5495-13-24-26)

敵軍工作に関する総政治部の指示

1944年6月1日

抗戦数年以来、我が党、我が軍の敵軍瓦解工作与捕虜を獲得する工作は、努力を重ねてある程度の実績を実現させたのである。その主な実績は、敵軍捕虜を獲得する過程で多数の敵軍幹部を養成できたことである。そして多くの地区で日本人反戦組織を作ったことである。これらの組織はもうすでに敵軍の中で相当の影響力を持ち、工作の過程で初歩の経験を積み重ねた。それは今後の工作のために有利な条件を作ってくれた。今後は更なる大きな規模で敵軍工作を展開すべきである。日本軍隊の民族特徴と上述した条件の変化を考慮し、総政治部は敵軍工作に関して下記の指示をする。

(一) 日本人幹部がおり、同時にこれらの日本人幹部が政治上には練れている地区においては、今後の敵軍工作は主に日本人解放連盟(元名反戦連盟)を通じて行なうべきである。(現在はまだ日本人幹部また解放連盟組織の無い個別な地区においては、今まで通りに敵軍工作を行う。)各級政治部の敵軍工作部門は力を集中し偽軍工作を行なうべきである。敵軍工作に対しては、方針的な指導と具体的な困難の解決だけを担当する。そういう変化のため、解放連盟と敵工部門の間の関係を下記の通り、具体的に規定する。

(甲) 敵工部の分担する工作

子、敵軍工作に関する連盟の報告に定期的に耳を傾ける。そして日本人同志と共同で敵軍工作の新しい方針と政策などの諸問題を討論して決定する。

丑、連盟が起草した各種の工作(新来捕虜の宣伝教育、扱い、人事など)計画を審査し批准する。そしてその工作の実行を着実に支援する。

寅、連盟が上級機関に提出する報告は、自己の真面目な審査を終え、副署してから提出すべきである。

卯、日本人幹部教育の指示と支援。

辰、各種の資料と情報と収集・研究し、それを中国語に翻訳する。

巳、工作経費の審査と批准、そして連盟総務工作創立の支援とほかの困難の解決。

午、日本人同志を保護し、その安全を確保する。特に敵軍が掃蕩するときと工作行動のとき、更なる多く重視する。

(乙)解放連盟が担当する工作

子、敵工部門に定期的に工作報告をし、その指導と指示を受ける。

丑、連盟内部の問題の解決。

寅、敵軍工作計画方案の提出と実行。

卯、新来者と連盟の一般成員の教育と審査。

辰、敵工部に敵国敵軍に関する各方面の資料を供給する。

巳、批准された経費の扱いと連盟自身の総務工作(必ず中国幹部を通じて行なう)。

(二) 敵軍工作の方針: 現在は依然として敵軍に対する宣伝に重点を置くべきである。宣伝内容については、敵軍の内部矛盾と日増しに悪化している生活問題を利用し、兵士の不満と闘争を引き起こす同時に、更に政治攻勢の中で敵に不利な方面をとらえて、敵軍の厭戦と失敗気分を強化するため宣伝を拡大すべきである。去年2月延安日本人解放連盟が可決した闘争綱領を通俗的で分かりやすい言葉で広範的且つ突っ込んだ宣伝を行い、連盟の影響力を強めるべきである。日本兵士の覚醒程度を考慮し、目下はまだ高すぎる政治宣伝スローガンを設定すべきではない。しかし、日本人共産主義団体の名義を利用し、通俗化の形式で適切に共産主義を宣伝することと階級覚醒思想を啓発することは、徐々に始めてもいい、しかもはじめるべきである。宣伝の方法と方式には、今までの経験によれば次の各点を注意すべきである。

子、同盟国の勝利と日本の失敗を宣伝するとき、日本の宣伝の自身を利用し、その前後の矛盾を暴露し、敵側の情報の瞞着性を暴露し、我側の宣伝の真実性を証明する。我側の通信をそのままうつすのは、宣伝の効果を弱めるだけでなく、日本兵士の反感まで引き起こすかもしれない。

丑、各地連盟支部はできるだけ小型新聞を発行すべきである。その新聞の形式と署名は、必ずしも反戦連盟と解放連盟の名義ではなくても良く、敵側がすでにできている各種の地方小型新聞の偽装形式で行なうほうが良い。

寅、慰問袋と品物の送り、手紙の往復、呼びかけ、電話などの交歓工作は、今までの経験に証明された通り、一番効果の良い宣伝方法である。今後は必ず更に普遍的に行なうべきである。

卯、反掃蕩の時機を利用し、スローガンとピラを作り、敵兵は我が根拠地に入ったら、あらゆる場所で我側の宣伝と接触させる。

宣伝物については、各地自分で作るほか、毎週火曜と金曜二回、午前九時に日本語ローマ字で各地に向けて放送する。この期間中、宣伝物の教材を印刷し、各地は時間を守って聴取し、着実に利用すべきである。

敵軍内及び居留民の中の組織工作の展開について、あらゆる方法を考えて行なうべきである。しかし、敵の憲兵及び特務組織の厳密と狡猾を考慮し、敵軍及び日本居留民の中のあらゆる革命組織は、必ず十分慎重と秘密な方法を採らなければいけない。各秘密組織の間には、お互いに連絡などのつながりは一切無いようにし、それぞれ単独で根拠地の解放連盟と連絡すべきである。これらの組織工作の展開の最初のときは、常に敵と接触する信用できる農民、偽軍・偽政権、敵軍内の通訳、適切な教育を受け送り返さなければならない捕虜を利用したほうが良い。できれば、各地はそういった日本人幹部を養成すべきである。

(三) 日本の革命勢力を養成するため、今後原則的に捕虜を釈放しないことを決める。しかし、下記の状況は除外する。

子、我が軍の捕虜政策の影響をあんまり受けていなく、捕虜釈放で宣伝する必要のある日本軍部隊。

丑、戦況緊急または連れて行けない者。

寅、教育する意味の無いもの。例えば体が不自由になった者、高齢者、弱体者、婦人など。

新来捕虜の扱いのため、各地は新来捕虜収容・隔離・審査用の、適量な日本人兄弟招待所を設置しても良い。同時に、釈放すると決めた捕虜に対しても、これらの招待所で一定の教育を経ってから釈放する。

敵軍環境の困難を考慮し、系統的な教育を行なうため、今後各地のすべての捕虜は、できれば一律に延安に送ってくるべきである。各地で必要となる幹部については、延安から成熟に養成した幹部を送り出すべきである。晋西北で日本工農学校の分校が開設しているので、各地から延安に送ろうとする日本人は、まずは同校に送り、初歩的な教育を経ってから延安に送るべきである。

(四) 敵軍工作の組織上の変化が決定されたので、各級政治部と敵軍工作部は、それに対して正確な認識を持たなければならない。今後の敵軍工作は解放連盟と日本人幹部を通じて行うので、自分の責任は軽くなった、とくれぐれもそう思っはいけない。今回前線から延安に戻ってきた日本人幹部の報告によれば、一部の地区では彼らの工作に対する指導、あるべき信用、生活上の配慮は非常に不十分である。今後、彼らに更なる多くの工作と更なる大きな任務を任せるので、ぜひ彼らに更なる多くの信用と更なる多くの配慮を与えるべきである。生活上には、必ず彼らの民族情緒を尊重すべきである。彼らの工作を指導する方式においては、ぜひ彼らと多く相談・討論する方法を採るべきである。方針と政策の指導に重点を置き、具体的な工作の進行は彼らの意見を尊重すべきである。そうして初めて彼らの工作積極性と創造性を発揮させるのである。それは工作に有利で、対敵闘争にも有利である。知らなければならないことに、日本人同志

と共同で真剣に工作し、あらゆる努力で日本人同志の進歩を進めることは、我が軍今日の抗戦においてなくてはならないことである同時に、我ら国際共産党人が将来の日本革命のために幹部を準備するという人になすりつけてはならない責任でもある。今まで、一部の同志がそれに対する認識は足りなく、日本人同志に対して正しくないところがあった。今後、それを真剣に直すべきである。

各地がこの指示を受けた後、敵工部門及び解放連盟内部で同時に伝達し討論すべきである。そして執行状況を随時に電告すべきである。

今件は各級政治部敵工部科まで伝達する。

(1)

友の軍日

日曜日

日一十月四年七十和昭

報告

在支日人民反戦同盟支部... 組織的此の光榮任務を終るまで... 奮闘する...

致各位の出席を乞ふ次第

日本兵士各位... 日本人民各位... 五月十一日十日開

晉察冀支部創立一週年紀念ヲ迎へて

この一年は、我々の闘争が、ますます激しくなつて来た。...

日軍の友

刊週 號五十第

所行發 部治政區軍察晉 内區邊察晉

支部創立壹週年紀念大會ニ參加セヨ!

支同戰反日軍 部支冀察晉

大且重務任ノ等我 泰原上

我々の任務は大且重である。泰原上、我々の闘争は、ますます激しくなつて来た。...

我々の闘争は、ますます激しくなつて来た。...

純眞ノ國際友愛

中村鉄夫

我がハ會ツテ日... 諸君ニ正確ナ認識... 戰局ノ變遷...

米海空軍 突如日本近海ヲ急襲

東京戦々兢々

最近米海空軍... 東京南ニ距離ルコ... 米機百餘機...

部優遇の支給... 谷等一週ノ人受... 弟路軍ニ...

行機百餘機... 行機百餘機... 行機百餘機...

山東駐在ノ日本... 本年一月二日... 本年一月二日...

略信 一丈二尺ニ... 安省東部ノ中... 四門中ニ...

獨ソ決戦ノ前奏 獨軍二〇九師團全滅... 獨軍二〇九師團全滅...

ヒットラーノ新策動... 季攻勢ハ急々... 季攻勢ハ急々...

ヒットラーノ新策動... 季攻勢ハ急々... 季攻勢ハ急々...

我等が曙光

次代ノ建設スル重大任務ヲ
我等ニ授ケル明日ヘノ希望ニ向
テ奮然ニ生ケル我々ノ使命ニ幸
シクシテ
諸君ノ奮然ニ生ケル我々ノ使命ニ幸
シクシテ
諸君ノ奮然ニ生ケル我々ノ使命ニ幸
シクシテ

昨日ノ五月四日ヲ顧ミテ
小林重一
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必

我等ノ至寶 藤投手

異國北支ノ野
ニモ何時シカ
運レタ此處太
後ノ空隔ガホ
ガアル此處ニ
ガアル此處ニ
ガアル此處ニ

若人ノ血潮ハ燃ユル

アア感激ノ國際大野球戰
甘粉製
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ

昨日ノ五月四日ヲ顧ミテ
小林重一
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必

昨日ノ五月四日ヲ顧ミテ
小林重一
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必

昨日ノ五月四日ヲ顧ミテ
小林重一
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必
然結果ニ伴フ必

アア感激ノ國際大野球戰
甘粉製
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ

アア感激ノ國際大野球戰
甘粉製
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ

アア感激ノ國際大野球戰
甘粉製
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ

アア感激ノ國際大野球戰
甘粉製
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ

アア感激ノ國際大野球戰
甘粉製
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ

アア感激ノ國際大野球戰
甘粉製
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ
今日ハ榮切イ

支那民主生活

上野友一



諸君モ周知ノ通り我ガ警察反戦同盟支...

民主俱樂部ノ具體化成長

小松定治

支部俱樂部ハ文ヨリ、又必要ニ依...

國際友愛ノ結晶!

民主俱樂部ノ任重シ

三木光男

支部俱樂部ハ文、發展ニ貢献スル所...



文藝

同盟音頭

作詞 三木光雄 振付 原繁雄

ハアアアアアアアアアアアアアアア...

希望ノ空、夢ノ國!

アアアアアアアアアアアアアアア...

支那ノ劇變通補ニケル(原圖志)...

支那民主生活

付録4: 反戦同盟晋察冀支部『日軍の友』18号(1942年5月23日)

日本の友

刊通

號八十第

所行發
部治政區軍察警
内區邊境察警

日本婦女ノ生活

日本ノ婦女ハ約
三千五百五十萬人
居テ、彼等ノ地位
ハ其ダ低ク、飽ク
途デ家政管理、夫
ノ御奉公、子供養
育ノ奴隷ニサレ、
殊ニ中日戰爭以來
彼等ハ一層苦シイ
境遇ニ置カレテ居
ル。戰爭ガ彼等ニ
與ヘテ深刻的災難
其ノモノハ、平
ノ出征戦死片輪デ
アリマシテ、彼等
フシテ孤獨ノ母、
若後家トナリ、悲
哀ト寂寞ナリヲ暮
シテ居リ、尙一方
同デハ戰爭ノ消耗
ニ依テ人民ノ生活
ハ日増ニ悪化ト因
難ニ陥リ、多數ノ
人借金ニ迫マラレ
テ子女ヲ遊廓ニ身
賣シ、又ハ工場ニ
出シテ其ノ日ノ暮
ヲ強ク状態デアル
、僅ク青森、宮城
、秋田、福島ノ四
縣ダケデ昭和九
年ノ十月月間デ以
テ身賣シテ女子ハ
五〇、三四〇名デ
アツテ、昭和十三
年ハ平時ノ三倍ニ
達シタ、尙昭和十
二年ニ於テ女工ノ
總數ハ一、八八八
、〇〇〇名デ至工
場勞動者總數ノ百
分ノ三七、五ヲ占
メ、昭和十五年二
月現在ノ統計デハ

百分ノ四十七ニ増
加シタ、ツシテ其
ノ増加ハ主ニ軍
需工業方面ニシテ
女工ハ男工ノ仕事
タル旋盤工等ヲヤ
ラセルガ女工ノ取
得スル賃金ハ僅カ
男工ノ三分ノ一ニ
過ギズ、昭和十二
年ノ如キハ男工ノ
平均賃金ハ一、八
四圓ノ低額デアツ
タノデアル。其ノ
次ニ榮養不良、工
場ノ衛生設備ノ不
完全其ノ上英ダシ
キニ至ツテハ勤務
時間ハ一日十九時
間ニ延長サレ、コ
レガ爲ニ患病率ハ

非常ニ高ク、其ノ
中女工ハ實ニ此ノ
百分ノ三三、八ヲ
占メテ居タノデア
ル。如斯ク日本ノ
女工ノ収入ハ僅少
ノ上ニ物價ハ天井
知ラズ騰貴シテ居
ルガ日本ノ統治者
(政府)ハ愛國婦
人會トカ處女會ト
カ稱フヤウナ名目
ヲ利用シテ會費ヲ
徴收シ國防獻金ヲ
強要スル外ニ多數
ノ婦女ハ從軍女郎
トシテ種々異國ノ
地ニ轉リ出サレテ
居ル如クコレニ依
テ日本婦女ノ慘目
ナ生活ノ全貌ヲ見
ル事出來ルヲ云フ

日本經濟學者石橋氏

南洋經濟開發困難ヲ論述

スイス雜誌ガ發表セル通信ニ依レバ日本
ハ資源ノ寶庫タル南洋諸島ヲ占領シタト云
ヘ、日本經濟破綻ノ危機ヲ解消スル事出來ズ
、日本ノ騰貴問題ハ南洋資源開發ノ困難ヲ極
度ニ焦慮シ、經濟界ノ權威者石橋滋山氏ガ「
東洋經濟」第二〇二二號ニ於テ「南方資源
開發困難」ト云フ論文ヲ發表シタ、其ノ大意
ヲ要約スレバ、日本ハ南洋ヲ開發シ物資ヲ取
得セントスレバ第一大資本ヲ必要トスル
ト同時ニ充分ナル時間ヲ要スルモノデア
ル。然ルニ資本ト時間ト兩者ニ於テハ頗ル困難ト
スル處アリ、過去ニ於テハ滿洲及中國占領
地域ノ資源開發ノ結果ハ莫大ニ資本ヲ投ジテ
モ即座ニ其ノ成果ヲ收メラレナイ事ガ其ノ明
カナ歴史的教訓デアル。

町ノ實話

三月サレテ居ラズ、結
ニ入ツ 局入院出來ナカツ
ヲ聞モ 夕。幸ヒニ一週間
分ノ脚 程ヲ熱ガ下ツタ。
炎ニ罹 醫者カラ絕對安靜
ナレタ 命ヲゼラレ、「町
應ニ容 會ハ行ツテ用紙ヲ
能クテ 見エテ、モラツテ來
見エテ、乳、卵ノ特別購入
入院ヲ 院ノ証明シテヤル
ノ幼兒ヲ抱入テ病
室ハ軍ノ方ニ費用

人ノ看護ニ當ツテ
居タ妻ニハ魚、肉
、野菜ヲ買フ得ノ
長蛇行列ニ加ハル
事ハ出來ナカツタ
。デ喜ンデ町會ニ
尾紙ノ請求ニ行ツ
タ。トコロガ「區
役所ノ事務繁雜ノ
爲、ソレハ毎月二
十三日ニダケ下附
スル」ト云ハレテ

仕方ナク展ラサ
タ。急ヲ要スル病
人ノ榮養採取ノ爲
ノ數個ノ卵位ヲ購
者、町會、區役所
ト面割テ手續ヲデ
ハ良イガ毎月一
定期日ニ下附スル
ヤウデハ... (以
下略)
(文藝春秋昭和
十七年五月號、誌
上會)
如斯キ紙上ノ新
片の現ハレリ見
テ侵略戰爭ノ長
期化ト擴大化ニ依
テ日本國內人民ハ
如何ニ苦痛デアリ
、如何ニ不平不滿
ヲ抱イテ居ルモ
ガ推量出來ルモノ
デアル。然ルニ
ンナ戰爭善ハ何轉
迄領シカ？發達
ル日本フアツシ
軍部ガ存在スル以
上ハ決シテ解レス
モノデアル。必ラ
ズ日本兵士ト人民
ガ自衛メテ積極的
反侵略行動ヲ取ツ
職製造者タル日
本フアツシレヨ
自山平和ヲ來ル
デアル。

太平洋作戦會議

「日本ヲ日本人ノ日本ニスル」正義 的スロウガン提出

太平洋作戦會議ハ五月二十日ワシントンノ白屋館ニ於テ開カレ、會議ニ於テ「日本ヲ日本人ノ日本ニスル」的スロウガンヲ創設シタ、コレニ就テニュージランド大使テイヌウ氏ハ微笑ヲ浮ベテ語ル、會議ガ此ノ正義的スロウガンヲ取リ入レタ事ハ同盟側ガ日本ニ抗戦スル目的ハ單ニ日本ノ侵略機體ヲ消滅スルモノデアツテ、日本ノ國家ト民族ヲ消滅スルノデアイト云フ事ヲ立証スルモノデアリ、コノ「日本ヲ日本人ノ日本ニスル」根本意義ハ即チ戰爭終結後ニ於テ日本ヲ日本人自己ガ樹立スルトコロノ平利民主國家ニスルモノニシテ諸外國ハ一切其ノ自由獨立ヲ干渉シ得ザルモノデアル。

同盟側今年ノ總論的戰略

先ニヒットラーヲ片付ケ

イギリス軍事通 日本ノ命運ヲ決定スルモノデアルカバ同盟側ガ今年ノ總論的戰略ハ日、獨、伊樞軸ノ全世、界侵略ヲ粉砕スベク、計劃的組織的、反攻ヲ斷行スル由デアル。同盟側ノ反攻ハ既ニソ聯ヨリ開始シ英米モ歐州テ上陸作戦ヲ敢行、段取ヲ着々進メテキル。因ニヒットラーノ命運ハ

赤珊瑚海海戰

（新華社延安十日電）米國ハ日下反攻ニ備フ可ク積極的ニ軍艦生産ニ力ヲ加ヘテ居ル。軍艦生産局ノ報告ニ依レバ單ニ軍用機ノ生産ダケデモ八分三十分毎ニ一機（一ヶ月五台）製作スルコトヲ、而シテコレ等最新式機ノ飛行速度ハ時速、四百哩以上ノ機體ヲ有シ居ル。

素晴ラシイ米國ノ軍事生産

入分三十秒毎ニ軍用機一機出來上ル

赤軍ニ合流セルオーストリア

兵士ノ告白

冀東ノ八路軍熱河へ挺進

一直線承德城下ニ肉薄

（新華社延安十日電）米國ハ日下反攻ニ備フ可ク積極的ニ軍艦生産ニ力ヲ加ヘテ居ル。軍艦生産局ノ報告ニ依レバ單ニ軍用機ノ生産ダケデモ八分三十分毎ニ一機（一ヶ月五台）製作スルコトヲ、而シテコレ等最新式機ノ飛行速度ハ時速、四百哩以上ノ機體ヲ有シ居ル。

（新華社延安十日電）米國ハ日下反攻ニ備フ可ク積極的ニ軍艦生産ニ力ヲ加ヘテ居ル。軍艦生産局ノ報告ニ依レバ單ニ軍用機ノ生産ダケデモ八分三十分毎ニ一機（一ヶ月五台）製作スルコトヲ、而シテコレ等最新式機ノ飛行速度ハ時速、四百哩以上ノ機體ヲ有シ居ル。

（新華社延安十日電）米國ハ日下反攻ニ備フ可ク積極的ニ軍艦生産ニ力ヲ加ヘテ居ル。軍艦生産局ノ報告ニ依レバ單ニ軍用機ノ生産ダケデモ八分三十分毎ニ一機（一ヶ月五台）製作スルコトヲ、而シテコレ等最新式機ノ飛行速度ハ時速、四百哩以上ノ機體ヲ有シ居ル。

（新華社延安十日電）米國ハ日下反攻ニ備フ可ク積極的ニ軍艦生産ニ力ヲ加ヘテ居ル。軍艦生産局ノ報告ニ依レバ單ニ軍用機ノ生産ダケデモ八分三十分毎ニ一機（一ヶ月五台）製作スルコトヲ、而シテコレ等最新式機ノ飛行速度ハ時速、四百哩以上ノ機體ヲ有シ居ル。

日本ハ船舶拂底ニ頭痛入卷

日本ハ戰線ノ擴大延長及巨大軍港ヲ築リタル事ニヨリ、船舶ノ缺乏ヲ痛感シテ居ル。コレニ付キニューイック時、事新聞ノ統計ニヨレバ太平洋戰爭爆發以來日本商船ノ五分之一ハ既ニ撃沈サレ、如斯キ損害ハ目下日本ノ造船能力ヲ以テ絕對ニコレヲ補充スル事ハ莫クナイト。

冀東ノ八路軍熱河へ挺進

一直線承德城下ニ肉薄

（新華社延安十日電）冀東ノ我ガ八路軍ハ先月下旬ヨリ長城線以北ニ挺進ヲ開始シ、主力一部ハ承德城附近ニ肉薄シテ當地ノ日本軍ニ重大損害ヲ與ヘ、〇〇支隊ハ錦承鉄道ヲ越シテ承德ニ赤軍東方ノ糧樹林ヲ攻落シテコソコソ復シタ。

中冀大激戰之極

八路軍遊擊戰之開展 日本軍應對之極端

冀中ノ掃蕩戰ハ依然繼續中アリ、八路軍ノ主力部隊ハ相前後シテ日本軍ノ包圍外ニ突出シ、計劃的ニ部隊ヲ分散シ、全區ニ互ツテ游擊戰ヲ展開シタ。コレヨリコトヲ觀ルニ、八路軍ハカリデ日本軍ヲ應對シテ術ハナク、茲ニソノ主ナル戰鬥情況ヲ舉ゲレバ次ノ如シデアル。

十一日深縣以北ヲ掃蕩セントシタ日本軍二部ハ我が八路軍カラ二回ノ襲撃ヲ受ケ、百二十餘名ノ死傷ヲ與ヘタ。外圍軍三名ヲ俘虜ニシ、尙小銃十一挺、自轉車二十二台ヲ擄獲シタ。八日八路軍〇〇部隊ハ瀋陽縣以北ノ段莊ニ於テ日本軍ト遭遇シ激戰一時、時間ニ亘リ、ソノ結果、日本軍ノ自轉車隊及騎兵隊ヲ擄獲シ、百七十餘名ノ死傷ヲ與ヘタ。

完縣唐縣各地ノ日本軍恐シイ襲撃ヲ受ク

遙ヒ此ノ間八路軍ハ京漢線西側ノ完縣城內ニ攻入シ、夕ガ日本軍ハ僅カニ二十數名ヲ殘シ、彈ノ掃蕩ヲ明イテ

去ル四月十六日黎明濟南日本軍三千餘名ハ突然章邱、嶺山、曹家一帶ニ駐屯セル一防共ニ襲撃シ、ノ高松亭ヲ生死不明デアリ。此ノ事件ガ發生スルヤ山東中部各地ニ於ケル一防共治軍ハ大イニ憤

山東一防共治安軍七千名 蹶起祖國ニ歸ヘル

八路軍相呼應シテ分遣三十餘ヲ破碎

我ガ八路軍〇〇部隊ニ襲撃シタガソノ仙ハ悉ク日本軍ノ爲ニ背島ニ送ラレ、高松亭本人モ生死不明デアリ。此ノ事件ガ發生スルヤ山東中部各地ニ於ケル一防共治軍ハ大イニ憤

目下冀中ノ平地ニシタ。大戦ガ展開サレ、多數ノ部隊ハコノ作戦ニ引カレタ。元ヨリ兵力ガ稀薄デアツタモノガコレニ依リ一層空虛ヲ生ジ、何時八路軍ガ襲撃スルカ分ラナイ。夜中ニ銃聲ガスルトハソノ物ヲ見テハ少イ物淋シイト一チカ當リテハ戦々然ト恐怖的氣味ガ充溢シテ居ル。

今戰地ニ賦性ガ流行ツナル。一部ノ遊シタルハウント食ヒ兵士ノ家裏ハ満足ニ食ヘナイ、上宜ハ後方。兵士ハ最前線、オマケニ戰争ノ見透シハサアツバリツカズ而モ擴大スル一方テ兵隊ノ待遇ガ惡化シ、時代ガ變ニナル様ヂヤ難ダツテ死ニタヌナラス

八路軍ノ青年一同 日本軍青年兵士ニ書翰ヲ送ル

最近八路軍青年一同ハ日本軍青年兵士ニ宛テ書翰ヲ送り、相互ニ手ヲ握ヘテ日本アソシヨガ發動セル侵略戰爭ヲ終結サセル爲ニ奮鬥努力スル事ヲ要望シタ。ソノ書翰ニ「櫻滿開ノ季節ハ固ヨリ諸君ノ最モ愉快デアリ幸願テ時節デアル。然シ乍侵略戰爭ノ魔玉ノ爲ニ諸君ハ廣漠タル北支ニ送ラレ戰争ノ道具トシテ死ノ湖戸際ニ置カレテ居ル。立テ！日本ノ青年諸君ヨ！吾等ハ願願團結、國難青年團結ノ力ヲ以テコレノ罪惡極マル侵略戰爭ヲ終結サセヨ！」

時事小叢 市川會夫

「ノンキ節」

飢饉ニ飢饉時代 飢饉ニ飢饉ガ流行ル 賦性自發ガ賦性ガ流行ル コレデ飢饉モヘルデセウ

死スノアヲ待テヨ兵隊サンヨ 死ンデ花見ガ咲クヂヤナシ 軍部財閥打ツタホシ 明ルイ日本ニ生キセウ





目録 第二號

我等の進むべき道
赤和ス ト
小林重一

特 日本軍隊より揚がる
正義的反抗の焰
日本朝野に聞かせる
革命軍の命を奪ふ

時局 三角相
正義の叫び
中村哲夫

電祝 覚醒聯盟(贈る)
戦争 中村哲夫
短歌 中山保
及戦詩 古澤清海
門出 蓮海

編輯後記
在支白人民反戦同盟
晋察冀支部
前進社
編輯室

我等の進むべき道



我等は侵略のための戦具であり
消耗品なのだ。此の言葉は其の眞髓
を穿つたものである。即ち統治階級
の欺瞞を赤裸々に暴露して眞実の
状態を突いてある。私利私慾にあ
くなく彼の統治者共と立場を異に
する我々勤労大衆は人類永久の
幸福のために又此の立場に立脚して
絶対に侵略戦争を反対することである。生活上に於いても肉親
と離別するとか苦しめられるとか、物事を強制されること
云つた事のない、即ち政治的の自由に依つて笑つて生きる事
が最大希望である。

此處に於いて今次の日支事象は我々勤労大衆の望みに
根柢から徹塵に打ち砕いたものである。故に我々
は統治者の常套手段たる欺瞞扇所を指摘して此れに
對策を講ぜなければならぬ。
即ち我々は如何して喰ふものも喰はず父母妻子の悲
壯なる聲を前に秘めて戦争に承けなければならぬか。もし
て何のためか又何を得んとしてゐるか? 現在于て我々
の目撃した幾多の戦友の悲惨な末路を憶ふ時、戦死
に依つて家族は救はれぬか我々勤労大衆は何を得るか
それ極度の生活困難である。
現在國內の労苦大衆の消費生活は其の生活を以て
一層の窮乏化するものとなつた。戦争に依つて龐大な軍
事實費負擔産業統制、國民登録制と云つた凡ゆる

自由の束縛、柳屋と彈圧等である。けれども國民全体が此の様な憂目に逢着してゐるのでは決してない。

103
物価政策に於いても家元が此の政策の精神に反する行動を散へてして、我々勞苦大衆に對しては統制の取締り違反の云つた人童の行動を爲すことと自任が有即ち不合理的で、何んであらう、單に煙草の値上米の割制のみならず、少數支配階級のする事なす事が我々勞苦大衆を圧迫すると言つた態度精神だ、即ち凡ゆる政治の權力を掌握してゐる被等は、大衆の精神を躡して、人間生活地獄の苦痛も見向きもせず、其の上、壯丁を戦争に追は立て、總ての束を用じて私腹を肥し、名譽を奪はせ、そして豪華な生活と優越的感懐に浸つてゐる。此の私の速懷を盡りに馬耳東几と馳せ捨てる

104
事なく諸君の境遇に對照して、今迄の生活は盲目的であつた事を認識すると共に、此の甘苦味な侵略戦争の片棒を擔事なく我々の尊厳と生命を被等支配階級の私腹を肥す爲に、即ち勝者行政を行政する爲めの上、台にさかしてゐる事を直ぐ止め、有る事だ、そして此の侵略戦争をして、國內勞苦大衆の目的自由解放の國內戦争に、かゝる事が我々現在果し得る重天任務の第一義である。

これに侵略戦争の犠牲者である兵士及國內勞苦大衆と我々反戦同盟員一同は堅固なる團結組織を以て同じ壓迫下にある中國人民と相提携し、而して、丹戸と言ふ殿様時代の殻を破砕し

此の侵略極まる戦争を見る、社會又父母、妻子、現在の悲に遭遇せむ、新社會を建設すべきである。

105
此處に於いて、我々は現在の侵略に反對すると同時に、統一戦線にある革命、路軍と綱領の如き、力量を結成し、少數の日本統治階級を倒す事に依つて、我々の日西口人民は解放されるのだ。此れこそ、我々勞苦大衆に、果へら水た唯一の道なのだ。しつかり、握れ、我等の旗幟、勞苦大衆よ、仰げ、せよ、新に、丹戸の邊、おれ、方の人、生、最、上、の、あり、幸、福、な、歌、聲、を、一、而、して、赤、い、よ、勞、苦、大、衆、希、望、に、輝、く、我、等、の、前、途、下、一、完

赤いスト

106
労働の不経済統制を先ず戦争統制を以て三身米の兵士の血と口民の涙の量をもけ、見え、必要がある。二の必要は毎日平均二、千、六百、萬、圓、の、兵、隊、に、つ、て、お、る、口、民、は、逆、直、に、せ、ら、れ、腹、の、へ、る、のを、防、止、し、て、お、る、が、お、り、腹、は、へ、る。

最近、戦地は、カウ、ン、の、方、に、レ、イ、ト、難、カ、ン、ン、下、さ、飯、等、等、最後、は、自、分、も、カ、ン、ン、に、な、つ、て、帰、還、する、の、あ、い、

日本兵士の中、死ぬまで、銃をすて、と云ふ、大、無、膽、が、少、く、な、つ、た、事、は、日、本、人、の、名、譽、を、最、大、に、お、わ、れ、お、れ、の、仲、間、の、さ、う、な、ら、ば、善、い、

國際愛情

小林重一

中國の八路軍は領袖毛澤東同志の領導下にある國際主義の革命軍であることは既に世人悉く周知の所であります。この革命軍が路軍は中華民族の爲めにのみ自由解放を目標としたのではなく勤勞日本人民は勿論、進んで、は、弘く全世界の人類平和の擁護と被壓迫的にある全世界の弱小民族の自由解放を唯一の目的とした中國の被壓迫的階級にあるところの勞苦大衆よりなる軍隊であります。次に日本帝國主義に向つて堅決奮闘する反抗を繼續してゐる所以のものであります。而して武力を以つて他國の獨立を侵す日本帝國主義者の行爲は野蠻であり又不正義であるのであります。これと正反對に祖國自衛の爲めに戦つてゐる八路軍の行爲は正義であります。これは世界各國の有識人士

同に於て批判されてゐることは今更々言ふ必要ないのであります。この正に感んだ八路軍は一視同仁上は領袖毛澤東同志を始めとして下は幾千幾百萬の將兵に至る迄同志を愛することと一般民衆を愛することとをなから眞の兄弟姉妹を愛撫するのと同様であります。この友愛精神の充溢は眞の國際主義の友愛互恵の精神の相しであること確信して居ります。主に日本の生活に於ても將兵全体は毫も隔離なき誠心平等と合時に日常の生活に於ても將兵全体は毫も隔離なき誠心平等で自由で快樂な日々を送つてゐるのであります。分り易く言へば人と人との階級的支配によつて各々待遇的差別を有するとか強制を有するとか壓迫的行爲を敢て爲すものがある。かたは自己の自覺の規律とこの規律の嚴守觀念は先に述べた様に互恵の精神に正尊ぶ觀念が旺盛であり行届い

た鍛練と教育によつて外部的にも完全に統一されてゐる秩序の正しいことは極端な封建帝國日本帝國主義統治下にある兵營内に於ては到底見る能はざるのみならず、實際上此の軍隊であつて革命軍の部隊内に限つて見ることも出来ないものであります。故にこの誇りとすべき光榮傳統的八路軍の友愛精神即ち國際主義の愛情の眞の偉大なることが容易に認識出来る所以のものであります。

斯の如く八路軍は全世界人類の和平擁護と被壓迫民族の解放即ち自由解放といふ大きな目標を主眼としてゐるからその内部的にも勿論外部的にも現在執行されてゐる例へば日本の兵士に告ぐる書、日軍捕虜虐待條令等々の内容に於ても日本の統治階級者の如き人間的性質のものではなく日本兵士に対する否日本の全勞苦大衆に対する絶對的に民族

的偏見主義のものではないのであります。これは八路軍の級第一等員に基く堅決なる趣旨であり旧來よりの習慣的日本兵の異族的偏見と階級的觀念を根底から除去せしめることを促し密切なる聯繫を計り眞の東洋平和を建設せんとするのであります。同時に日本の兵船なども八路軍と同様に被壓迫階級のものであります。から従つて敵對觀念を以つて當らな、所以であり八路軍の傳統的光榮ある眞の國際愛情即ち國際主義の友愛精神の發露のものであります。今日の時代が要求してゐるものは國際主義が最も適應したものと信じます。野蠻的掠奪を逞まにした人類屠殺の帝國主義大戰は今や全世界に波及し益々拡大慘酷化しつつあります。斯から我等は此の帝國主義戰爭を絶對に

反対し打倒清滅を大に叫ぶものであります。この様現に我々が日本人民を代表して反戦同盟支部を設立しましたのも八路軍との密切なる提携の下に階級的壓迫下にあつて苦しめられてゐる日本の労苦大衆よりなれる兵士諸君の覚醒を促し一日も早くこの苦境から脱身せしめんとする意味するに外ならないのであります。この日本人よりなれる反戦同盟は今や全中國の各地に續々と実現しつつあるのであります。而して我等は大いに八路軍の國際主義を学びやります。而して我等は弱小民族被壓迫民族の自由解放と眞の東洋平和の確保は全世界人類の眞の平和建設の第一歩としてこの正々たる八路軍と協力一致して重大なる任務の遂行に邁進してゐるのであります。 完

日本軍隊より揚がる正義的反抗の焰

班長佐々木部下五名を引率して任多日本人民反戦同盟に参加す

中日勤労大衆團結蹴起
最前線に於ける战友の武裝放棄を由ぶ

華北新々晋西北五月一日電
去月回回堡の戰鬥中に於て佐々木班長は黙然として部下の武裝放棄の「スロリカン」を主張した。班長のこの叫びに感動した部下六名の兵士は自發的に即座に武裝放棄を実行した。當時の戰鬥は果に激烈に極め大部隊が殆んど消滅した。其の際佐々木班長は

絶好の機会として二名の兵士を逸早く引率して中口革命軍に合流した。
尚佐々木氏の目標に據れば彼は思へ切らぬ憤慨に充ちて私は社会大衆党員である。前領麻生久、母部磯雄一巡の主張する侵略戦争賛助に不賛成するのみが全日本の勤労階級の要求は戦争の即時停止である。

反戦厭戦の心潮の高漲

独立戦の日本將兵に及ぼす影響の前途に
駐屯部隊中自殺者頻出
最近殊に今春より初夏にかけて將兵の反戦厭戦情

緒は張つてゐる。

七月二日

保定駐屯津山旅団新美部隊の兵士五名の自殺事件と易回水水上隊隊加未在大隊附將校二名と兵士五名の自殺事件が殆んど前後して發生した。又今月初旬迄、你駐屯独立小隊旅団獨立小隊隊小柴大隊の兵士一名が完全な軍裝の、反戦同盟に参加して来た。
自殺逃亡自殺的の革命軍に参加を志して、事件の類縁的傾向は侵略戦争に困つて受ける兵士自身の苦痛と熱帯刻々上乗化する國內家屋の生活苦に起因する。無量の悲哀と陰鬱なる侵略戦争の製造者軍部

中口ロンドン革命軍第八路軍總司令部命令(省冊)

日軍兵士は勤王の子弟であり、皇國の義勇士である。故に、
 一、日本兵士は捕虜に殺戮し、侮辱、其所持の武器を没収し、
 二、傷病の日軍兵士は特別の看護を行ふ。治療せしむべし。
 三、政府又は原隊に歸る事を欲する者に行つて、
 四、中口で働く事を欲する者に行つて、
 五、家族友人と交通を欲する者に行つて、
 六、戒厳区域には埋葬し、墓標を立つべし。

總司令 朱徳
 副總司令 彭德懷

中華民國三年(即西曆一九一四年)

に對する極度の憤怒と無限に堪へ切らぬ煩悶は遂に
 程鉉的厭世感より自殺したのである。

將兵諸君！
 目前に聳へておる正義の旗幟は我等が互に
 盟の戦列に加へするものが光明の道である。
 自殺は國を軍に一個人の苦痛を脱脚するより
 一歩進んで門内大如家の非道境を救出する爲に！

完

どん底から救済方を政府に囁き
 て冷淡にも去開拂ひを喰はせられた
 揚句の果だ。とは最近及戦同
 盟に参加した日本の農業出身の一
 青年の供述だ。

何故に政府は冷淡か？
 て生れれば同じ人間が毎日の生活道
 程に苦じめられぬものと苦じめぬ
 ものとは生死の差がある。ブルと
 軍閥の一味はさうほつと建着
 の準備をしてゐる。國民の生命を
 彼等の私慾のために犠牲とされるか
 ら、國民から恨まれるのが當然だ。

「ロンドン」ト社
 二十一日發售

本日午前四時強軍は宣戰佈
 告無しに突然ソ聯に對し軍
 事行動を開始す

獨逸フアツシヨは露亞式
 侵犯であり、ソ聯には一切の
 責任を負ふ可きものがある
 獨逸フアツシヨの強盜的横暴
 行爲たる軍事行動は國際勞
 働人民及びフツシヨ的先進
 分子は絶對反對すべきである

華北治安悪化 と力言つて
 鉄兜は熟じられて今にも目眩が
 してうになる。華北の不安は一目
 瞭然だ。茶山子でもないのに決哨の
 任務は穿に思ひやられろ。一体誰
 のためなのか？ 異國北支の曠
 野に黄金の波はいつしか消えた。
 郷里の初夏 家屋上守る可弱
 い老母や愛妻が寒業期に當面して
 留守と川た夫の身の上只健康で無
 事帰還の日を待つてゐることだら
 う。見せるな家族に白木の箱上

小林重一

惨めなのは百世とんだ、作つ
 作つても働いて喰つていか
 れる苦がない。構つて探り盡
 され揚句の果だもの恐らく
 真逆様に品して青松葉で燻べ
 られらつてもう露血も出て来
 やしない。一体誰から苦じめられ
 られ又探られぬのか？

近來悲劇の續出は異型か
 らぬ毎日各新聞の三面記事が
 望まぬへて賑はつてゐる。家
 の支柱たる夫が奪られ後で生れ
 た赤ん坊を背負つたまゝ、厭世
 自殺。この新劇は生活徒の

止義の叫び

中村 哲 夫



現在八路軍内に在る日本兵士は惨酷なる戦いに於いて重傷を負ひ或は喰ひや喰はずの激しい戦斗の末遂に昏倒し虫の状態より八路軍に依つて救はれたのである。

其の際誰かが八路軍に捕つたこの上はあの恐ろしい青龍刀で回響を射貫かぬ首を叩き切らぬ事と直感し又覚悟した事であらう。此れは事実日本軍隊内に於て或は内地に居る時分から何回となく言ひ聞かされたのだから無理もない事である。而し此の強制的惨酷なる戦場より脱却せざる總ての兵士に對して八路軍は以前の事情の如何を問はず真心より同情し殺身も及ばぬ厚き取扱をなするのである。重傷者はこれに後方の病院へ運ばれて手厚い看護の下に養生したのである。此處に於て「捕虜」とはつたものは韓州の捕虜營に抱き且つ薄味寒く感じた事であ

らう。誰かが死を覚悟して居たのだ。それゆゑ戦士は於つてとてんぐん敵對し抵抗したる者に對しての處置がなされたから。而し數日後に於て八路軍の存在と性質及び目的を理解した時過去の無智を恥じると共に且つ残念でならなかつた。現在八路軍内には多くの日本兵士と將校下士官が居る。此れ等の日本將兵は事變の余孽を理解して自己の進むべき道に回鑒めて到る處に堅固なる反戦同盟を設立して一致團結日本帝國主義打倒日本人の自由解放真の東洋平和建設を目標として日夜奮闘して居る。誰か彼々に對して非國民の國賊とか言ふ愚かな者があつたらう。愚かな者は大きな誤りである。正義は國境なし。今後八路軍内に在る全日本兵士は益々八路軍同志と固く手を握り一致協力以つて中日人民の自由解放と平和幸福の延びては世界人類永久平和幸福の建設に向つて邁進するものである。諸君及者せよ目醒めよ。一日も早く。とて依つて日本人の死は生へん救はれるのだ。目醒めよ。起て。而して我等と共に十數個日本兵隊の敵。日本兵とと軍戦闘を倒せ。

祝見 覺醒聯盟への贈り

諸君は日本兵士覺醒聯盟創立週年記念を慶祝す。惟し親愛の友高木繁雄。秋井英男両君並盟員一員向かて昨年未だ門身を失ひ日本兵士の熱心光明なる道を閉ざし。中日人民團結を益々基礎を築きたるを自り。之に對し我等は諸君に高木英男の遺志を継ぎ、次期を期す。我等も共同所帯の信念の下に於て五月四日反戦同盟支部を創立せり。我等の所帯は断じて獨立のものに非らず。有りて有るが爲め争戦を期して居る。今々日本内地及び軍隊に連發的の反戦事件が續出しつ。あり。此の事案は當下の薩永を細流たりとは


雖一之の無數なる細流は總て我等の面前に洋々たる大海を築し日本統治は没戴するなり。中口人は此等の類であり。我等が争する唯一目標は不敵の日本統治有量部。欺罔にあるなり。積壓迫者の反抗。假欺聽者の奴心統。我等日一奇に露王日本統治者に向て抗議すべし。我等は高木英男の遺志を継ぎ。日本軍は自ら中口から撤去すべし。日本人民團結して眞の東洋平和獨立の爲に門争せよ。と絶するものなり。在る日本人民反戦同盟 普察葉支部 支部長 宮本折口次

1024

文 藝 短 歌

木 山 保 高

月の影は
 月影より
 此の影は
 三年の
 今下
 故郷
 三年の
 今下

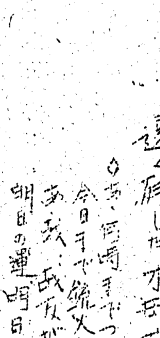


1023

文 藝 争 战

甲 村 哲 夫

何故
 思は
 苦し
 遠く
 明日




1026

文 藝 出 門

治 健 速


側
 お日
 誰
 主
 妻



1025

文 藝 争 战

想
 知
 和
 柳



編輯後記



△讀者諸兄の健在を祝し我々は常に諸兄を想ふ。

又分道して終焉の行軍中此の雜誌を諸兄の面影を想像する。

讀者諸兄よ、此の雜誌上の筆名をとつた者も編輯する者も皆、諸兄と同様に陣雨を浴びつて来たものはや。

1627 諸兄は文中に筆名を言はんとするものと云ふを良く咬み取つておいて諸兄自身の現在の境遇を顧みよと目した。

△最近符の日本軍増りては皆兵刃友敵厭成気運の増漲は益々大々く有りてあり自殺・逃亡事件が盛に報道されて居る。

此の情勢裡に我々も此の亦三方を諸兄の許に送る事は我々の同盟に大なる害びてあり意義深きものである。

△讀者諸兄よ、本誌に於ける投稿を希望すると共に又此の批評を歓迎致します。

1628 △最後に讀者諸兄に本誌の報道を战友諸兄方々に報道せよと事を切に我等に命じて居る次第です。

通信處 在支日本人民友成同盟 晋察冀支部



ニ少數人ノ大財産資本家ノ手中ニ擧ラレ、彼等ハ既ニ全國ノ勞働者、農民ヲ掠奪シ盡シ、遂ニ生産ハ根底カラ破壊サレ、經濟恐慌ヲ來シ、人々ノ生計ハ立たズ、ソレヲ勞働者、農民ガ奮起シテ革命ヲ起スコトヲ恐レテ、彼等ハ自分ノ死滅ノ危険ヲ救フ爲ニ、反動ヲ爲メ、國內ノ民主ヲ取消シ、公開的ニ恐怖政策ヲ實行シ、極端辣ナ殘酷手段ヲ用ヒテ勞働者、農民ヲ壓迫スルノデアアル、故ニフアツシヨ、ハ此等大資産階級ガ實行スル其ノ最モ反動的暗黒專制デアアル。

第二新ノ如ク此等大資産階級ハ全國人民ヲ掠奪シ盡シテ擧句死物狂ニナツテ世界人民ノ生命財産ヲ掠奪セントシ、先ヅ殖民地ヲ掠奪シ、弱小民族國家ヲ滅亡シテ、勞働者、農民ヲ驅シテ異國ニ移リ出シテ戦争ノ消耗品ニサセ尙フアツシヨ強盜ハ自分ハ世界ノ一等民族ト法螺ヲ吹キ其ノ他ノ民族ハ皆劣等民族ト侮蔑シテ自分ノ民族ト他民族トノ離間ノ限リヲ盡シ相互ノ怨恨ヲ激發シ相殘殺サセ、被侵略ノ民族ヲ滅亡セシメル、故ニフアツシヨトハ荒レ狂ツタ最モ野蠻的侵略主義デアリ最モ殘酷ナ民族壓迫スルモノデアアル。

第三然シ今日デハ世界ノ殖民地ハ殆ンド劃分サレテ士盡ツテ。

フアツシヨ強盜ハ愈々ニ飽キ足ラズ公然ト平和ヲ反對シ死物狂ヒニナツテ戦争ヲ製造シテ必死ニナツテ弱小民族ヲ侵略スルノミナラズ遂ニハ狂ヒアガツテ世界上ノアラユル民主國家ヲ進撃シ甚ダシキニ至リテハ世界平和ヲ保衛スル社會主義國家ノ強大ナル革命力量ヲ恐怖シテ大膽ニモ生死ヲ顧ミズツ聯テ攻撃シタ、斯様ニフアツシヨ強盜ハ最モ兇惡ナ狂犬ノ様ニナツテ全世界ノ到ル處ヲ手當リ次第人ニ咬ミツキ危害ヲ加ヘル大罪惡ノ限リヲ過シ、彼ハ實ニ今日ノ世界大戰ノ禍ヲ醸シタ張本人デアツテ全世界ノ人類ニ禍害ヲ及ボシテキル。故ニ我々ハフアツシヨ強盜ヲ全世界人民ノ公敵ト云フ。

フアツシヨ強盜ノ侵略ニ抵抗シ全人類ノ生命、財産ヲ保衛スル爲ニ全世界ノ人民ハ既ニ強大ナ反フアツシヨ陣線ヲ結成シタ：フアツシヨ強盜ノ國內ノ勞働者、農民ハ今ヤ生計ハ立たズ、其ノ上戦争ノ禍害ガ加ヘラレ戰場ハ戦争道具トシテ強制サレルノヲ反對スル爲メ、戦禍ノ母國カラ自救ヲ計ル爲、正ニ革命ヲ起シツツアツテ、コロノ凡テ反フアツシヨ革命力量ガ結合シテ騰起シ、頗ル強大ナカトナツテ居リ最後ニハ必ズ其ノ兇惡ナ狂犬ヲ撲殺シ、世界ノフアツシヨヲ消滅スルノデアアル。

戦争

花見時ガ來夕櫻ノ花ノ下デ散歩シテ居ル戦局下ニモ相懸シテ
イ親子瀧ヒノ花見客ヲ見タ。

人民ハスブアモ買ヘナイト云フノニ顯紗ノ洋服ヲ着テ女ハ類ニ
オ白紛ラベタベタト塗ツテ戦争何處カト云 夕風ノ客ハ何處ノ馬
骨カ……

戰場テ生死ヲ的ニ動ラカサレテ居ル兵士ノ氣持チモ知ラナイデ
戦争ガ有ルト金ハ儲ルシ、自分一人デ花見モ獨占出來ルト云ツタ
委ノ一家ハ……コレゾ國民ノ血汗ヲ搾ル大金持ノ奴等ダ……。
然シ此ノ頃ノ兵士モ自覺シテ來タ、自分達ヲ苦シムル奴ハ日本
統治者デアル事ヲ認識シテ、戦争ノ有害無益ヲ語り近頃故々ト日本
軍隊ヲ脱走シテ反戦同盟ニ参加シテ居ル。此レハ即チ日本勤勞人民
ハ軍部ノ支配下ニ在ツテハ永久ニ幸福ハ得ラレス、故ニ日本勤勞人民
民ノ利益ノ爲メ闘争スル事ガ兵士ノ任務デアル事ヲ充分ニ知ツテ來

タ事ハ日本勤勞人民トシテ顧母シイ事デアル。

我ガ反戦同盟ニ通信處ヲ設ケテ以來、日淺キニモ拘ハラズ各分
遣カラ枚舉ニ暇ガナイ程御投稿トサイベシク御禮申上デマス。
今後共一層、御利用、御投稿ノ程ヲ御願ヒスルト共ニ其ノ實例ヲ舉
ゲテ見マセウ。

××分遣隊一兵士(特ニ秘名)

問：私ノ分遣ニ伍長ト兵士一名ガ突然遺書ヲ殘シ銃劍ヲ悲惨ア相殺
ヲ遂ゲタ。其ノ遺書ノ内容ハ「吾レ吾レハ生キテハ絶対ニ故郷ニ歸
レナイ、父母ト會フ時ハ必ず白木ノ箱ダ。ドウセ死ヌアラ慘酷ア戦
場デ苦勞スルヨリ自殺ノ方ガマシダト。此ノ遺書ト事實ヲ見テ私
ハ自分自身ノ行ク途ヲ考ヘル様ニアリ、日本人ノ氣持チモ此ノ頃ハ
大分變ツテ來タ事ヲ私自身ガ認メマス。此ノ原因ハ何處ニアルデセ
ウカ。(原文ノ大意)

答：私ハ貴方ノ氣持チヲ充分察スル事ガ出來マス。然シ一名ノ兵士
ノ取ツタ行動、自殺行為ニハ絶対反對シマス。其ノ原因ハ二兵士ノ
行動カラシテモ推察出來ル様ニ物事ノ解決ハ自己ノ清算ニ依ツテ解
決スルト思ツテ居リマスガ、其レハ自分自身ニ關スル小サイ個人的
ノ解決デアツテ其ノ根本ハ何等サレテ居ナイデアリマス。

其ノ事ハ伍長ト兵士一名ノ自殺ノ後、貴方モ直ク行ク途ニ迷フ
 何時生命ガ亡クナルトモ知レナイ戦争ノ長期戦ノ爲ニ満期ハナク、
 貴方ハ私的制裁ヲ受ケ乍ラ、自ラモアク、自分ノ希望デ
 ズ、必ず出来ル問題デス。止メル事ガ出来カト疑問ヲ抱ケ
 一人ノ反戦者、二人ノ反戦者、三人ノ反戦者ガ集レバ反戦ノ力量ハ大キクナ
 ガリ、反對ニ日本統治者ノ力量ハ減少シ、我々反戦者ノ勝利即チ戦争
 ナクナルノ事アリマス。我々反戦者ノ勝利即チ戦争ハ頓キ
 全部自殺、或ハ戦死スルマデ統治者ハ戦争ヲ観ケルデアリマス。
 此ノ事ヲ望ムモノゾ御考ヘニナツテ貴方ノ生キル道ニ進ム事ヲ決定サ
 シテ早ク一日モ早ク惨酷ア戰場ヲ脱シテ希望ノ反戦ニ進マレン
 事力ニ依ツテ一日モ早ク惨酷ア戰場ヲ脱シテ希望ノ反戦ニ進マレン
 盟員一同ハ心カラ祈リマス。

反戦同盟 有川

昭和十七年三月五日印刷 行(毎月一回) 晋作志日人反戦同盟發行
 昭和十七年三月七日發行 晋作志日人反戦同盟發行

希望に向つて

松山達男

利根川の水は空雲の影を流してゐる岸の白楊の緑の下を舟が静かに下つて
 行く水を見つめながら渡鳩の伍作ぢいさんは過去の幸福を想ひ浮べてゐた伍作
 ぢいさんの孫は二人の孫があり惨酷な戦争に二人の孫を取られてぢいさんを握
 死か土葬若し進んでゐた。戦争の起きた年十一月に大きい方が戦死
 してしまつた。三つ下の要一も兄の後も續いて北支に引かれて行つた。せめてぢ
 いさんは村で遺骨が歸つて来る度に暗い暮が押し迫つて来る様子を感ずるのた
 づな然し要一が希越した最後の手紙を受取つてからの伍作ぢいさんは胸が青
 空の版に明るかつた。其の手紙の内容は、
 希越いさん要一の部隊では最近
 エイ人の戦友が毒薬をふりまき銃を用ひたりして自殺しました。他の部隊で
 も澤山あるのです。要一は通譯から聞いてよく知つてゐます。おぢいさん以南の
 方々又大きな戦争が起つた事を知つてゐるでせう。要一の部隊からまだ未兵
 隊山向ふへ送り込まれたおぢいさん今の戦地は毎日の生活が非常に苦しい
 です。人数が減つて危険が一層加はつて来ました。その上兵隊はもう團に歸
 へる事が出来なくなりました。せめて永い戦争の中でドシドシ戦友は死んで行
 きます。今にとつと一度に戦死してしまふ時をきつと来ると皆が話合つてゐま
 す。要一も今の儘で行けばおぢいさんと會ふ日は白木の箱になつてかうで
 せう。こんな様だから望を失つた戦友達は自殺してしまつたのです。然しおぢい
 さん要一は決して死にませぬ。要一には懐かしいおぢいさんがあつたのです。
 要一は今から戦友と軍隊を抜け出して一日も早く戦争を止めさせ
 せる為反戦同盟へ参加して一生懸命に働きます。かう日本の戦争政府が倒
 れて戦争が止むのも最近です。おぢいさん安心して遠慮なく働いて要一が元氣
 で歸つて来る姿を見て下さい。其の日からはおぢいさんと三人で楽しく暮しま
 せう。

懐かしいおぢいさんへ

要一より

伍作ぢいさんには様かうな手紙を大事せうに懐中にして置いて林に
 なる時にほいほい其の手紙を讀みかへして作らう。要一は生きてゐると満足かに笑
 ひ残すのたつた。

在華日人反戦同盟晋察冀支部

急告

現在兵士諸君の前に生命を捧げんとする向一つの太鼓が鼓吹せんと叫びてゐる。幾度か日本軍部は道義を重んずるも考慮する事なく強大な社会主義ソ聯に向つて必死の危険を冒して進軍しようとしてゐる。英、米、中國等二十六ヶ國と生死の決闘にあり乍ら日本は又もヒットラーを撃破してゐる強大なソ聯と火蓋を切らんとしてゐる。斯の如きは荒狂つた軍部が日本の崩潰を導くものであつて日本は恰も敵の真中に飛び込んだ様だ。その周囲に強敵に取り圍まれて日本軍民をして未曾有の災難に遭遇させる危険な情勢に置かれてゐる。

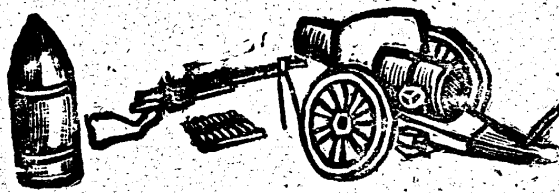
日本フアツシヨが進軍する時にどんな虚偽的口實を以てするとしても實際上に於ては他でもなく西歐を狼狽してゐるとヒットラーを救ふことである。ヒットラーは日本フアツシヨ將軍達の團主であつて今やヒットラーは無敵赤軍の攻勢の下に潰敗して慄へおのいてゐる。斯る情勢の如く愈々危急を告げて居りヒットラーの陣營は既に紊亂状態に陥入つて實力を恢復せ出れぬ。此れに反してソ聯の偉大な生産力量は既に赤軍をしてタンク飛行機大砲諸兵器は質と数量の上に於て絶對優勢を占めたと同時にソ聯全國に普及してゐる新軍の訓練も既に完了した。

此れ等の事實からして春季大戦後にはヒットラーの崩潰する危険がある。故に日本フアツシヨ將軍達は死を冒かしてヒットラーの悲運を救はんとしてゐるのである。然し乍らこれは正しくフアツシヨ侵略者の死出の旅路である。

イギリスの論者が獨逸の戦局を評論した如くソ聯と赤軍の驚く可き威力は有史以來の新記録であつて所謂「無敵」の獨逸は赤軍の打撃の下に崩潰と混亂の一途を辿り士氣は一落千丈に失墜し毎日死傷萬以上を算し足を止め得ず敗退のやむを得ないに至つてゐる。日本フアツシヨの軍隊は獨逸には較してどうであるか？赤軍の局勢的衝突とソ聯の短期の交戦に於て日本軍は五萬以上の死傷者を出した。其の體験は今までの進軍に斯くなるものがある。今後の大戦にはソ聯が極東に於ての兵力新兵器は増加する一方であつて其の際の戦争の惨酷と危険は想像の付かぬものである。現下の太平洋上の戦争は幾億萬人以上に波及して居り中國英米の各同盟國も正に大反撃の準備に没頭して居るのであつて斯の如き多くの強大な敵を相手にして經濟食料人力不足の日本は既に應對出来なない。も構はらざる尚ソ聯を敵とすれば日本人民と國運は單獨の為に最後の「一か八か」の勝負に投げられ人類史上に此類の唯一の大損害を償ふのである。

目下日本軍部は各據點並各部隊からといへば兵を募集して居り各街道線兵軍を荷送列車で混亂を極め兵士達は互に哀愁と苦痛の面影で打眺め沈黙の悲法的情景は實に形容し難いものである。今や相續いて大原は諸君の身に迫らんとしてゐる。兵士諸君日本フアツシヨの侵略戦争狂暴的擴大戦争に反對に如何かに脱走して戦争を避けて生命の安全を圖られん事を望む。

在華日本人民反戰同盟香港支部



ハテナ?

!! 軍需品

米國ガ日本ニ輸出セル軍需品統計ニ據ルト則
日本ハ一九三七年ニ全世界各國ノ總數ノ百分ノ五百四
十五、四ヲ占メ一九三八年ニハ百分ノ五十六、一九三九年
ニハ百分ノ七十一ヲ占メ現在ハコレ等ノ輸入ハ完全ニ斷絶
ナレタ。

イ ナイ 様

日本ノ最モ急務品タル鋼鉄、鉄、廢鉄、鉛、アルミニ
ウム、石油、羊毛、棉花等ノ軍需原料ハ僅カニ日本國
ノ産出ヨリ取得シテキルガ到底問題ノ解決ハ難シ。
特別ニ、鋼鉄、鉄、鉛、アルミニウム等ノ原料ハ南
洋カラ生産シナイ故ニ日本ノ軍需、飛行機、艦船ノ生産ハ
著シク大量ノ低減ハ免レ得ナイコトハ明白デアリ。

比 成ル程ネ!

在華日人反戰同盟警察支部

自殺ハ我等ノ出路ニ非ス

「死ナズニ」國ハ破ラレタニ此レハ銃劍ノ柄ヲ握ル者ノ責ニ非
シ。我々ハ此ノ時ニ至リテハ兵士ノ簡單ナ悲劇ノ遺棄デア
ル。我々ハ彼レハ成程國ノ機會ヲ得タ、我々ハ我々ノ父母
ガ毎日狂ハシメテリニ心配ヲシテ待ツテ居ルノハ、アノ無
責任ナル事ナラズ!
我々ハ自盡スルナラシキヲ避ケル道ガアル。此ノ道ハ我々
反戰同盟支部ニ來テ長期戦争ノ終先ヲ通シテ、二年或ハ三
年中ノ大テ大テ我々ノ兩腕ト會フ事ガ出來ル。

在華日人反戰同盟警察支部



絶對反對スベキモノ

- 一 戦争ノ繼續ト擴大ニ反對セヨ!
- 二 討伐ニ反對シ北進ニ反對セヨ!
- 三 軍隊ノ壓迫制度ニ反對セヨ!
- 四 無理ナ鐵拳制裁ニ反對セヨ!
- 五 上官ノ欺瞞宣傳ニ反對セヨ!
- 六 非人道的燒殺姦淫ニ反對セヨ!
- 七 八路軍送還ノ戦友釋放ニ反對セヨ!

在華日本人民反戰同盟
晋察冀支部



北進反對

- 一 軍部ガヒツトラーヲ救フヲ反對セヨ!
- 二 軍部ノ侵蝕戰爭ヲ止メヨ!
- 三 南進北進戰ヒ何時終ル!
- 四 人民ヲ肉體化軍部勲功得ル!
- 五 強敵ノモハン慘敗ヲ忘レルナ!
- 六 獨逸軍サヘ失敗日軍ドウダ!
- 七 士兵ノ骨山軍部ハ勲功!
- 八 軍部正ニ冒險的侵ソ準備ヲ急メ日本
兵士ノ危険勇ニカサナル!

在華日本人民反戰同盟
晋察冀支部

日本ファシストの滅亡は 日本人民の勝利である

横暴にも平和的他國を侵略した事に依り激印したる二十數個國の包圍陣に孤立化した日本ファシストは人力物力等網べての經濟上軍事上に必然的敗戦は免れない状態に陥入り益々其の狂暴性を發揮してゐる現在であります。

敗戦の結果は同時に日本ファシストは消滅し若々勤勞人民は此の慘酷的戦争地獄より救出され平和な幸福な日が訪ふれるのである。何故なれば現在の戦争は過去に於いての戦争と本質が全く相異なるからであります。

過去に於ける世界大戦は帝國主義相互間の戦争であつて先進國と後進國との市場と資源即ち殖民地分割の争奪戦であつた。故に敗戦國は戰勝國に對して其の賠償として自國の支配に屬する領土若しくは殖民地を讓渡しなければならなかつた。統治權は移動され其の領土上の人民は又民族は新たな統治者に壓制され奪取され奴隷的に酷使されたのであります。

現在の總體的世界大戦は初期に於いては多少の類似性あるも今日の戦争段階は全然本質を相異にする。即ち其の表現と重要點は舊國家の日獨伊ファシストの不正義的侵略行為に對抗してソ聯を中心主力としたる英米其の他の諸外國の反ファシスト陣線の鞏固なる結果であります。

此の反ファシスト陣線の抗戦は國際ファシストの暴民的侵略行為に對して自國衛衛と自國の獨立自由民族解放の民主的正義の防戦なのであります。

中心主力たるソ聯は全人類の自由と平和をスローガンに掲げて全世界の被壓迫民族被壓迫階級の利益擁護のため獨逸ファシストを撃滅せんと偉大なる勝利を収めつつある現在であります。

又英國にありて世界注視の的になつて居た印度の獨立も英國の正義的行為に依りて民主を開放された。此の印度の民主開放こそ前大戦と今次の大戦と相連し且つ現在の戦争の重要な特性なのであります。

兵士諸君以上が戦争の本質であつて日本が敗戦しても決して戰勝國の殖民地になつたり我々勤勞人民が奴隷化されない事實が斷言され得るのであります。

此處に於いて我々勤勞人民に取つて互に利害關係のある日本ファシストの正態を認識する事が現在の諸君の急務であり疑問が解消されるのである。

日本に於いて日支事變又今回の慘酷なる太平洋戦争を發動したる張本人は誰か我々勤勞人民であるか？決して勤勞人民ではない。其れは一部少数たる支配階級即ちファシストである事は疑はれない事實である。

此の統治階級が自己の利益と地位を獲得するために又日本經濟命脈を支配してゐる大財閥が軍部と共に謀して又獨逸の統治者と連絡を取り全日本勤勞人民更に全世界の勤勞人民をあらゆる著名のスローガンを以て欺瞞し我々の血の一滴一寸片まで奪ひ取らんとするのが日本ファシストの正態であります。

傾り見よ我々同胞が鮮い血を流し骨を埋めて戦ひ取つた滿洲はどうなつたか！人民が幸福になつたか！現在の日支日美戦争も其れと同然であり戦争で利益を得得ずべく戦争を走したのは日本統治階級である。

國內に於いて人民を苦しめ國外に於いては横暴なる侵略を以て外國の市場資源を奪ひ且つ民族を奴隷化する此の侵略魔が日本ファシストの正態なのであります。

故に世界の人類幸福と平和を愛好する民主國家被壓迫民族は獨逸を盟主とする日伊ファシストの暴戾なる侵略行為に對して鋼鐵の如き反ファシスト陣線を結成して非人運糧り無きファシストを全人類より擯る可く敢然と蹴走してファシスト打倒に邁進して居る状態であります。

故に日本ファシストは滅亡しても我々日本人民の滅亡は無い事を固く斷言し且反ファシスト陣線は我々日本人民の味方であると絶叫するものであります。

願くば戰友諸君
擴大侵略戦争に忍従する事なく戦争の本質を正確に認識されん事を希望して已まぬものであります。

在華日本人民反黨同盟音楽隊支隊

特別行證

日本兵士諸君
 の通行證（パス）を附近の第八路軍兵士に見せられたいし。わいの安全を諸君の志として、諸君を同待遇する。

日本兵士諸君
 此通行證與附近第八路軍兵士看，我軍保障諸君生命之安全，並以同志待遇諸君。

中國國民革命軍第八路軍總司令部

中國國民革命軍第八路軍總司令部命令（略）

日本兵士は勤勞民の子弟であり、軍閥にのみまされ、きよらうせられて、われらに銃をむけてゐる。故に：され、われら、日本兵士の捕は殺傷、侮辱、其所持品の没収などすべからず。われらは、兄弟として待遇すべし。違反者は、處刑すべし。

二、偽朝の日本兵士には特別の注意を、せしめ、治癒せしむべし。

三、故に、或は原隊に歸る事を欲する者には、できるだけの便宜をあたふべし。

四、中國で働くことを欲する者には仕事をおこなせしめ、勉學を欲する者は學校に入學せしめしむべし。

五、家庭、友人と交通を欲する者には便宜をあたふべし。

六、病死者は埋葬し、墓標をたつべし。

日本兵士は保勞善人民の子弟、在日本軍に對し、應に親善進之下面與我軍接觸。因此、

一、日本兵士親善者、不得傷害、侮辱、其所持物品、一律不得沒收或毀壞。如有違反此項命令者、我軍將嚴刑處之。

二、對偽朝或患病之日本兵士、須特別注意、應給以治療。

三、願回國或原隊之日本兵士、儘可准予、應以方便其安全到國目的。

四、願在中國或中國軍隊工作之日本兵士、應與我軍合作、願為自善者、應優其待遇。

五、願與家族或友人通信之日本兵士、應與我軍以方便。

六、戰死之日本兵士、應埋葬、建立墓標。

中華民國二十九年（昭和十五年）七月七日

總司令 朱德

副總司令 彭德懷

